

発掘調査報告第4集

県営ほ場整備事業大田切地区（昭和47・48年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・湯原・射殿場
南原・横前新田・塩木・北原・富士山
—緊急発掘調査報告—

1974

駒ヶ根市教育委員会

南信土地改良事務所

序

今回ここに刊行の運びとなった報告書は、県営ほ場整備事業に伴い実施された緊急発掘調査の報告で、昭和47年・48年の2ケ年にわたるものであります。

北は大田切川・南は中田切川を境界とする赤穂地区は、広い扇状台地上に展開し、その間には古田切川・上穂沢川・辻沢川などの小河川が東流し、田切地形を形成していますが、遺跡は中央アルプス山麓や小河川の沿岸に集中して見られ、その濃密な遺跡群は古くから学界の注目するところでした。

しかし、正式な発掘調査は行われぬまま、たまたま県営ほ場整備事業を迎えたため昭和45年以来、藤助畑・舟山・羽場下遺跡などの発掘調査を実施したわけでありまして、そして、2ケ年3次にわたる今回の発掘調査の結果、縄文時代中期の遺構を中心として、多くの成果をあげることができました。

発掘調査の詳細は報告書の各項に見られる通りであります。大城林遺跡における縄文時代中期の集落の確認、北方遺跡における多くの埋甕の発見、更に縄文時代晩期から弥生時代にかけての条痕文系土器の発見など、学界に新知見をもたらすものも少なくないと思います。

長期間にわたって発掘調査にご指導いただいた友野良一先生を始め調査団の先生方快く発掘作業に参加して下さった地元の方々、事業に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所の方々等、多くの方々のご厚志によって無事発掘調査を終了することができました。

ここに関係の方々に心から感謝を申し上げるとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第です。

最後に、昭和46年に調査会が発足したときから会長として、埋蔵文化財の調査と保存に心を砕いてこられ、去る1月14日永眠されました前教育長北沢照司先生に本書の発刊をご報告申し上げ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

昭和49年3月15日

県営ほ場整備事業大田切地区
埋蔵文化財調査会

会長 宮下清計

赤穂上穂地区の地形及び地質

赤石山脈、木曾山脈、伊那山脈はともにフォッサ・マグナを北限としていずれも南北に走り、木曾山脈と伊那山脈との間を諏訪湖に源を発する天竜川が、これら山地から流れ出ずる数多くの支流を合わせ南下している。天竜川の両岸はその支流によって構成された複雑な扇状地、河岸段丘を形成する伊那礫層の上に火山灰土層をのせて伊那盆地が展開している。

伊那盆地は上伊那郡辰野町付近を北限とし、伊那市あたりで東西14,000mの伊那谷最大の幅に達し、それより南下した伊那市と宮田村の境赤木付近では、再び狭まり東西2,500 mとなるが、またここを境とし、大田切川の扇状地の影響を受けて東西の幅は8,000 mに広がる。駒ヶ根より更に南下すると、天竜川の段丘はますます複雑化し、その比高も増してくる。また天竜川に注ぐ大小河川もそれにつれて侵食度を増す傾向を示している。

こうした伊那盆地は、平坦で開けた地域あり、また東西の山脈が極度にせばまった箇所も幾つかあって、非常に複雑な段丘地形を形成している。

今回報告する遺跡の所在する付近の地形をやや詳細にみることにする。

木曾山脈より流れ出る黒川、北御所、中御所、本谷川の支流を合わせた一級河川大田切川は、宮田村との境をなすが、木曾山脈の主峰2,956.3 m及び南駒縦走路に当る千丈敷カールと空木岳、木曾殿越えの本谷川を合流した木曾山脈最大な河川で、最大洪水量は744トンである。この大田切川がもたらした扇状地は、宮田村全域と伊那市諏訪形、表木、赤木に至る区域と右岸は駒ヶ根市上穂沢川を境にした総面積53,24 km²の広範囲な扇状地を形成している。

また、南駒ヶ岳2,842 mに源を発する中田切川は、隣接する飯島町と境をなす河川だが、その最大洪水量は300トンに達し、同様飯島町と駒ヶ根市上穂沢川にまたがる15km²の扇状地を形成してい

以上の2河川が駒ヶ根市におけるおおかたの扇状地を作った河川であるが、そのほか、この間を小河川が再扇状地を形成している。まず北の方から古田切川がある。光前寺の北側の小河川と一部大田切川の氾濫源を源とした河川で、古くは大田切川の一部であったと考えられる河川である。古田切川の左、右岸には富士山遺跡をはじめ北原遺跡、飯坂遺跡、日向坂遺跡等重要な遺跡が分布している。

古田切川と上穂沢川との中間に鼠川がある。この鼠川は、空木岳の前山池山(1,733m)を中心とした山に源を発する小規模河川であるが、この間は断層など加わった複雑な地形をなしている。そのせいもあって、時には地滑りや思いがけない洪水に見まわれることがある河川で最近の洪水量は76トンを数えている。鼠川沿岸には、かなりの遺跡の分布が知られており、塩木遺跡もその一つである。

上穂沢川は、赤穂地区の中央を東西に分断する重要な河川である。本河川の源は簫笛山の東南に発し、深沢川、一の沢は、大城林遺跡の北側で合流し、赤羽根川は大城林の南を流れ羽場下遺跡の北辺で、上穂沢川に合流する。舟山遺跡付近からV字谷となり、現在も盛んに開析が進んでいる。上穂沢川及びその支流河川沿岸には、横前新田、湯原、北方、八斗蒔、春日大明神、四分一、八幡

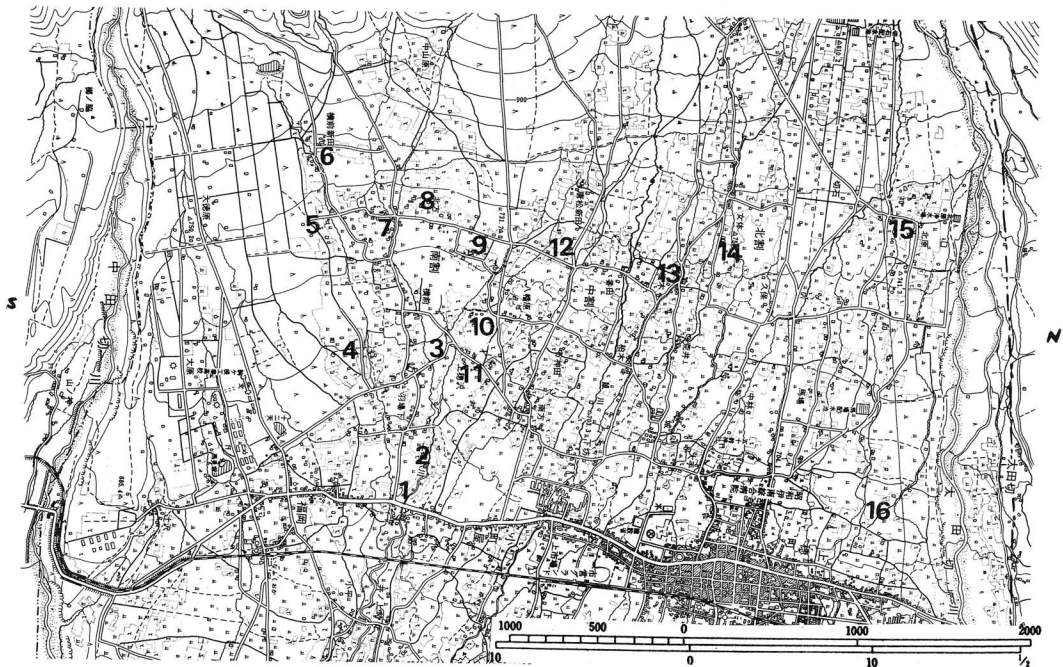
原、藤助畑、大城林、羽場下、舟山、荒神沢、中通り等の主要な遺跡が分布している。

如来寺川は簾笛川の東南の谷に源を発して、南割部落の横前、湯原の南・射殿場の北を流れ、如来寺の北で上穂沢川と合流する。現在は場整備工事で旧河川の付け替えが行われ、昔日の面影をとどめない。この河川の沿岸には、南原、射殿場、舟山、如来寺等の遺跡がある。

辻沢川は樋ヶ沢の東麓大徳坊森上付近に、源を発する諸種の水源地が集まったもので、古くは中田切川の支流であったとも考えられる小規模な河川である。この河川の両岸には遺跡が多く、大徳坊森上、樋ヶ沢、養命酒駒ヶ根工場用地内、辻沢南、馬住原、大原、筒沢、蟹沢などがある。特にこの沿岸は遺跡の豊富さとともに各種、各時代にわたる遺跡があり、辻沢遺跡群として重要な所である。またこの遺跡群を取り巻く環境は、開発の波があまり襲うことなく、ほとんど昔のままの姿を残していることでも駒ヶ根市最後の**自然保護地区**として重要な所である。

以上、駒ヶ根市における地形面からの遺跡分布を概観してきた。ここで考えられることは、まず第1に、大河川の沿岸地には遺跡は極めて少なく、小規模河川の左右段丘上に沿って発達していること、第2には、上方春日街道沿いの小規模段丘付近に集中していることである。これは段丘上を利用するという面と、小さいながら、河川の扇状地を巧みに利用して集落の発達したことがうかがわれる。

地形上から遺跡の分布を大体とらえたが、各遺跡毎の地形及び地質についてはそのつどふれることとする。



上穂地区遺跡分布図

1. 舟山, 2. 羽場下, 3. 大城林, 4. 射殿場, 5. 南原, 6. 横前新田, 7. 湯原, 8. 北方II, 9. 北方I,
10. 八幡原, 11. 藤助畑, 12. 春日, 13. 塩木, 14. 女体東, 15. 北原, 16. 富士山



大城林遺跡より駒ヶ岳を望む

昭和47年度分 第1次発掘調査

大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・湯原・射殿場・南原・横前新田

凡 例

1. 今回の調査は昭和47年度に実施された県営ほ場整備事業大田切地区に伴うものである。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により、県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和48年度）にまとめることが要求されておるため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はでき得る限り簡略し資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 遺構関係の図面は吉村進が整図した。焼土はドットで表し、住居跡内埋嚢は○で表示し、ウメ（正位の埋嚢）、フセ（逆位の埋嚢）と記して区別した。柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。
5. 土器、石器の実測及び整図、土器拓本は吉村が担当した。
6. 土器の復元は和田武夫氏の手をわずらわした。一部福沢幸一氏に依頼した。
7. 写真撮影は福沢正陽、吉村が担当した。
8. 本文執筆は、友野良一、福沢、吉村が分担した。なお遺構遺物の執筆は吉村が担当者の調査カードをもとに記述したものである。担当者は文末に記してある。
9. 本報告書の編集は吉村が担当した。
10. 遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。

目 次

凡 例	6
目 次	7
挿 図 目 次	9
写 真 目 次	13
第 I 章 発掘調査の経過	
第 1 節 発掘調査の経緯	15
第 2 節 調 査 の 組 織	15
第 3 節 発掘作業経過	16
第 II 章 発掘調査遺跡	
第 1 節 大 城 林 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	24
2. 調 査 概 要	24
3. 遺 構 及 び 遺 物	26
4. ま と め	90
第 2 節 北 方 I 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	100
2. 調 査 概 要	101
3. 遺 構 及 び 遺 物	102
4. ま と め	131
第 3 節 北 方 II 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	135
2. 調 査 概 要	135
第 4 節 湯 原 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	135
2. 調 査 概 要	136
3. 遺 物	136
4. ま と め	139
第 5 節 射 殿 場 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	139
2. 調 査 概 要	140
第 6 節 南 原 遺 跡	
1. 位置及び遺跡環境	140
2. 調 査 概 要	141

第7節 横前新田遺跡

1. 位置及び遺跡環境	141
2. 調査概要	142
3. 遺物	142

插图目次

第 1 图	大城林遗迹地形图	25
第 2 图	大城林遗构图	26
第 3 图	大城林第 1 号住居址实测图	27
第 4 图	大城林第 1 号住居址出土遗物	27
第 5 图	大城林第 2 号住居址实测图	28
第 6 图	大城林第 2 号住居址出土遗物	28
第 7 图	大城林第 3 号住居址实测图	29
第 8 图	大城林第 3 号住居址出土遗物	30
第 9 图	大城林第 4 号住居址实测图	31
第 10 图	大城林第 4 号住居址出土遗物	32
第 11 图	大城林第 5 号住居址实测图	33
第 12 图	大城林第 5 号住居址出土遗物	34
第 13 图	大城林第 6 号住居址实测图	35
第 14 图	大城林第 6 号住居址出土遗物	36
第 15 图	大城林第 7·8 号住居址实测图	37
第 16 图	大城林第 7 号住居址出土遗物	37
第 17 图	大城林第 8 号住居址出土遗物	38
第 18 图	大城林第 9 号住居址实测图	39
第 19 图	大城林第 9 号住居址出土遗物	39
第 20 图	大城林第 10·11 号住居址实测图	40
第 21 图	大城林第 10 号住居址出土遗物	40
第 22 图	大城林第 11 号住居址出土遗物	41
第 23 图	大城林第 12 号住居址实测图	42
第 24 图	大城林第 13 号住居址实测图	43
第 25 图	大城林第 13 号住居址出土土器	44
第 26 图	大城林第 13 号住居址出土石器	46
第 27 图	大城林第 14 号住居址实测图	47
第 28 图	大城林第 14 号住居址出土遗物	48
第 29 图	大城林第 15 号住居址实测图	49
第 30 图	大城林第 15 号住居址出土遗物	49
第 31 图	大城林第 16·17 号住居址实测图	50
第 32 图	大城林第 17 号住居址出土土器	51
第 33 图	大城林第 17 号住居址出土石器	52

第 3 4 図	大城林第18号住居址実測図	54
第 3 5 図	大城林第18号住居址出土遺物	54
第 3 6 図	大城林第19, 21号住居址実測図	55
第 3 7 図	大城林第19号住居址出土遺物	56
第 3 8 図	大城林第21号住居址出土遺物	57
第 3 9 図	大城林第22, 23, 24号住居址実測図	58
第 4 0 図	大城林第22号住居址出土遺物	59
第 4 1 図	大城林第23号住居址出土遺物	60
第 4 2 図	大城林第24号住居址出土遺物	61
第 4 3 図	大城林第25, 33号住居址実測図	62
第 4 4 図	大城林第25号住居址出土遺物	63
第 4 5 図	大城林第33号住居址出土遺物	65
第 4 6 図	大城林第26号住居址実測図	66
第 4 7 図	大城林第26号住居址出土土器	66
第 4 8 図	大城林第28号住居址実測図	67
第 4 9 図	大城林第28号住居址出土遺物	67
第 5 0 図	大城林第29, 30号住居址実測図	68
第 5 1 図	大城林第29号住居址出土遺物	70
第 5 2 図	大城林第30号住居址出土遺物	71
第 5 3 図	大城林第31号住居址実測図	73
第 5 4 図	大城林第31号住居址出土土器	75
第 5 5 図	大城林第31号住居址出土遺物	76
第 5 6 図	大城林第32号住居址実測図	77
第 5 7 図	大城林第32号住居址出土土器	78
第 5 8 図	大城林第34号住居址実測図	78
第 5 9 図	大城林土壙群実測図	79
第 6 0 図	大城林土壙 2 土器出土状態図	80
第 6 1 図	大城林土壙 1, 2 出土土器	80
第 6 2 図	大城林土壙 11, 12, 13 実測図	81
第 6 3 図	大城林土壙 12 出土土器	81
第 6 4 図	大城林ピット 1 実測図	83
第 6 5 図	大城林ピット 2 出土土器	83
第 6 6 図	大城林ピット 3 実測図	84
第 6 7 図	大城林配石址 1 実測図	84
第 6 8 図	大城林配石址 3 実測図	85
第 6 9 図	大城林配石址 4 実測図	86

第70図	大城林配石址5実測図	86
第71図	大城林特殊遺構1出土土器	87
第72図	大城林特殊遺構2出土土器	87
第73図	大城林特殊遺構3, 4出土土器	88
第74図	大城林特殊遺構5出土土器	89
第75図	大城林先土器時代の遺物	90
第76図	大城林住居址別石器出土表	95
第77図	北方I遺跡地形図	100
第78図	北方I遺構全測図	102
第79図	北方I第1号住居址実測図	103
第80図	北方I第1号住居址出土遺物	103
第81図	北方I第2, 4, 5号住居址実測図	104
第82図	北方I第2号住居址出土遺物	105
第83図	北方I第3号住居址実測図	106
第84図	北方I第3号住居址出土遺物	107
第85図	北方I第4号住居址出土遺物	110
第86図	北方I第5号住居址出土土器	112
第87図	北方I第5号住居址出土石器	113
第88図	号住居址実測図(折り込み)北方I第6, 8, 9, 10, 11	114
第89図	北方I第6号住居址出土土器	115
第90図	北方I第6号住居址出土石器	117
第91図	北方I第7号住居址実測図	118
第92図	北方I第7号住居址出土遺物	119
第93図	北方I第8号住居址出土土器	120
第94図	北方I第8号住居址出土遺物	122
第95図	北方I第9号住居址出土遺物	123
第96図	北方I第10号住居址出土遺物	125
第97図	北方I第11号住居址出土遺物	127
第98図	北方I弥生時代遺構実測図	128
第99図	北方I弥生時代出土土器	129
第100図	北方I配石1, 2実測図	130
第101図	北方I配石3実測図	130
第102図	北方I配石3出土石皿	130
第103図	北方I住居址別石器出土表	132
第104図	北方II遺跡地形図	135
第105図	湯原遺跡地形図	136

第 106 図	湯原遺跡出土土器	137
第 107 図	湯原遺跡出土土器	138
第 108 図	射殿場遺跡地形図	140
第 109 図	南原遺跡地形図	141
第 110 図	横前新田遺跡地形図	142
第 111 図	横前新田遺跡出土土器	143

写真目次

写真 1	大城林畑北側の調査グリット	17
写真 2	大城林 3, 4, 5 号住居址発掘	17
写真 3	桐原指導主事雨についての視察	18
写真 4	大城林遺跡グラウンド付近の調査	18
写真 5	北方遺跡発掘風景	20
写真 6	ありし日の北沢教育長	21
写真 7	掘ってはみたが	23
写真 8	大城林遺跡北より望む	24
写真 9	土器を使った炉	26
写真 10	3～7号住居址	28
写真 11	3号住居址	29
写真 12	4号住居址	30
写真 13	5号住居址炉址	33
写真 14	6号住居址	35
写真 15	6号炉址と深鉢	35
写真 16	9号住居址	38
写真 17	遺跡東の住居址群	42
写真 18	13, 14, 15号住居址	43
写真 19	14号住居址炉址	47
写真 20	15, 16, 17号住居址	50
写真 21	17号住居址遺物出土状態	50
写真 22	25, 33号住居址	61
写真 23	33号住居址	64
写真 24	28号住居址	66
写真 25	29, 30号住居址	68
写真 26	29号住居址埋襲	68
写真 27	30号住居址遺物出土状態	69
写真 28	31号住居址	72
写真 29	土 壙 群	99
写真 30	土壙第 2 遺物出土状態	80
写真 31	土壙第 11, 12, 13	82
写真 32	土壙第 12 遺物出土状態	82
写真 33	配石址 3	85

写真 34	配石址 4	85
写真 35	特殊遺構 1 土器出土状態	87
写真 36	特殊遺構 2 土器出土状態	87
写真 37	特殊遺構 3 土器出土状態	88
写真 38	特殊遺構 5 土器出土状態	89
写真 39	大城林遺跡出土土器	98
写真 40	大城林遺跡出土土器	99
写真 41	北方 I 遺跡北東より望む	101
写真 42	2号住居址	106
写真 43	3号住居址	106
写真 44	4, 5号住居址	108
写真 45	5号住居址	111
写真 46	2, 4~11号住居址	114
写真 47	6号住居址	114
写真 48	6号住居址埋甕	116
写真 49	7号住居址埋甕	117
写真 50	8号住居址炉址	119
写真 51	9号住居址埋甕	122
写真 52	10号住居址埋甕	125
写真 53	10号住居址炉址	125
写真 54	北方 I 遺跡出土土器	134

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

県営ほ場整備事業大田切地区第Ⅲ換地工区内の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託したい旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市当局と市教育委員会とが協議した結果、市立博物館を中心に、県営ほ場整備事業大田切地区（第Ⅲ換地工区）埋蔵文化財調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

4月1日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結、また市長と調査会との間で再委託契約を行った。一方、県教育委員会に発掘調査の着工について連絡し、指示を得たので友野良一氏を団長とする調査団を編成し、4月2日から調査を開始した。

なお、47年度分にかかわる遺跡のうち、大城林遺跡は3月より分布調査を実施していたので、そのまま発掘調査に切り換えて実施した。

第 2 節 調査会の組織

。県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

会 長	北 沢 照 司	(市教育長)
理 事	木 下 義 男	(市文化財調査委員会委員長)
〃	下 村 忠比古	(〃 〃 副委員長)
〃	吉 沢 康 道	(市立博物館長)
監 事	池 上 重 雄	(駒ヶ根市文化財保存会会長)
〃	気賀沢善右衛門	(駒ヶ根郷土研究会会長)
幹 事	小 池 金 義	(市教育次長)
〃	福 沢 正 陽	(市博物館学芸員補)
〃	武 蔵 法 子	(市博物館)
〃	細 田 繁 子	(〃)

。調査団

団 長	友 野 良 一	(日本考古学協会員)
調査員	吉 村 進	(明治大学学生)
〃	山 田 年	(長野県考古学会会員)
〃	北 沢 雄 喜	(〃 〃)
〃	吉 沢 文 夫	(〃 〃)
〃	田 中 清 文	(〃 〃)

調査員	伊藤修	(大正大学学生)
特別調査員	根津清志	(長野県考古学会会員)
〃	福沢幸一	(〃 〃)
〃	本多秀明	(〃 〃)
〃	小池政美	(〃 〃)
指導	桐原健	(県指導主事)
	今村善興	(〃)
	神村透	(〃)
	丸山徹一郎	(〃)
	宮沢恒之	(〃)
	林茂樹	(日本考古学会協会会員)

(役職名は調査時のものである。)

第3節 発掘作業経過

3月25日(土) 晴 南信土地改良事務所下島係長と共に、表面採集を兼ねて地区内の現地確認を行う。作業員の手配を依頼する。

3月26日(日) 雪のち晴 10時すぎまでの雪のため、予定をしていた抗い打ち作業も出来ず、北原幸雄氏宅に出向き大城林からの出土品をみせてもらう。

3月27日(月) 晴 グリット組みを行う。グリットは2m×2mとし、遺跡の西端果樹園の西を基点として、南から北へあ、い、う……、西から東へ1, 2, 3, ……とする。

3月28日(火) 晴 本日より調査を始める。約25グリットを調査、19-ぬより配石を発見第1号配石址とする。他のグリットはほとんど遺物の出土がなかった。

3月29日(水) 曇 昨日に引き続き畑部分の調査、25グリットを掘る。上穂沢川に面したかなりの北傾斜は、頭大からそれより大きな自然石が河原状をなし、氾濫源と思われる。

22-にに住居址らしき落ち込みを確認、第1号住居址として周囲の拡張を行う。新しく配石址が2ヶ所に見つかる。

3月31日(金) 曇 1号住居址(以下住居址を省き○号住とする)の拡張と、1号住の東部分のグリットの調査を行う。

4月1日(土) 晴 小沢建設の御好意によって、ブルドーザによる道路敷部分の削土と田のあぜはずしを行う。

1号住の精査、中央北寄りに石組み炉を確認する。前に発見された配石址第2号は住居址の東壁に位置し1号住に属して祭壇的用途を持つものと考えられる。その手前より底部穿孔の伏襲が発見される。

1号住の東に2号住を確認、外側に柱穴がみられる。更に配石址4, 5号を発見する。

午後4時より現場にて、発掘調査の着工式を行う。

4月2日(日) 晴 2号住の精査 内部に炉、柱穴を持たない。

昨日ブルドーザーによって排土した地区の調査を始める。柱穴、炉の一部が発見される。3, 4, 5号住と命名する。

6時より、調査団打ち合わせ行う。

4月3日(月) 晴 3, 4, 5号住の拡張及び掘り下げをする。壁は北側には、認められない。3, 4号住の南部分に周溝が確認される。

新しく6, 7号住も付近より発見される。

今後の調査日程について、事務局と調査団との打ち合わせ行う。

4月4日(火) 曇のち雨 3~7号

住の調査に全力をそそぐ。3号住は完掘し一部清掃。炉は石囲い炉で、南から西にかけて周溝がみられる。4号住の炉は焼土のみで特に炉の施設はない。5号住もほぼ完掘、石囲い炉である。住居址東側に貼り床がみられる。6号住はプランを確認する。石囲い炉を持ち、周溝が北側にみられ、そのわきから小形深鉢が出土する。

1, 2号住の写真撮影、遺構の全体測量を行う。

7時より、中間報告会について打ち合わせ。

4月5日(水) 曇 3~7号住の清掃、写真撮影行う。7号住は貼り床がみとめられる。

5号住実測後、貼り床をこわし調査する。黒色土が充満し、中から深鉢が2ヶ出土する。

4月6日(木) 曇のち雨 7号住の貼り床をこわし、8号住を調査する。東側は開田によって破壊され、プランは不明である。

8号住の東に調査を進める。33一さに幅2m、深さ1.5m位のV字形の溝を発見、古老によると南北に通じる堀らしきものがあったとのこと、大城林なる地名から城、館址などに関連するものと考えられる。

更にもその東39一かに堅いたたき面が見られる。9号住とし、拡張・精査を行う。北側に接して2列の列石と大きな円筒形のピットを発見、時期、性格は不明である。

4月7日(金) 雨 天候悪く、午前中機材手入を行う。

桐原指導主事指導のため来市、雨の中を現地に出向く。



写真1 大城林畑の調査グリット



写真2 3, 4, 5号住居址発掘

4月8日(土) 曇 1号配石址及び1, 2号住実測を行う。

9号住の精査, その東に落ち込みを確認拡張すると焼土及びピットが発見される。10号住とする。この付近は, ブルドーザーを使つての開田のため, ローム面が削られており, これより南の部分の調査は断念する。11号住の東に円形にめぐる柱穴を確認, 11号住とする。更にその東に, 12号住が発見される。

4月9日(日) みぞれ

天候が悪いため, 作業を中止し宿舎にて, 遺物洗浄, 整理を行う。

4月10日(月) 晴 10号住完掘, 炉の西より下半分が埋められた深鉢出土する。11号住を拡張, 精査する。中央より焼土が充満した深鉢出土, 埋甕炉である。12号住は攪乱がひどくプランははっきりしない。

3, 4号住実測

現場にて「中間報告会」を行う。

4月11日(火) 晴のち小雨 9, 10, 11号住の清掃及び写真撮影を行う。

12号住は床面の攪乱がひどく, 原形をとどめない。

本日からグラウンド部分の調査にかかる。51-う, お, きなどより, 土壌らしき落ち込みを発見, 全面拡張に全力をあげる。

4月12日(水) 雨のち晴 雨のため現場作業は中止し, 遺物の洗浄, 註記を行う。

4月13日(木) 晴 引き続き土壌群の拡張; 一部精査を行う。土壌群北側には, 不定形のピットが20数個発見される。中には炭化物のみられるものもある。南西の舟底形の土壌より, 小形深鉢が口縁, 胴部, 底部にわけて埋め込まれていた。更に東方に長方形の土壌が3基発見され, 真中の土壌よりは壺形土器と条痕文を持つ小形鉢形土器が, 壊され重なって出土した。

4月14日(金) 晴 土壌群の完掘, 清掃終了後写真撮影を行う。

土壌群の東, 65-い, う, え, 67-い, うの各グリットとも遺物多く, 一部に落ち込みが発見されたので, 付近の全面拡



写真3 桐原指導主事雨についての視察



写真4 大城林グラウンド付近の調査

張を行った結果、13、14号住を発見する。

4月15日（土） 雨 昨夜来の雨のため、作業は中止し吉村調査員も久しぶりに帰宅する。

4月16日（日） 晴 13、14号住の完掘に全力をあげるとともに、調査の手を東に進める。13、14号住に隣接して15、16、17号住を発見する。15号住は炉址の確認、16、17号住はプランから複合するものと思われる。

4月17日（月） 晴 昨日に続いて、13、14、15号住の精査、清掃終了後写真撮影を行う。

16、17号住はほぼ完掘、16号住は17号住によって切られ、その比高は約30cmである。しかし、炉址は発見されるも柱穴はまったくみあたらない。

17号住の炉は方形の一部石囲い炉で掘り込みは深く、石は大きな一枚石を使っている。

炉の形状からすると住居址の拡張及び建て替えが予想される。なお東壁ぎわに深鉢の底部付近が埋められていた。

グラウンド北及び道路へ調査を移す。14号住の北に18号住、更にその北西に19号住を発見する。続いて土壌群と19号住の間に、胴下半部をローム層に埋め込んだ深鉢を発見、20号住とし全面拡張を行う。するとその北4 m程に黒色土に埋め込まれた水神平系の甕形土器が出土する。夕方のため、遺物は取り上げ精査は明日にする。

6時より、調査内容の検討をするとともに、水神平系土器の出土から調査上の注意をおくため、神村指導主事に連絡をとる。

4月18日（火） 晴 16、17号住の完掘、清掃終了し写真撮影行う。

20号住は周囲の精査にもかかわらず、床面とおぼしき面や柱穴は発見できず、住居址と断定はできなかった。特殊な単独の埋設址であろう。又その北、水神平系の甕が発見された所も、慎重な調査をしたが、生活面等遺構らしきものはやはり発見できず、同様な性格を持つと思われる。

19号住に切られて南に21号住が発見される。更に19号住の東に直線的に並んで焼土と炉址2ヶ所が発見される。22、23、24号住と命名する。

4月19日（水） 晴 18、19号住の清掃行う。18号住は22、23号住に切られている。昨日発見した22、23、24号住は中央より北は開田の時に破壊され、全体は判明しない。22号住は西側一部19号住の貼り床がされている。

全住居址の清掃終了後、全体写真撮影を行う。

一応、大城林遺跡の全体的様相とまではいかないも、大方の結論を得たので本日をもって一時大城林遺跡の調査を終了し、次の目的地北方遺跡に移動することに。実測班は残りの測量を行うこととし、器材の点検、運搬をする。

神村指導主事、中央道の調査の合い間をぬって指導のため現地の視察に来る。

信濃毎日新聞が取材のため現場に来る。

4月20日（木） 雨 雨のため現場作業は中止し、宿舎にて遺物整理を行う。

4月21日（金） 晴 本日より北方Ⅰ遺跡の調査を開始する。測量班は大城林遺跡の実測を行う。

調査区域の北西隅畑と道路の境を基点とし、東へa、b、c……、南へ1、2、3……として、

2 m×2 mのグリットを組む。

3-a, 3-kを調査, 3-kは表土から20cm程で条痕文を持つ水神平系の土器片がかなりまとまって出土する。3-aは黒色砂質土50cmで白質の砂質土となる。それより約2 m部分的に掘り下げても同質の砂層が堆積する。遺物は黒色砂層中より縄文中期の土器が出土する。全体を白色砂質土まで、掘り下げると部分的にローム質土が置かれた所があり、遺物のかなりの出土量と考え合わせると住居址の可能性もあり、今後の調査に待つ。

4月22日(土) 晴 昨日の住居址の可能性を求めて、西側部分に調査区域を上げたいが、用地外のため地主の了解を求める。幸いにして協力を得られたため調査に入る。その結果、礫に混って多くの遺物が出土するとともに、白色砂質土を切って黒色砂質土が埋没していることがわかり、1号住居址として周囲の拡張を進める。

7-eからも礫に混って遺物が多量に出土し、拡張すると一部に落ち込みが確認される。第2号住と命名する。3-eで水神平系の包含層に達し、南西隅より埋め込まれた甕を発見、この面まで周囲を拡張する必要がある。

4月23日(日) 曇のち雨 1, 2号住居址の完掘に全力をそそぐも、礫が多く思う様に作業ははかどらない。11時過ぎより雨のため現場作業を中止する。午後遺物整理を行う。

4月24日(月) 晴 昨日に続いて1, 2号住の完掘に全力をあげる。1号住は調査区域外を一部調査させていただいたが、壁を確認するにはほど遠く東側半分の調査にとどまる。炉は炉穴で深く掘り込まれ、中より多量に土器が出土する。

2号住は4 m程の大きさの円形なプランで、1号住同様ロームが敷きつめられ固く良好な床面である。

1号住の東に3号住発見される。

4月25日(火) 曇 3号住の精査にかかるるとともに、2号住東にある水神平期の生活面の調査を行う。焼土やピットが発見される。

更に2号住を切り込んで4号住が確認されるが、上部には水神平期の生活面があり調査は難しくなる。

4月26日(水) 雨一時晴 作業が予定より遅れがちのため、晴間をぬって3号住の調査を行う。幸いにして砂質土のため思ったより作業は楽である。

4月27日(木) 曇 4号住の上に乗っかる水神平期の生活面の実測を済ませ、下部の調査にかかる。東側は壁がなく、同一レベルを持って床面が続きプランはひょうたん形となる。住居址の複合を考える必要と共に精査が望まれる。床面精査の結果、4号住中央に東に周る周溝を発見、5号住が

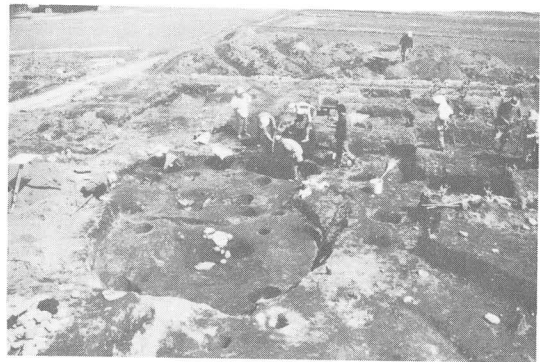


写真5 北方遺跡発掘風景

確認される。5号住東壁ぎわに並んで埋甕が2ヶ、更に東側にめぐるピット内より底のない小形深鉢と大形深鉢の破片を発見、やはり埋甕的要素を持つと思われる。

4月28日(金) 晴 畑の南東に落ち込みを確認6号住とする。北は複合する住居址があるらしく、広範囲に落ち込みが認められる。拡張とともに住居址の掘り込みを実施する。東壁ぎわ中央より大形の埋甕が発見される。取り上げは明日にする。

更に5号住の東に7号住を発見、遺物は少ないが東壁ぎわより埋甕が発見される。

4月29日(土) 晴 6号住の精査と北側の拡張を行う。昨日発見された大形深鉢の北よりもう一つ埋甕が発見される。又西側床面から完形の深鉢と壁ぎわになだれ込むように、やはり完形の深鉢が出土する。

6号住の北を一応8号住として遺物整理を行う。床面上から平出ⅢAに類似する深鉢の大破片が出土する。

住居址実測を始める。

4月30日(日) 晴 8号住の完掘に全力をそそぐ。その北西に9号、北東に10号住が確認される。

8号住は小形な石囲い炉を持ち、その上部に大形深鉢がつぶれて発見され、炉中より小形深鉢の完形品と石棒が出土する。又住居址の西側は段を持ち、床面上から縄文前期末葉の土器片が出土する。先行する住居址をこわして構築された可能性もある。

5月1日(月) 雨 雨降りのため、宿舎にて遺物整理、復元を行う。

5月2日(火) 曇 9、10号住の調査を行う。10号住を切って東に11号住発見される。

9号住の炉址内には、土器が貼られている。東側より埋甕発見される。10号住の炉の内部は石が壁に積まれている。

6、8、9号住の清掃及び写真撮影も同時に行う。

5月3日(水) 晴 11号住の完掘に力を入れる。貼り床下より埋甕が3ヶまとまって出土するが、10号住と11号住との複合関係もあり、全て10号住に属するものかは疑問である。更にピット内より小形深鉢と東壁ぎわより埋甕出土する。

10-aより石組みが発見される。大城林遺跡から発見されたものと同様な性格を持つものと思われる。

北方Ⅱ遺跡の調査に取りかかる。2m幅、長さ10mのトレンチを2本東西に設定し、それを2m毎に区切って適宜調査する。遺物はまったく発見されない。

5月4日(木) 曇のち雨

本日が現場作業最後の日である。

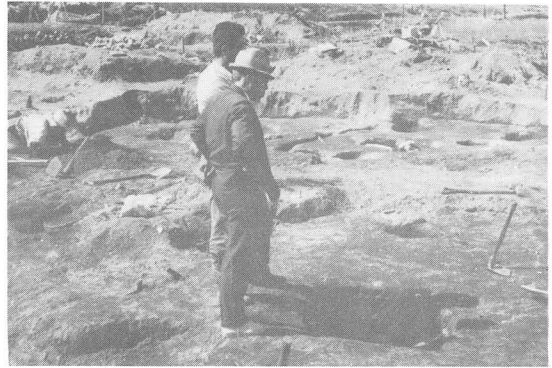


写真6 ありし日の北沢教育長

北方Ⅱ遺跡は昨日に続いて調査行方も、土器の小片が一片出土するのみで期待は持てず調査は打ち切る。

中間的ではあるが、北方遺跡の予想外の成果と日数の点から本日をもって南割地区の調査は一区切りとして残った調査地点は夏にまわすこととし、長い調査を終る。午後より器材点検、撤収準備を行う。

1月以上にわたる長期間の調査のお互いの労をねぎらって慰労会を開く。

6時より調査団と事務局との打ち合わせを行い、今後の実測作業や遺物整理の基本を決める。

その後、10日ほど実測作業や遺物整理が行われた。

7月26日(水) 晴 南割地区の発掘調査を再開する。春実施した大城林遺跡の再調査から始める。グラウンド中央部が調査区域として残っているが、排土した土がありブルドーザーによって春の調査の排土を除き、基線からグリットを組む。器材運搬も終り、明日からの調査の諸準備完了する。

7月27日(木) 晴

昨日組んだグリットの調査に入る。グラウンド中央寄りには表土(グラウンド面)から10cm程でローム層にいたるが東にかけては埋土があり深くなる。

落ち込みを確認、25号住とし拡張する。

7月28日(金) 晴

25号住を西側へ追って壁を確認すると、新たに住居址を発見する。すでに住居址が確認され、住居址番号がついているため一応50号として整理する。後の33号住である。25号住によって切られている。

25号住南壁外浅いピット中より、弥生時代初期に属する壺形土器がつかれて出土する。

25号住東に焼土を伴ったピット群が発見され、26号住とする。更にその東にローム層に胴下半部が埋め込まれた釜形と表現すべき完形品が出土する。27号住と命名したが精査の結果、住居址でなく、単独の埋設施設と判明する。

その東側に円形の落ち込みを確認し、28号住とする。

7月29日(土) 晴 25号住の完掘に努力するも、周溝などあり発掘は手間どる。33号住石囲い炉を発見する。25号住は埋葬炉である。昨日発見された壺形土器の東からやはり同時期と思われる壺形土器が出土する。

7月30日(日) 晴 25、33号住の完掘及び清掃、26号住の清掃に全力をあげ終了後写真撮影行方。作業員は休みとし、関係者のみの調査で仕事ははかどらない。

7月31日(月) 晴一時雨 28号住の完掘、清掃を行い写真撮影も完了する。

29号住の東に複合して30号住を発見する。複合関係は同レベルで床面が続き、遺物による検討が待たれる。30号住床面より大形深鉢がつかれて出土する。

28号住の南に複合する31、32号住を発見する。32号住は攪乱がひどく床面の確認に手間どるが、東側にカマドの一部が見つかる。31号住は床面が32号住よりも深く、貼り床がされている可能性は十分あり、慎重な調査が望まれる。

8月1日(火) 晴一時雨 本日より一部作業員を分けて他地点の調査にかかる。

射殿場遺跡は過去に遺物が採集されている。道路南側畑に2×10mのトレンチを3本設定し、調査を行うも遺物の出土はまったくなく、午前中で調査を打ち切り、午後南原遺跡の調査にかかる。

過去にやはり遺物の散布があったが、射殿場同様今回の調査では細土器片が一片でたのみで、遺構らしきものはまったく確認できなかった。



写真7 掘ってはみたが(射殿場)

一方大城林遺跡は31号住の調査を主体に行う。住居址中央に層をなして井戸尻期の土器が出土する。32号住はほぼ方形のプランが確認された。更に29号住東側に石が乗せられた埋甕が発見される。

8月2日(水) 晴一時雨 湯原遺跡の調査を行う。分布調査で桑畑から部分的に遺物が集中して採集されたので、その付近に重点をおく。条痕文を持つ縄文晩期末の土器片が2×2mのほどの範囲内から多量に出土する。しかし他の所からはまったく遺物の出土はみられない。遺構の追求に全力を傾けるも不明のまま終る。

大城林遺跡は29、30号の完掘、31号住は遺物が多く作業ははかどらない。

8月3日(木) 曇 最後の発掘地点横前新田の調査にかかる。トレンチを2本設定して掘るも縄文中期土器片が断片的に出土するが、遺構は確認できない。

8月4日(金) 晴 昨日に続いて横前新田の調査を行う。やはり遺構は検出できず、調査を打ち切る。

大城林は31号住の完掘と全住居址の清掃、終了後写真撮影を行う。

器材の点検及び撤収準備を行い、春、夏にわたる南割地区の調査を一応終ることにする。

早稲田大学滝口宏教授 現地視察する。

8月5日(土) 晴 大城林の実測作業

8月6日(日) 晴 //

8月7日(月) 晴 北割地区塩木遺跡へ器材を運搬する。

春、夏にわたる長期の発掘調査を実施するに当って、調査団員、土地改良区事務所関係者、小沢建設、地主の方々、地元協力者をはじめ、多くの方々のご協力のご配慮によって、ここに初期の目的を果し調査を終了することができました。心から感謝の意を申し上げる次第です。

なお現場作業終了後、約半年間にわたり、和田武夫氏には遺物整理、復元に多大な協力をいただきました。地味な仕事にただもくもくと打ち込まれ、報告書の基礎資料を作成されましたことをつけ加え、心から感謝の意を申し上げる次第です。

(福沢正陽)

第II章 発掘調査遺跡

第1節 大城林遺跡

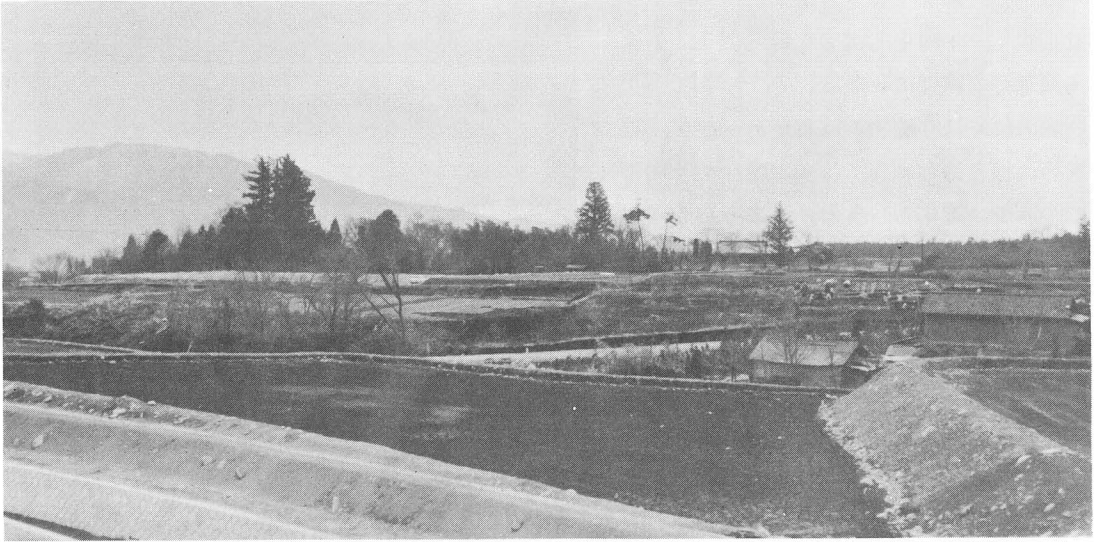


写真8 大城林遺跡北より望む

1. 位置及び遺跡環境

大城林遺跡は、駒ヶ根市赤穂7,936番地南割地区に所在し、飯田線駒ヶ根駅の南々西3kmの地点にある。市道上穂本線が南割地籍に入るところ、上穂沢川と交叉する地点から赤羽根川と交叉する地点の間の東側に続く段丘突端である。

標高は700m前後を測り、上穂沢川との比高は約5m、東側はなだらかに上穂沢川に落ちる。

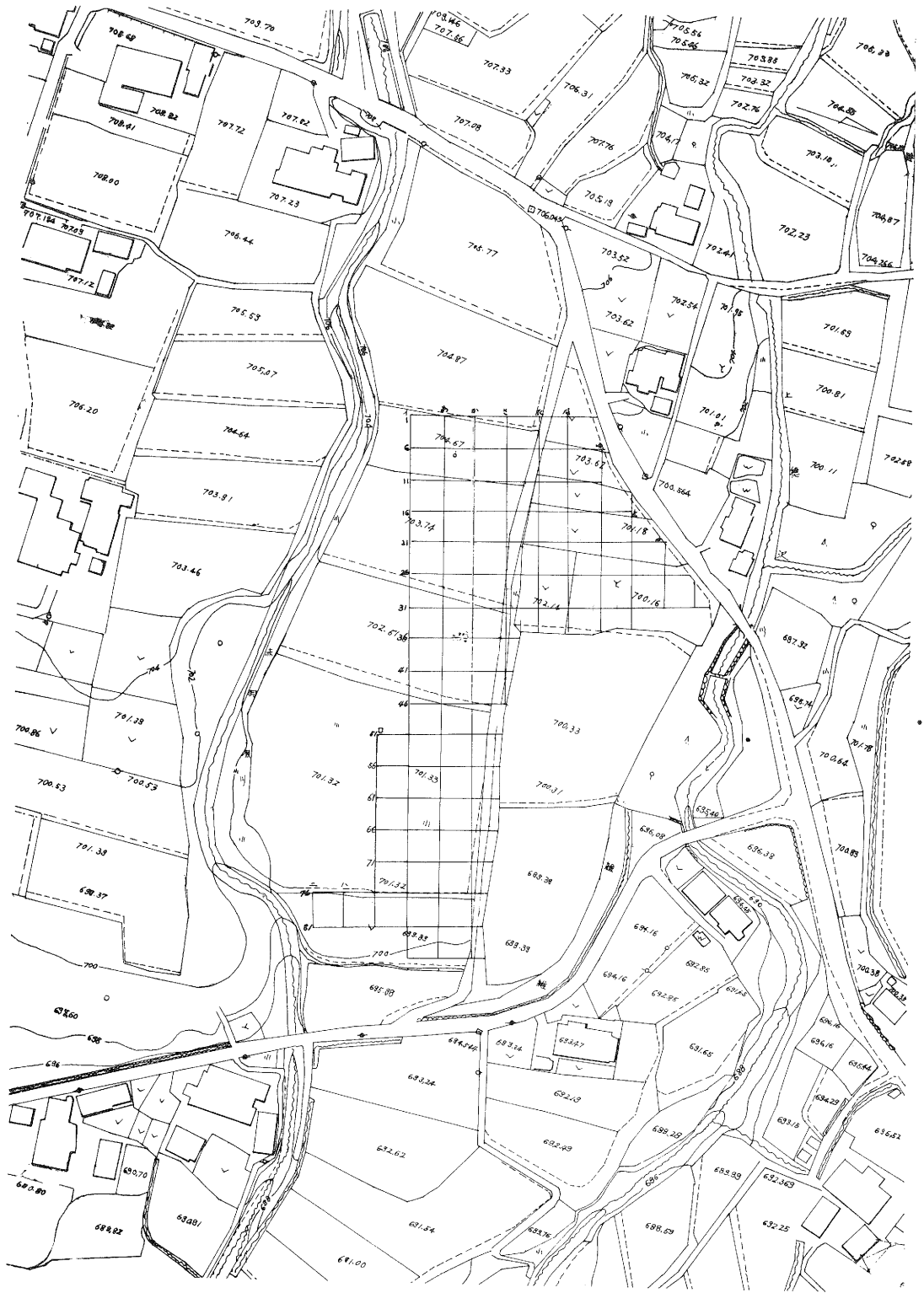
上穂沢川沿岸は市内有数の遺跡群を形成しており、大城林もその一つである。

遺跡の地質基盤は伊那礫層からなり、その上に新期ロームが堆積している。表土は黒色腐植土で確認できる畑部分で約30～40cmを測る。遺構はローム層を掘り込んで構築されている。

2. 調査概要

当遺跡は昭和28年3月、区の遊園地造成工事中に発見された。それ以前は松の茂る蒼古とした森であった。

発見の連絡をうけた友野が調査したところ、遊園地中央やや南寄りに住居址が点々と見うけられたが、いずれも満足なプランを示すものはなく、大部分は破壊された後であった。その時、採集し

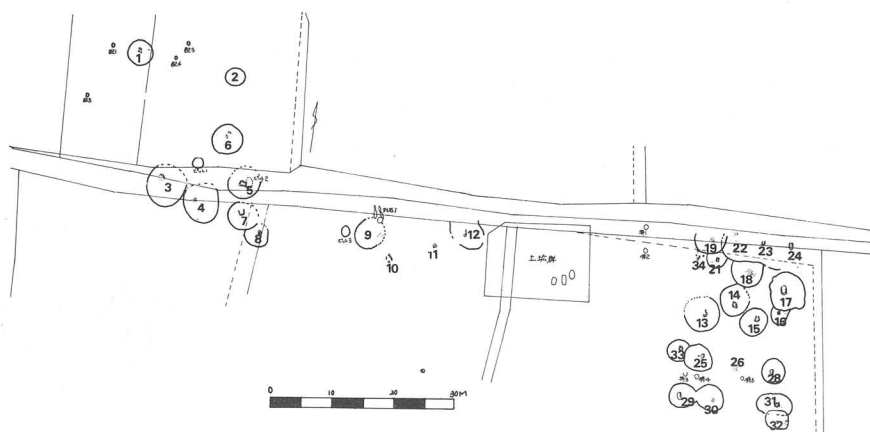


した遺物は加曽利E式に所属するもので、現在市立博物館に保管してある。

その後、昭和30年後半になって遊園地の西及び北に水田ができてしまった。造成時には住居址がかなり確認され、遺物も豊富に出土したとのことであるが、調査はなされぬままに水田化され、今回の調査は残った畑、中央を通る道路及び田や遊園地の埋土部分に限られてしまった。果樹園は攪乱がひどく、更に樹木の関係もあり、調査区域から除外した。

調査方法は果樹園西端を基点として、ほぼ台地主軸にそうようグリットを設定した。大体南北方向2m毎にあ、い、う、東西方向に1、2、3とし適宜グリットを掘り、遺構確認によってそのまわりを拡げる方法をとった。(吉村 進)

3 遺構および遺物



第2図 大城林遺跡 遺構図 (S=1/800)

1) 第1号住居址(第3, 4図, 写真9)

遺構 本住居址は北斜面の畑ほぼ中央より発見された。この付近でのルーム面までの深さは約40cm, 北に行く程深くなる。

大きさは径 3.8m前後, プランは不整円形をなしている。壁は10~15cm, 南東部はなだらかな傾斜で壁は不明りょうである。

炉址は中央やや北寄りにあり, わずかにくぼめられた周囲に自然石が不規則に並べられ, 内部には土器の底部が埋められていた(写真9)。

住居址南東には, 自然石を組み合わせた配石がみられる。多分住居址に付属するも

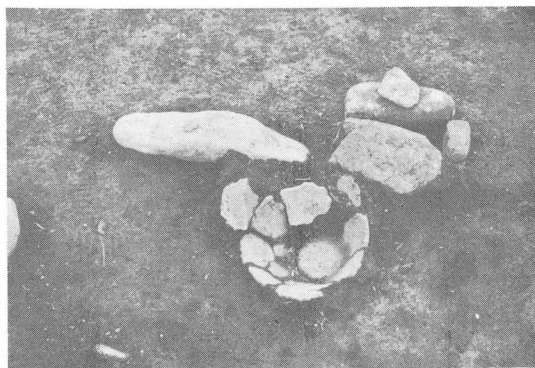


写真9 土器を使った炉

として良いだろう。更に西には、床面よりわずかに低く逆位に埋め込まれた底部せん孔の埋甕（第4図-1）が出土している。内部は黒色土が充満する。柱穴は北に2ヶ発見されたのみである。

床面は固く良好である。

遺物（第4図） 1はくびれた頸部を持つ深鉢で、口縁部は細かな波状を呈す。頸部には1条の粘土紐を蛇行させている。他は無文である。底部はせん孔され、逆位の埋甕である。

2, 4は曾利式にみられる文様である。3は関東地方の加曾利E式に比定される。総じて加曾利E式の前半、曾利II式に比定されるであろう。（福沢正陽）

2) 第2号住居址（第5, 6図）

遺構 1号住居址の東側に発見された。径約4mの大きさで円形のプランを示す。壁高は西で30cm, 東で15cmを測る。床面はタタキはみられず軟弱である。

内部には炉址あるいは焼土及び柱穴はみとめられず、南東壁ぎわに花崗岩がすえられているだけである。

屋外に7ヶのピットが発見されたが、ほぼ方形を形作るころから柱穴と考えると良いだろう。

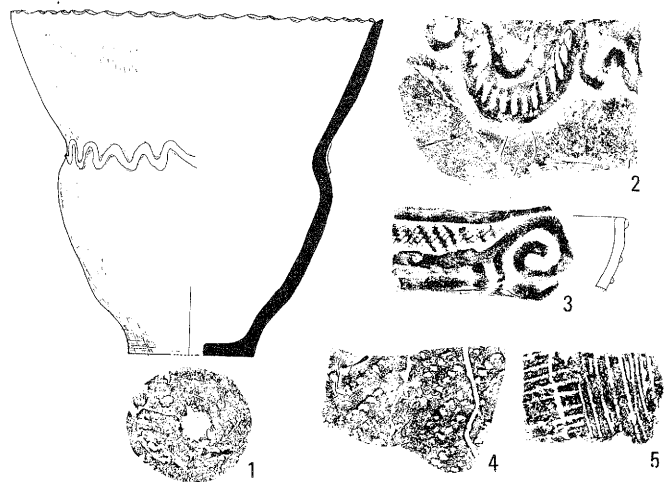
この様な例の堅穴を住居址とすべきかは、今後の研究に待ちたいと思う。

遺物（第6図） 覆土中より出土した遺物は非常に少なく、土器は数片、石器は硬砂岩製の石斧（第6図-5）1点である。

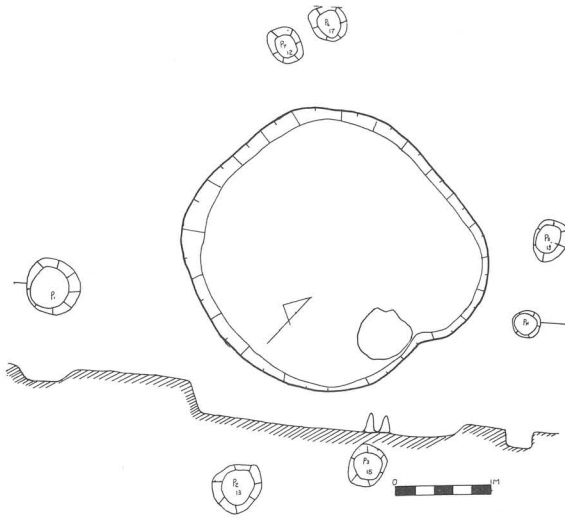
加曾利E式に属するが、全体を知り得るものはなく、くわしくはわからない。（伊藤 修）



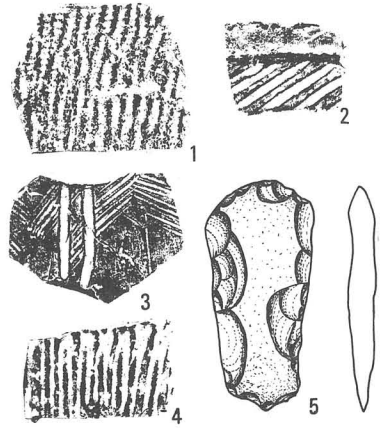
第3図 大城林第1号住居址実測図 (S=1/80)



第4図 大城林第1号住居址出土遺物(1-1/6, 2-5-1/3)



第5図 大城林第2号住居址実測図(S=1/80)



第6図 大城林第2号住居址
出土遺物(1/3)

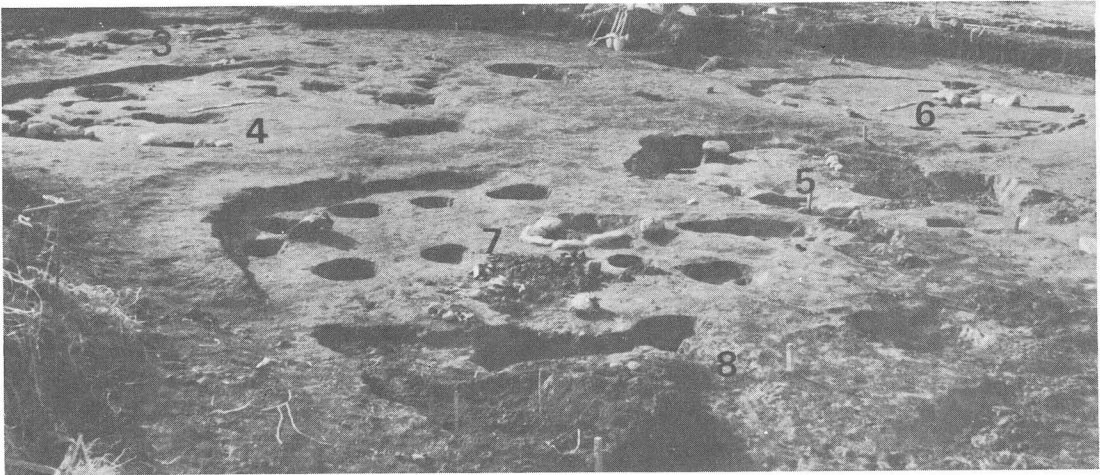


写真10 3～7号住居址

3) 第3号住居址(第7, 8図, 写真10, 11)

遺構 本住居址は1, 2号住居址の南, 道路及び田の埋土下より発見された。

壁は南側で高さ40cmを測るが, 北に行くに従い低くなり北側ではなくなっている。推定規模約6m, 円形のプランと思われる。床面はタタキが加えられ固く良好である。

炉は中央北寄りであり, ほぼ長方形の石囲い炉で, 焼土の堆積はかなり厚い。南側に一部石がないが, 抜きとられたものかは判然としない。支柱穴は一応4ヶと思われるが, 南に深いピットが3ヶあり, 定かではない。

住居址南から西にかけて, 浅い周溝がみられ不規則なピットがあるのは壁の防護施設のためのものかも知れない。



第7図 大城林第3号住居址実測図 (S=1/80)

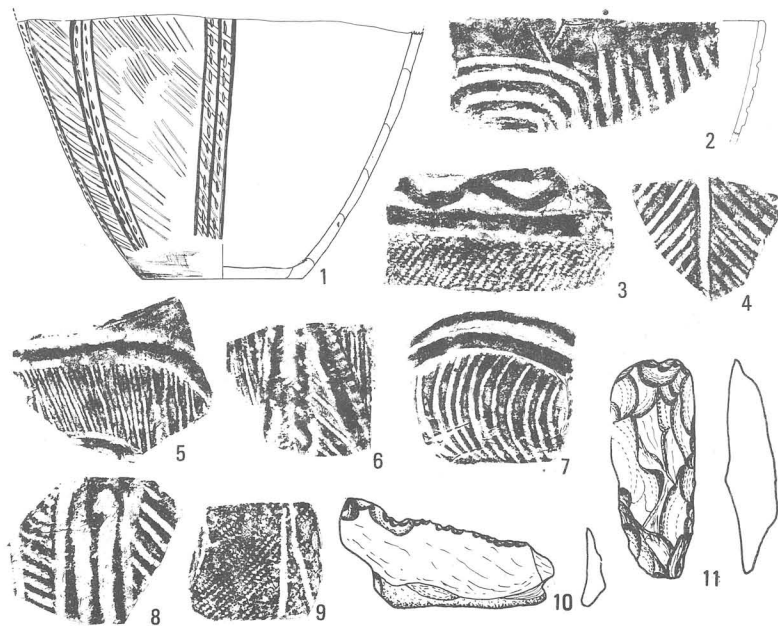
遺物(第8図) 1は炉址の付近より発見され、復元したものである。内面に炭化物が付着している。茶褐色で焼きは普通である。文様は3本の下垂する沈線を施し、その内部を刺突文が充填、更に全体に条線がみられる。加曾利EⅡ式に比定できる。

2, 5, 7, 8は甕ないし、深鉢の破片で南信、中信の同時代の遺跡においてはごく一般的にみられるものである。5, 7, 8は胴部付近のもので、隆起帯によって文様を表出し沈線がその間を埋めている。6は諏訪地方にみられる曾利Ⅰ式に属するものであり、土器中では古い時期のものである。

石器は石匙(10)と打製石斧(11)があり、共に硬砂岩製である。石匙は刃部に加工がなく製作時のものであろう。(吉村進)



写真11 第3号住居址(北より)



第8図 大城林第3号住居址出土遺物 (1-1/6, 2~11-1/3)

4) 第4号住居址 (第9, 10図, 写真10, 12)

遺構 3号住居址の東に隣接して発見された住居址である。北には壁はなく全体に低い。プランは楕円形を呈し、推定規模長径7m, 短径5.5mを測る。床面は固く良好である。

西側に一部周溝がみとめられる。柱穴は6ヶと思われるが、内部に共に深いP₂, P₃があり、更に焼土があるところからすると住居址の拡張も考えられる。

なお、P₂の両側にP₁, P₃があるが、側柱であろうか。

炉址は特別な施設はなく床面上に薄い焼土の堆積がみられるだけである。

遺物 (第10図) 出土遺物は豊富である。

1は頸部に段を有す無文の浅鉢で、チョコレート色に固く焼かれている。内面には器面調整の擦痕がみられる。2, 5は口縁部にワラビ手状の貼り付け文を施し、中を縄文で埋める。胴部は縄文を地文とし、2は器面を8分画に沈線による蛇行懸垂文が走る。関東地方の加曾利E IないしII式に比定される。3は口縁部がラップ状に開き、一度くびれた頸部から長胴の胴部へ続く深

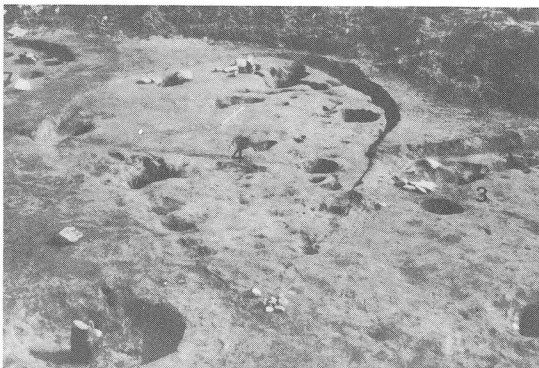


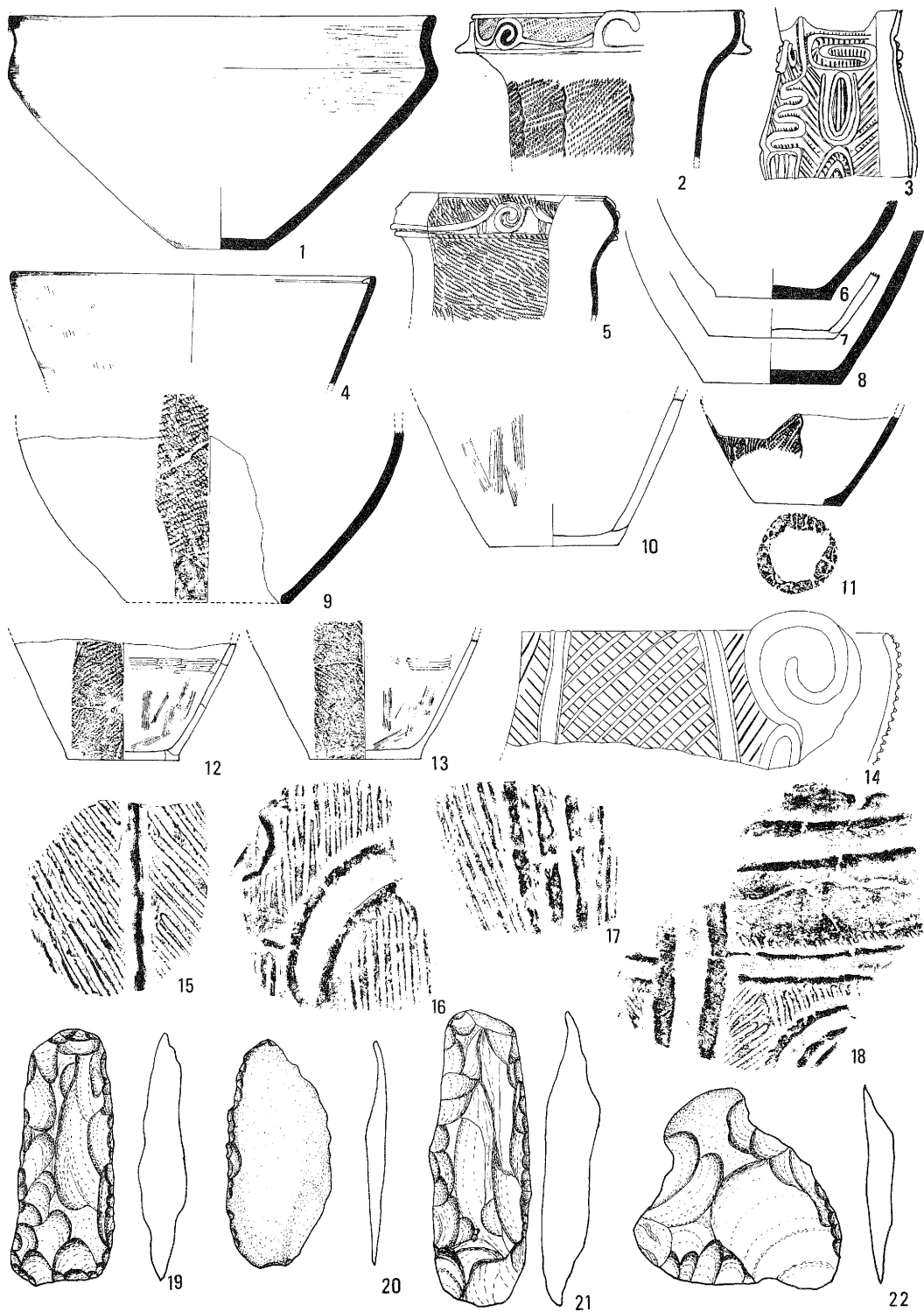
写真12 第4号住居址 (北より)



第9図 大城林遺跡第4号住居址実測図 (S=1/80)

鉢である。口縁は多分無文であろう。細い粘土紐によるS字文・人体文を施し、隆線の内にはへら状工具による連続押し引き文、区角の間には竹管による沈線が充填している。曾利I式に比定できる。14は馬蹄状の突起を配し、その間は斜走する沈線とソーメン状の粘土紐による籠目文がみられる。曾利I式である。4は1同様無文の浅鉢であろう。6～13は全て底部付近のもので、6、7、8、10の様に無文のものと縄文を施したものとがある。11には蛇行懸垂文もみられる。10は外面に12、13は内面にハケ状の擦痕、更に12、13の内面にはへら状工具によると思われる器面調整の痕が顕著に残っている。15～18は隆線によってさまざまな区角を描き縦走、斜走する沈線を持って埋めている。曾利I～II式に位置する。

石器は打製石斧(19, 21)、石匙(22)、横刃形石器(20)があり、共に硬砂岩製である。20は中央道用地内の遺跡から多くさん出土し、これを横刃形石器と呼んでいるのでここでもその名称を使うことにする。礫を打ち割り、扁平な剥片の縁辺に刃部を作出するもので一面は自然面を残すも



第10图 大城林第4号住居址出土遗物 (1~13-1/6, 14~22-1/3)

のが一般的である。当遺跡よりかなり多く出土している。 (吉村 進)

5) 第5号住居址 (第11, 12図, 写真10, 13)

第4号住居址東, 第6号, 7号住居址のほぼ中間に位置する。

南と西に壁は確認されたのみでプランは不明である。西側に幅10cm程の周溝がみられる。壁高は約20cmを測り北に行くに従い低くなる。

床面は軟弱である。支柱穴は4本を基本とすると思われる。中央やや北寄りに方形の石囲い炉 (写真13) がみられ、内部には、5cmほどの焼土が堆積している。

炉のすぐ東に楕円形の貼床が確認され、その内部から埋設された土器 (第65図-1, 2) が2ヶ出土している。貼床は

炉址の一部にもみられ、その上に炉石が完全にのっているところからすると、ピットとの先後関係は当然ピットの方が古くなる。遺物との関係からみると时期的にそう違いがみられない。問題点は後述する。

遺物 (第12図) 遺物は比較的少ない。1はキャリパー状の深鉢で4つの頂きを持つ波状口縁である。胴上半部と下半部とを横走する2本の隆線によって文様帯が区切られ、その間は無文帯をなす。

口縁部文様帯は頂きから垂下する隆帯と更にその間に退化した人体文によって器面を8分画し、区角内は竹管による浅い沈線を持って幾何学文様を表出している。胴下半部は井戸尻期特有の楕形文がみられる。内面には若干、炭化物が付着している。あまり類例のない土器であるが、懸垂化された隆帯文と楕形文からすると、井戸尻Ⅲ式に比定できるであろう。2は全様の器形は知り得ない。垂下する4本の隆帯を配し、沈線による楕円や円弧文によって充填する。1同様類例は知られないが、ほぼ同時期のものとして良いだろう。

4~9は井戸尻式の最末から曾利式の初期にかけてごく普通にみ



第11図 大城林第5号住居址実測図 (S=1/80)

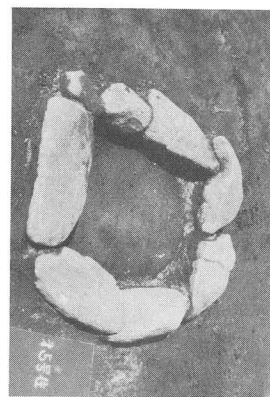
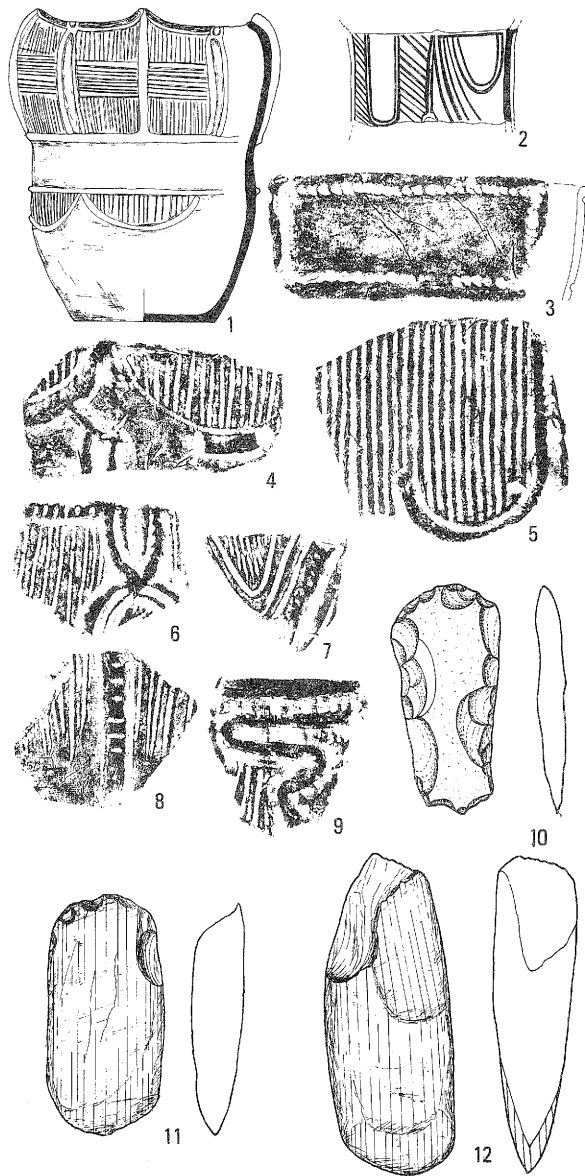


写真13 5号住居址炉址



第12図 大城林第5号住居址出土遺物(1, 2-1/6, 7-17-1/3)

分面に懸垂している。2は胴部に段を有す深鉢で口縁はラッパ状に開くと思われる。多分文様は持たないであろう。頸部から刻みを持った隆線が器面を4分割に懸垂し、頸部と胴半部にはそれを結ぶかのような横走する隆線によって区角される。胴上半部は細い粘土紐と細沈線による籠目文、下半部には縦方向の沈線がみられる。共に曾利I式に比定される。3は細い沈線による渦巻文、蛇行文が走り、条線が器面一杯に施される。外面には炭化物がこびりついている。諏訪地方において曾利

られるものである。

石器は打製石斧1点(10)と磨製石斧(11, 12)3点が出土した。10は自然面を残し縁辺を打ち欠いたものである。11には打撃痕がみられる。(吉沢文夫)

6) 第6号住居址(第13, 14図, 写真10, 14, 15)

遺構 第5号住居址北西に発見された住居址である。壁は南で5cmを測るが北するに従い低くなり、北ではなくなっている。

床面はタタキが加えられ固く良好である。

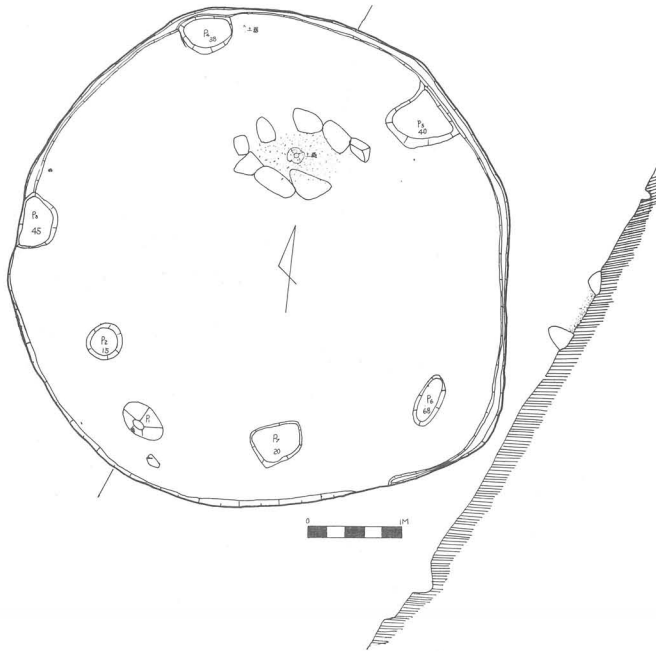
柱穴は6本を基本とするであろう。

炉は楕円形の石囲い炉(写真15)で中央北寄りに位置する。幅5~10cm, 深さ5cm程の周溝がみられるが、南側がないのは炉の位置からして入口のせいであろうか。焼土は厚く堆積し、中には深鉢の底部(第14図-4)が埋められており埋襲炉である。炉の北周溝ぎわに小形深鉢(第14図-1)が横になって出土した。(写真15)

遺物(第14図)

1は小形の深鉢である。頸部には粘土紐による隆区帯を作り、胴部は隆線の変形人体文や蛇行文をアレンジして、その内部を沈線で埋める。

口縁は2条を1組とする沈線が8



第13図 大城林第6号住居址実測図 (S=1/80)

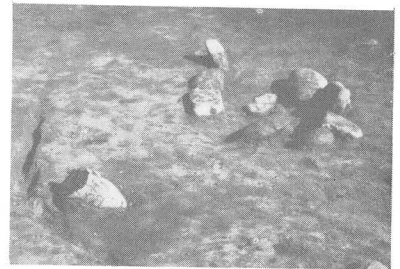


写真15 第6号炉址と浅鉢



写真14 6号住居址(西より)

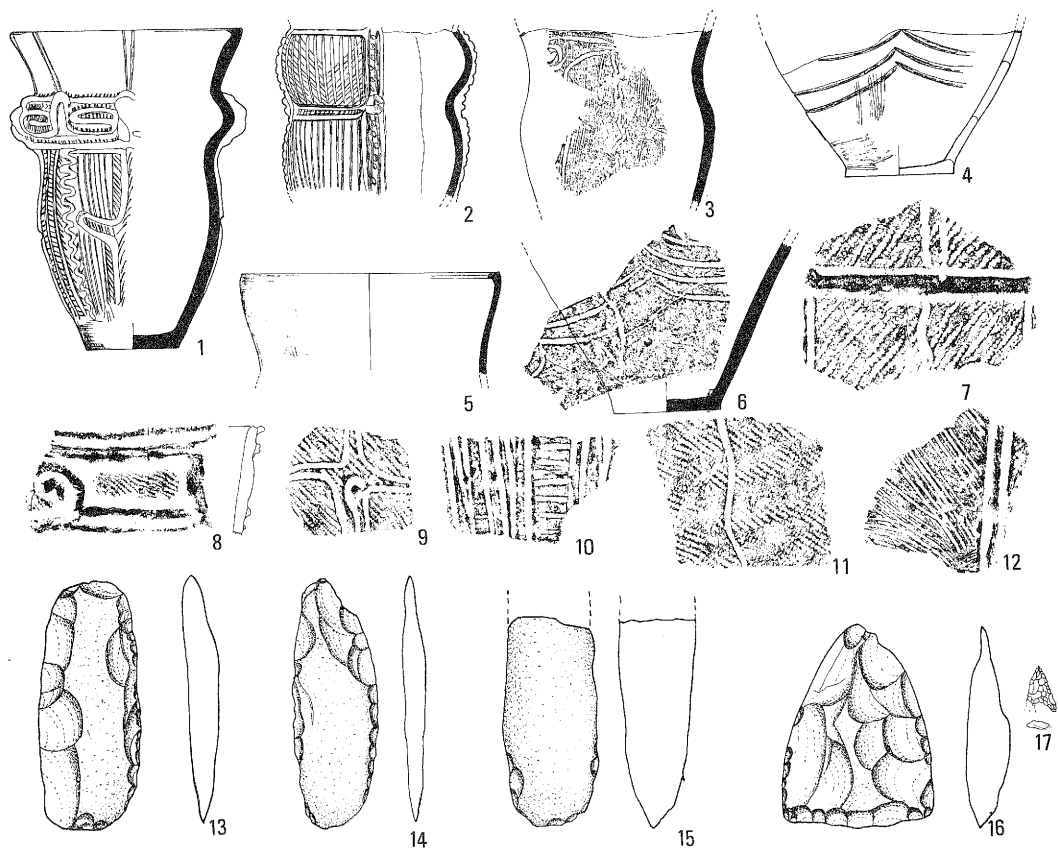
式の初期に伴出することが知られている^{※1}

4, 6は共に底部付近のものである。竹管による円弧文が描かれる。住居址内の埋甕に往々にしてみられるものの底部であろう。4は炉の中より出土したもので、一部へラ状研磨がみられる。5は1などの口縁部である。7は口縁部付近の破片で頸部に1条隆線を横走させ、縄文の上に1条ないし、2条の沈線が懸垂する。8は関東地方の加曾利E I 式に類似する。12は太い2本の沈線による懸垂文と条線とからなる。土器中では新しい時期に属する。10は1, 2

と同様である。

石器は打製石斧9, 石鏃, 敲打器, 異形石器それぞれ1点ずつ出土している。13, 14は比較的偏平で自然面を残している。15はふ厚く敲打器である。16は三角形状を呈し, 両面に丹念な調整がみられる。石鏃とみましがうがあまりに大きすぎる。用途は不明である。以上4点は硬砂岩製, 17は黒曜石製である。(吉村 進)

※1—「梨久保遺跡, 第三, 四次発掘調査報告」 岡谷市教育委員会 1972



第14図 大城林第6号住居址出土遺物(1~6-1/6, 7~17-1/3)

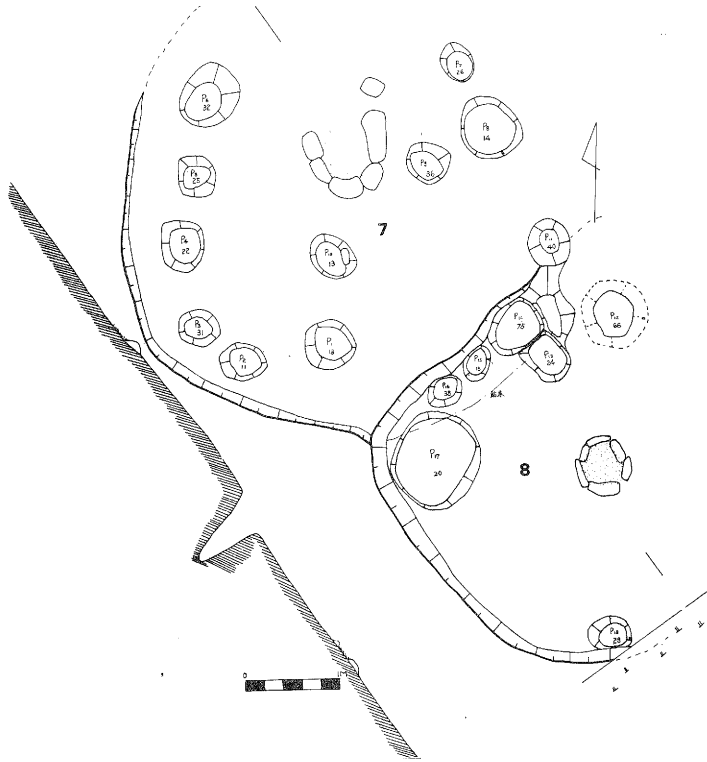
7) 第7号住居址(第15, 16図, 写真10)

遺構 第5号住居址南東に位置し、一部は田の埋土下に発見された。壁は南と西で10cmを測るが北側部分ではなく、東は8号住居址に貼り床をしている。プランは円形、推定規模5m前後である。床面は軟弱である。炉はコ字形の石囲い炉で焼土は厚く堆積している。北側に石がないが抜かれたと思われる形跡はない。

柱穴は数多くみられるが4本が基本であろう。炉の両側に対をなすピットは何らかの特別な機能を持つものだろう。炉のわきに筒状の把手を持つ大形の深鉢が出土したが、事後の処理が悪く器形復元にいたらなかった。文様は縄文地に沈線が懸垂するもので第16図-3はその一部である。

遺物(第16図) 1, 2は同一の大形深鉢の胴部破片で、縄文地に細沈線を施している。諏訪地方の曾利式初期に類例が知られることは先に述べたところである。

4は硬砂岩製の石斧で3点出土したうちの1点である。調整は丹念に行われている。(田中清文)



第15図 大城林第7, 8号住居址実測図 (S=1/80)

8) 第8号住居址 (第15, 17図)

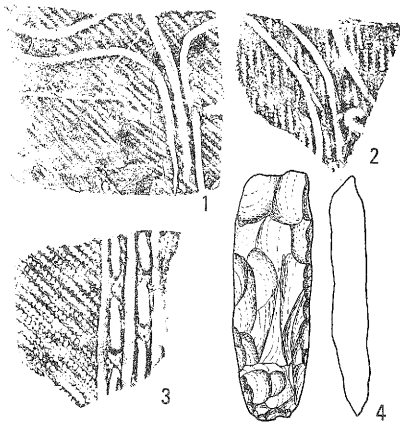
遺構 第7号住と複合して発見され、西側には一部第7号住居址の貼り床がされている。その比高は10cmを測ることができる。南と西とに壁はみとめられるも北にはない。更に東は田の造成により切りとられている。

プランは隅丸方形と思われるが規模は不明。床面はやわらく不安定である。

炉は円形の石囲い炉で、焼土が厚く堆積する。

柱穴は4本が基本となるであろう。

遺物 (第17図) 復元可能及び器形復元のできるものはなく全て破片である。1, 2とも口縁部で粘土紐と細沈線による籠目文を表出する。5も同様であろう。4は粘土紐のミミズバレ状文, 6は沈線による渦巻文など口縁部にみられる。曾利IないしII



第16図 大城林第7号住居出土遺物 (1/3)

式の古い方に比定される。3, 7は同一の破片である。区角文, 人体文を隆線によって表し, その間は沈線をもって埋めている。曾利I式に属するものであろう。

石器は打製石斧(8, 9), 石匙(10), 横刃形石器(11), 石鏃(12), スレイパー(13, 14)が出土している。打製石斧は共に欠損している。10は製作途中の石匙である。

8~11は共に硬砂岩製, 石鏃はチャート製。13, 14は剥片に刃部をつけた不定形石器であるが, 一応クスレイパーとして分類しておく。共に黒耀石製である。

(福沢正陽)

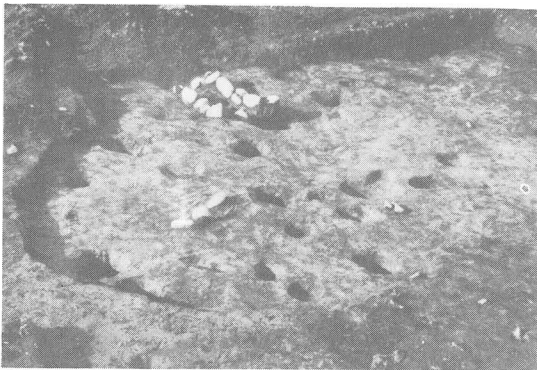
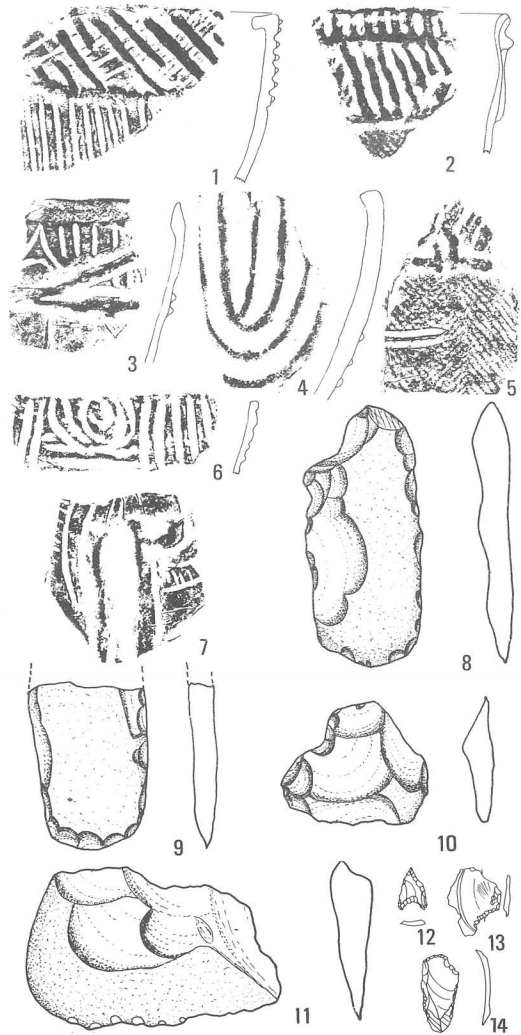


写真16 9号住居址(南より)



第17図 大城林第8号住居址出土遺物(1/3)

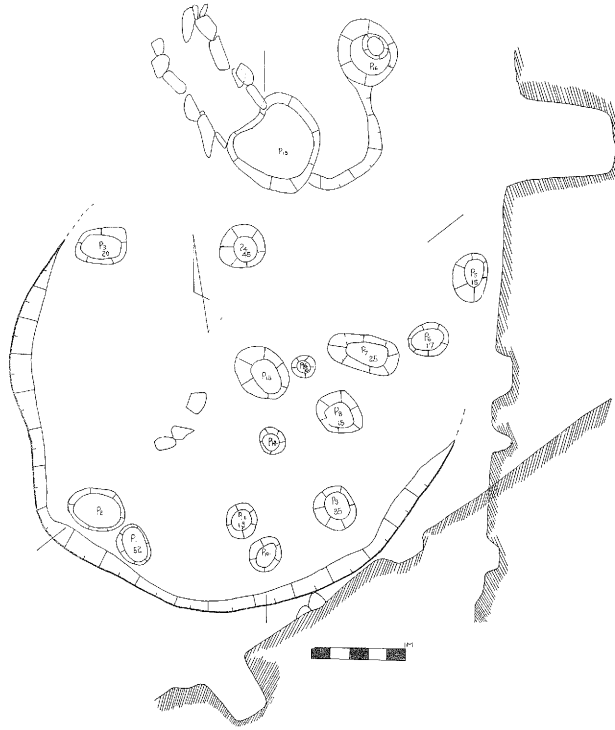
9) 第9号住居址(第18, 19図, 写真16)

遺構 第7, 8号住居址の約15m東, 道路下に発見された。

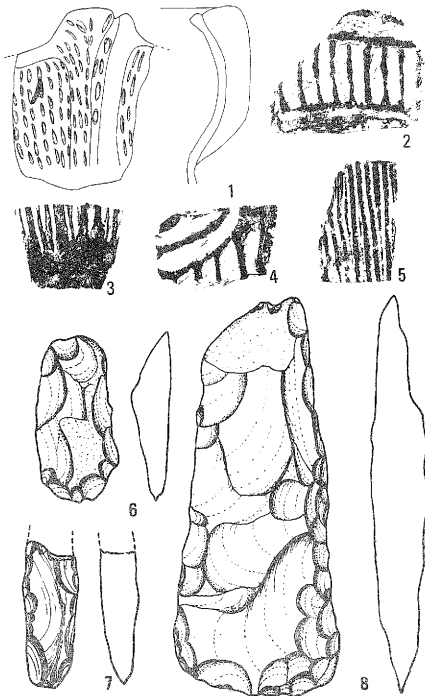
南で壁高約15cmをはかるが北に行くに従い, 低くなりなくなっている。床面は固く良好である。

ピットは15ヶみられるが支柱穴は4本が基本であろう。炉としての特別な施設はなく, 焼土もみられる。中央やや西床面上に3ヶの花崗岩が接して置かれているが, 炉と考えるには不十分である。住居址北側に深いピットを伴う列石が発見されたが, 時期はまったく不明である。

遺物(第19図) 土器は比較的少ない。1はせりあがり状の突起を持ち, 工具の先端を使った連続刺突文が加えられている。文様構成上, 沈線を使っているものは類例が多く知られる。2, 4は粘



第18図 第9号住居址実測図 (S=1/80)



第19図 大城林第9号住居址出土遺物(1/3)

土紐によって形文などを表出している。3, 5は縦に走る沈線より構成され、曾利I式に比定できる。

石器は打製石斧の3点のみである。8は大形のもので両辺に加工がみられ、一次剥離のあと、一縁辺にのみ更に調整が加えられている。6, 8は硬砂岩製、7は緑泥岩製である。(北沢雄喜)

10) 第10号住居址 (第20, 21図)

遺構 第9号住居址の東に位置し、炉址とピットが確認されただけのものである。床面は田の地場のすぐ下で壁は開田のさいに破壊されたと思われる。

焼土を囲んで4ヶの自然石が不規則ではあるが置かれており、炉として良いだろう。炉のすぐ西ピット内に胴下半部から下の深鉢(第21図-1)が発見された。

このような例の遺構を住居址とすべきかは問題が



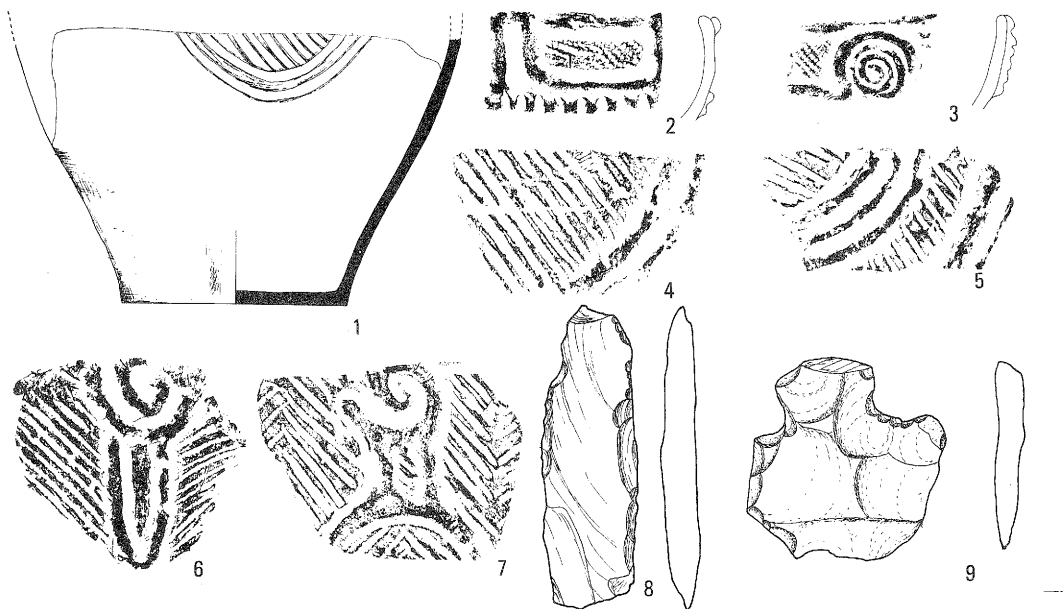
第20図 第10, 11号住居址実測図(S=1/160)

ないわけではないが平地住居の可能性もあり一応住居址としておく。

遺物(第21図) 1は埋葬に利用される深鉢ないし甕の胴下半部である。隆線の大きな渦文の一部がみられる。4~7は同様な胴部破片である。松本平、伊那地方に普通にみられるものである。2, 3は口縁部に粘土紐による渦文やく形を配して中を縄文で埋めている。

総じて曾利Ⅱ式に比定できる。

石器は緑泥岩製の打製石斧(8)と硬砂岩製の石匙(9)の2点である。打製石斧は原石から大きく打ち欠いた剥片の縁辺に調整をしたものである。石匙は刃部の調整があまりみられない。(吉沢文夫)



第21図 大城林第10号住居址 出土遺物 (1-1/6, 2~9-1/3)

11) 第11号住居址(第20, 22図)

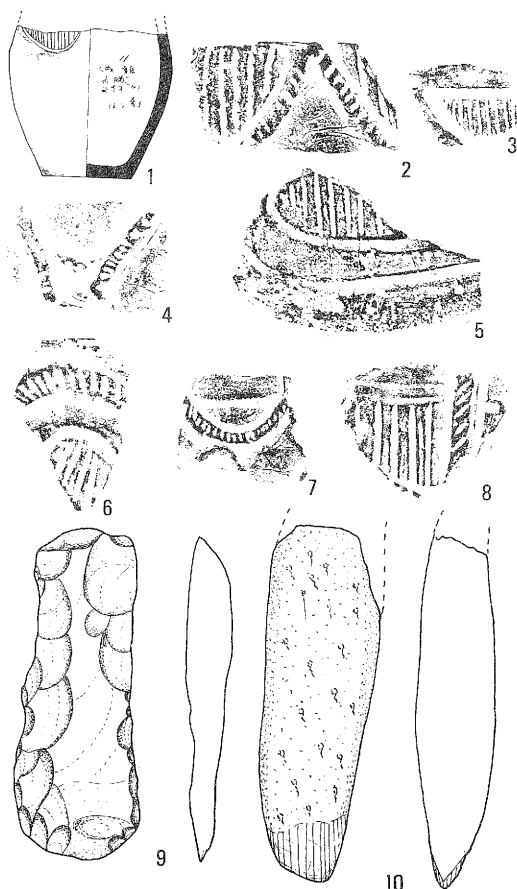
遺構 第10号住居址同様、ピット群と炉が発見されただけのものである。

ローム層を掘り込んだ多くのピットがみられるが全て柱穴と考えるには疑問があろう。

深鉢の胴下半部(第22図-1)が埋め込まれており、中には焼土が充満していたところから、埋葬炉と考えられる。その両側には浅いピットがあり、やはり焼土が充満していた。副炉と考えるのが妥当であろう。

遺物(第22図) 1は埋葬炉に使用されたものである。井戸尻期に盛行する胴下半部の楕円形を持つ小形深鉢である。器面調整も良く固く焼かれている。

出土土器中楕円形を持つものは非常に多く、2, 3などもそうである。5, 6はキャタピラ文を持つ。7は円弧文を持つ口縁部破片である。8は縦方向の施文がみられるもので、井戸尻Ⅲ式にこの手法が始まる。器形の全様を知り得ないのははっきりはしないが、先学に従えば井戸尻Ⅱ～Ⅲ式に繪じて比定でき得る。



第22図 大城林第11号住居址出土遺物(1/6 2~8-1/3)

(北沢雄喜)

12) 第12号住居址(第23図)

遺構 第11号住居址の東、田とグランドの境に発見された。北東と南に一部壁を残すが、他は攪乱のため破壊されている。推定するにプランは隅丸方形、規模は4.5×4mである。

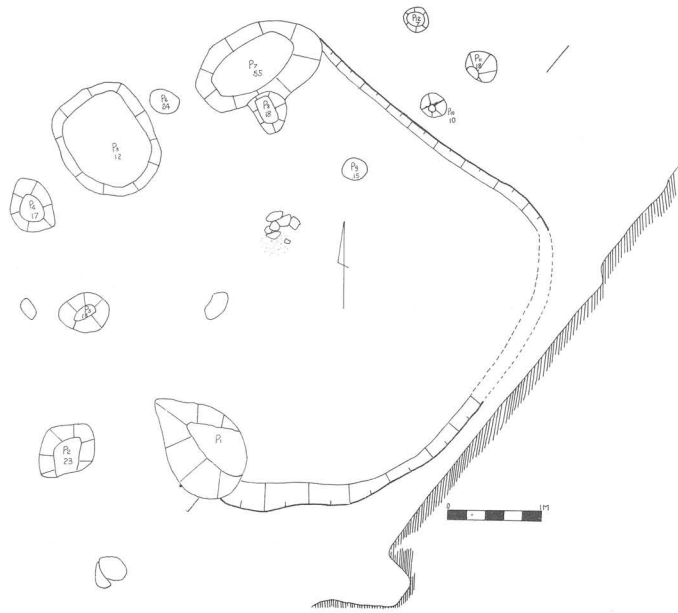
壁高は20cm前後を測る。床面はタタキはみられず軟弱である。

住居址ほぼ中央に焼土があり、わきには集石がある。炉と考えるのが妥当であろう。

柱穴は不明である。

本住居址からは遺物の出土は少なく、土器がわずかに出土したのみである。細片で文様を知り得るものはほとんどないが多分加曾利Ⅴ式に属するであろう。

(田中清文)



第23図 大城林第12号住居址実測図(S=1/80)



写真17 遺跡東の住居址群(西より)

13) 第13号住居址

(第24, 25, 26図, 写真17
18)

遺構 土壌群の東, グランド中央北寄り発見された。

壁高は南で約30cmを測るが北するに従い低くなり, 北ではなくなっている。プランは円形を呈すると思われ推定規模は 5.8m 前後である。床面は固くタタキが加えられている。

炉は中央やや北寄りに位置し、現存する石は東と南の一部であるが、もともとは方形の石囲い炉で他の石は抜き取られたものと考えられる。

焼土は厚くみられる。

ピットは数多く主柱穴は定かでない。住居址北西に続いて焼土を伴った配石がみられる。あたらしい住居址なのか、特殊遺構なのか明確でない。しかし R_6 や R_5 などからすると何らかの上屋ものの存在が考えられる。

第10, 11号住居址のような平地住居的なものかも知れない。出土土器は本住居址と時期的には大差はない。

遺物 (第25, 26図)

本住居址からは多量の遺物が出土している。出土土器の特徴は楕円文と口縁のミミズバレ状文に代表される。

1はワラビ手状の懸垂文を4分画に配し、その間をミミズバレ状の浮線文、それらに続く肋骨文などで、口縁から胴上半部を飾り、その下部はH字状文と楕円文によってデザインされている。3,

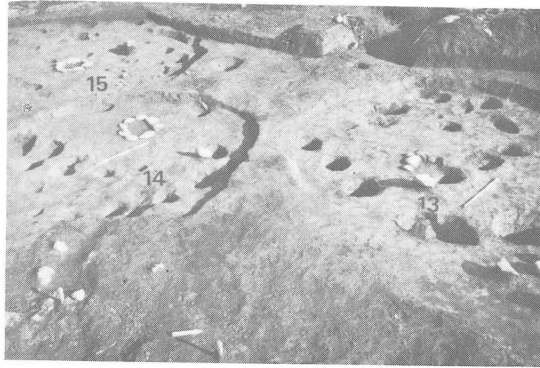
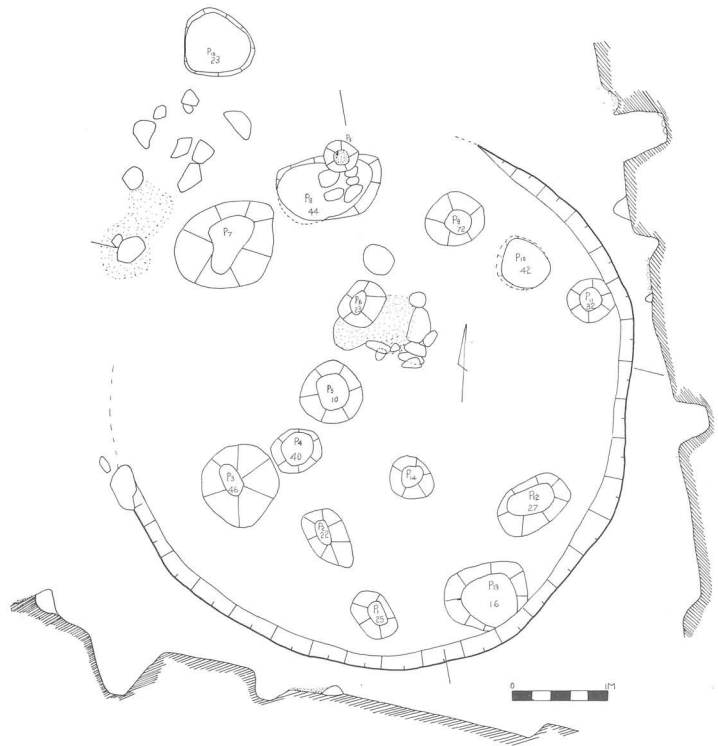
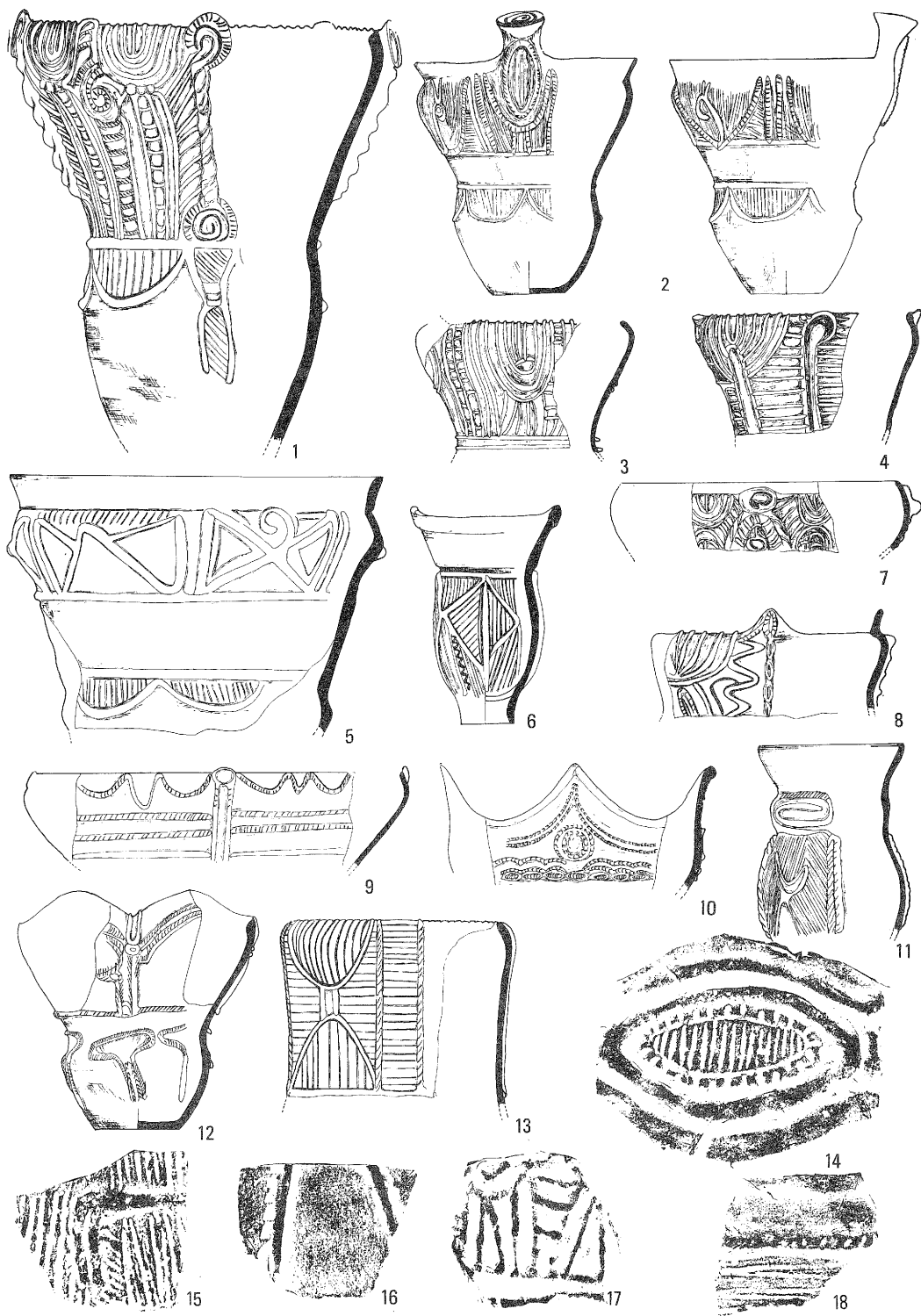


写真18 13, 14, 15号住居址 (北より)



第24図 大城林第13号住居址実測図(S=1/80)



第25图 大城林第13号住居址出土土器

4, 7, 8は全て口縁部のみで全様はわからないが同様な文様構成を示すと思われる。これらにみられる口縁部文様には懸垂的なものが多く、曾利式の特徴を多分に持つ。その反面井戸尻期に盛行する橢形文もみられる。橢形文の消滅を持って曾利期とすれば井戸尻期に属する。

このことは井戸尻期から曾利期にかけて文様構成がスムーズに移行したことを示すと思われる。

2はせりあがり状の突起を1つ持つ小形深鉢である。突起の上端には沈線の渦文、更に刻みが施されている。突起の下は楕円形の浮状文を配し、2条からなる懸垂文、円弧文、ワラビ手を持った変形人体文などを配し、その間を細沈線で充填している。胴部のくびれ部から下には、連続する橢形文がみられる。

5は器形、更に胴部に無文帯を有し、橢形文を持つところはまったく同様である。口縁部の文様もX字状文など非常に類似している。時期は1と同じであろう。

橢形文を持つ一連の土器を見てきたが、器形の面から若干ふれてみたい。共通することは胴部にくびれを持つことである。口縁部についてみると内湾するものが多く、外反するものは2, 5のようにくの字状にそり受け口状になることである。このことについてはすでに武藤雄六氏が指摘しているところである*1

6は小形台付き土器で、口縁は強く外反し胴部はゆるやかなカーブを描く。口唇は肥厚し段を有する。口縁部は無文、頸部に1条の太い沈線が横走り文様帯はそれより下である。沈線の下に粘土紐を合わせ、それに直交する4本の浮線文とそれらを結ぶかのようなX字状文、更にX字の交点からは垂下する浮線や沈線の蛇行文が走り、器面は区角され縦走、斜走する沈線がその間を埋めている。曾利I式に属する。

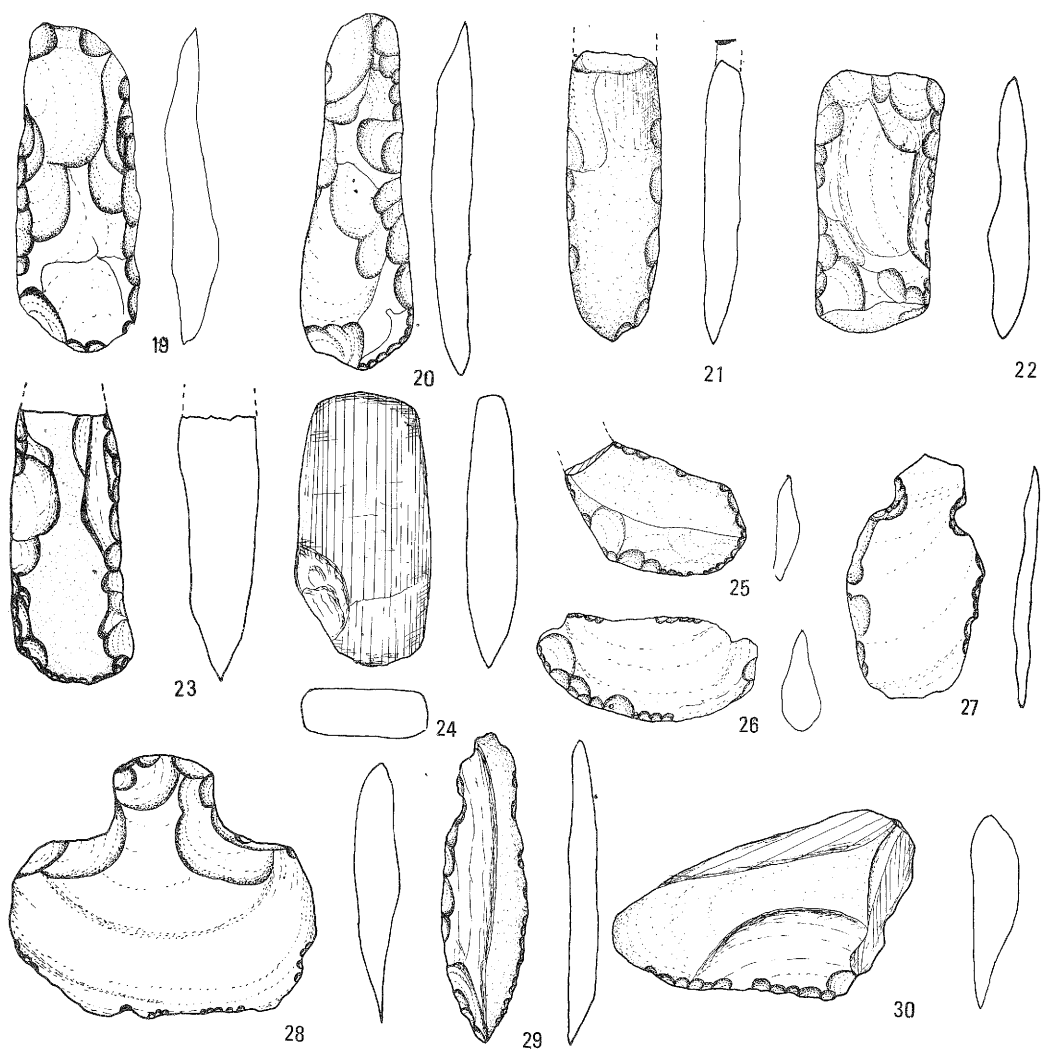
9は口縁部のみで全様は知り得ない。文様はやっとこ状の懸垂文とそれを結ぶうねり状あるいは直線的な刻みを持つ浮線文からなっている。

10は鋭角な頂きを持つ波状口縁部で深鉢と思われる。口唇は肥厚し、段を作る。文様は波状の頂き部にボタン状突起を浮隆させ、口唇下には2条の連続コ字状文を沿せ、その下にはやはり連続コ字状文によって連続する円弧文を描き、更にその下に隆帯の上を指頭の圧痕による楕円文を連続させている。さてこの土器の時期についてであるが、本群中の土器とは若干の時間差を持つものと思われる。当遺跡第31号住居址から多量に出土しているので、問題点は後述することにする

11は小形の壺形土器である。口縁部は6同様無文帯をなし、頸部はS字状を4ヶ浮隆させ胴部は2本1組のひねり状紐を懸垂させ、人体文をその間に施し、細沈線によって充填している。曾利I式に比定できる。

12は胴部にくびれを持つ波状口縁の小形深鉢で口唇は肥厚する。波状はゆるやかなカーブを描く。胴上半部くびれ部の上に1条の浮線を走らせ、波状の谷から懸垂するやっこ状文と交叉する。懸垂文の間は波状に沿う2条の浮線文が連絡する。胴下半部はきのこ状の浮線がみられる。浮線は断面三角形を呈するのが特徴で刻みを持つ。

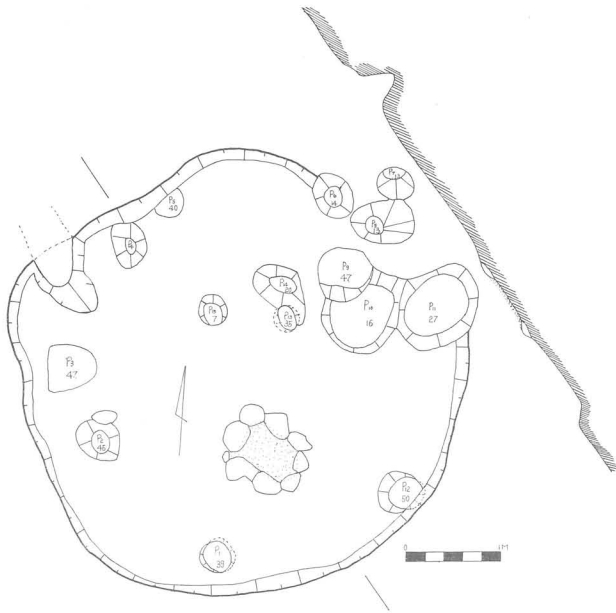
13は口唇が内屈する胴長な土器である。2条を1組とする隆線を縦に走らせ、それに交叉する隆線が1条走る。その間は連絡する橢形文、それを埋める細沈線が横走する。1などの口縁部に似た文様構成を持つものも同時期である。



第26図 大城林第13号住居址 出土石器 (1/3)

石器は土器同様多く出土し、全部で41点を数える。中でも打製石斧（19～23）は多く24点出土しているが欠損品が多く完形品は8点のみである。共に硬砂岩製である。21, 23は自然面を残したもので、21には一部研磨がみられる。24は定角の磨製石斧である。石匙は全部で6点出土している。25, 26, 28は横形のもので共に裏面に自然面を残している。27, 29は縦長のもので27は打ち欠かれた扁平な剥片の縁辺に調整を加えている。29は一面に皮を残した剥片の片辺のみ大きく打ち欠いて縁辺に簡単な剝離を行っている。つまみ部の調整は十分でない。30は横刃形石器である。10点出土し、本住居址中打製石斧に次いで多い。（吉村 進）

※1 武藤雄六 中期縄文土器の蒸器 信濃17-7 昭和40年



第27図 大城林第14号住居址実測図 (S=1/80)

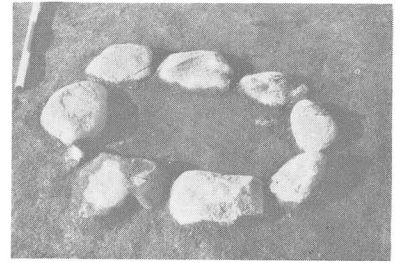


写真19 14号住居址炉址

14) 第14号住居址 (第27, 28図, 写真17, 18, 19)

遺構 第13号住居址のすぐ東に発見されたものである。東には第15号住居址、北には第18号住居址が近接している。

ローム層を掘り込むこと15cm程で床面に達するが、北側は若干浅くなる。床面はあまり良好でない。北東部は一部壁を欠くが規模は径 4.8m前後、プランは不整形円である。炉は方形石囲い炉で(写真19)中央南寄りにある。焼土は厚く堆積する。

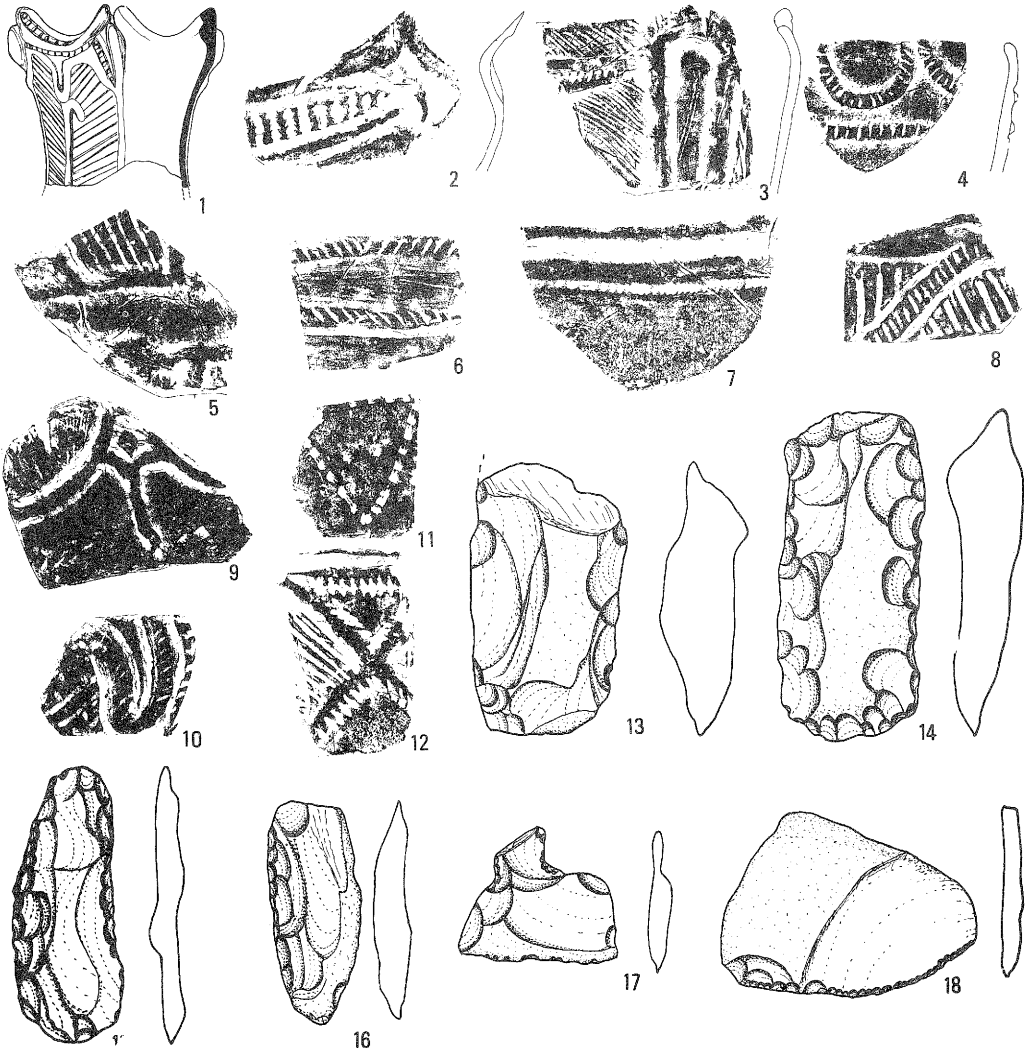
ピットは北東部に数多くみられるが、支柱穴は6本を基本とするであろう。

遺物(第28図) 土器の出土量は多いが器形が知れるものは少なく1のみである。1は波状口縁を持つ深鉢である。口唇は隆帯によって肥厚し、上部には1条の連続刺突文を持つ沈線が施され、口唇内部もやはり隆帯がめぐり段状を呈している。波状の頂きで隆帯は切れ、そこから懸垂の浮線、ステッキ状文様が飾られている。口唇下には1条の連続刺突文が波状に沿ってめぐらされる。浮線文の間は細沈線が埋めている。井戸尻期最末から曾利期初頭にかけてのものであろう。

2は波状の口縁部で、内湾する頸部から口縁にかけて強く外反する。口唇部はそぎ状を呈し段を有する。隆線によって区角された内部には縦位の連続刺突文がみられる。3はゆるやかなカーブを描く波状の口縁部で、頂きからはU字状の浮線懸垂文がそれをつないで口唇下には刻みを持つ凹状浮線が1条めぐる。器面には細沈線が充填する。

4も口縁部破片で刻みを持つ粘土紐の連続円弧文が施され、その下には浮線が横走する。

他にも文様の主体は粘土紐による浮線文が主でX字状や直線状に区角され、区角内は細沈線や太い



第28図 大城林第14号住居址出土遺物(1-1/6, 2~18-1/3)

沈線が埋めている。11は押し引きによる連続刺突の三角文がみられる。

総じて井戸尻最末期から曾利初頭期に位置すると思われる。

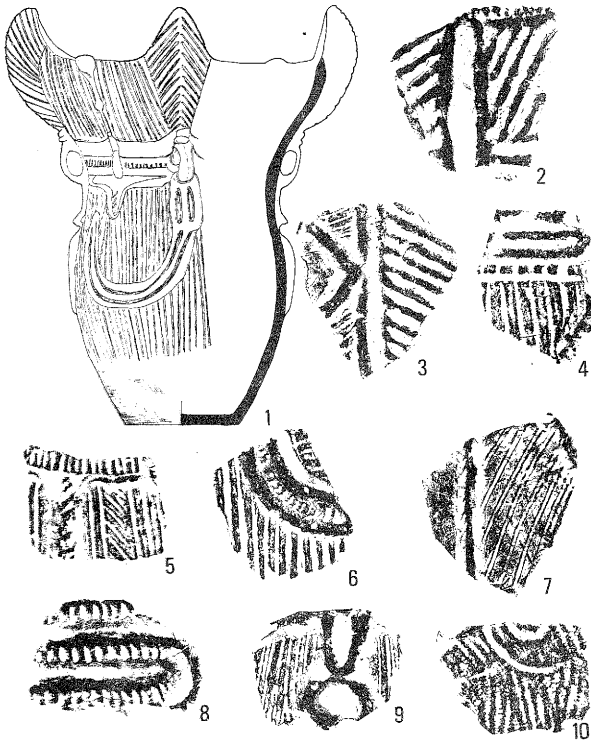
石器は打製石斧の出土がやはり多く、13~16がそれである。13, 14はぶ厚く自然面を残す。17は横形の石匙、18は横刃形石器である。他に磨製石斧の欠損品がある。(田中清文)

15) 第15号住居址 (第29, 30図, 写真17, 18, 20)

遺構 第15号住居址の東に接して発見された。壁高は南で20cmを測るが北東ではなくなっている。大きさは径5mで円形のプランを示す。東に張り出し部を持つ入口と考えるには炉の位置からし



第29図 大城林第15号住居址実測図 (S=1/80)



第30図 大城林第15号住居址出土遺物(1-1/6, 2~10

-1/3)

て若干無理があろう。

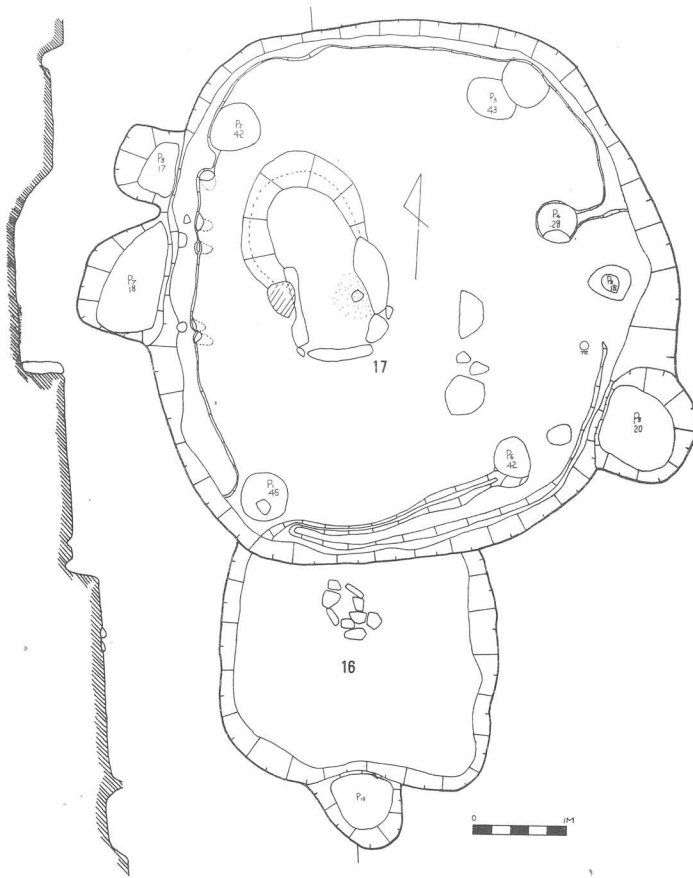
床面はタタキが加えられ固く良好である。

炉は円形の石囲い炉で中央やや北東寄りに位置する。焼土はわずか北側にみられるだけである。

主柱穴は4本を基本とする。屋外南東部と南西部に対をなすピットがみられる。

遺物(第30図) 1は口ばし状の突起を4ヶ持つ深鉢である。突起の下くびれた頸部には把手を持つ懸垂文がみられる。蛇体文の変形であろう。それと交叉して浮線が横走し縦位の沈線が充填する。

全体に文様は懸垂化され、空白部は縦位の沈線が埋める傾向が一般的で、4、8のようにS字状文を持つのも特徴である。10は縄文地に沈線による渦文が施される。総じて曾利I式に比定でき得る。(伊藤 修)



第31図 大城林第16, 17号住居址実測図 (S=1/80)

16) 第16号住居址

(第31図, 写真17, 20)

遺構 第15号住居址東に近接して発見された住居址である。北は第17号住居址に切られている。その比高約20cmを測る。

規模は3m程で隅丸方形のプランを示す。床面は軟弱である。

炉は中央やや北寄りにあり、くずれた楕円形を示す石囲い炉である。焼土はほとんどみられない。

内部にはピットはまったく発見されず南壁外中央にピットを持つが用途は不明である。

このような竖穴が住居址としての機能を持つかは今後の研究に待ちたいと思う。

遺物はまったく出土していない。(福沢正陽)

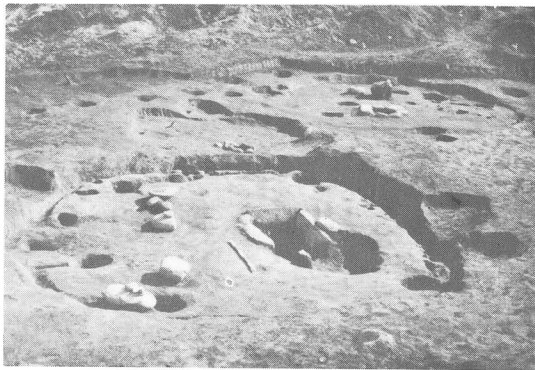


写真20 15, 16, 17号住居址(北より)一

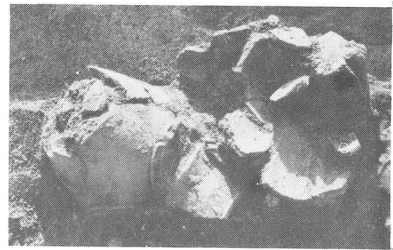


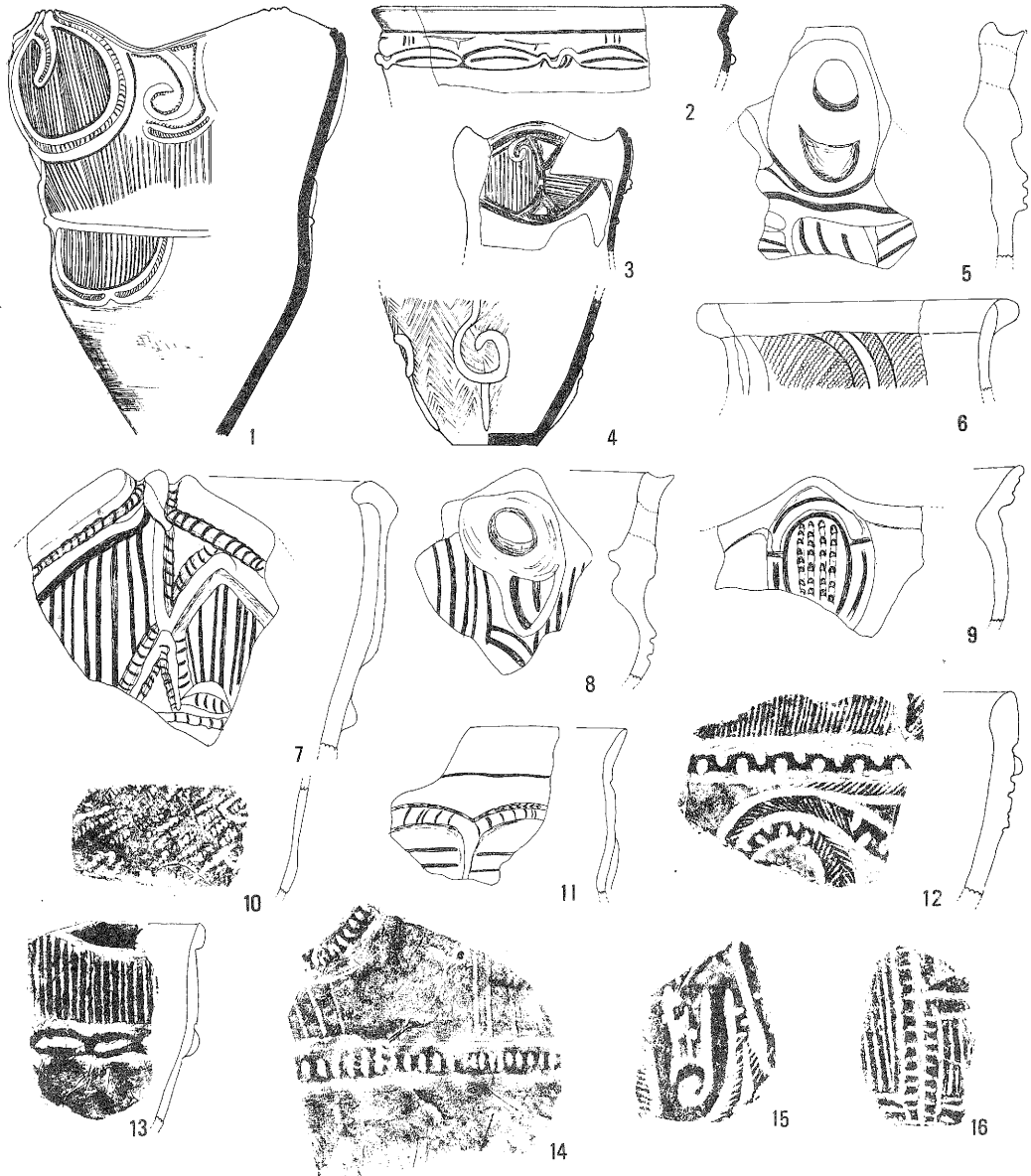
写真21 17号住居址遺物出土状態

17) 第17号住居址 (第31, 32, 33図, 写真17, 20, 21)

遺構 第16号住居址を切って北に発見された。

胴張り方形で大きさは 5.7m である。壁高は西で30cm, 北, 東は若干低くなる。床面は固く堅ちである。

周溝が断続的に一周するが東側中央部にみられないのは, 入口とも考えられる。南側では2重に



第32図 大城林第17号住居址出土土器(1~4-1/6, 5~16-1/3)

めぐる。西側周溝内壁には外側に向けた小ピットが5ヶ発見されている。壁防護用の施設の存在を
考えるべきであろう。

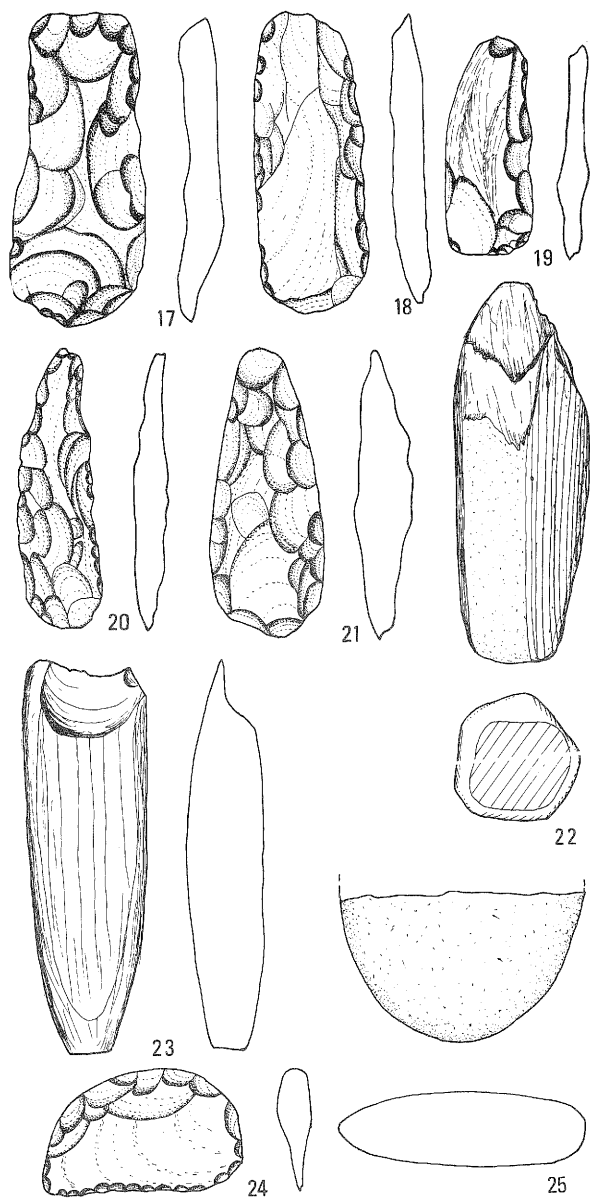
炉は中央西寄り位置し、方形の石囲い炉である。炉石は北側にはみられないが、壁にわずかに段
を持つところからするとともにあつたものと思われる。残存する炉石は大きく偏平なもので、
南と西のものは割り石を使っている。炉の規模は本遺跡の中では最大、掘り込みも深い。炉の主軸

が若干ふれているところなどから、
住居址の改築なども考えられる。ピ
ットは6ヶ確認され、4本を基本柱
穴と考えるのが妥当であるが、柱穴
の動きからは住居址の改築など積極
的に肯定できかねる。しかし遺物の
面からは明らかに時期が違っており
ので十分考えられるところである。

壁外西と東に対をなす浅い大きな
ピットがある。用途はまったく不明
だが、第16号住居址の南にある同様
なピットを結ぶとほぼ三角形を形作
る。何らかの関係を持つのだろうか。
中央東壁ぎわに深鉢の胴下半部（第
32図-4）が埋められていた。
西と南1 m位にL字状に置き石がみ
られる。区角された埋設であり注目
すべきことである。

遺物（第32, 33図） 土器の出土
量は豊富である。

1は底部を欠く深鉢で復元された
ものである。文様は波状口縁の四山
を基本として、隆帯によって変五角
形に区角され、谷にはやはり隆帯に
よるワラビ手状文を施し、区角内は
縦走する平行沈線によって埋めてい
る。胴下半部は凹状隆線に連続刺突
文を加えた楕形文がみられる。類似
する土器としては長塚遺跡第7号住
居址例^{※1}、梨久保遺跡3, 4号住居址出
土例^{※2}、鳴尾天白遺跡第4号住居址出



第33図 大城林第17号住居址出土石器(1/3)

土例^{※3}など知られている。井戸尻Ⅲ式に比定でき得る。同様な器形、文様を持つものとしては3、7などがある。

2は口縁が強く外反する浅鉢である。口唇はく字状に内屈する。くびれた頸部に沈線を1条走らせ、その下は隆帯を押しつぶしたような連続鎖状文をめぐるして、胴部から底部にかけては多分無文であろう。連続する鎖状文は平出ⅢA式にみられる連続指圧文の変形と考えてよいだろう。

4は住居址東壁ぎわ中央に発見された埋甕である。隆帯によって渦文を配し、その間は浅い沈線を綾杉状に充填する。曾利Ⅱ式に比定され得るもので他の土器群とは時期を異にする。住居址の改築を考えるに十分である。

5、8は共に把手部で同一個体のものである。6は深鉢の口縁部で口唇は粘土の貼り付けにより、肥厚し段を持つ。文様は縄文地に2本を1組とする曲線が描かれる。9は波状の口縁部破片で頂の下に隆帯による楕円文が配され、内部には押し引きによる連続コ字状文が縦走する。

10は胴部で縄文のみである。11は10同様薄手の口縁部破片、頸部に1条の沈線を走らせ、下部は浮状円弧文、内部に横走する沈線がみられる。13は波状口縁を持つ深鉢で口唇は肥厚し段を作る。胴上半部に鎖状文が走り、その間を縦の沈線が埋める。鎖状文は2にみられるが全体的には1に類似する。14は刻みを持った浮線が直線あるいは円弧状に走り空白部には浅い平行沈線が下垂する。16は2条の刻みを持つ浮線が下垂、縦位の沈線が器面をうめる。

12、15は出土土器中2とともに古い時期に位置するもので、12は頸部に1条粘土紐を横走させ、隆帯上には指圧によってます形文が施される。

出土土器を細分すると以上大体3時期に分類できる。12、15は4を除いた他のものとは類似し、その時間的へだたりを感じないが、4は別に取り出して住居址の所属時期を考えてみたい。即ち住居址の建て替えである。

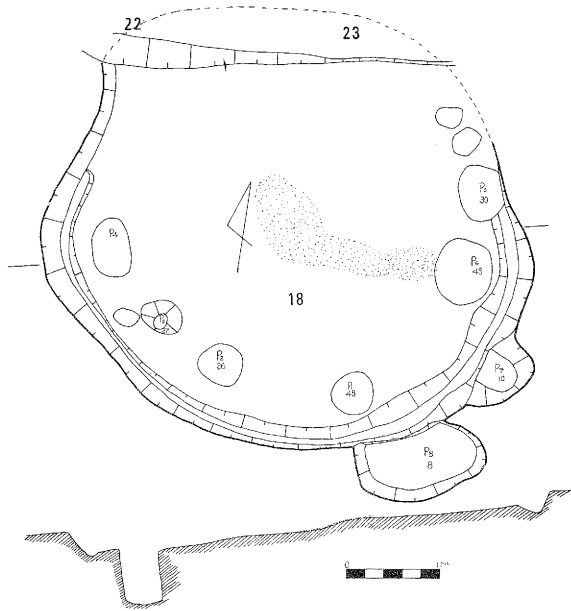
石器は打製石斧12、磨製石斧2、横刃形石器3、磨石1の計18点の出土がある。打製石斧(17~21)は全て硬砂岩製である。調整が全面にまで丹念に行れるもの(17、20、21)と大きく打ち欠いた剥片の縁辺に調整を加えたものとある。22は局部磨製石斧、23は磨製石斧で共に頭部を欠損している。22は断面が変六角形をなし、磨かれた面と自然の面とが交互になっている。共に端部は磨滅によって平坦な面が作り出され特徴的である。当遺跡出土のふ厚い磨製石斧の中にはこの種のものがかかなり見出される。いわゆる定角的な磨製石斧とは違った機能を持ち、乳棒状石器に類似するものと考えられる。22のような磨製面と半磨製面とを持つ石器については、手に持って使う砥石的な機能を持つものと考えたい。(吉村 進)

※1 「長塚遺跡」岡谷市教育委員会 昭和46年

※2 「梨久保遺跡第三、四次」岡谷市教育委員会 昭和47年

※3 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯島町地内その1」

長野県教育委員会 昭和47年



第34図 大城林第18号住居址実測図(S=1/80)

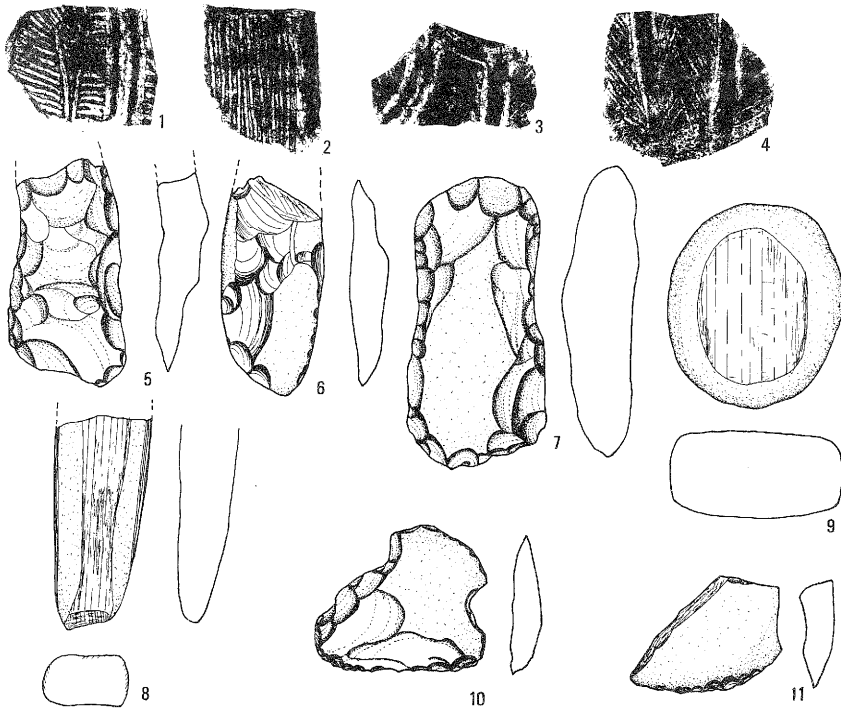
18) 第18号住居址 (第34, 35図, 写真17)

遺構 第14号住居址の北に接して発見されたもので、北は第22, 23号住居址によって切られている。その比高15cmを測る。

長径 5.2m, 短径 4.7mほどで不整形のプランを示すと思われる。南で壁高30cmを測るも北するに従い低くなる。床面はタタキが行われ良好である。

住居址南部分を半周する周溝がみられる。ピットは6ヶ発見されている。更に住居址南東壁外に浅いピットが2ヶあるが用途は不明である。

炉は特別の施設はなく、中央から東にかけて焼土が薄くあるのみである。



第35図 大城林第18号住居址出土遺物(1/3)

遺物（第35図） 土器の出土は比較的少ない。文様は隆線や半隆線による施文方法が一般的である。1, 3は渦文を配し、その間を太い沈線で充填する。1は住居址の埋襲などに往々にして利用されるものの破片で、当地方においては良く知られたものである。

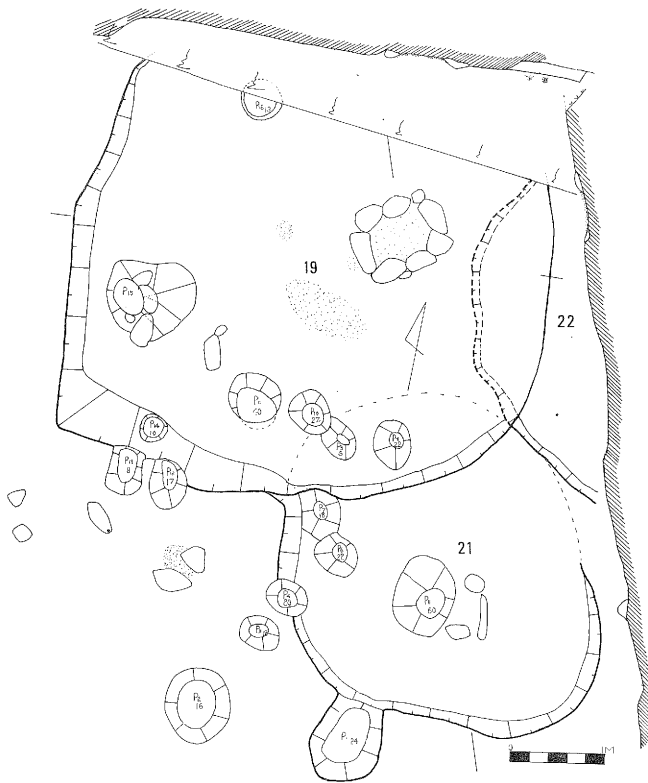
4は下垂する隆線の間を太い沈線の綾杉文で埋める。これらは総じて曾利Ⅱ式に比定すべきであろう。

2にみられる縦位の沈線文は井戸尻Ⅲ式から曾利Ⅰ式に発達するもので他より先行する。

石器は打製石斧（5～7）、磨製石斧（8）、磨石（9）、石匙（10, 11）がある。

8は第17号住居址出土のもの（第33図-22）と同様、自然面と磨かれた面とが交互にある。9は両面がかなり平坦に磨かれている。11は横刃形石器とも考えられるが、つまみ部を欠損したものとして石匙に分類しておく。

石質は6, 8が緑泥岩、他は硬砂岩である。（福沢正陽）



第36図 大城林第19, 21号住居址実測図(S=1/80)

19) 第19号住居址（第36, 37図, 写真17）

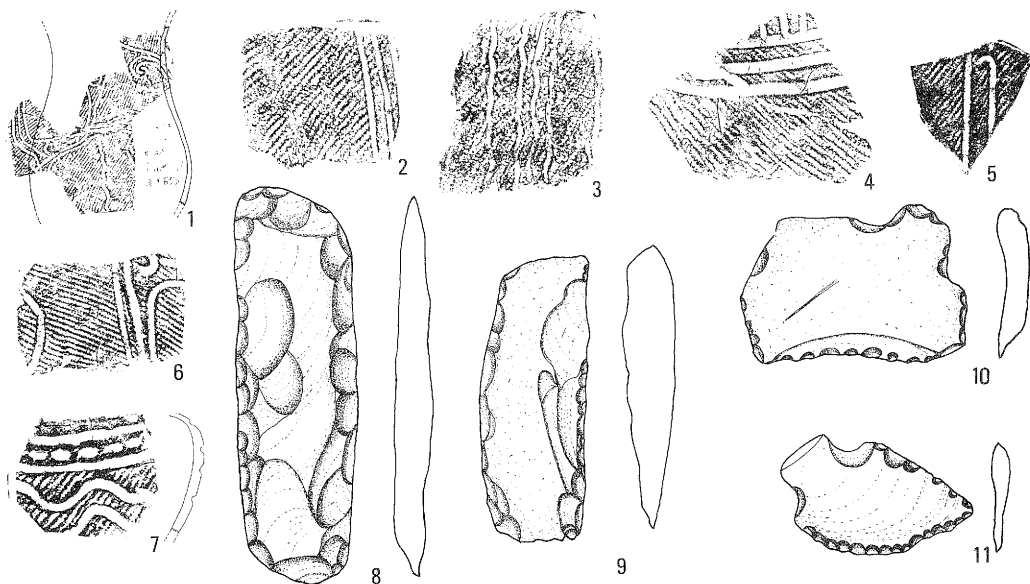
遺構 道路敷に発見された住居址で南は第21号住居址を切り、東は第22号住居址に貼り床をしている。北は開田のため切り取られている。

大きさは東西 5.1m, 南北もほぼ同程度で隅丸方形を呈すと思われる。

第21号住居址との比高は 5cm でただららとしている。第22号住居址とは、床面差10cm貼り床の状態はあまり良くないが他の床面は良好である。

ピットは南に集中してみられ 6ヶが確認された。貼り床面でのピットの確認はできなかった。あるいは第22号住居址のピットの内当住居址に属するものがあるのではないだろうか。

炉址は住居址北東寄り位置し、方形の石囲い炉である。焼土はかなりの堆積がみられる。その南西にも焼土が発見された。



第37図 大城林第19号住居址出土遺物 (1-1/6, 2~11-1/3)

遺物(第37図) ほぼ器形のわかるものは1のみで口縁は外反し、胴部がふくらむ壺形土器であろう。文様は縄文地に細沈線による渦文や蛇行懸垂文が描かれる。内外面とも炭化物が付着している。他の出土土器も1同様縄文地に沈線による懸垂文や渦文などを施すといった非常に斉一性を持ったもので、関東地方の加曾利E式の様相を強くもつものである。

1や4は曾利期の初期に伴うことが知られているが、他のものは加曾利EⅡ式に比定でき得る。

石器は打製石斧(8, 9)と石匙(10, 11)がある。共に硬砂岩製である。石匙の調整は丹念でない。

(吉村 進)

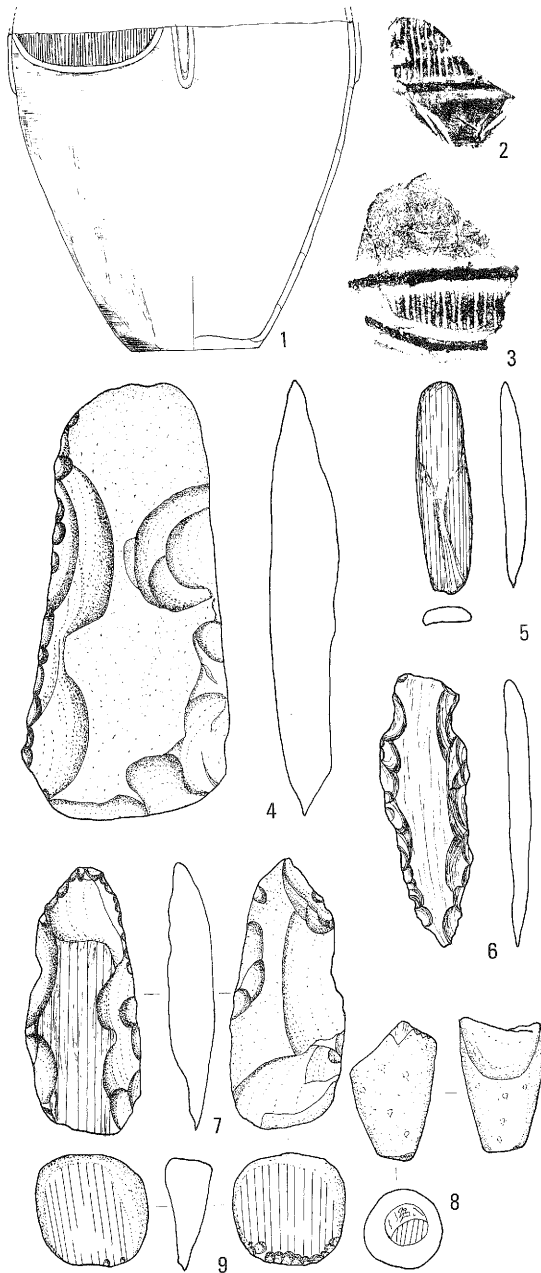
20) 第21号住居址 (第36, 38図, 写真17)

第18号住居址の西にあり、北は第19号住居址によって切られている。

壁高は南で10cmを測るが北東部でははっきりしない。規模は東西 3.2m, 南北は推定 3.6mほどでプランはくずれた楕円形をなす。

床面はタタキがほとんどみられず軟弱な方である。ほぼ中央南寄りにコ字状の石組みがある。焼土はまったくみとめられないが一応炉として良いだろう。西の石はP₅によって取られたものと思われる。内部にピットは3ヶみとめられるが、積極的に柱穴として良いものはみあたらない。P₅は石組みを炉と考えるとまったく無意味というより、邪魔な存在である。南西壁外に浅いピットがみられる。

住居址としての機能は一応持つが、第19と21号住居址の関係は、先に述べた第16, 17号住居址の关系到非常に似ている。規模が小さいこと、柱穴らしきものを持たないこと、炉址と考えるべきも



のはあるが焼土の堆積がどちらも無いことなどである。これらは単なる偶然だけでなくそこに何らかの必然性を持つものと考えたい。ただ第16号住居址と違って、当住居址は遺物が出土しており、明らかに第19号住居址より古い時期に属する。

なお、住居址西に配石と焼土を持った柱穴群が発見された。平地住居の可能性もある。

遺物(第38図) 土器の出土量は極めて少ない。1は床面にたおれて発見された深鉢の胴下半部である。輪積み手法の痕を明らかに残している。薄手の造りで器面調整は良く固い焼きをみせている。文様は楕円文と2条からなる懸垂文が4ヶずつ交互に配され、底部にかけては無文である。

2, 3も1同様楕円文を持つものである。井戸尻Ⅲ式に属する。

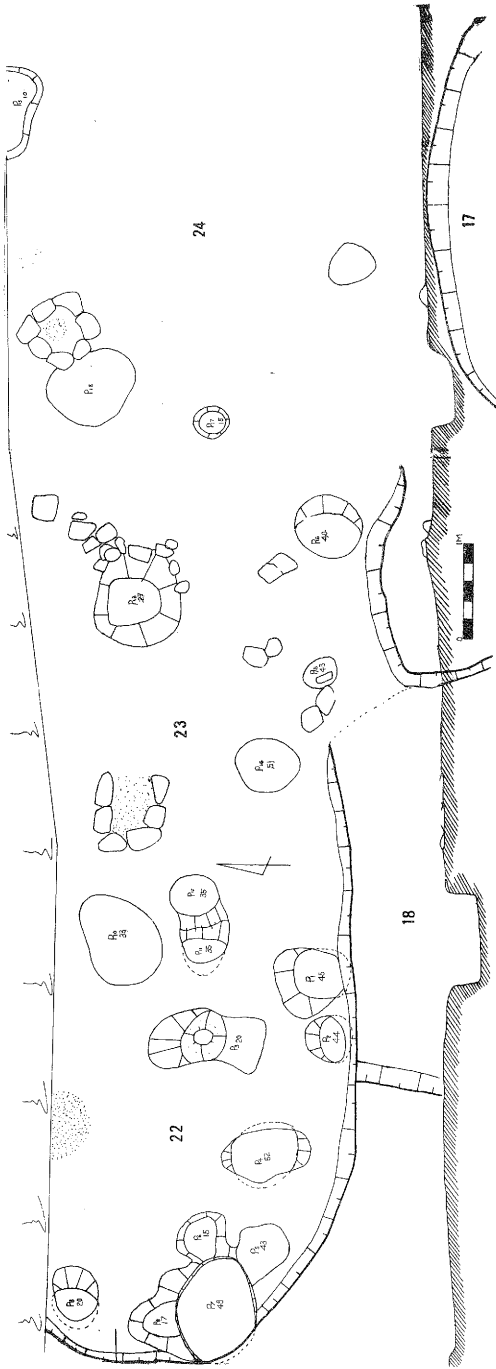
石器は土器に比べて多く出土している。

4は大形の打製石斧で両面とも自然面を大きく残して縁辺に調整を加えたものである。5は小形の偏平な磨製石斧, 7は打製石斧の一部を磨いたものである。6は石匙で偏平な剥片を利用している。8は乳棒状石器であるが端部は偏平にみがかれている。

9は断面が三角形の丸い河原石の両面を磨きあげ、片面縁に沿って細かな剥離を加えて刃部を作出している。横刃形石器の範ちゅうに入るかも知れない。

4, 7, 9は硬砂岩, 5, 6は緑泥岩, 8は蛇紋岩を使っている。(吉村 進)

第38図 大城林第21号住居址出土遺物(1-1/6, 2~9-1/3)



第39図 第22・23・24号住居址実測図(S=1/80)

21) 第22号住居址 (第39, 40図, 写真17)

遺構 第19号住居址の東に位置し一部貼り床がされている。南は第18号住居址を切り、東は第23号住居址に同レベルで続く。北は開田の時に切られており、壁は南と西で確認されるのみで規模、プランは不明である。

残存する壁高は南で15cmを測る。床面は固く良好である。中央部付近に焼土の堆積がみられる。炉と考えて良いだろう。炉石の存在の可能性はない。

遺物(第40図) 1は小形の深鉢で頸部に1条沈線を走らせ、文様はその下にみられる。人面を思わせる突起を配し、横に連結する2条を1組とした浮線が走る。胴部は縦の平行沈線をもって埋めている。外面には炭化物が付着している。これと似たモチーフを持つものとしては3がある。波状の頂きからはみみずく状の浮隆帯が垂下する。

4は鋭角な波状の口縁を持つ大形の深鉢で粘土紐を貼付してのワラビ手文、楕円文、H字状懸垂文によって器面を区角し、平行沈線がその内部を埋めている。1, 3は諏訪地方曾利期初頭に位置づけられる。4は若干時期が先行すると思われるが、口縁部にみられる渦文や胴部のH字状懸垂文からすると1, 3と同時期としてもさしつかえないだろう。

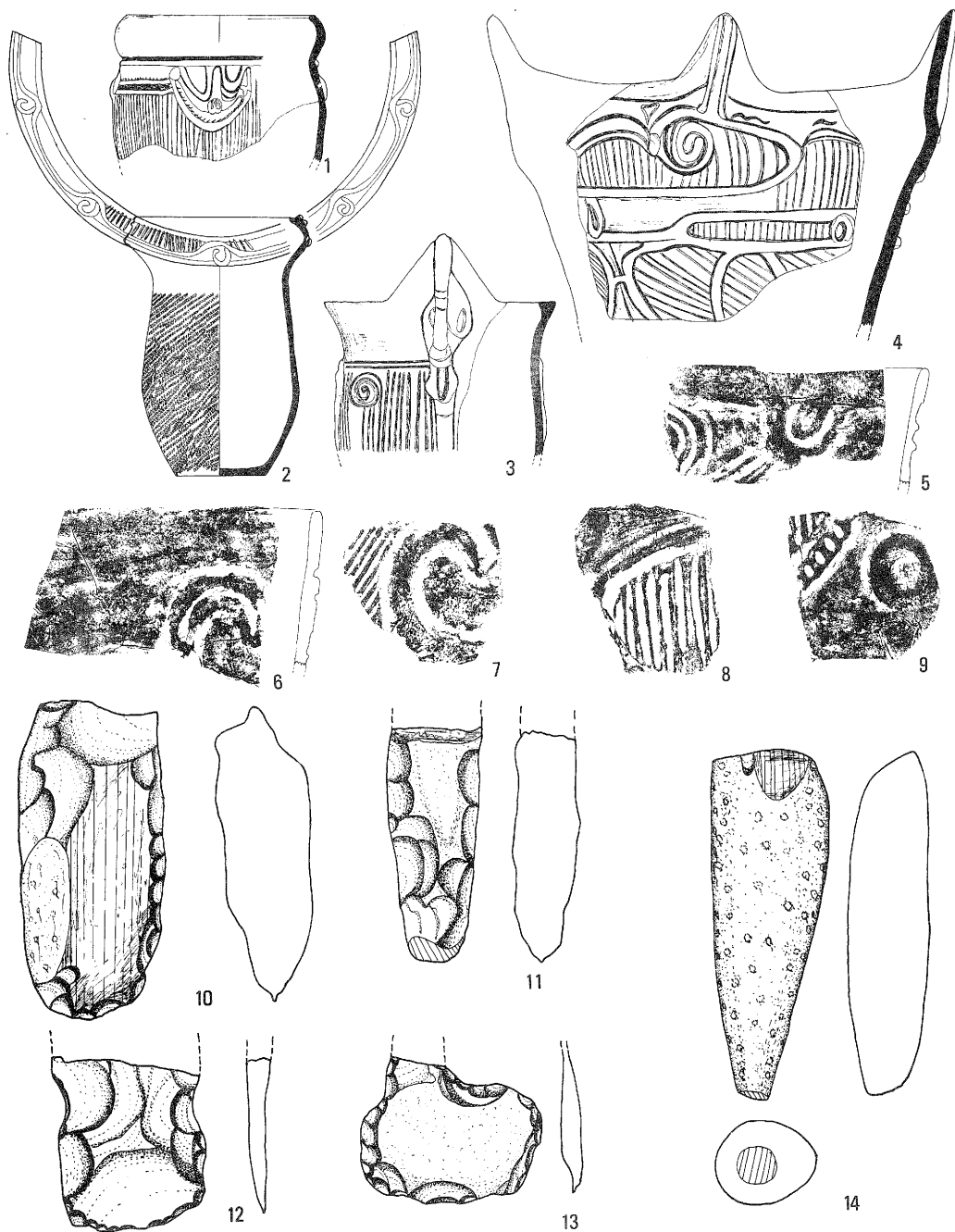
2は小形の深鉢で薄手に固く焼かれている。口縁部は渦文をつないで5分画され、胴部には縄文が施される。渦文の間は縦位の沈線が充填している。加曾利E I式そのもので、縄文と沈線は裏要素と言える。当地方における関東地方の加曾利E式の有り方を知る良好な資料である。5~9もほぼ同時期に属するであろう。

石器は打製石斧(11, 12), 磨製石斧(10), 石匙(13), 乳棒状石器(14)がある。

(伊藤 修)

10は第21号住居址出土のもの（第38図-7）と同様打製石斧の一面を磨いたものである。12は欠損しているが分銅形である。14はやはり端部が磨かれている。（吉村 進）

14は緑泥岩製他は硬砂岩製である。



第40図 大城林第22号住居址出土遺物（1~4-1/6, 5-14-1/3）

23) 第23号住居址 (第39, 41図, 写真17)

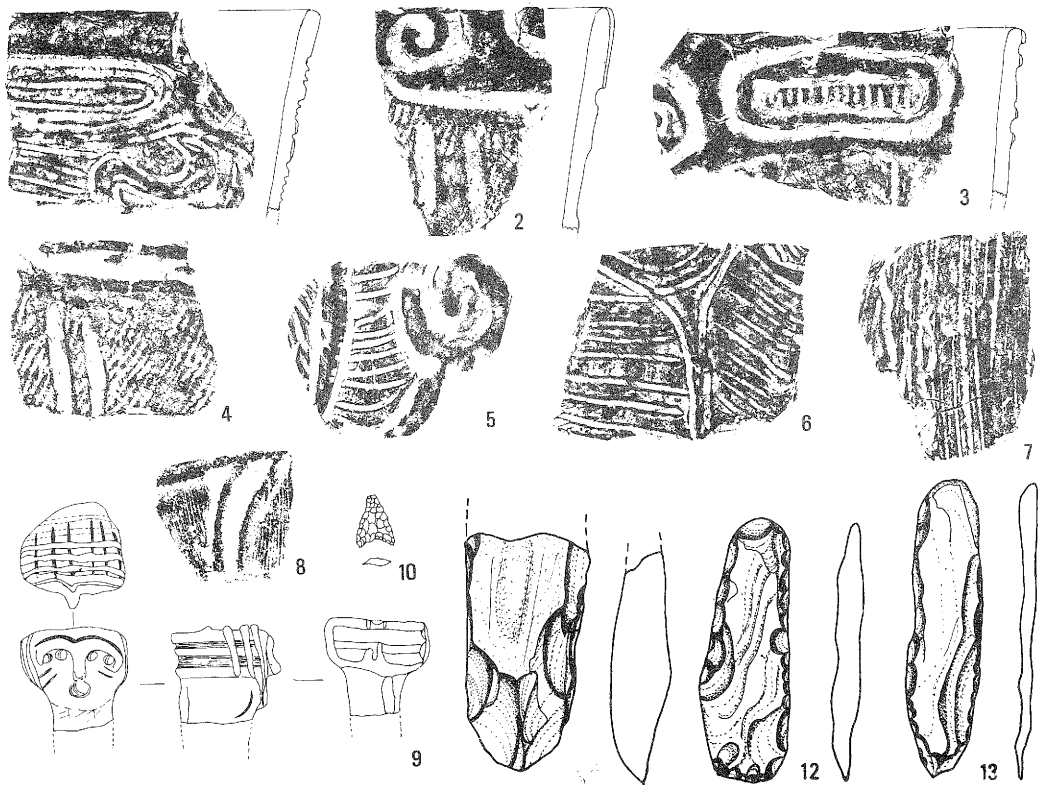
遺構 第22号住居址の東に続く住居址で南は同様第18号住居址を切っている。東は若干の床面差をもって第24号住居址に続く。

床面は固く堅ちである。炉はコ字形の石囲い炉で内部の焼土は厚く堆積している。柱穴はP₁₀, P₁₃, P₁₄などが考えられる。

第24号住居址との先後関係は遺物からすると当住居址の方が新しくなる。床面状態はその逆を示すが、非常に近接して構築される場合には壁の崩落も十分考えられることである。P₁₄の南からP₁₃の東にかけ床面上に頭大からこぶし大の自然石が弧を描いて置かれている。住居址の境とも考えられる。

遺物 (第41図) 1～3は共に口縁部破片で隆線による渦文や楕円文などで区角される。内部は同心状の楕円や縦方向の沈線が埋める。2の胴部は縄文地に太い沈線が下垂する。4は同一の個体であろう。5は粘土紐による渦文を配して沈線がその間を充填する手法で、6もモチーフ的には類似する。

7は縦位の粗い沈線を地文にし、蛇行懸垂文が走る。8は細い粘土紐を浮隆させ、縦方向の条線



第41図 大城林第23号住居址出土遺物 (1/3)

がみられる。縦方向に沈線が走る文様は井戸尻Ⅲ～曾利Ⅰ式に発達するものである。その沈線が細く、条線状になってきているのはその退化と考えられる。

総じて加曾利Ⅱ式に比定でき得る。5はそのうちでも古式に属するであろう。

当住居址よりは土偶（9）が出土している。正面の目の下の2本の線は、いれずみを表しているのであろうか。頭部は粘土紐の装飾によって、頭髪を表現し編み分けている。

石器は硬砂岩製の打製石斧と黒曜石製の石鏃がある。打製石斧は縁辺にのみ調整がなされている。

（伊藤 修）

23) 第24号住居址 （第39, 42図）

遺構 炉址のみ発見されたもので、プランはまったく不明である。西は第23号住居址と接し、第17号住居址の北に位置する。

炉は石組み炉で円形をなす。内部には若干の焼土がみられる。

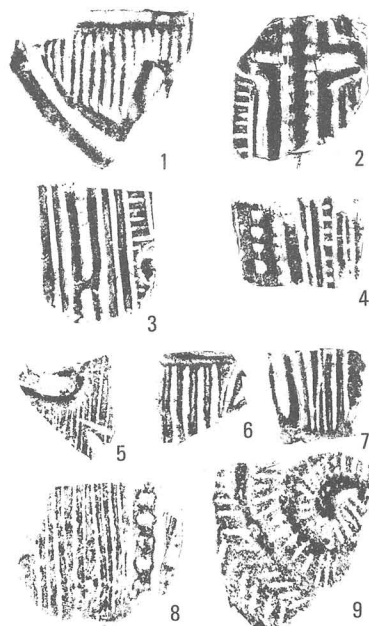
床面は固く良好である。

遺物（第42図） 全体的に深いきれいな沈線による縦方向の文様が主体となってくる。

変形人体文（2）やH字状懸垂文（3）を持つものもみられる。

8は指頭痕を施した浮線が懸垂する。9は時期的に他より後出するもので、渦文がみられ、その間を沈線が埋める。曾利Ⅱ式に属するであろう。

他は曾利期の初頭に位置する。 （福沢正陽）



第42図 大城林第24号住居址出土遺物(1/3)

24) 第25号住居址（第43, 44図, 写真22）

遺構 第13号住居址の南に位置し、西で第33号住居址を切っている。その比高15cmほどである。

壁高は南で15cm、北では低く10cmを測る。

大きさは南北6m、東西6.5mのほぼ円形のプランを示す。

床面は固く良好である。炉は中央東寄りにあり、円形のもともとは石囲い炉であるが、一部の石を残すのみで後は抜き取られている。内部には深鉢の胴下半部（第44図一2）が埋め込まれており埋壘炉である。

焼土はかなり厚く堆積している。

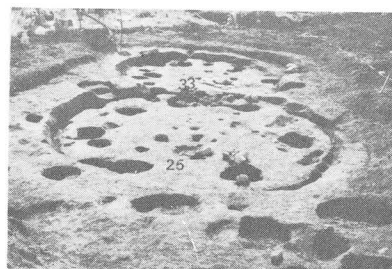
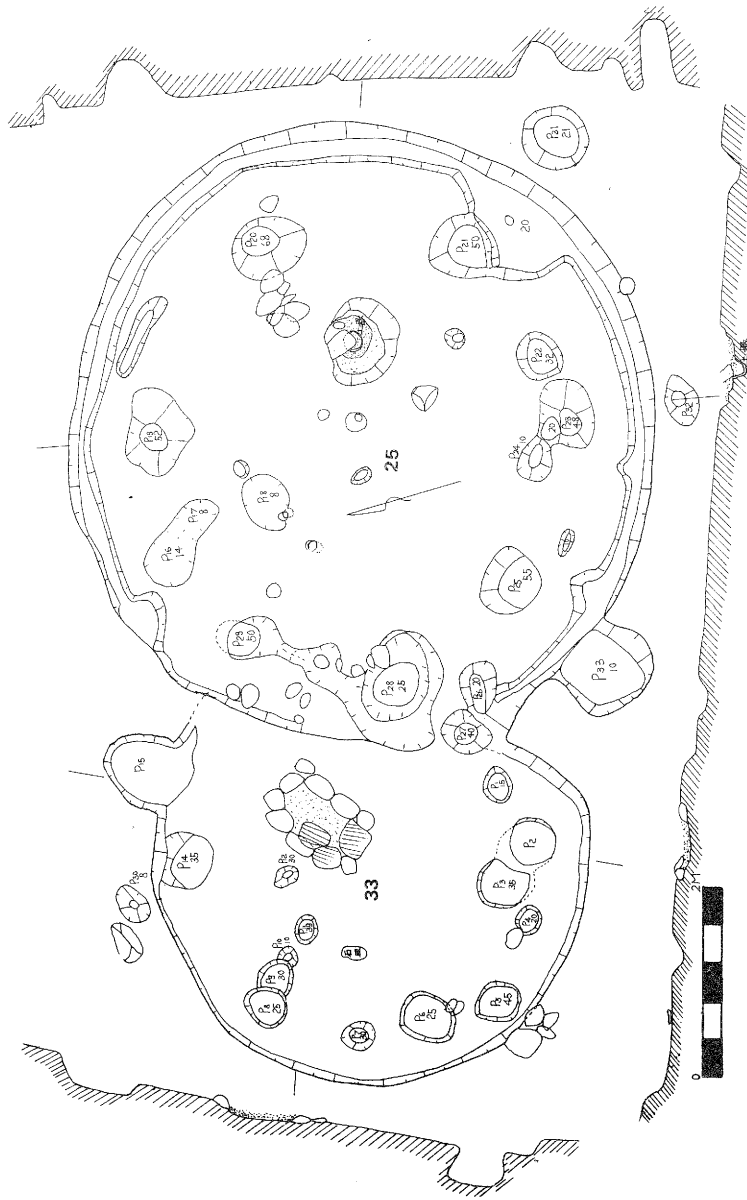


写真22 第25, 33号住居址(東より)



第43図 大城林第25, 33号住居址実測図 (S=1/80)

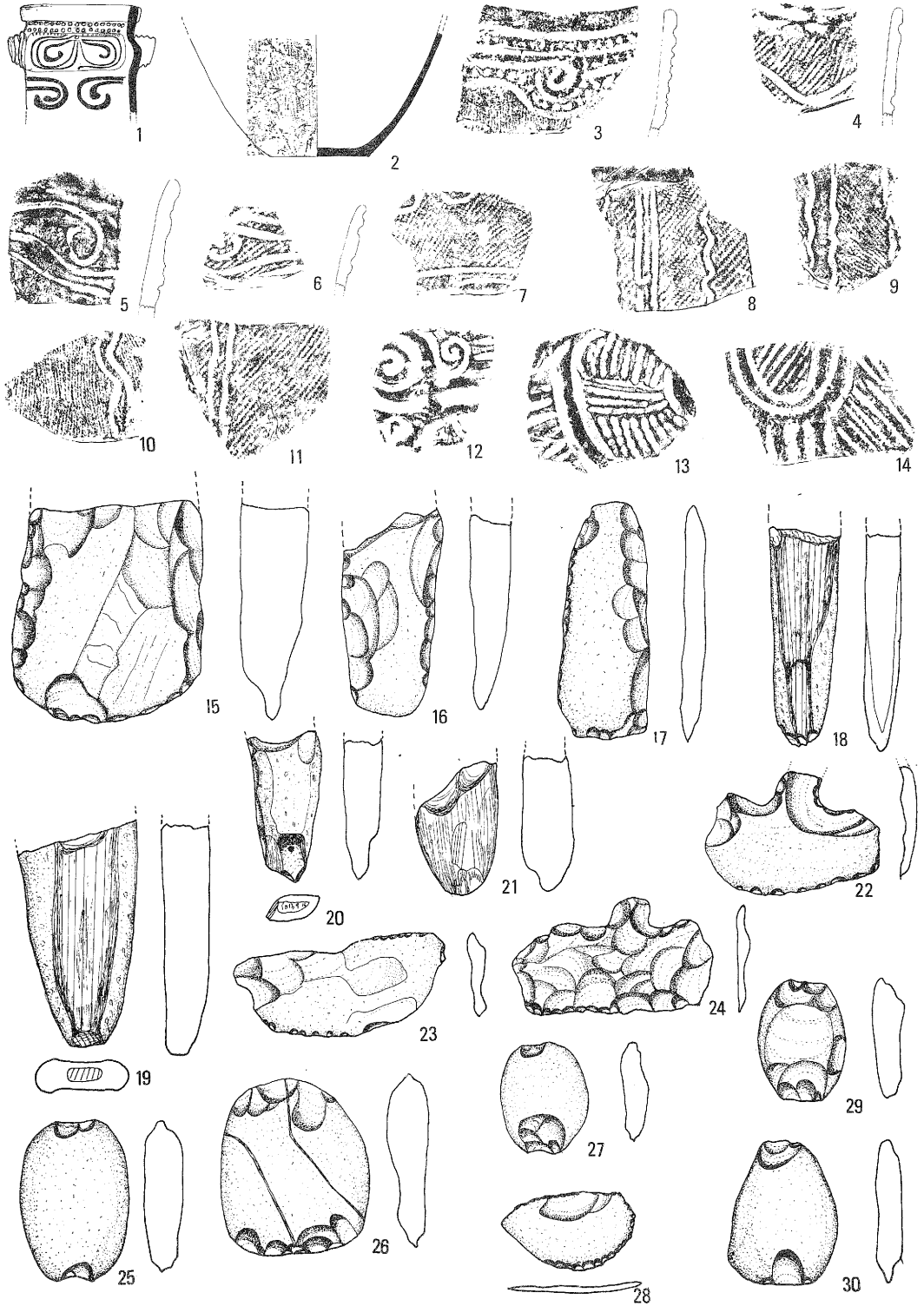
炉址の北東, P₂₀わきに頭大からこぶし大の大きさの自然石を使った集石がみられる。

支柱穴は6本を基本とするのが妥当と思われる。小ピットが幾つかみられるが、間取りと関連するものと考えたい。

周溝がめぐるが西側にみられないのは、炉の位置からして入口にあたるためであろうか。

屋外南に3個のピットがあるが機能は不明である。

遺物(第44図) 1は小形の筒形の土器でP₂₀に倒れ込むようにして発見されたものである。口唇は幅広い粘土紐をめぐらして段を作っている。若干ふくらみを持たせた胴上半部には、獣面を模した



第44图 第25号住居址出土遺物 (1.2-1/6, 3~30-1/3)

隆帯文を施しその下には沈線のワラビ手文が配される。頸部には丸棒の先端を利用した円形押圧文が2列にめぐる。

時期については他のものとそう大差ないものと思われる。雲母を含み固く赤褐色に焼かれている。

2は埋甕炉に使用されたものである。2次焼成のため器面は剥落がはげしい。文様は撚りの固い縄文が器面一杯に施されている。

地文に縄文を使用し、沈線による懸垂文、渦文、ワラビ手を描く斉一性を持つものが一般的である。3, 10は同一個体であろう。5は縄文を持たないが同種に含められるであろう。

12~14は渦文を浮隆させ、区角内を沈線で埋めるものである。

総じて曾利II式に位置づけられる。

石器は出土量、種類ともに豊富で、打製石斧(15~17)、砥石的石器(18~19)、敲打器(20)乳棒状石器(21)、石匙(22~24)、石錘(25~27, 29, 30)、横刃形石器(28)がある。

打製石斧は自然面を残すものである。18, 19は石の両面が研磨され断面が凹状を呈しているのが特徴である。18の端部には打撃痕が、19は研磨され平坦な面をそれぞれ作っている。このように2種類の機能を持つが、組み合わせ石器的な一つのものなのか、再使用によるものかは不明である。

断面が凹状を呈するのは砥石的機能—石器工作具としてのもの—を考えたい。

23は製作途中のものとして石匙に一応分類した。石錘は他には第28号住居址から1点出土しているのみである。全体に大形のものが多い。28は刃部が丹念に作出されている。

石材は18, 19, 21が緑泥岩、他は硬砂岩である。

(吉村 進)

25) 第33号住居址 (第43, 45図, 写真22, 23)

遺構 第25号住居址の西にあり、東側は切られている。大きさは南北 4.5m、東西約 4 m で楕円形を呈す。北側に張り出し部を持つ。壁高は約20cmを測る。

床面は固く良好である。第25号住居址との床面差約15cmである。

炉は中央北寄りに位置し、方形の石囲い炉(写真23)である。南西部の石は表面が磨かれている。焼土は約10cmほど堆積している。

柱穴は数多くみられるが、 P_2 と P_3 、 P_5 と P_6 、 P_8 と P_9 のように隣接したピットがあるのは改築の可能性も考えられる。炉と P_7 のほぼ中間に石皿(第45図-7)が発見された。

遺物(第45図) 1は赤褐色に固く焼かれたキャリパー状の深鉢で復元されたものである。口縁から胴上半部にはハート状の浮隆帯とさらに続く変形人体文が器面を4分画して施される。口縁部文様帯は浮隆帯の真ん中を渦文を持つ蛇行文が走り、その間を沈線とソーメン状の粘土紐による籠目文とからなる。その下には2条の粘土紐を各々連絡し区角を作り、ワラビ手状懸垂文と縦走する細沈線が内部を充填する。更に胴部は粘土紐を使って幾何学文様を作り、やはり細

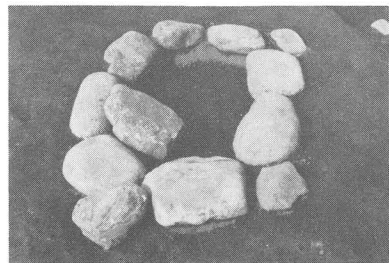


写真23 第33号住居址炉址

沈線が異方向に斜走する。

2は筒状の把手と鋭角な波状を持つ円筒形土器で口唇はふ厚く受け口状を示す。胴部は縄文が器面を埋めている。

3, 5は同一個体で隆線と沈線による曾利I式独特の文様がみられる。6は口縁部付近のもので楕円文を配し、内部には円形竹管文が施される。総じて曾利I式に比定できる。

石器は石皿片(7)と打製石斧(8~11)がある。打製石斧は自然面を残したもの(8, 9)とそうでないもの(10, 11)がある。7は花崗岩製, 9は緑泥岩製, 他は硬砂岩製である。(吉村 進)



第45図 大城林第33号住居址出土遺物(1, 2-1/6 3~11-1/3)

26) 第26号住居址 (第46, 47図)

遺構 第25号住居址と第28号住居址の中間に発見されたものである。壁は発見されず、第10, 11号住居同様焼土とピットを持つのみで住居址と断定するには問題あるが、平地住居的なものとして報告しておく。

遺物 (第47図) 器形を知るものはまったくない。1は縄文地に沈線が3本横走る。2は渦文を配して区角し内部を太い沈線でうめる。3は2と同種の胴部破片である。4は縄文地に沈線が縦走る。

総じて曾利Ⅱ式に比定でき得る。

(吉沢文夫)

27) 第28号住居址 (第48, 49図, 写真24)

遺構 第26号住居址の東に位置し、南には第31号住居址がある。

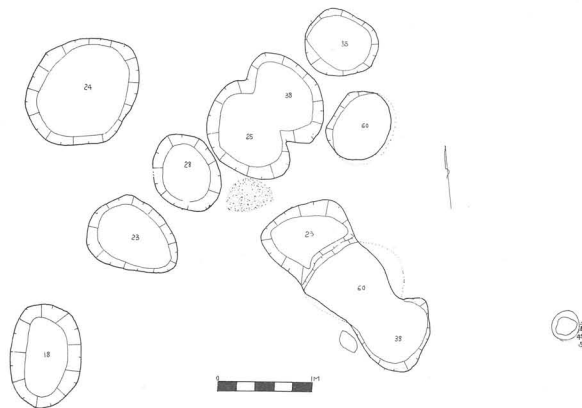
東西 4.2m, 南北 4 m の大きさを持ち、プランは変五角形をなす。

壁高は西で15cm, 東では25cm前後を測る。床面はタタキが行われており固く堅ちである。

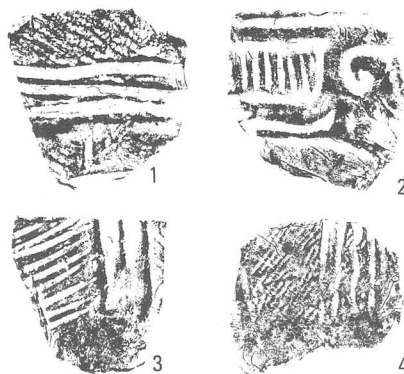
炉は中央やや西寄りにあり、円形で掘り込みは深く40cmほどある。一見炉穴を思わせるが、北東部に石組みの一部が残っており、断面に段がみられるところからすると炉石は抜かれてしまったと考えられる。焼土は5cmほど堆積する。

主柱穴は5本を基本と考えるのが妥当であろう。

床面上に偏平な置き石がみられる。何らかの意図をもって置かれたものであろう。



第46図 大城林第26号住居址実測図(S=1/80)



第47図 大城林第26号住居址出土遺物(1/3)



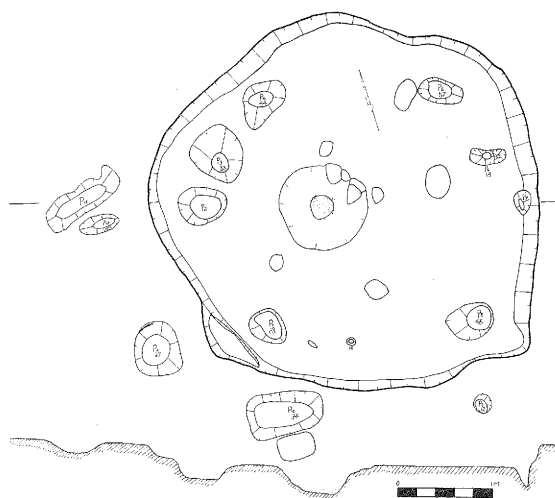
写真24 第28号住居址 (南より)

壁外，南西部にピットがみられるが住居址に付属するものかは不明である。

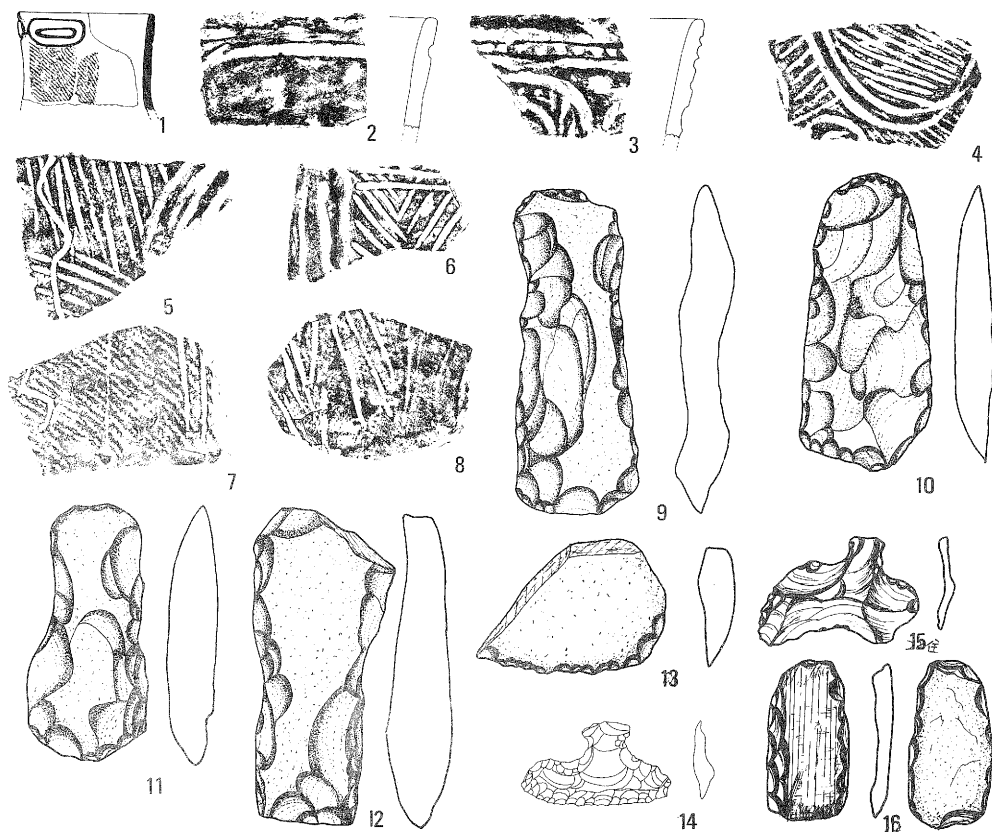
遺物（第49図） 土器の出土量は多いが器形を知り得るものはない。

1は口縁がわずかに外反し，胴部がふくらむ小形土器で壺とも考えられる。文様は口縁部に沈線による二重の楕円文を配し，胴部にかけて縄文が器面を埋める。

2，3は沈線を使って直線や円弧文を描くものである。5，6，8は2本ないし3本の隆線を1組として渦文や懸垂文を作出し，その間に太い沈線を斜走，稜杉状に施すものである。4も



第48図 大城林第28号住居址実測図(S=1/80)



第49図 大城林第28号住居址出土遺物 (1-1/6, 2~16-1/3)

モチーフ的に類似するものである。

7は縄文地に沈線で蛇行文や直線の文様を描くものである。

総じて曾利IIないしIII式に比定できる。

石器は打製石斧（9～12）、横刃形石器（13）、石匙（14、15）、磨製石斧（16）がある。16は縁辺を調整し、片面は自然面を残し、他面を磨きあげるものである。石材は14はチャート、15は安山岩、16は緑泥岩、他は硬砂岩である。
（北沢雄喜）

28) 第29号住居址（第50、51図、写真25、26）

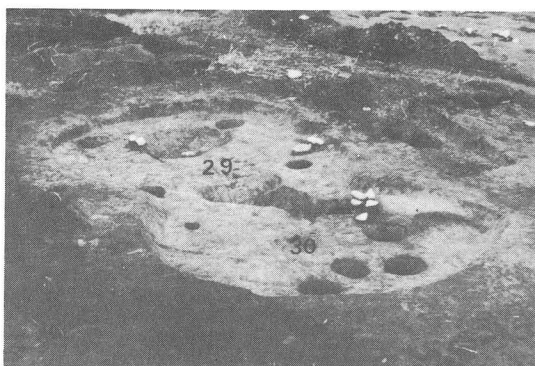
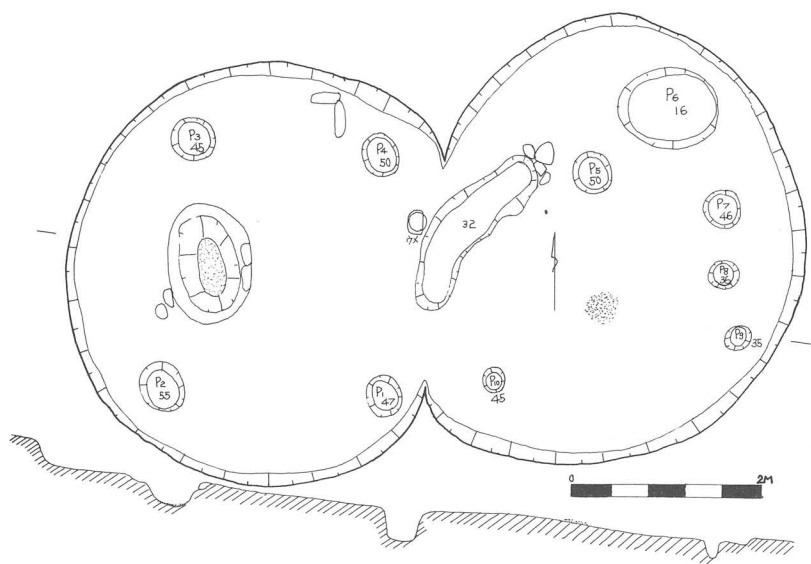


写真25 第29、30号住居址（南東より）



写真26 第29号住居址埋葬出土状態



第50図 大城林第29、30号住居址実測図（S=1/80）

遺構 第25号住居址の南に位置し、東には第30号住居址が同一床面レベルをもって続く。南北 4.5m、東西 4 m の規模でプランは楕円形を示す。壁高は西側で30cm前後を測る。床面は軟弱な方である。炉は中央西寄りにあり、楕円形を呈し掘り込みは深い。炉石が一部残っているところから他は抜き取られたもので、もともとは石組みがあったと思われる。

柱穴は 4 本。

住居址東側に自然石をのせた埋甕（第51図-1）が発見された（写真26）。

遺物（第51図）

1は埋甕である。いわゆる甕形の器形をなし、底部は欠損する。口唇内部には隆帯がめぐらされ受け口状になる。隆帯を使って渦文つなぎの文様を配し、その間は太い沈線で埋める。このような文様は当地方においては良く知られ、曾利Ⅱ式に並行するであろう。赤褐色に固く焼かれる。

2は胴上半部がくびれる深鉢で底部は復元による。4つの突起、更にその間に小突起を持つ。突起の上端は渦文が施される。突起の下には幅広く隆帯が懸垂される。口唇直下にはそれらをつなぐ沈線が3本めぐり、それに直交して蛇行沈線文が走る。それらによって8分画された器面は太い沈線を稜杉状に施して充填する。

3は胴下半部を欠いた深鉢である。口縁部は器肉を厚くして、楕円文が連結される。そのわきには隆帯に沿って沈線がめぐり、内部は沈線が縦に施される。楕円文の間から2本の沈線を1組としたワラビ手状懸垂文が無文部を走り、更にそれに直交してやはり2条の沈線がくびれ部にみられる。

4は小形の鉢形土器で無文である。口唇はそぎ状をなす。土器製作時の輪積みの痕を明りょうに残す。内面には炭化物の付着がみられる。

他の出土土器も大方これらのものに含まれる。10は縄文地に沈線の蛇行懸垂文が走るものである。以上12、13を除き一般的に知られるもので曾利Ⅲ式に比定できる。ただ1は時期が異なり曾利Ⅱ式に比定でき得るであろう。12、13は縄文地に連弧文が横にみられるものであまり類例を知らない。ただ近畿地方に盛行する醍醐Ⅱ式に同様な施文がみられる。^{*1} 他と時期的には大差ないであろう。

石器は打製石斧（14～17）、磨製石斧（18～20）、石匙（21、23）、横刃形石器（22）がある。磨製石斧のうち19は定角であるが第28号住居址出土のもの（第49図-16）同様縁辺に調整がみられる。23は釣り針状をなすが、石匙に含まれるであろう。18、19、20は緑泥岩、23はチャート、他は硬砂岩製である。

（吉村 進）

*1 日本の考古学第2巻 「縄文時代—縄文文化の発展と地域性—近畿地方」河出書房新社 昭和40年

29) 第30号住居址（第50、52図、写真25、27）

遺構 第29号住居址の東に続く住居址である。

プランは楕円形を呈し、東西 4 m、南北 4.8 m を測る。

床面は部分的に軟弱なところがある。壁高は東で15cmを記録する。

中央南寄りに径30cmほど焼土がみられる。地床炉である。ピットは5ヶ発見されたが、構造上から全てを柱穴

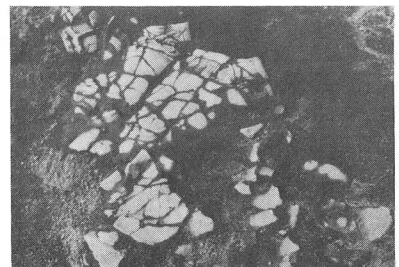
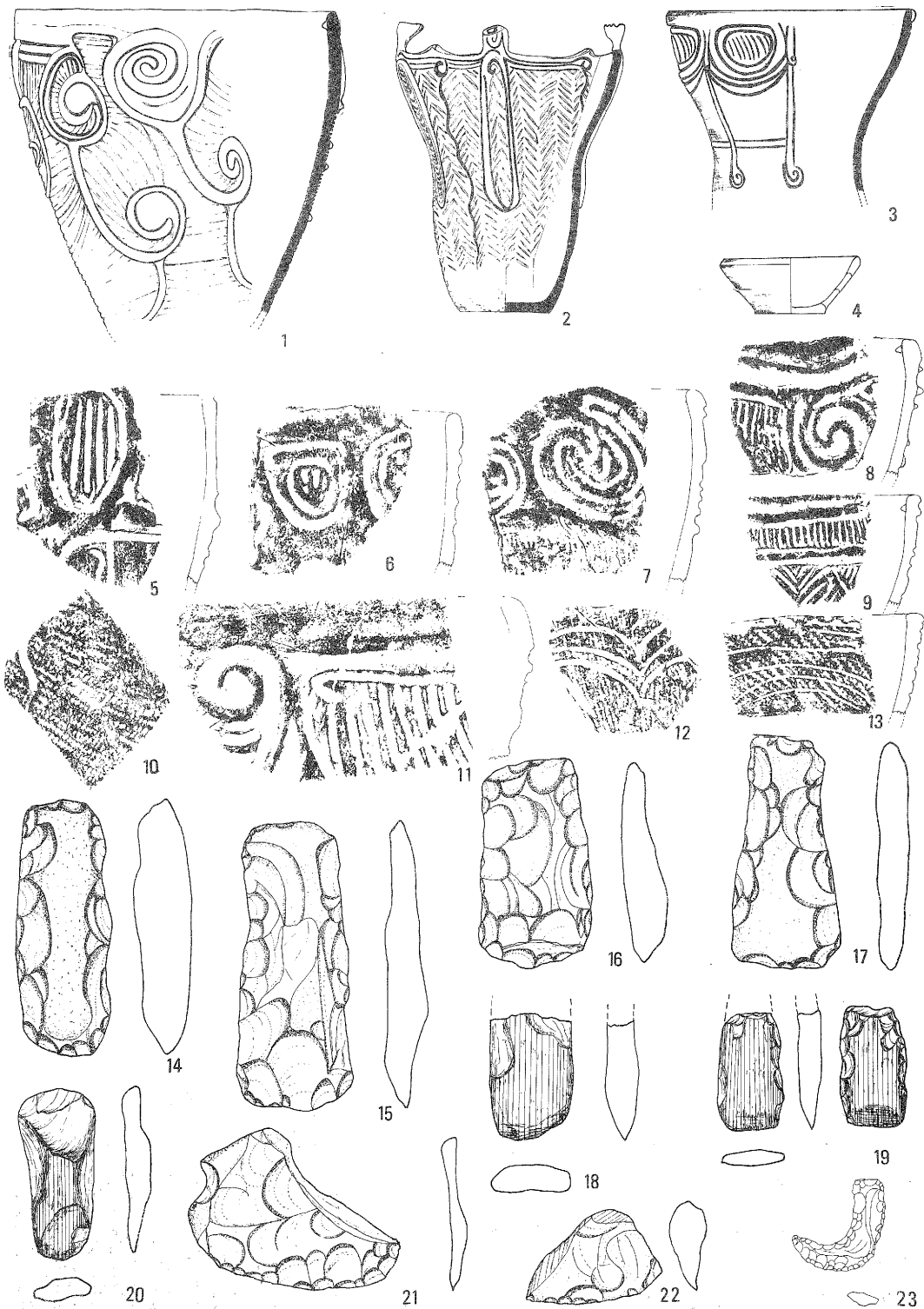
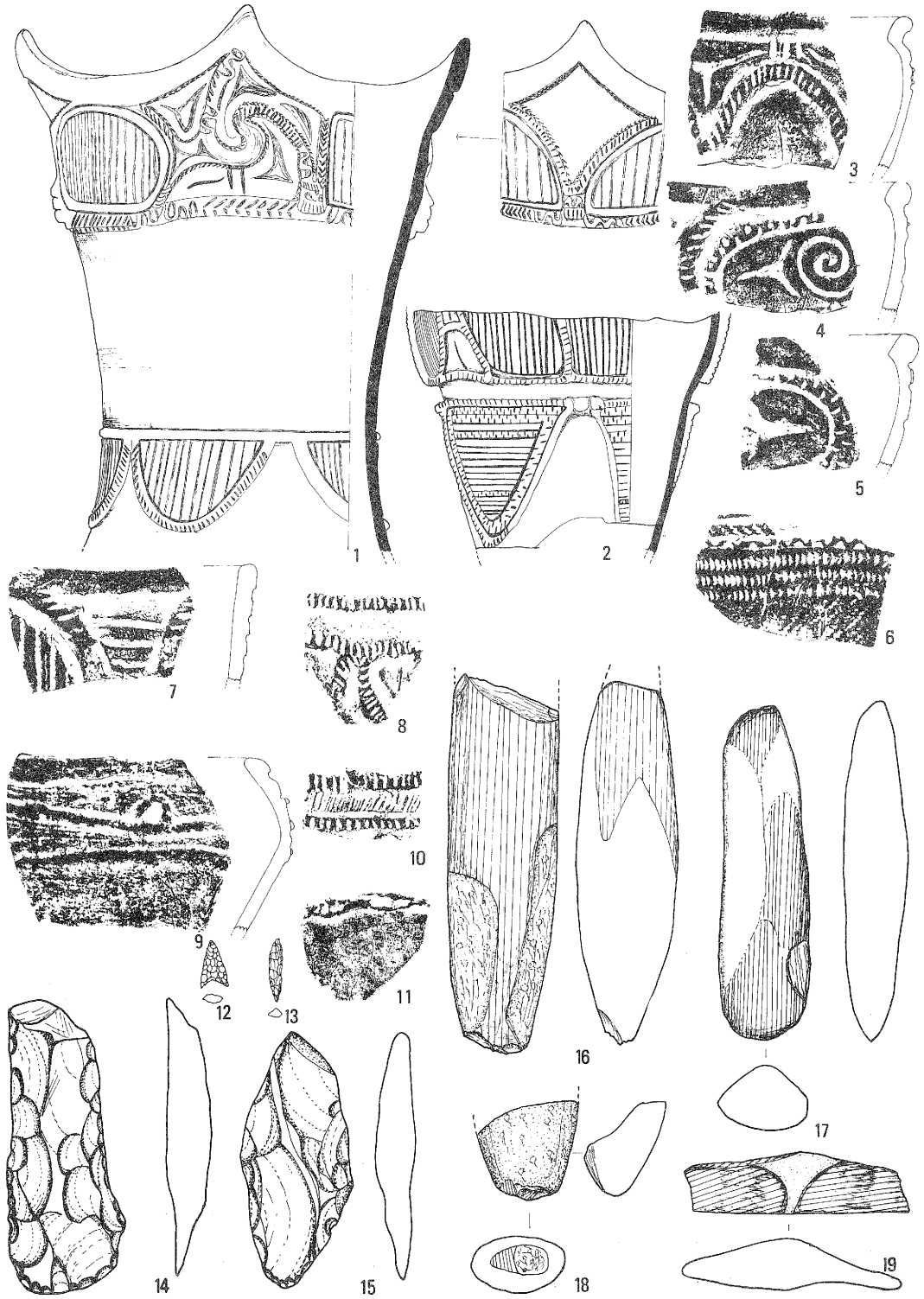


写真27 30号住居址遺物出土状態



第51图 大城林第29号住居址出土遗物 (1~4-1/6, 5~23-1/3)



第52图 大城林第30号住居址出土遺物 (1, 2-1/6, 3~19-1/3)

とするのは問題がある。なおP₆は柱穴でなく貯蔵穴的性格を持つものと考えたい。

又西側、当住屋址と第29号住居址が複合する付近に幅50cm、深さ30cmほどの構状遺構がみられるが機能は不明である。

東側床面上から大形深鉢（第52図-1）がつぶれて出土した（写真27）。

遺物（第52図） 1は大形な深鉢で胴下半部は欠損する。鋭角な頂きを持つ波状口縁は外反し、胴部はゆるやかな曲線を描く。文様は口縁部と胴下半部にみられ、中間は無文帯となる。口縁部文様帯は口唇直下を無文とし、頸部を横走する刻みを持つ隆帯の間に作られる。楕円文、楕形文、ひし形文を配す。正面には抽象文とそれを埋める沈刻三角文のモチーフがあり、それは反対側にも対称的にみられる。胴下半部は楕形文が連続的に施される。黄褐色に固く焼かれている。

2は口縁と底部を欠く深鉢である。文様は横走する2本の隆線によって分けられ、その間に若干の無文部を残す。隆線から発する粘土紐はく形文や三角文を作り出し、縦、横に走る平行沈線がその間を埋める。

他のものも粘土紐を曲線的に走らせて文様を作るものが一般的である。3～5には沈刻三角文や渦文がみられる。7は内部を沈線が埋めるものである。3～5のように口唇がく字状に強く外反するものもこの時期に良く知られる特徴である。

9は強く内屈する口縁部破片でソーメン状粘土紐を使って文様が描かれる。6は出土中では特殊なもので口唇直下に縄文をめぐらし、その下は工具の先端を利用した連続三日月状文が3条走り、胴部は縄文が器面を埋める。当地方においてはあまり類例を知らない。近畿地方の粟津式に同種の施文方法を持つものがある。更に粟津式の新しい時期のものは勝坂式を伴出することが知られている。^{*1}

出土土器は総じて藤内II式ないし井戸尻期の初期に属する。

石器は石鏃（12）、石錐（13）、打製石斧（14、15）、磨製石斧（16、17）、乳棒状石器（18）、砥石（19）がある。16、17は部分的に研磨したものである。砥石はプロペラ状にへっている。12、13は黒耀石、14、15は硬砂岩、16、18は蛇紋岩、17は緑泥岩、19は安山岩製である。（吉村 進）

※1 日本の考古学第2巻「縄文時代—縄文文化の発展と地域性—近畿地方」 河出書房新社 昭和40年

30) 第31号住居址（第53、54、55図、

写真28）

遺構 第28号住居址の南に位置し南側は第32号住居址に貼り床されている。

東西 6.5m、南 4.2mを測り楕円形のプランを示す。

壁高は約20cm、床面は平坦で非常に固い。

炉は石組み炉で中央やや東寄りにある。床を10cmほど掘り、平坦な炉石を使って、正方形に作られる。炉東わきに大きな平坦な石が埋められている。炉に付属するもの

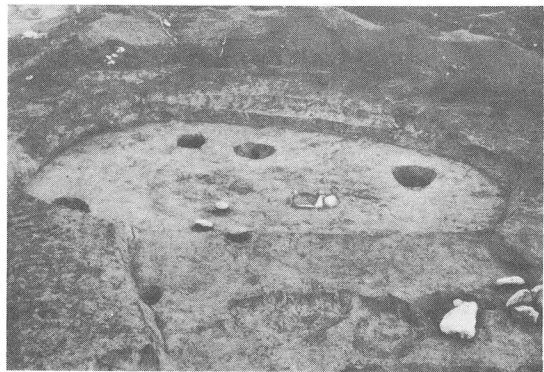
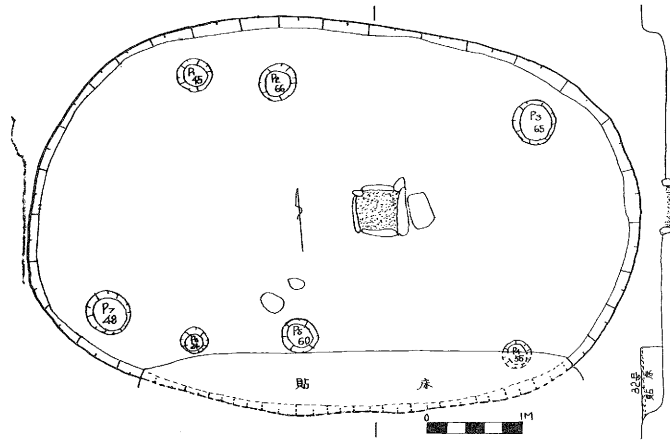


写真28 第31号住居址（南より）



第53図 大城林第31号住居址実測図 (S=1/80)

であろう。

柱穴は6本が基本と考えられる。

遺物(第54, 55図)炉の上に逆三角錐状に重なって20個体ほどの土器が出土した。しかし発掘中に器形が推測され得るような出土状態をみせるものはまったくみられなかった。故意に一括廃棄されたものとして注目されるものである。

1~19はすべて復元されたものであるが、欠損部分がほとんどないものとしては、1, 3, 4, 8があり、他は図上復元によるものである。

1は大形の深鉢で輪積みの痕を明りょうに残す。口縁部は内湾し、胴部は筒状をなす。コニーデ状の中空の把手を一つ持つ。口縁部は把手に爪形文を持つのみで他はまったく無文である。頸部に連続爪形文を持つ隆帯を横走させ、その下に2個1組とした逆M字状文が施される。その間は弧線が連絡する。区角内には細い平行沈線が充填する。沈刻文もみられる。胴下半部にかけては、若干の無文部を残して縄文が器面一杯に施文される。器面調整は丹念に行われチョコレート状に固く焼かれている。

2は胴部がく字状に内屈し口唇が強く外反する浅鉢で平縁の口縁には1個だけ把手を持つ。把手の頭は破損しており不明であるが、その下には果実状の突起がつく。文様は口縁部のみに施されており胴部は無文となる。刻みを持った粘土紐を波状に走らせ口唇との間は細線が縦に埋める。波状の頂きからは楕円文が貼付される。

3は赤褐色を呈し焼きはあまり良くない小形の深鉢である。口縁はマール状の頂きを4個持ち、口唇は肥厚する。頸部がくびれ口縁は外反し、胴部はゆるやかなふくらみを持つ。文様は頸部に1条沈線を走らせ文様はその下に施され、口縁部は無文となる。ゆるやかな波状に刻みを持つ粘土紐が走り谷には連続S字状文と小形渦文、そして山の部分からは隆帯が懸垂される。

4, 5は楕形文を持つ土器で共に口縁部は突起状の波状を示す。5は口唇がく字状に外反し内部は受け口状を呈す。文様は口唇直下を無文として、4個の頂きを基本として施文される。4は頂に桃実状の文様を配し、それをつなぐように刻みを持つ粘土紐が波状に走る。その下は粘土紐が横走して文様帯を作り、その間は沈線が縦に埋める。

5は口唇無文下と頸部に押し引きによる連続コ字文を持った粘土紐を横走させる。頂部は同手法の人体文風な文様が描かれ間は連続コ字文が埋める。

6は器形の面においては1に非常に類似する。頸部は横帯区角文がみられ、頂部下には球根状の区角を作り、隆帯をU字に垂らし、内部は縦の平行沈線が埋める。胴部には縄文が器面を一杯に施

文される。

7は口唇が強く外反する小形な筒形の土器である。口唇下に蛇行文を浮隆させ、更にその下に1条刻みを持った隆帯がめぐる。文様は縦走する浮線によって3分画される。横走する沈線が胴半部を走ってそれをつなぐ。

8は2と器形が非常に類似する。文様はまったく持たない。チョコレート状に固く焼かれている。

9, 10は類似する深鉢である。口唇は肥厚し外反する。文様は頸部に1条隆帯を横走させ、その上は板状工具による連続沈刻文が施される。9は胴部に文様を持たないが、10には逆V字の隆帯が4配分される。外面には刷け目状擦痕がみられ、内面口縁部と胴半部にはへら状工具による器面調整の痕がみられる。

11は口縁部を欠く小形の深鉢である。胴上半部に連弧文を浮隆させ、そのわきを連続コ字文がめぐる。胴半部は無文帯で下半部は大きな連弧文が描かれる。弧の内部には同心状に連続コ字文が走る。いわゆる橢形文の変形と考えられる。

同様の器形を持つものとしては15, 16, 19がある。15は口縁にかけて連続コ字文を山形状に施し胴下半部には小さな連弧文が走る。16は半円形の文様を4個配し、横走する隆帯との間は縦位の細線が埋める。

12は小形の椀ないし浅鉢で底部は欠損する。文様は口縁部に2条連続刺突文がめぐらされるだけである。

13は胴下半部を欠くが文様の施文方法に若干違いがみられるほかは5に非常に類似する。

14はゆるやかなふくらみを持つ小形土器で口唇下に無文部を残し、半円状の抽象文が描かれる。

17は深鉢の口縁部で波状を呈す。文様は波状の4山を基本とし断面三角形状の隆帯がS字状に走る。内部は細い竹ペン状の工具によると思われる沈線の山形状文が横に縦に施される。

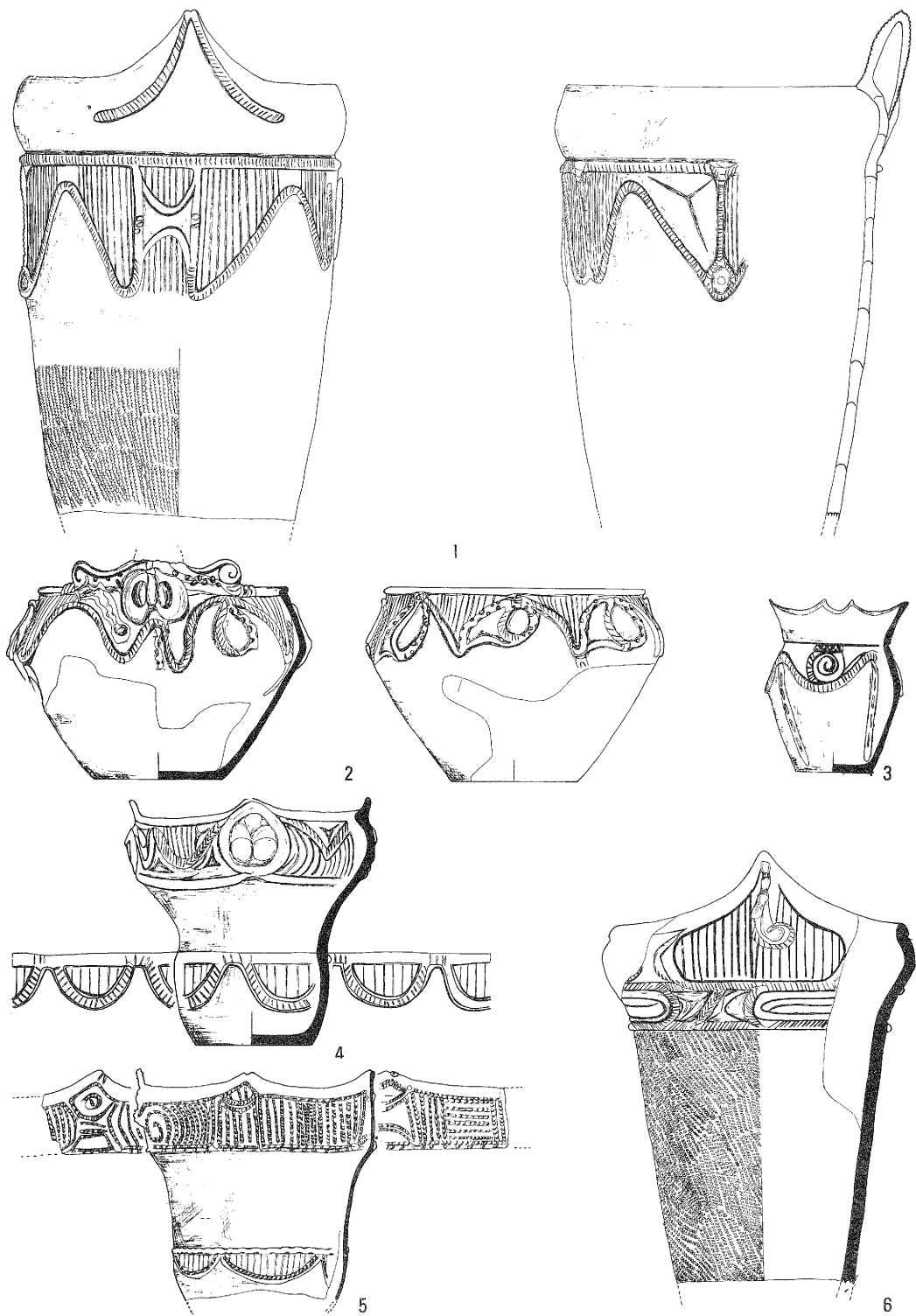
18は小形土器の胴部で縄文が器面を埋めている。

20~29はこれらのものに含まれるものである。時期は総じて藤内期から井戸尻Ⅱ式にかけてのものと思われ、17はわずかに先行する。

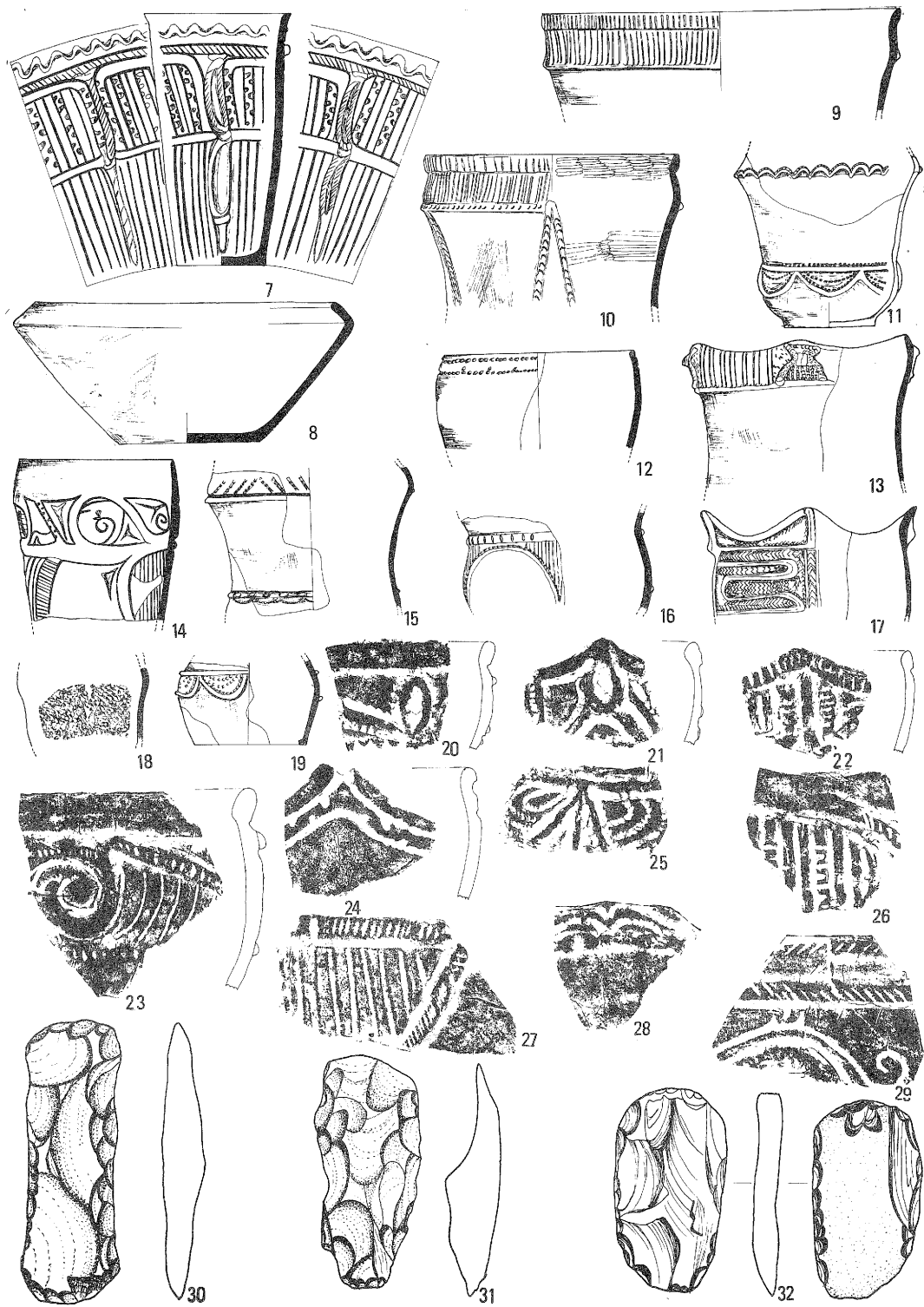
以上、土器について述べてきたが、5, 11, 13, 15, 19などにみられる連続コ字文の施文方法と時期について若干問題点にふれてみたい。出土量は多く、口縁部からすると10個体ほどある。

連続コ字文の手法は前期末葉に盛行する結節状浮線文の流れをくむもので、貉沢式に盛んに用いられることが知られている。その手法はその後の藤内、井戸尻期の浮隆線のわきにみられる爪形文、キャピラ文などに引きつがれてくると思われる。

ところで本住居址出土のものをみると橢形文が併せ用いられ更に概して薄手作りであるところから大きな特徴がある。橢形文の初源は新道期にもとめられる^{*1}が本住居址出土のものはその形態からすると最盛期の井戸尻期に比定できる。このことからすると井戸尻期まで連続コ字文の手法が明らかに使用されたことが知られる。更に曾利期においても連続コ字文手法を文様の一部に使用した例が本遺跡を初め、的場遺跡^{*2}、増野新切B遺跡^{*3}、追越遺跡^{*4}出土土器の中にある。諏訪地方においてはあまり類例を知らないが伊那地方においては一般的ではないにしろ、連続コ字文手法が絶えることなく引きつがれてきたことが知られる。



第54图 大城林第31号住居 址出土土器 (1/6)



第55图 大城林第31号住居址出土遗物(7~19-1/6, 20~32-1/3)

これらのことから所属時期は井戸尻Ⅱ式に比定してもそう問題はないと思われる。11, 19のような文様を持つものが井戸尻Ⅱ式に知られている^{※5}ことから妥当と思われる。同様な文様を持つ土器は現在当地方においてかなり発見されており、月見松遺跡^{※6}山溝遺跡^{※7}出土例等がある。

石器は出土が少なく硬砂岩製の打製石斧(30, 31)と緑泥岩製の横刃形石器(32)があるのみである。(吉村 進)

- ※1 武藤雄六 「中期縄文土器の蒸器」 信濃17巻一7号 昭和40年
- ※2 「的場一国道153号改良工事松川町古町地区昭和47年度緊急発掘調査報告書一」 長野県下伊那郡松川町教育委員会 昭和48年
- ※3 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 昭和47年度一 下伊那郡高森町地内その2一」 長野県教育委員会 昭和48年
- ※4 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書昭和46年度一上伊那郡飯島町地内その1一」 長野県教育委員会 昭和47年
- ※5 藤森栄一編「井戸尻」中央公論美術出版 所収 昭和40年
- ※6 「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」 長野県伊那市教育委員会 昭和44年
- ※7 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書昭和47年度一 上伊那郡飯島町内その3, 駒ヶ根市内一」 長野県教育委員会 昭和48年

31) 第32号住居址(第56, 57図)

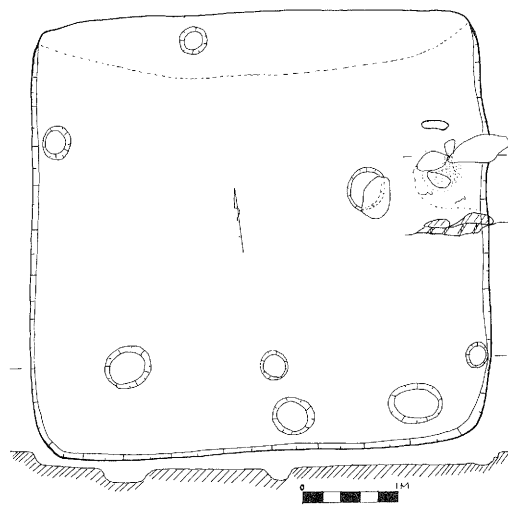
遺構 第31号住居址の南に位置し当住居址の北側は貼り床からなっている。

規模は南北 4.4m, 東西 4.9mで隅丸方形のプランをなす。壁高は15cm前後を測る。床面は攪乱がひどく、又タタキもほとんどみられず軟弱である。

東壁中央北寄りに石組みのカマドがある。ロームの盛り土とカマドの石組みが北側にみられるだけである。他は破壊されたものと思われる。内部の焼土の堆積はわずかである。カマド内より甕形土器の破片が出土している。

攪乱が激しくピットの検出は大変困難をきわめたが8個発見された。ただし上屋構造の上からすると不規則であり、全てを柱穴と考えるには問題があろう。更にカマドの手前に石をのせたピットが発見されたが機能は不明である。

遺物(第57図) 出土した土師器の量はあまり多くない。器形を知り得るものは3点あるが、いずれも甕形土器の口縁部から胴上半部にかけてのものである。



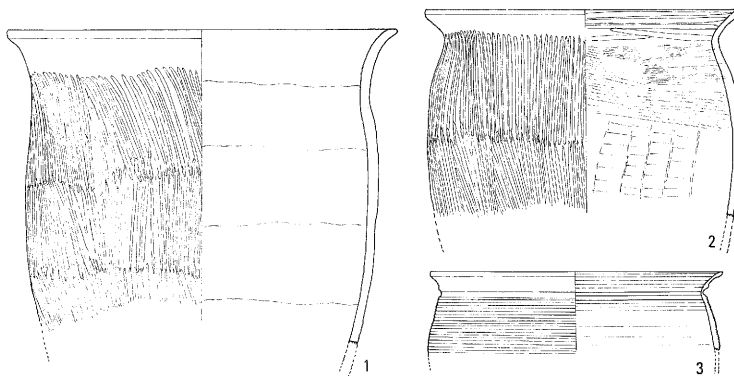
第56図 大城林第32号住居址実測図(S=1/80)

1は口縁が立ち上がって外反し、胴部はゆるやかなカーブを描くいわゆる長胴形である。器表面は丹念なへら削り手法による調整がみられる。ロクロ使用の痕はみられない。

2は口縁がく字状に外反し、口唇は肥厚して丸味を持つ。胴部はやはり長胴形を示す。器表面には1同様丹念なへら削り手法がみられる。更に内面の口頸部には刷け目痕が横走し、胴半部にはタキ目痕がみられる。

3はく字状に強く外反し、口唇部と頸部の上に稜を持つ。器表面胴部と裏面口頸部に調整の平行沈線がみられる。ロクロ使用による製作であろう。

1～3ともに土師器後半真間式に位置すると思われる。以上の土師器のほかに須恵器が数片発見されている。
(吉沢文夫)

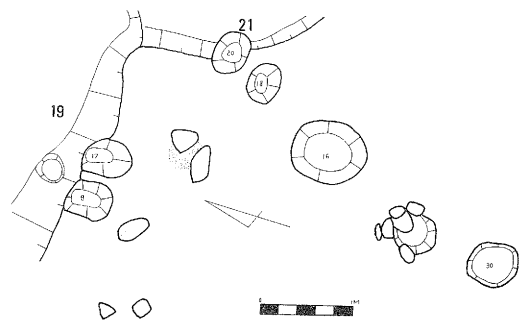


第57図 大城林第32号住居址出土土師器実測図(1/4)

32) 第34号住居址 (第58図)

第19号住居址の南、第21号住居址の西に発見されたもので、第10, 11, 26号住居址同様焼土とピットのみ発見されたものである。

遺物はわずかに発見されているが、いずれも文様が判別できるものはない。焼き厚さなどから縄文時代中期に属すると思われる。
(北沢雄喜)

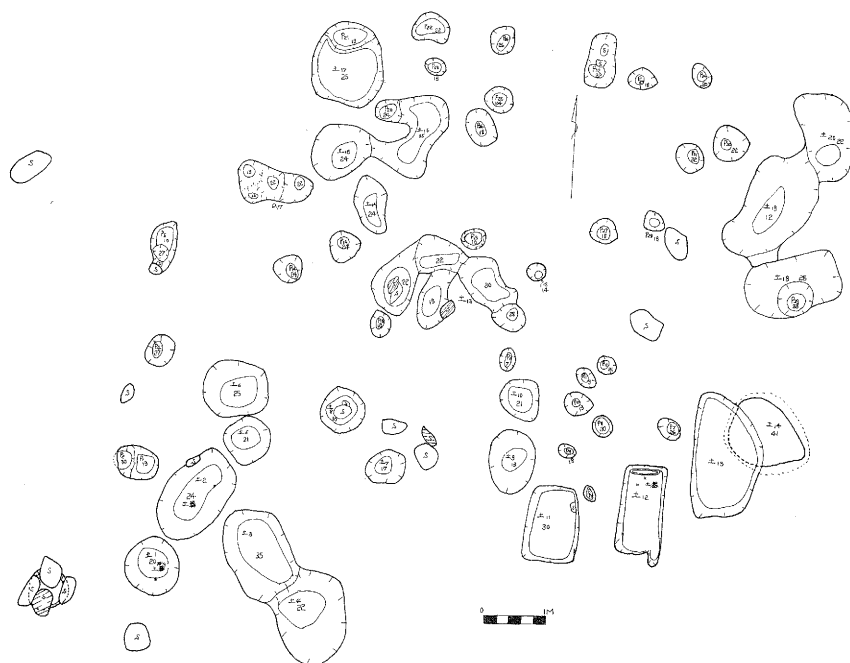


第58図 大城林第34号住居址実測図(S=1/80)

33) 土壌 (第59図, 写真29-99ページ)

土壌的性格を持つものと考えられるものが集中して20基確認された。第59図がその全体図であるが、土壌とともに無数の小ピットが発見されている。

ところでこの小ピットをみると3グループに大別できる。土壌6の北P₄, P₅, P₁₄, P₁₅, P₁₆の一群,



第59図 大城林 土壌群実測図 (S=1/120)

土壌9, 10の東P₆₋₁₃の一群。最後は土壌15~17と土壌18~20の中間にサークルを描く一群である。

このように小ピットが整然とではないが、円を描くのは、何らかの永久的ではないにしろ構造物があったことがうかがわれる。

以下内部より埋設されたと思われる土器を出土した土壌について遺構と遺物を述べることにする。

(イ)土壌1 (第61図)

大きさ南北1m, 東西0.9mのほぼ円形のプランを呈す。底部は舟底状である。土壌ほぼ中央より第61図-1の小形深鉢が立って出土した。頂を4個持ち波状の口縁を示す。胴部はくびれて口縁部はく字状に内屈する。文様は頸部と胴半部を横走る浮隆線によって3分される。口縁部は頂き部にU字文を配して、それをつなぐかのように円弧文が走り、更に沈線が内部を並走する。胴上半部は2本の浮線を縦につないで器面を4分し、区角内はX字文が連結する。浮線のわきにはそれと並行する沈線が施される。空白部は平行沈線やく字文がみられる。

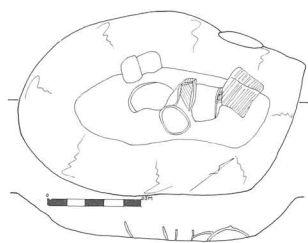
所属時期は曾利期初頭に位置する。

(福沢正陽)

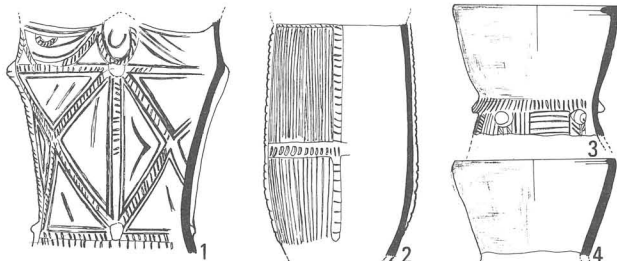
(ロ)土壌2 (第60, 61図, 写真30)

土壌1の北東に隣接して発見されたものである。プランは楕円形を呈し長径1.6m, 短径1mの規模を持つ。底は舟底状をなす。

内部より第61図-2, 3, 4が出土した。第60図はその出土状態である。それからすると各土器を壊して意識的に埋設されたことがうかがわれる。



第60図 土壙2 土器出土状態(S=1/40)



第61図 土壙1, 2 土器出土土器 (1/6)

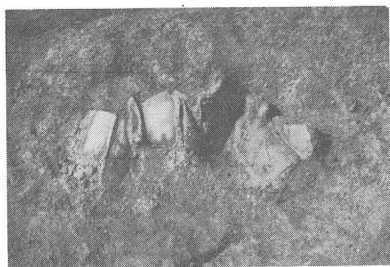


写真30 土壙2 遺物出土状態

第61図-2は小形の筒形土器で口縁部と底部を欠く。口縁部は3, 4のようにラッパ状を呈すると思われる。胴部文様は頸部と胴半部に横走る刻みを持つ粘土紐とそれに直交するやはり粘土紐を4本配し、方形の区角を作出し内部は縦の平行細沈線で埋める。

曾利期初頭に比定でき得る。

3, 4は小形深鉢の口縁部分でラッパ状に開き口唇内部は隆帯がめぐらされ受け口状を呈す。文様は口縁部にはまったく施文されず, 3の様に頸部以下に施文される。2同

(吉沢文夫)

様曾利期初頭に位置する。

(イ)土壙12 (第62, 63図, 写真31, 32)

土壙群の南東部に発見されたもので, 西に土壙11, 東に土壙13があり, ほぼ並列している。

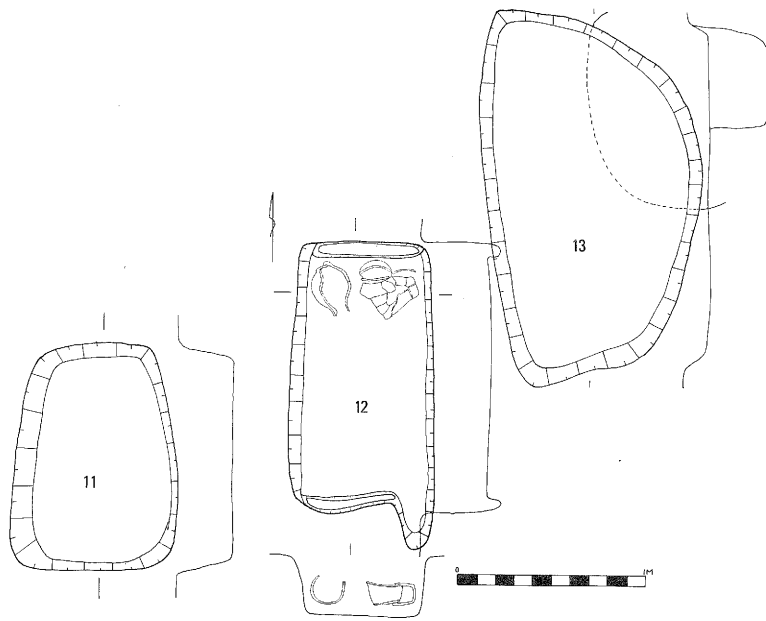
プランは長方形をなし南東部は切れ込み部を持つ。主軸はほぼ南北を示し, 大きさは南北 1.4m 東西0.75mで南側は若干幅が広がる。壁は直壁に近くローム面から35cmで底に達し, 底は平坦である。特別踏み固めたような痕跡はない, 北と南の端には深さ10cmほどの溝がみられる。木片などは検出されなかったが組み合わせ木棺の可能性もある。

北側より浅鉢と壺形土器(第63図)が出土している。第62図がその出土状態である。第63図の3の壺形土器の胴部を半分欠いて横に置き, 更に2の浅鉢の一部を1の中に入れ二重にし, やはり横倒しにし, その北に3の欠いた胴部分を置いている。このような状態から意識的に壊して埋設したことは十分考えられる。

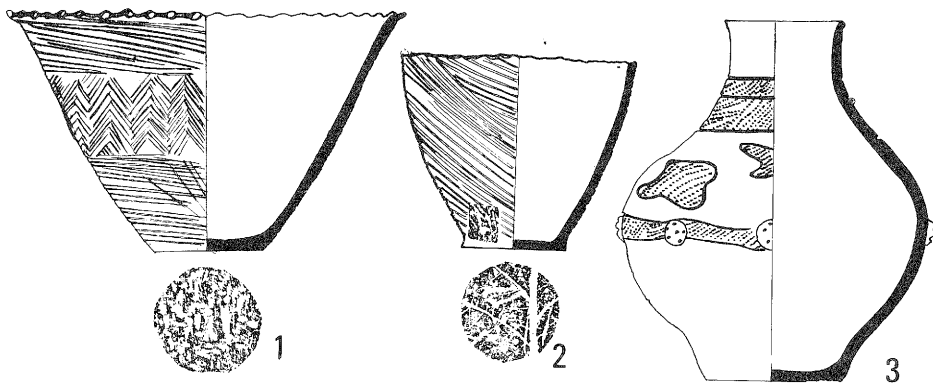
次に出土土器についてであるが共に復元したもので2, 3には欠損部はほとんどないが1は約2割ほど欠損している。

1は底部から口縁にかけて大きく広がり, 口縁部は底部の約4倍の口径を持つ。口唇はわずかに外反し, 連続指圧痕が施される。胎土中には石英粒を多量に含み, 器面調整はあまり良くない。器内外面ともあばた状に剥落している。

文様は竹管状器具による条痕文が口縁部と胴下半部は横あるいは斜めに走り, その間は綾杉状に施される。底部は網代底である。



第62図 大城林土壙11, 12, 13実測図 (S=1/40)



第63図 大城林土壙12出土土器 (1/4)

2はやはり浅鉢で口縁部にかけてゆるやかなカーブを描いて広がり、口径は底径の約3倍を測る。口唇には1同様連続指圧痕がみられる。胎土中に石英粒を多量に含み、器面調整があまり良くないためか全体に粗雑な感をうける。器内外面とも口縁部付近を中心として炭化物の付着がかなりみられる。底部は本葉底である。

器表面底部より若干上に靫の圧痕がある。圧痕は斜めに深くついている。計測の結果は長さ 6.3 mm, 幅 4.1mm, 長幅比1.54である*1

文様は竹管状器具による条痕が斜走する。

3は壺形土器で太く短い口頸部は立ちあがって口唇部にてわずかにそる。胴部は大きく張って胴中央にて最大径を持つ。

文様は沈線によって帯状文がつくられ、内部を縄文がうめる。帯状文は頸部に3条の平行沈線によってつくられるもの、雲形状のもの、胴中央にみられる波状ぎみのものとがある。磨消縄文手法はみられない。胴中央部波状ぎみの帯状文には8個の細い棒の先端を使用した刺突を持つ円形粘土板が等間隔に貼付される。

さてこれらの土器の時期についてであるが、これらの3個の土器は出土状態からして、一括土器として良いであろう。

器形は壺形土器と浅鉢形土器とが知られる。浅鉢形土器は口唇部に連続指頭痕を持ち、竹管状の条痕(線)を持つ。壺形土器は沈線および縄文を持つものである。このような文様構成を示す土器群を他に類例を求め得れば、岡谷市庄ノ畑遺跡の上層より出土した庄ノ畑式土器^{※2}以外にはないであろう。

庄ノ畑式土器は林里式土器に続くものとして、濃尾平野の西志賀Ⅱ式^{※3}に比定されている。東海地方では条痕文系土器は発達して丸子式土器を生んでいる。丸子式土器^{※4}と庄ノ畑式土器とは非常に類似した文様構成を持つもので、丸子式・庄ノ畑式土器類似の土器群は関東地方までその分布をみせている。北信地方においては伊勢宮式土器^{※5}なる名称が与えられている。

庄ノ畑式土器を基盤として中期の土器が発展をみせる。庄ノ畑式土器以降条痕文系土器群は櫛歯状器具による施文方法を取りながらも中期北原式土器^{※6}へと引きつがれて行く。

土壙11, 13も形態は12に類似するものとして、ほぼ同期のものと考えたい。内部よりの出土遺物はまったくみられない。

※1 佐藤敏也 「日本の古代米」 考古学選書1 雄山閣 昭和46年の計測方法による

※2 「岡谷市誌上巻」 岡谷市役所 昭和48年

※3 杉原荘介 「尾張西志賀遺跡調査概報」 考古学集刊第1巻 昭和47年

※4 杉原荘介 「駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に就いて」 考古学集刊第1巻 昭和47年 (第3冊)

※5 磯崎正彦 「長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古代弥生式土器」 信濃第11巻第6号 昭和34年

※6 「北原遺跡」 長野県高森町教育委員会 昭和47年

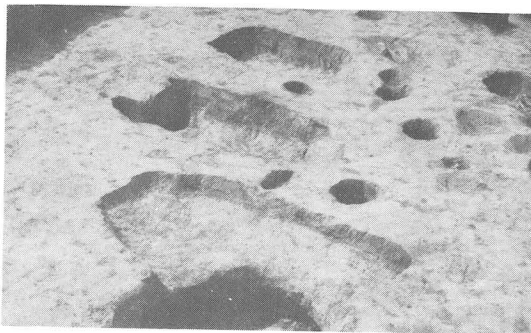


写真31 土壙11, 12, 13



写真32 土壙12土器出土状態

34) ピット (小竪穴)

当遺跡よりピットが3個発見されている。

(イ) ピット1 (第64図)

第3号住居址と第6号住居址のほぼ中間に発見されたものである。

プランは楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.5mを測る。壁は斜壁をなし、底は東に傾斜する。中央部に石が置かれているほかはまったく施設を持たない。遺物は縄文時代中期の土器片がわずかに出土している。(田中清文)

(ロ) ピット2 (第11, 65図)

第5号住居址の炉址の一部から東にかけて発見されたもので、上部は貼り床され住居址の床面となっている。

プランは長楕円形を呈し、長径1.7m、短径0.85mである。底は平らで壁は若干ふくらみを持つ。

覆土はローム土と黒色土の混合土とからなりいわゆる自然堆積の状態は示していない。

底に横倒しになって底部を欠く深鉢が2個体(第65図)完形状態で発見された。

1, 2とも器形はくびれた頸部から口縁は大きく開き、口唇が強く内屈するいわゆるキャリパー状を呈し、口縁部は素文となる。

1は2本の粘土紐によるH字状懸垂文や渦文を持たせた懸垂状文を交互に配し、それらを頸部でつなぎ内部は平行沈線が縦に走って埋める。隆線のわきは連続コ字文手法がみられる。

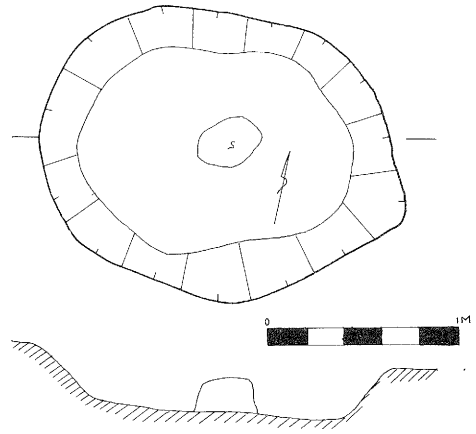
2は頸部に蛇行文を1条横走させ、そのわきには沈線が走る。胴部は粘土紐を組み合わせたような逆し字文を4個配してその間を縦の平行沈線で埋める。

ともに曾利I式に比定できる。

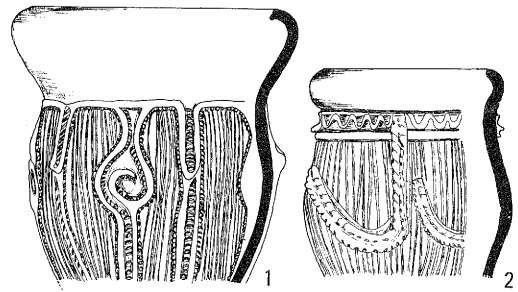
さて、第5号住居址の項でもふれたがピットとの複合関係について述べたい。

両遺構の土器であるが、第5号住居址のものとピット2のそれとを比較すると同時期ないし、先行することはあっても第5号住居址の土器が後行することはまったく考えられない。さらに楯形文を持つ土器(第12図-1)は床面上わずかの所から出土しており、住居址に所属すると考えるのが当然であり、使用開始時がピット2より古くなることは明らかである。

ここで問題となるのは、遺物の先後関係と第5号住居址の床面及び炉がピットの上に存在するという矛盾である。



第64図 大城林ピット1実測図(S=1/40)

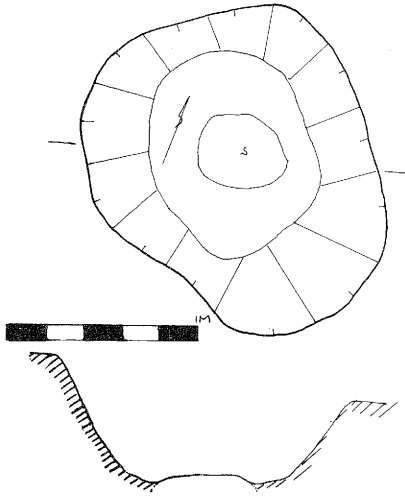


第65図 大城林ピット2出土土器(1/6)

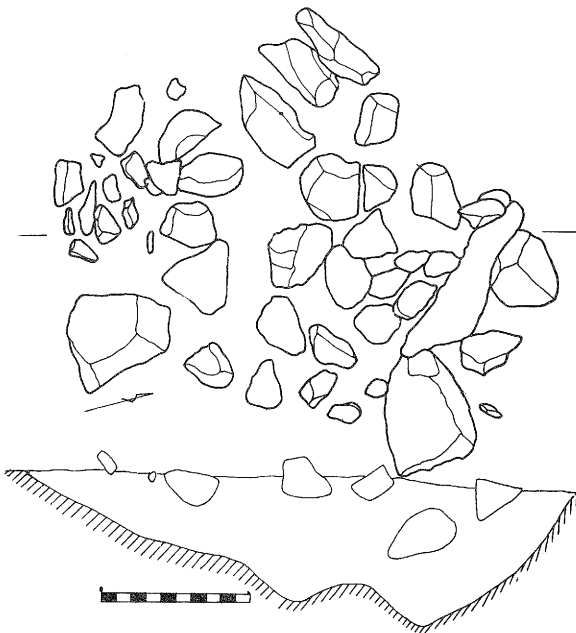
そこで考えられることとしてピットの特異性をあげたい。

ピット内の埋没土の状態が自然的でないことからして意識的に埋設されたことは確かである。それ故にわざわざ壊したものを復元するという作業が行われたと考えることもそれほど無理なことではないと思われる。いずれにしても今後の研究に待ちたい。

(吉村 進)



第66図 大城林ピット3実測図 (S=1/40)



第67図 大城林配石1実測図 (S=1/10)

(ハ) ピット3 (第66図)

第9号住居址の西側に発見された。プランは不整形で、径1.5m南側は張り出す。壁は傾斜を持ち、底は自然石が露出するがほぼ平坦である。

内部より縄文時代中期土器片が数片出土している。

(吉沢文夫)

35) 配石址 (集石址)

第1号住居址を中心として4基の配石が発見された。配石より遺物の出土はなく、付近から縄文時代中期の土器片が出土している。

なお、配石2は第1号住居址に付属するものとして報告してあるのでここでは省くことにする。

(イ) 配石1 (第67図)

第1号住居址の西3mに発見されたものである。

径0.6mの範囲内に頭大からこぶし大の自然石が集中してみられる。特別石を組み合わせた状態はみられず、集石とすべきかも知れない。

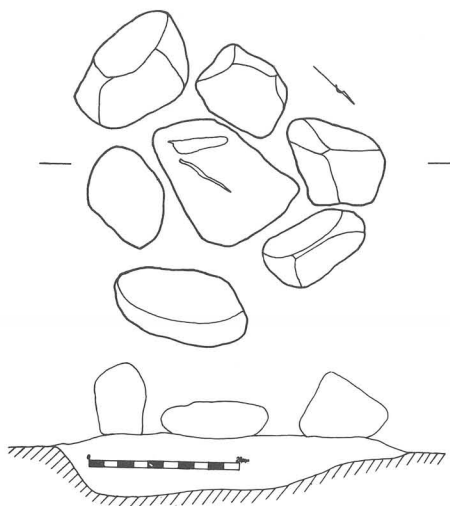
配石の下部は全体が落ち込み、黒色土が充満している。落ち込みはほぼ円形で径0.75m、深さは最高15cmを測り、底は舟底状をなす。

(ロ) 配石3 (第68図、写真33)

第1号住居址の東北東6mに位置する。配石はロームを掘り込み、炭化粒を含んだ黒色土を盛りあげてその上に作られている。掘り込みは西側で6cmを測るが東

するに従い浅くなる。

配石は盛りあがった黒色土を基盤として中央に偏平な方形の石を置き、その周囲に頭大位の石を6個円形に立てて作るものである。全体の形状はほぼ円形をなし径約40cmを測る。



第68図 大城林配石 3 実測図 (S=1/10)



写真33 配石 3



写真34 配石 4

(ハ) 配石 4 (第69図, 写真34)

第1号住居址の東約4m, 配石3の南西約3mに位置する。配石下部には落ち込みはなくロームを基底として径80cm位の間に自然石の集石がみられる。1同様集石址とすべきかも知れない。

(ニ) 配石 5 (第70図)

第1号住居址の南西約10mに位置する。ローム層を基底とし東側は若干下がる。配石は全体にまとまりを欠き、西と東のブロックに分けることができる。1, 4同様集石的性格を持つ。

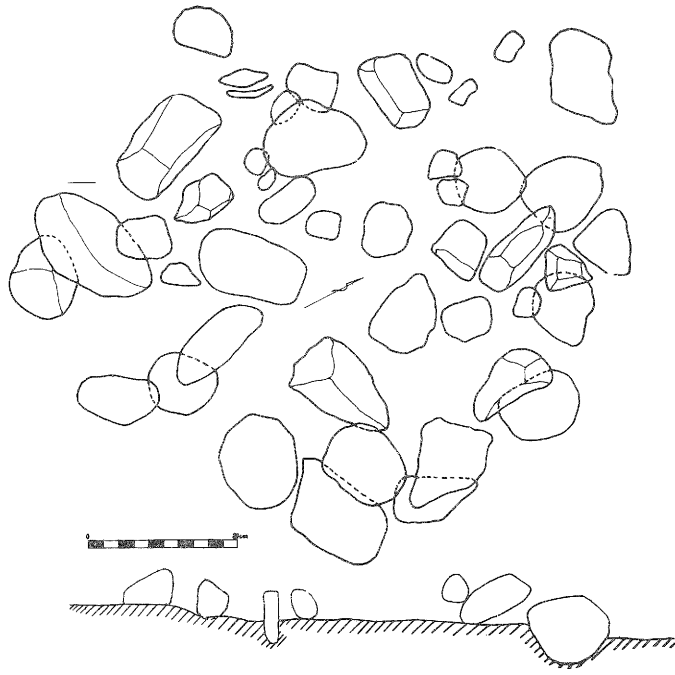
36) 特殊遺構

土器が単独に出土する遺構が縄文, 弥生時代を通じて5基発見された。

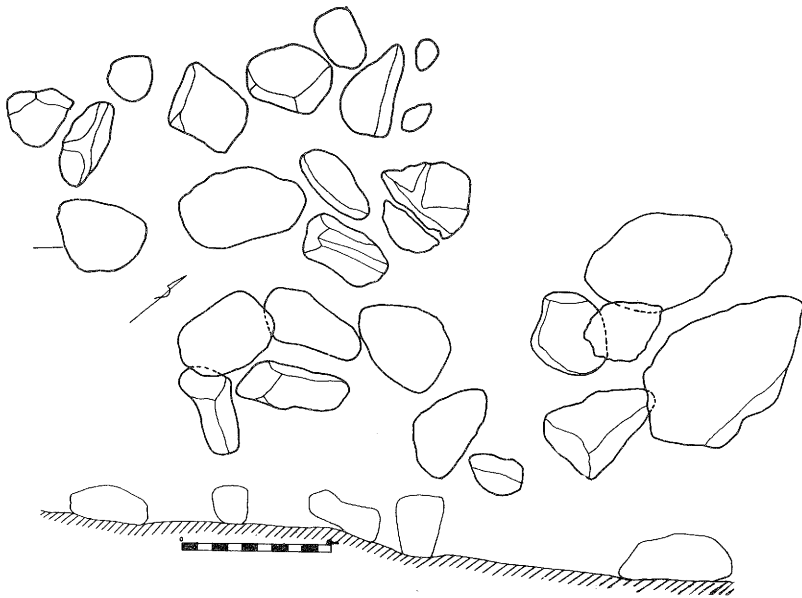
(イ) 特殊遺構 1 (第71図, 写真35)

第19号住居址の西10mの所に発見されたものである。道路敷面下15cm黒色土を掘り込んで第71図の甕形土器(底部を欠く)が口縁を上にして出土している(写真35)。その付近を調査するも、ピット, 焼土などの発見はみられなかった。

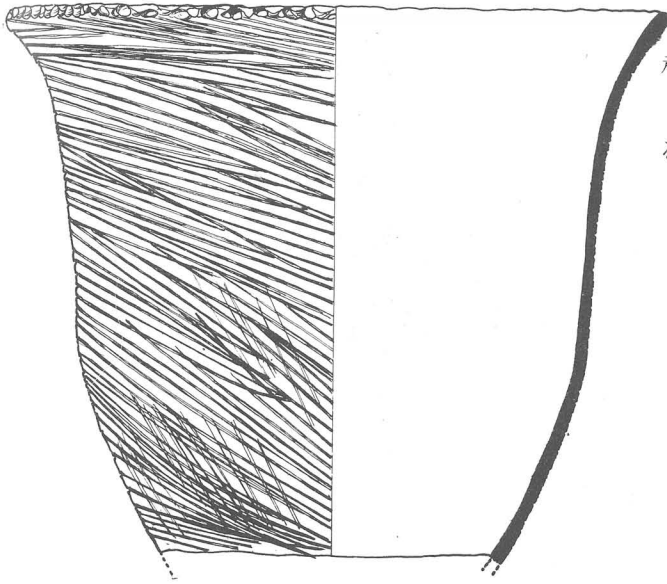
出土土器は底部を欠く甕形土器で一担胴部で張り, ゆるかやに反って口縁部は強く外反し最大径



第69図 大城林配石 4 実測図 (S=1/10)



第70図 大城林配石 5 実測図 (S=1/10)



第71図 大城林特殊遺構1 出土土器(1/4)

を測る。口唇には連続指圧痕がみられる。
 文様は櫛歯状器具による条痕文が器面を斜走する。外面は炭化物が付着し黒色をなす。
 焼成が器面調整ともに良く固く焼かれている。
 続水神平式庄の畑式土器に位置づけられる。

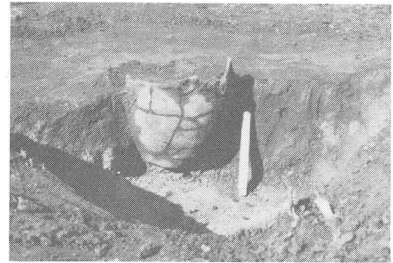
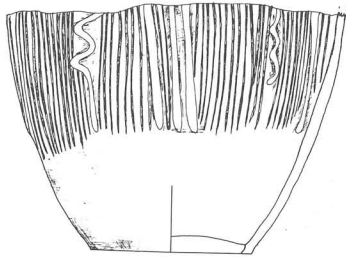


写真35 特殊遺構1 土器出土状態



第72図 大城林特殊遺構2 出土土器(S=1/4)

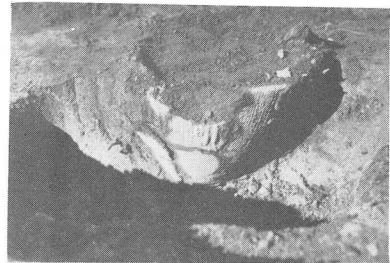


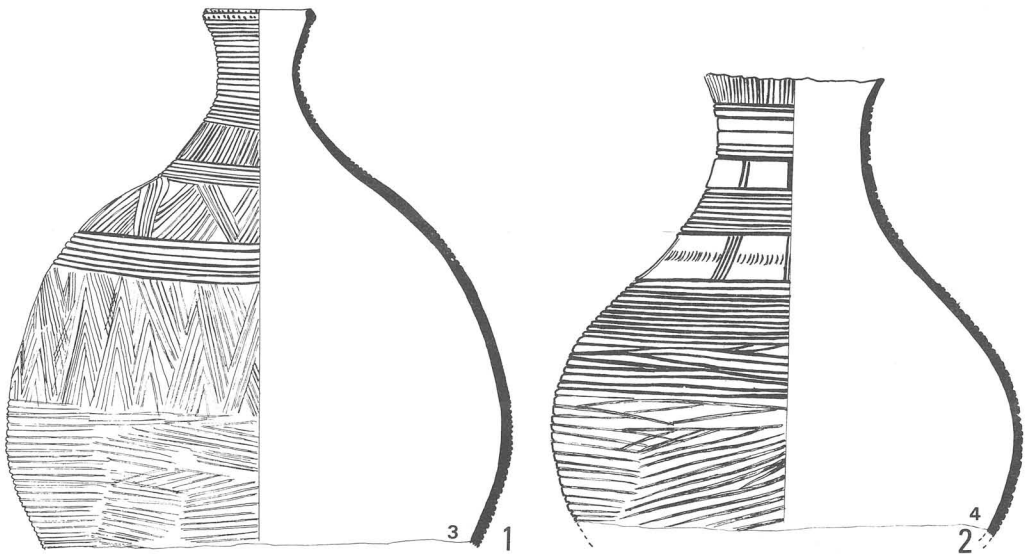
写真36 特殊遺構2 土器出土状態

(ロ) 特殊遺構2 (第72図, 写真36)

特殊遺構1の南約4mほどの所にあり、ロームに深鉢の胴下半部が埋め込まれたものである。これに付随する施設等は見られない。土器は埋設に伴い胴上半部より上を欠かれたものと思われる。しかし打撃痕は見られないので、製作時における粘土のつなぎ目を切り離したと思われる。わりに薄手に固くチョコレート色に焼かれている。

器面を4分して3条の粘土紐を1組みとした懸垂文を施し、その間にはやはり粘土紐による蛇行懸垂文を走らす。空白部は縦位の平行沈線が走る。

縄文時代中期曾利I式に位置づけられる。



第73図 大城林特殊遺構3, 4出土土器(1/4)

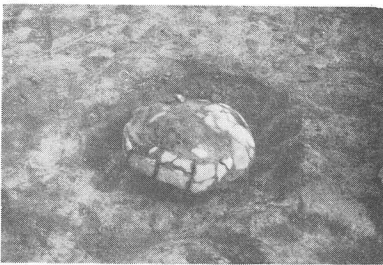


写真37 特殊遺構3土器出土状態

(イ) 特殊遺構3 (第73図, 写真37)

第25号と第29号住居址の間に発見されたものである。

ロームを掘り込んだ径30cmほどの浅いピットに壺(第73図-3)が口縁を上にしてつぶれた状態で出土した。

復元のさい丹念にさがしたが底部の破片はみあたらなかった。埋設時にすでに欠損していたと考えられる。

短く細い口頸部は外反し口唇部はく字状に内屈し段を有する。胴部は大きく張り胴中央部にて最大径を持つ。

胎土中には石英粒を多く含む。器面調整は全面にわたり丹念に行われているが、内部は焼成時の剥落のため石英粒が露出するところもある。全体に黄褐色に明るく焼かれている。

文様は竹管状器具によるものである。横走直線文を口頸部と胴上半部に間をおいて3段にめぐらし、その間は縦位あるいは綾杉状に沈線が施される。胴下半部は条線が横走する。口唇には2段にわたり竹ペン状の連続刺突文がめぐる。

土壙の出土土器同様庄の畑式土器に比定でき得る。

(ニ) 特殊遺構4 (第73図)

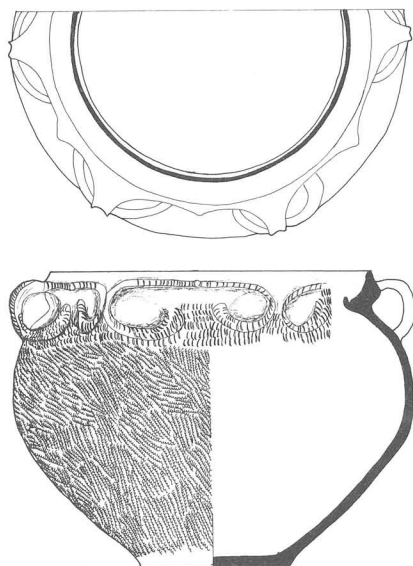
特殊遺構3の東約2mの所から同じ様な状態で出土している。

出土した壺(第73図-2)は図上復元によるもので半分ほどしかまわらない。口頸部は太く短くて外反する。口唇部の状態は磨滅しており不明である。1同様胴部は大きく張り最大径が胴中央部に位置する。

胎土にはやはり石英粒を含む。黒褐色に固く焼かれている。

文様はへら描き文による直線文を主体とするものである。口唇直下は直線文を縦位に施す。その下に横走集合直線文を3段間をおいてめぐらし、その間には間隔をおいて2条ないし4条の直線文が縦位に走る。胴下半部はへら描き文が横走、斜走する。

1 同様弥生時代庄ノ畑式に位置づけられる。



第74図 大城林特殊遺構5 出土土器(1/6)

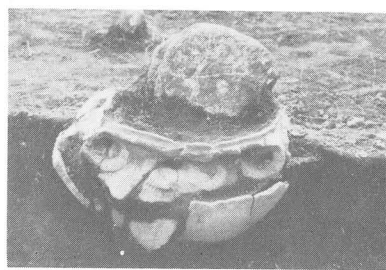


写真38 特殊遺構5 土器出土状態

(ホ) 特殊遺構5 (第74図, 写真38)

第26号住居址の南東2m, 第28号住居址の西約5mの所に発見されたものである。

胴下半部をロームに埋め込んで直立して浅鉢(第74図)が出土した。上部には石が入っている。

胴部は大きく張り上半部に最大径が来る。口頸部はく字状に外反し口縁部は全体に肥厚するも、口唇はそぎ状を呈す。口縁内部は隆帯をめぐらし受け口状になる。

胎土はち密で器面調整も良く、黄褐色に固く焼かれる。

口頸部にX字状の中空な把手を上部で連結させて飾り、隆帯上やそのわきには連続爪形文を施す。胴部は縄文が器面を一杯に埋める。

あまり類例の知られない土器である。口頸部にみられる連続爪形文手法は遠く瀬戸内地方に盛行する船元I式土器^{*1}を想起させる。縄文時代中期中葉に比定できるが確かなところはない。今後の研究に待ちたい。

※1 「里木貝塚」 倉敷考古館研究集報第7号
倉敷考古館 昭和46年

37) 列石址 (第18図)

第9号住居址の北に発見された。

自然石を1.3mほどの長さに0.5mの間隔をおいて2列に並べたものである。焼土はまったく検出されなかった。

列石の南端と東側にピットが2個ある。P₁₅は径80cmほどの不整形円で深さは1mを測る。P₁₆は内部にピットを持つもので上段は15cm, 下段は25cmの深さを測る。ともに列石に伴うものと思われる。遺物の出土はまったくない。時期, 性格とも不明である。

38) 溝状遺構

第8号住の東に幅2m、深さ1.5mのV字形の溝が発見された。長さ4mほどしか調査はできずに終わった。古老によると南北に通じる堀らしきものがあったとのことである。それを裏付けるものとして上穂沢川に面する断崖に石をつめこんだ跡を確認している。それがはたして赤羽根川まで通じていたかは断面調査ではわからなかった。

底には若干砂の堆積がみられたが水の流れた形跡はない。

大城なる地名からして城、館などの存在が考えられ、それに伴う堀ではないかと考える人もある。しかし、調査中にはそれを裏付ける中世陶器の出土はまったくみられず確証には至っていない。

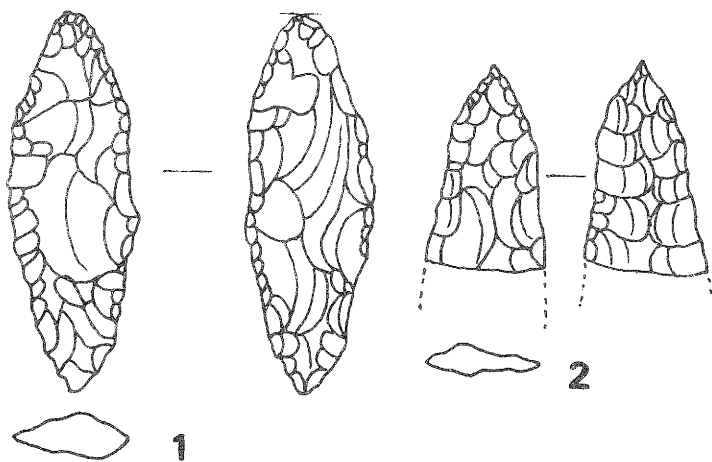
(吉村 進)

39) 先土器時代の遺物 (第75図)

第29号住居址上層埋め土中より、発見されたもので、共に黒耀石製の尖頭器である。いわゆる葉状石槍で1は菱形に近い木の葉形に整えられ表裏とも薄い剝離を丹念にくり返して調整されておる。

2は欠損品である。やはり木の葉状を呈すと思われる。調整は丹念である。

グランド西側部分に2×2mのグリッドを5ヶ設定しローム層を1m掘り下げるも遺物はまったく発見できなかった。



第75図 先土器時代の遺物 (1/1)

(吉村 進)

4. まとめ

大城林遺跡の全体からすれば5分の1ほどの限定された区域の発掘調査であったが、予想外の成果を得ることができた。詳しい考察は後にゆずるとして調査の過程において明らかとなった問題点を簡単に記して参考に資したい。

まず第1に出土した土器についてであるが、縄文時代中期、弥生時代中期、平安時代のものが知られている。

今回の調査で出土した土器中一番古い時期に属するものは藤内期のものである。区域が限定されはっきりしたことは言えないが、過去の採集土器にも藤内期より古いものは知られていないので、当遺跡における最も古い土器は藤内期のものと思われる。

縄文時代の土器は藤内期から曾利Ⅲ式までのものが出土している。

中期の土器の編年については当地方における地域の独自の編年が樹立されておらず、井戸尻編年を対比し採用する形で処理されてきた。諏訪地方に近いといっても上伊那南部、下伊那地方の土器は諏訪地方の土器と様相を異にしていることが最近の大規模な発掘調査によって明らかになってきている。^{※1}地域の土器の検討から編年という作業を行い、それを周辺地域の編年とどう対比するかを追って更にそれを広げて行く方法を採用しての編年研究が早急になされねばならないことを痛感する。

藤内、井戸尻期の土器についてであるが、八ヶ岳山麓とさほど違いはみられない。第31号住居址で指摘した連続コ字文手法は曾利期まで続くことが知られた。形式手法上の残存をうかがうことができるが、当地方における特徴なのか、諏訪地方にもみられる一般的現象かははっきりしない。完形品の実測図をみるかぎりではあまり顕著ではないようである。

これに続くものは加曾利E式に対比されるものである。諏訪地方においては対比されるものとして曾利編年がある。八ヶ岳山麓では加曾利Eの要素を持つものはあまり出土が知られていない。それ故、当地方においては曾利式編年は対比資料であってそのものでない。両者の諸要素が入り混ってこの時期の土器群を形成している。

曾利Ⅰ式期においては八ヶ岳山麓地帯そのものの出土がみられる。しかしそれ以後においてはあまり顕著でない。曾利Ⅱ式期土器は胴部に渦文をつないだ唐草文が盛行する。松本平^{※2}や伊那地方においては一般的に知られるものである。諏訪地方には少ない土器で八ヶ岳山麓には殊に少ない傾向をみせている。海戸遺跡ではこの土器が主体をなしており八ヶ岳山麓との対比をみせていて、石器相にもその対比がみられると指摘している。^{※3}曾利期を通じて多量に出土する土器に縄文を地文とするものがある。加曾利E式そのものでないにしてもほぼ比定できるものである。曾利Ⅰ式期においてはあまり知られないが、曾利Ⅱ式期になるとその量は増大してくる。加曾利E式文化の伊那谷における様相を知る資料となる。諏訪地方においては曾利Ⅰ式から伴出することが知られている^{※4}が量的にはあまり多くないようである。経路として当然諏訪地方を考えねばならず、遺物の報告に完形品が主体をなし、破片の紹介があまりみられないことから、報告もれの中にはある程度の量があるのではないだろうか。縄文を地文とする土器は飯島町、松川町、高森町の山麓遺跡^{※5}などにおいても盛行している。上伊那南部から下伊那地方の当時期の特徴をなすものである。これらの中に横走する文様が施されたものがみられる。当遺跡ではあまり知られないが、南下するに従い増えてくる。東海地方の咲畑式の影響を考慮する必要がある。

前後するが、特殊遺構5より発見された土器であるが類例をあまり知らない。口頸部に発達する爪形文の手法は瀬戸内地方に発達する船元Ⅰ式土器に求められる。月見松遺跡からも船元Ⅰ式類似土器の出土が知られている。^{※6}特異な土器として注目したい。

次に弥生式土器についてである。出土した量は少ないが、ほぼ完形の形で発見されている。

条痕文を持つ一群の土器水神平系土器・庄ノ畑式に類似する土器がある。水神平系土器群は赤穂地区では断片的であるが古くから採集されていた。昭和46年行われた養命酒工場用地内遺跡の発掘調査では特殊な遺構を伴って出土し、^{※7}立地条件等今後の研究が待たれていたところ、昭和47年に行われた当遺跡を初めとする一連の発掘調査の結果、北方Ⅰ、湯原遺跡から条痕文を有す土器が多量に

発見され、赤穂地区における条痕文系土器の様相をある程度理解できることとなった。北方Ⅰ，湯原遺跡資料とあわせて今後の問題である。

ここで指摘しておきたいことは立地と出土状態である。当遺跡は先に記したように段丘突端にあり、小高い丘状をなしていること、土器が完形に近い形で単独に発見されたことである。台地の占有が日常生活のためのものでなく、埋設（墓としての）のためであったと考えたい。北方遺跡や湯原遺跡と立地条件が対比されることから考えられることである。

これに続く土器の出土は市内ではほとんどない。下伊那地方においては弥生時代中期の良好の資料を出す遺跡があるが上伊那地方では少なくわずかに数遺跡にとどまっている。このことは遺跡がないことを決して示すものでなく今後の調査いかんとりわけ立地条件を考えての調査がなされれば資料の増加は間違いないであろう。赤穂地区の条痕文系土器の資料増加が先に記したような状態で行われてきたことを考えると、今後我々の調査も低湿地をひかえた地点への探求の必要を感じる。

土師器についてであるが、段丘の突端に1基の住居址が確認されたのみで詳しいことはわからない。出土土師器は真間式に比定されるであろう。わずかながら須恵器の伴出がみられた。器種は甕形のみである。

土師器を伴う住居址は、上穂地区（国道153号線より西と便宜的にする）では羽場下遺跡の1例^{※8}、女体北遺跡の1例^{※9}、養命酒工場用地内遺跡の2例^{※10}、辻沢地籍の1例^{※11}と合わせて6例^{※12}が知られている。

この数は辻沢、大徳原を含む福岡地区を除いてみるといかに少ないかが知れる。そしてこれは如来寺川から大田切川までのほぼ全域にわたる調査結果である^{※13}。大城林遺跡や羽場下遺跡は調査区域が限定されたため若干の数の増加が考えられても大規模な集落として存在したことは考えられない。それに反し、赤須地区（国道153号線より東とする）は美女ヶ森付近^{※14}、原垣外地籍^{※15}に大規模な集落が予想され、更に大城林、羽場下遺跡の北を流れる上穂沢川下流上赤須中通り遺跡^{※16}などの遺跡が知られている。このような対比関係は遺跡の立地問題、更に赤穂地区の古代、中世の歴史を解明するうえで重要視すべきことと思う。

第2に住居址であるがここでは縄文時代中期の住居址についてだけふれることとする。

住居址は31基を確認することができた。これは前述するように遺跡の一部の調査の結果である。道路両側の田の開田時には、遺物が多量に出土しており、当然住居址の存在は予想される。更にグラウンドの南側部分にもプランははっきりしないが10基前後の住居址があったことを友野が確認している。これからすると大城林遺跡の住居址は50基を下らないものと推定できる。

全体にゆるやかな上穂沢川に面した北傾斜に住居址は造られ、環状集落をなすと思われる。環状集落の場合、住居址に囲まれた中央部は広場として使用されていたことが知られている。ところが大城林遺跡では広場と考えられる中央に土壙群がみられる。このような形態を持つ集落としては鳴尾天白^{※17}、尾越^{※18}、山溝^{※19}、和田西^{※20}、海戸^{※22}遺跡がある。これについて桐原健氏から問題提起がなされており、今後の研究課題である。

住居址の時間別の分布状態—集落構造—であるが大変難しい問題である。

住居址の使用開始時と廃絶時の時間差における土器形式の持つ意味、継続する生活の中ではたし

土器の形式の区分をどこにおくか。自身の土器形式の認識の甘さ、力不足とともに強く疑問を持つところである。

今後の研究に待たしていただいて、全体的な流れの中で把握できたことにふれてみたい。

竪穴住居址のプランについてであるが、楕円形、円形(不整円形も含む)、隅丸方形、胴張り方形、五角形のもの認められる。藤内期から井戸尻期においては楕円形を示すものが、曾利Ⅱ～Ⅲ式になると隅丸方形を示すものが多くなる傾向がみられる。バラエティーにとんだ形態を持ちながらも、円形を基調として隅丸方形に移行する傾向をうかがうことができる。

炉については形式の上から焼土のみの地床炉・埋甕炉・石囲い炉とに分類できる。

地床炉は第4号、12号、22号、26号、30号、34号住居址が該当する。数は少ないが全時期を通じてみられる。埋甕炉は少なく第11号住居址のみである。曾利期においては姿を消し、石囲い炉の内部に底部などを敷いたり、埋め込んだ形のものに変化して行く。石囲い炉は中期の基調をなすもので、当然数の上からも多きを占めることは論を待たないが、その間にあっても変化はみられる。第31号住居址例、第21号住居址例のように井戸尻期においては小形で掘り込みもあまり深くない特徴がみられる。曾利期にはいると徐々に大形になるのが一般的で第29号住居址例のような大形石囲い炉で掘り込みも深くなるという方向への移行がみられ、炉としての常識的な在り方を示している。

第10、11、26、34号住居址は炉や柱穴を持つところから平地住居址としてまとめて述べてきたが、特殊な住居址として別に取り出して考える必要があるのではないだろうか。たとえば集落を構成する単位集団の共同作業場の機能を持つと考えるのは早計であろうか。同時期に属する第26号と第15号、18号と25号との関係を考えてとあながち無理なことではないと思われる。今後類例を求め、住居址の入口の問題など関連する各方面からのアプローチが必要である。

これらの住居址同様、注目すべきものに第2号、9号住居址がある。第2号住居址は内部にまったく施設を持たない。第9号住居址は柱穴はあるも炉と考えるべきものがなく、共に遺物は少ない。住居址としてある程度の期間存続したと考えるには十分でない。

最後に住居址における埋甕であるが、第1号(逆位底部穿孔)、第17号(正位胴下半部以下)、第28号(正位底部欠損)の3例が発見されている。

共に曾利期に属するものである。3例とも入口にあたる位置に埋設されている。

第3に特殊遺構について述べたい。縄文時代中期のもの(2, 5)と弥生時代中期に属するもの(1, 3, 4)がある。

縄文時代中期のこのような例は意外と少なく、藤内遺跡、和田西遺跡^{*24}、海戸遺跡^{*25}例位である。ここ数年の全国的な緊急発掘調査の増大によって資料も増えていることと思うが、その点は指摘していただくとして先に進みたい。

海戸遺跡例はローム層を掘り込んで大深鉢形土器を逆に埋め込んだもので若干他と趣を異にする。

共に当遺跡同様、住居址等とみられる遺構は全く認められていない。藤内遺跡例については、報告者の武藤雄六氏は、一一種の祭祀址であるのか、竪穴を欠く夏期間の平地住居址の一種か、それとも墳墓様遺構なのか、いまだだちにその帰趨を明らかにすることは困難である一としている。

更に海戸遺跡例については報告者である宮坂光昭氏は一埋葬といわれる施設は、曾利期に盛行するが……………曾利期初期の土器で、住居址外のある場所に施設されたこの大埋葬は、おそらく埋葬の初現であろう。そして、それがどういう意味を持つ施設であるかということは、現在積極的には述べられないが、非実用的なものであるとはいえるであろう。—と述べている。

大城林遺跡についてみると、2は曾利Ⅰ式、5は船元Ⅰ式類似土器で、当地方における埋葬の盛行する時期より早いことは確かである。

5の例の特徴としてまず第1に土器の特異性であり。第2に第30号、31号住居址の中間に位置すること（これは5の出土土器が住居址と同時期に属すると仮定してであるが）である。2についてみれば同時期の住居址に囲まれていることをあげたい。これらから非実用的ではあるが、集落における重要な位置を持つことは確かであろう。

類似するものとしてピット2の例や土壙1、2の例がある。このような例は非常に多く、実際土壙あるいは浅いピットからの出土例と区別しがたい。はたしてこれらの例と特殊遺構として取りあげたものの性格に違いがあるのか、今後の問題である。

弥生時代のものは甕棺、壺棺の用途を持つものと思われる。

第4に配石についてであるが、4基発見されている。集石状のもの（1、4、5）とそうでないもの（3）とに区別できる。いずれも伴出する遺物はない。

このような配石の例は各地で発見されている。近くでは飯島町山溝遺跡例^{*26}がある。やはり遺物は伴っていない。立沢・坪平遺跡、中道尾根遺跡例は縄文後期の構築で石組み墳墓と思われる^{*27}として

いる。

後述する北方Ⅰ遺跡にも発見されている。

配石の所属時期であるが遺物の伴出がなく決定できかねるが、周囲にみられる遺物から縄文時代中期と考えたい。配石の分布は第1号住居址の周囲にみられ、その住居址に室内祭壇を持つことを考えると無視できない問題があると思われる。更に上穂沢川をはさんだ対岸、藤助畑遺跡より配石址が発見されている^{*28}ことも指摘しておきたい。

第5に石器の問題であるが、縄文時代中期以外の遺構からはまったく検出されていないことを最初にことわっておきたい。

石器の出土量は多く500点以上を数える。住居址に直属するものは330点である。住居址別の出土状態を表にしたものが第76図である。

打製石斧が70%強を示し、その卓越さが知られる。他のものは数量的には比較できないほどの数量であるが、横刃形石器、石匙、磨製石斧の順を示す。

石鏃の少ないことは以外であった。表採における採取の量が多いわりに住居址からの出土が少ないことは石鏃の機能とも関係するのではないか。石鏃が少ないことは月見松遺跡でも指摘されている^{*29}。八ヶ岳南麓地方においては、中期に入ると前期末葉に多かった石鏃が減少し、かわって打製石斧が爆発的に増加し、凹石もこれにともなって増加するとともに、石匙が粗製大形化する傾向がみられる^{*30}。中期前半については不明であるが、大城林遺跡と羽場下遺跡を比較すると打製石斧が石鏃^{*31}にとってかわるという同様な現象がここにおいてもみられる。

第76図 大城林住居址別石器出土表

住居址番号	種類	打製石斧	磨製石斧	石匙	石錘	石皿	凹石	乳棒状石器	横刃形石器	石鏃	スクレーパー	磨石	その他	計
1号														0
2号		1												1
3号		5 ₂		1										6
4号		8 ₅		1					1					10
5号		1	3											4
6号		9 ₇						1		1			1	12
7号		3 ₂												3
8号		3 ₃		1					1	1	2			8
9号		3 ₂												3
10号		1		1										2
11号		1	1											2
12号														0
13号		24 ₈	1	6					10					41
14号		12 ₆	1	1					2					16
15号														0
16号														0
17号		12 ₅	2						3			1		18
18号		6 ₃	1	3								1		10
19号		15 ₁₃		2										17
20号														0
21号		4 ₂	2	1				1						8
22号		5 ₁	1	1				1						8
23号		7 ₂								1				8
24号														0
25号		22 ₁₀	1	3	5				6			1		38
26号														0
27号														0
28号		18 ₈	1	1	1				2					23
29号		30 ₁₅	1	2					3					36
30号		13 ₄	2						3					18
31号		14 ₉							4					18
32号														0
33号		18 ₄				1			1					20
34号														0
計		234	17	24	6	1	0	3	36	3	2	3	1	330

(打製石斧の小文字は完形品の数である。)

石皿、凹石、磨石の少なさはいかなる理由によるものであろうか。赤穂地区でも当遺跡に限られた現象なのか、今後の問題である。

打製石斧は短冊形、揆形のもので全面に調整を加えたものと、片面に自然面を残したものとがある。当然機能の面にも違いがみられるのだろう。

石匙は黒耀石やチャートを使った小形なものは少なく、硬砂岩製の大型粗製のものが一般的である。

横刃形石器は中央道用地内遺跡の発掘において注目され、積極的な取り組みがなされてきているが、スクレーパーとか、石匙とかさまざまな機能が考えられ、いまだ結論をみていない。

石錘は6点出土し、そのうち第25号住居址より5点発見されている。石錘の機能を考えるとき、他の住居址から出土しないので使用されなかったと考えるのは疑問が残る。

追越遺跡など中央道用地内縄文中期の遺跡にみられる敲打器はあまりみられない。

乳棒状石器は先端部が敲打器状なすものと、すって平坦になったものがある。

石器の種類別の量をみてきたが、住居址毎の残存状態はどうであろうか。

第13号、25号、29号住居址のように多量に発見された住居址とまったく出土しない、ないしは出土しても少ない住居址、更にその中間に入る住居址とがある。同一遺跡の中でもきわだって多く石器を残す例はかなり知られている。住居址の廃絶に伴う一括廃棄によるものか、単位集団における分業の問題にまで及ぶのか、単なる偶然ではない。

生産用具としての石器については、まだまだ解明されねばならない問題がある。各遺跡の資料集行を行ない、同一地域における比較、更に他地域との比較へとその輪を拡げて行くべきである。海戸遺跡における石器研究はその指針をなすものである。

(吉村 進)

※1 中央道用地内遺跡—追越、鳴尾天白、山溝、増野新切—などがある。

※2 樋口昇一、小松虔 「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報」 信濃16—4 昭和39年

※3 「海戸第二次調査報告書」 長野県考古学会 昭和43年

※4 } 共に中央道用地内遺跡の発掘調査報告書によるものである。
※5 }

※6 「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」 伊那市教育委員会 昭和44年

※7 正式報告書は未刊である。筆者が調査に参加している。

※8 「羽場下 舟山」 駒ヶ根市教育委員会 昭和47年

※9 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町その3、駒ヶ根市内」
長野県教育委員会 昭和48年

※10 ※7に同じ。

※11 赤穂福岡区辻沢にあり、友野が調査し資料は市立博物館に所蔵してある。

※12 同年実施した塩木遺跡の発掘調査で方形の住居址が2基確認されたが時期不明のため入れてない。

※13 昭和45年度から県営ほ場整備事業が実施され昭和48年度で国道より上一帯の調査が終了し

た。

- ※14 赤穂市場割地籍にあり，縄文，弥生，土師にわたる多量の遺物が採集されている。東方段丘突端には小鍛冶小墳群がある。
- ※15 やはり市場割地籍にあり，消滅したが古墳が3基あり，付近は縄文，弥生の大遺跡である。
- ※16 上穂沢川と鼠川とにはさまれたデルタ状の所にあり，道路改修中に須恵器，灰釉陶器が多量に出土している。中でも灰釉の耳付壺は優品である。
- ※17 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書上伊那郡飯島町その1」長野県教育委員会 昭和47年 所収
- ※18 ※17に同じ
- ※19 ※9に同じ
- ※20 「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会 昭和45年
- ※21 ※3に同じ
- ※22 ※17の縄文中期学習会の中でふれられている。
- ※23 藤森栄一編 「井戸尻」中央公論美術出版 昭和40年 所収
- ※24 ※20に同じ
- ※25 ※3に同じ
- ※26 ※9に同じ
- ※27 ※23に同じ
- ※28 「藤助畑，春日」駒ヶ根市教育委員会 昭和46年
- ※29 ※6に同じ
- ※30 ※3からの引用である。
- ※31 ※8に同じ



写真39 大城林遺跡出土土器



写真40 大城林遺跡出土土器

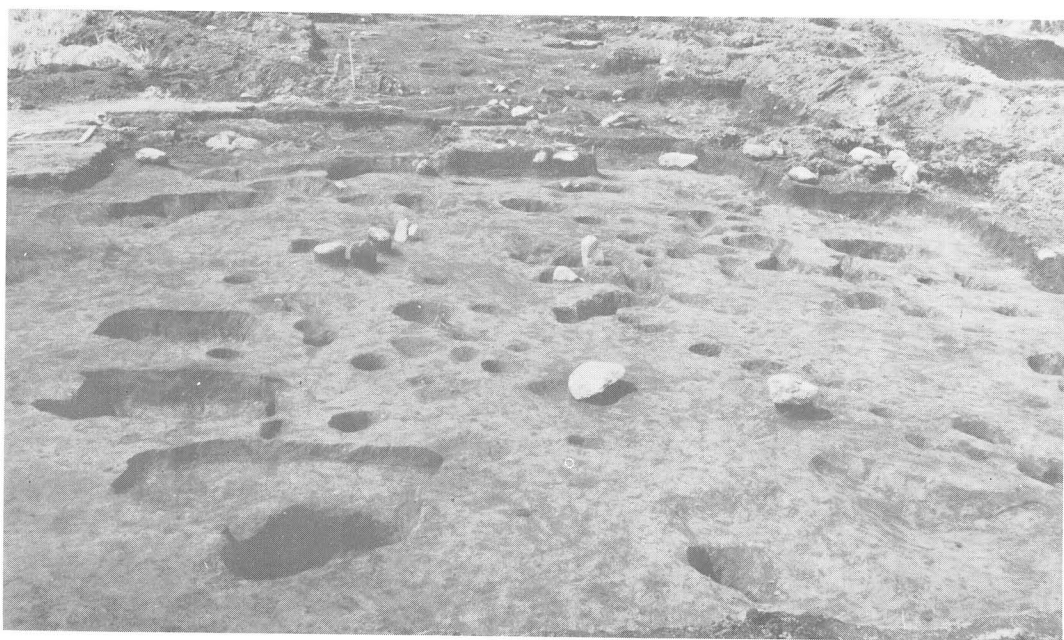


写真29 土壇群

(編集ミスにより 写真もれがありましたことおわび致します。)

第2節 北方 I 遺跡

1. 位置及び遺跡環境

北方 I 遺跡は駒ヶ根赤穂6958番地南割地籍に所在する。飯田線駒ヶ根駅から西南 3.2 km、大城林遺跡から直線にして 200m ほど西方にあたる。

遺跡のすぐ西は中割と南割を結ぶ主要幹線道路が段丘下を南北に走っている。

当遺跡もやはり、上穂沢川沿岸の遺跡群の一つである。段丘上には四分一、段丘下には八斗蒔遺跡があり、北を流れる上穂沢川の対岸には、春日・大明神、八幡原遺跡など縄文時代中期の遺跡がある。

当遺跡は八斗蒔遺跡の南に続き、当然八斗蒔遺跡に含まれるものである。昭和44年度に実施された県の分布調査の折、北側はすでに開田され遺跡の現況を残していなかったため、新しく北方遺跡と名付けられてしまった。ところが北方なる地名は実際はもっと南であり、その地籍からも遺物の散布が知られているため、便宜上当遺跡を北方 I 遺跡として報告することとする。

遺跡の地質は伊那礫層を基盤とし、ローム層の堆積はまったくなく、砂が 2.5m ほど堆積する。砂層はⅣ層からなり、表土—黒色砂質土30~35cm、第Ⅱ層—赤褐色砂質土10cm、第Ⅲ層—白色砂質土50~60cm、第Ⅳ層—礫混りの砂質土の堆積をみせている。

縄文時代の遺構は第Ⅲ層白色砂質土を掘り込んで構築されている。

上穂沢川の北、春日、八幡原遺跡の調査では、表土下30~40cmで新期ローム層に達している。更に



第77図 北方 I 遺跡地形図 (S=1/2000)

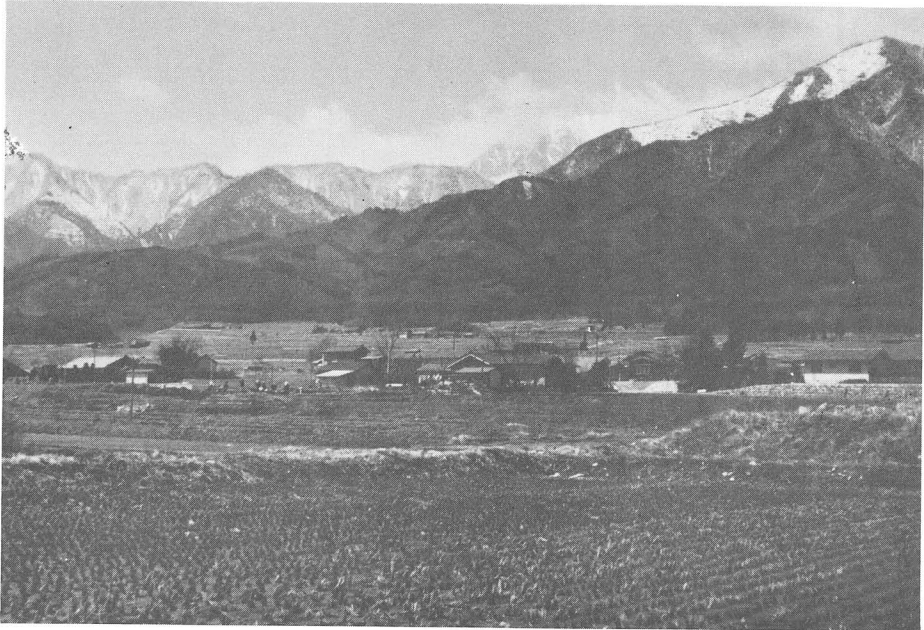


写真41 北方I遺跡 北より望む

当遺跡より南 100mほどのところでも新期ローム層がみられる。

上穂沢川上流は小支流（自然流路）の発達が顕著で、当遺跡もかつてはその小支流があったのではないだろうか。当遺跡の南に現在でも小支流があり、低湿地を作っている。北方I遺跡における小支流の存在は縄文時代前期以前のもので、縄文時代中期にはすでに丘状をなしていたものと思われる。後述する湯原遺跡も同様な立地条件を持つ。（吉村 進）

※1 「農業振興地域等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書—昭和44年度」長野県教育委員会 昭和45年

※2 「藤助畑・春日」駒ヶ根市教育委員会 昭和46年

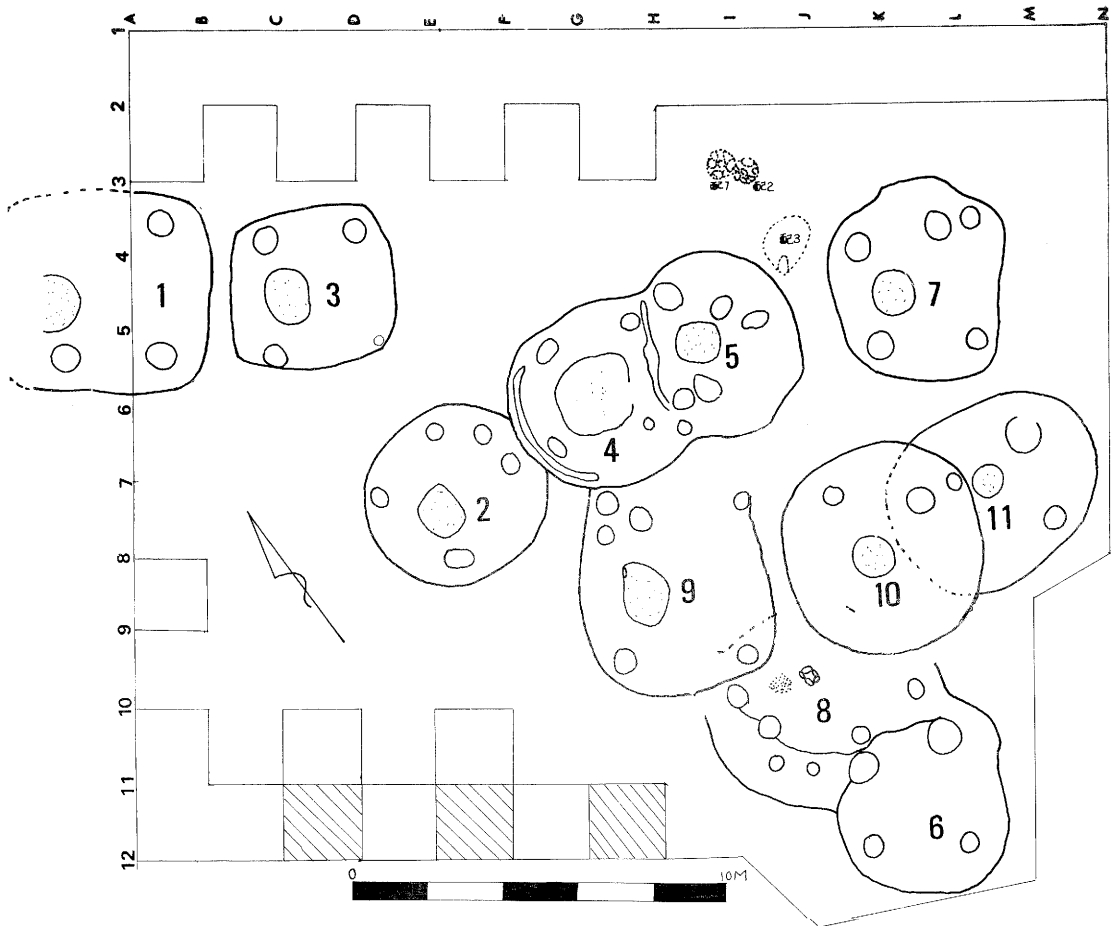
2. 調査概要

当遺跡は北に続いていた八斗蒔遺跡の一部と考えるのが妥当で、道一つへだてた北側は戦後しばらく森林をなしていたが、開田によって破壊されてしまった。その折、友野によって多量の遺物が採集されている。主体は縄文時代中期のものである。

その後、昭和44年の県の分布調査の折、当遺跡から水神平B式土器が採集され注目されていた。我がの事前調査でもやはり条痕文土器を採集し、他に縄文時代中期の土器を多量に採取した。

今回の調査は現地形を残す桑畑を中心に行うこととし、桑畑北西を基点とし、東へa, b, c…南へ1, 2, 3…と2m×2mのグリッドを設定して適宜調査し遺構の確認によって周囲を拡げる方法をとった。（吉村 進）

3. 遺構および遺物



第78図 北方I遺構全体図 (S=1/200)

1) 第1号住居址 (第79, 80図)

遺構 本住居址は桑畑の北西に発見されたもので、東には第3号住居址がある。

住居址の大部分は区域外であったが、幸い地主さんの協力を得て一部であるが、掘ることができた。

プランは隅丸方形をなすと思われ、推定規模6×5.5mである。

他の住居址も同様であるが、白色砂質土を掘り込んで構築されている。壁高は東で50cmを測る。

床面はローム土が所々に薄く敷かれ、固く踏み固められている。

炉は中央西寄りにある。東側半分だけしか調査できなかったが、径1mほど、円形のプランをなすと思われる。掘り込みは50cm前後を測る。炉石があったかどうかは不明である。

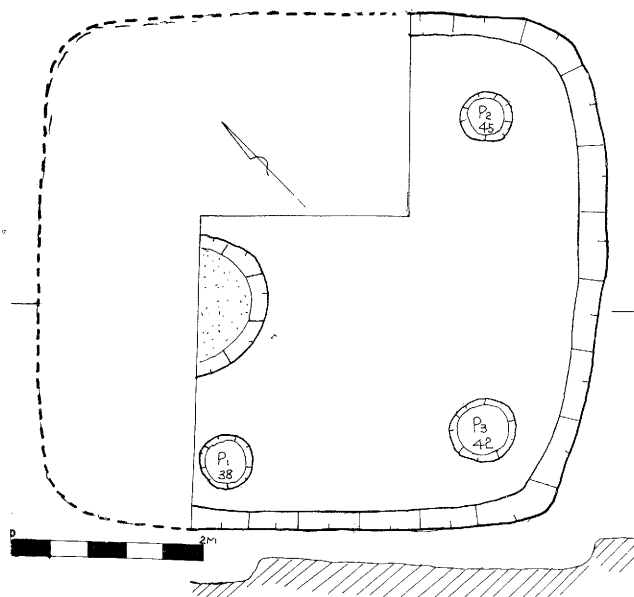
柱穴は3ヶ発見されている。多分4本を基本とするのであろう。

遺物(第80図) 遺物は比較的少ない。甕ないし深鉢形土器で、隆帯を使って渦文やワラビ手文、楕円文など様々な文様を表出し、内部を太い沈線で埋める文様のものが、当遺跡において盛行している。伊那谷や松本平に盛行することはすでに述べてきたところである。胴部まで渦文をつないだ文様が施されるもの(6)や口頸部分を隆帯で飾り、胴部は懸垂状の文様帯を施して条線や縄文を地文とするもの(4)などがある。

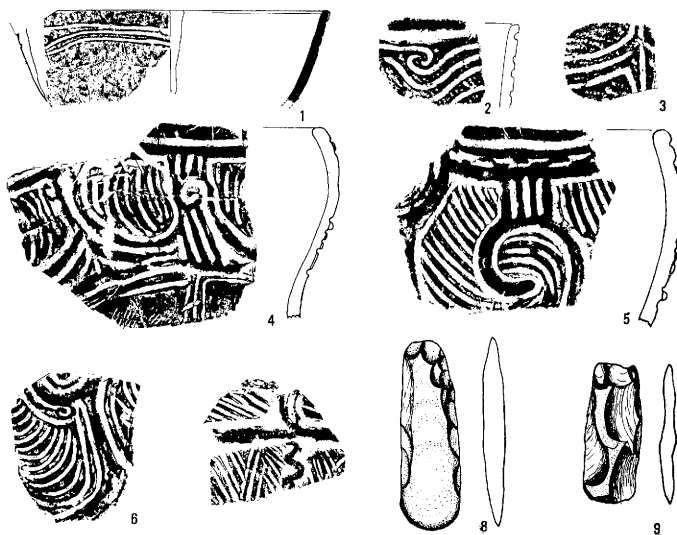
1は浅鉢で口縁部に3条の沈線が走る。2, 3は縄文を地文にし3条を1組みとした沈線が施される。曾利Ⅱ式に比定できる。

石器は打製石斧が2点出土している。8は硬砂岩製で自然面を残す。9は緑泥岩製である。

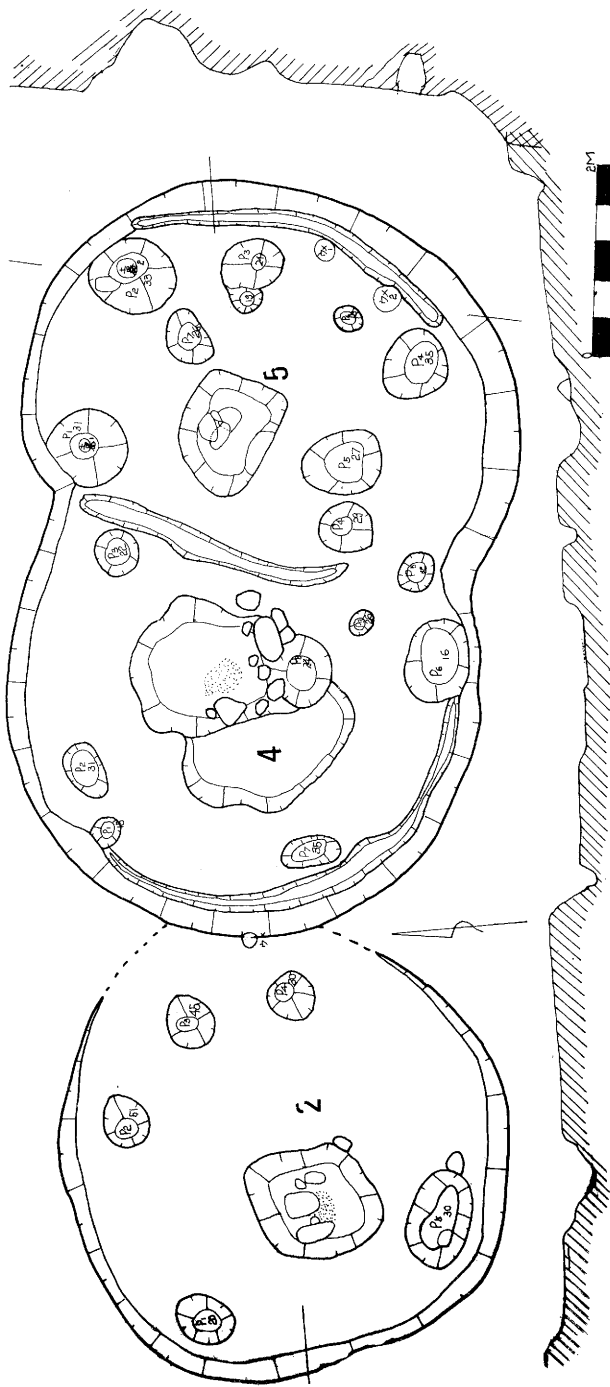
(福沢正陽)



第79図 北方Ⅰ第1号住居址実測図(S=1/80)



第80図 北方Ⅰ第1号住居址出土遺物(1-1/6, 2-9-1/3)



第81図 北方I第2, 4, 5号住居址実測図 (S=1/80)

2) 第2号住居址

(第81, 82図, 写真42)

遺構 第1号住居址の南約10mの所に発見されたもので、東側はわずかであるが、第4号住居址によって切られている。

プランはほぼ円形を呈し、径4.8mを測る。

壁高は西で20cmを測る。床面は平坦で固く良好である。部分的であるが、ローム土が敷かれている。

炉は中央西寄りに位置し、正方形の石囲い炉で大きさは1.1mである。石は全て抜き取られている。

炉内は炭化物が充満し、土器片も若干出土している。底に薄く焼土の堆積がみられる。

ピットは5ヶ発見されている。

住居址東側に口縁部を欠いた正位の埋甕(第82図-1)が出土している。第4号住居址によって一部壊されている。

遺物(第82図) 器形を知り得るものは少ない。1は埋甕で口縁部はない。全様は知り得ないが、底部から口縁にかけて大きく開く浅鉢である。頸部に3条の粘土紐を間をおいて横走させ、縦走する平行沈線で埋める。

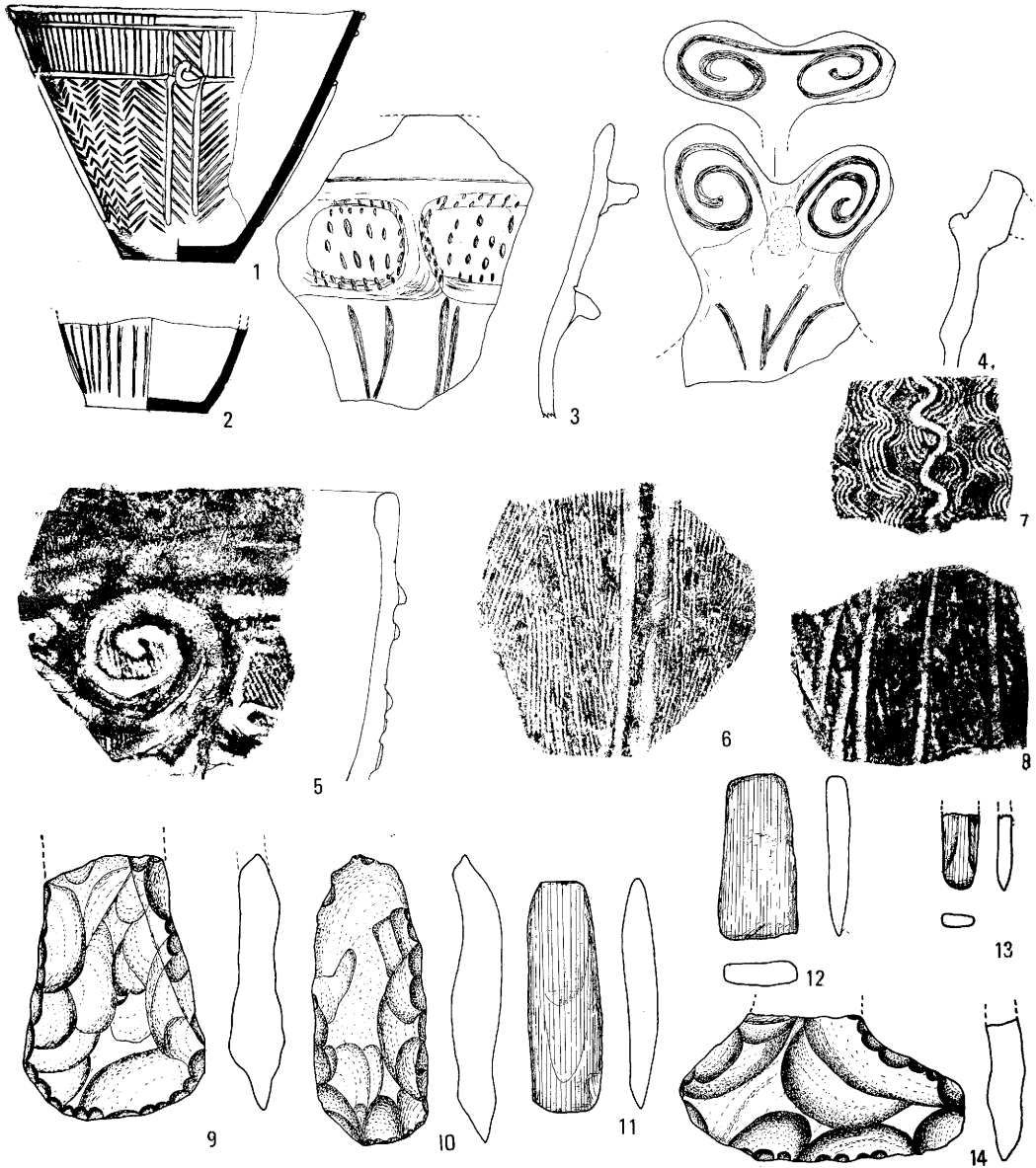
胴部は2条を1組みとした隆帯を懸垂させ、間は太い沈線の綾杉文が施される。曾利II式に比定できるであろう。

3は口縁部破片で2条の高い

隆帯を走らせ内部に楕円状の区角を作って刺突文を施すものである。

4はみみずく状の突起部で沈線の渦文が施され、上端にもみられる。

5は無頸甕で口縁部に無文帯を残し、隆帯による渦文が走り、内部は櫛状工具による条線が埋める。6、7は櫛状工具によって文様が描かれる。7は沈線の蛇行懸垂文の間を集合条線が同様に走るものである。条線は曾利Ⅲ式以後盛行してくる。埋甕よりは若干後出するものである。



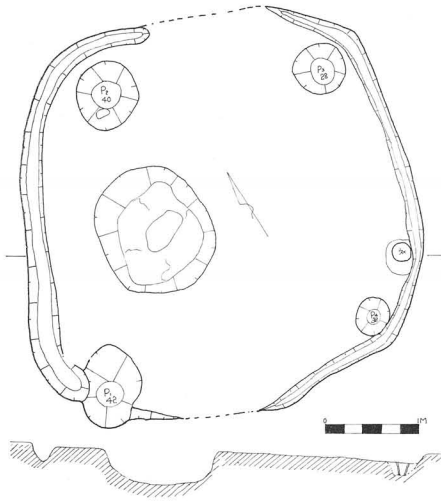
第82図 北方Ⅰ第2号住居址出土遺物 (1,2-1/6, 3~141/3)

石器は打製石斧（9，10），磨製石斧（11，12，13），石匙（14）がある。

9は撥形のもので縁辺に丹念な調整が加えられている。10は自然面を残すものである。

磨製石斧は全て緑泥岩製の定角である。

14はつまみ部を欠損する横形の粗製のものである。調整はあまり丹念でない。打製石斧，石匙は硬砂岩製である。（伊藤 修）



第83図 北方I第3号住居址実測図(S=1/80)



写真42 2号住居址（西より）

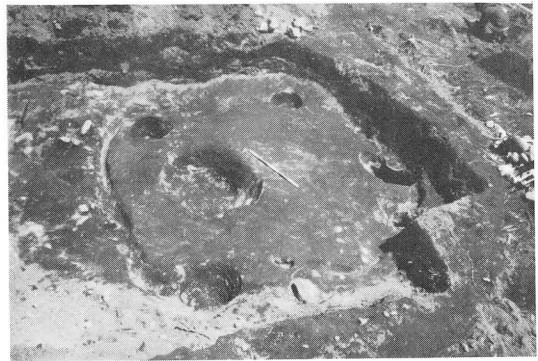


写真43 3号住居址（西より）

(3) 第3号住居址（第83，84，写真43）

遺構 第1号住居址の東に発見されたものである。

プランはほぼ隅丸方形を呈し，大きさは4.3m前後を測る。

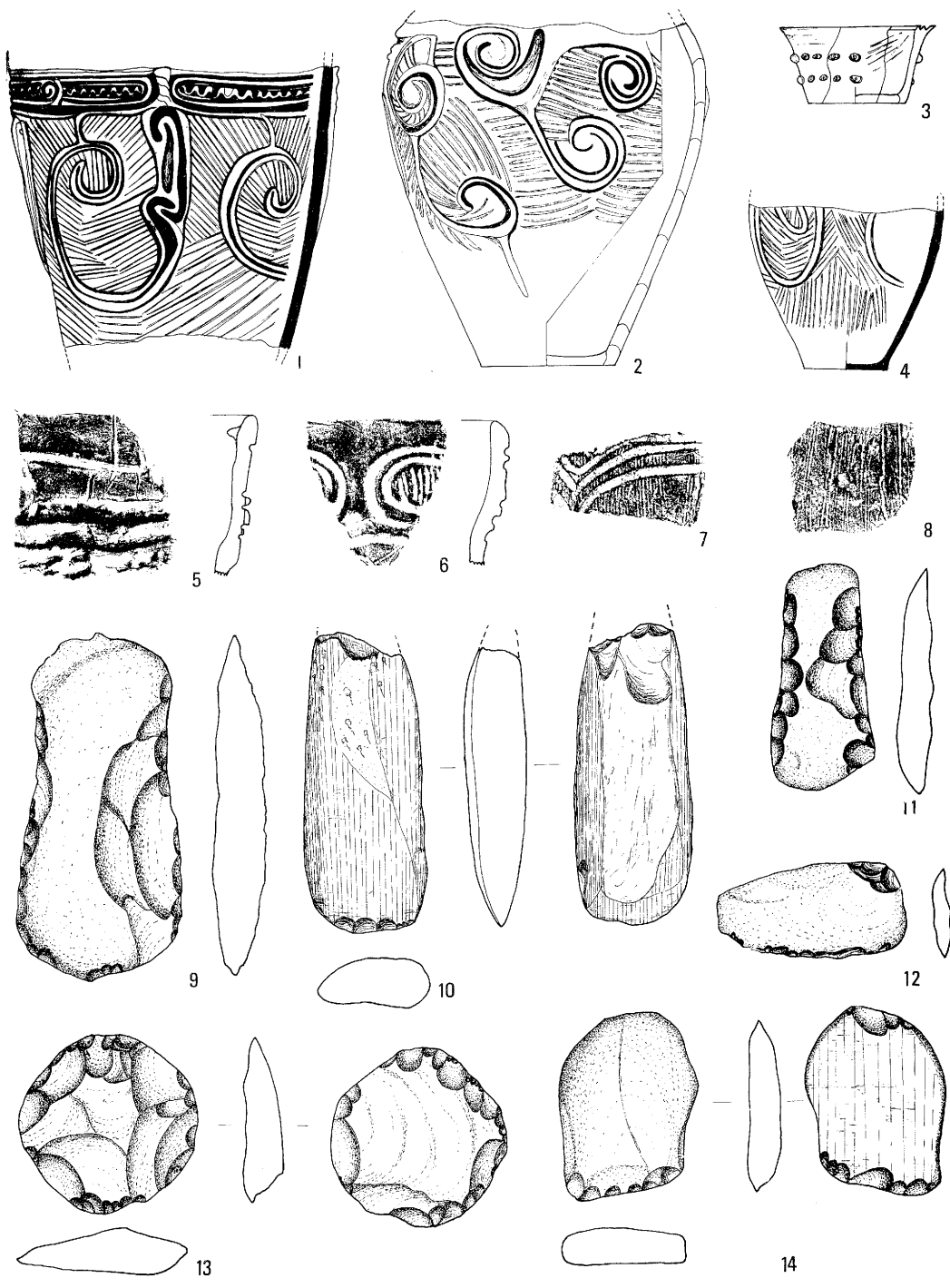
壁高は全体に浅く東側で約10cmを測る。西側はあまり認められず，南と北では一部壁がない。西と東側には，深さ20cmほどの周溝がめぐる。

床面は東に若干傾斜している。状態はあまり堅ちでない。

柱穴は4本である。

炉は中央西寄りにあり，楕円形を示す。大きさは長径1.4m，短径1.1mを測る。掘り込みは35cmを測る。焼土の堆積はみられないが，かなり使用されたものか底の砂は赤色を呈している。炉壁は砂質のためあってははっきりしないが一部に段を持つ所がある。石囲い炉で石が抜かれた可能性が大きい。内部より炭化物に混って第84図-2の土器がほうり込まれた状態でバラバラになって出土している。

東壁ぎわP₄の北に正位の埋甕（第84図-1）が発見された。口縁部と底部を欠く。



第84图 北方I 第3号住居址出土遺物 (1~4-1/6, 5~14-1/3)

遺物（第84図） 1は埋甕である。口縁部を欠くが無文であろう。頸部は蛇行横走する粘土紐を持った横帯区角文で飾る。胴部にはそれから発する渦文が4配分され、空白部は沈線を持って埋める。黒褐色に焼かれ、内面には炭化物が付着している。

2は炉内よりバラバラで出土し復元したもので、口唇部を欠く甕である。文様は隆帯による渦文つなぎで、太い沈線が空白部を埋めている。

3は図上復元による浅鉢である。口唇は肥厚し、上端には2条の沈線がめぐり。文様は胴部に2列の乳房状突起をめぐらすほかはまったくの無文である。

4は胴上半部より上を欠く小形土器で薄手で赤褐色に固く焼かれている。粘土紐による渦巻を持つもので、細沈線がやはり空白部を埋める。

5は1に類似する口縁部破片であろう。6は口縁部に楕円文を持つもの。7、8は条線を地文とするものである。曾利Ⅲ式以後盛行するもので、他より一時期遅れる。

石器は打製石斧（9、11）、磨製石斧（10）、横刃形石器（12）、特殊な石器（13、14）がある。

打製石斧は共に自然面を残す。10はぶ厚いもので全体を磨きあげている。裏面は大きく打ち欠かれておるが、端部の使用痕から考えると2次的なものでであろう。13は円形の原石を打ち割り縁辺に調整を加えたものである。第4号住居址から出土しておる。羽場下遺跡でも出土し円形特殊石器として報告した^{*1}。製作技法は横刃形石器と同様であるが、機能は異なるものではないだろうか。特殊な石斧としたい。14は一面は自然面で他面を磨いたもので、端部に使用による打撃痕がみられる。敲打器の一種かも知れない。10は緑泥岩製、他は全て硬砂岩製である。（吉沢文夫）

※1 「羽場下、舟山」 駒ヶ根市教育委員会 昭和47年

4) 第4号住居址（第81、85図、写真44）

遺構 第2号住居址の東をわずかに切って構築され、東側は第5号住居址と同一レベルの床面で続く。第2号住居址との床面差は30cmを測る。住居址の構築のさい第2号住居址の埋甕を一部壊している。第5号住居址との複合関係であるが、第5号住居址の周溝が第4号住居址の内部をめぐっているからといって第5号住居址の方が新しいと速断するのは問題がないだろうか。

住居址がほぼ同一レベルで複合する時、考えられる状態としては三つある。

- (a) 互いに周溝を持たない場合。
- (b) どちらかが周溝を持つ場合。
- (c) 両方とも周溝を持つ場合。

(a)の場合は先後関係はまったく不明である。時間的にかなりの差がある場合には覆土に違いはみられるが、^{*1}やはり先後関係は遺物に頼るほかない。

(c)の場合は後の住居址が前の住居址の周



写真44 4、5号住居址（西より）

溝を当然埋めることが考えられる。住居址の貼り床の場合は、程度の差はあるとしても、ある一定の範囲の面積を持ち、注意すればその判別はそう難しくない。しかし周溝のように狭い範囲の所で、それが埋められたもか、自然の埋設によるものかの判別は非常に難しくなる。

(b)の場合は2通りある。① 先行する住居址が周溝を持ち、後行する住居址が持たない場合と、② その逆の場合とである。①は(c)同様周溝は埋められるものと思われる。①、②いずれの場合も掘りあげた状態は同じで、その過程において区別がつかぬ限り先後関係は不明である。

これを解決する方法として住居址の覆土の層位関係が考えられる。理論的に言えば一方の自然堆積状態を切る訳だから、その先後関係は一目りょう然となる。確かに両者にかかなりの時間差があればそれは可能であるが、^{*2}本例のように時間差があまりない時に有効かは疑問であり、肉眼における観察ではまず不可能と思われる。

明らかに遺物に先後関係がある場合は別として、掘りあげた状態でその先後関係を論ずることは危険を伴うと思われるが、現実に照らしてみるとどうであろうか。

本例のように両住居址に時間差が求められない時、住居址の埋没速度とも関係するが、古い住居址の覆土がはたして壁になり得るだろうか。更に同一レベルの床面を持つ複合という場合、そこに継続する集団、即ち同一世代、同一家族による行為が伴わない限りみられない現象であろう。

(b)の場合にみられる周溝はその意味では、住居址の構築時の縄張りを意味すると考えられ、(b)の1の例は時間差のない複合において(c)になり得ることはあっても考えられないと思われる。

これらから第4号住居址の方が古く第5号住居址に移動、建て直ししたと考えたい。

プランは楕円形を呈し、推定規模は長径5.5m、短径5mである。

壁高は40cm前後を測る。床面は平担で所々にローム土が敷かれ、固く良好である。

西から南側にかけて深さ20cmほどの周溝がみられる。

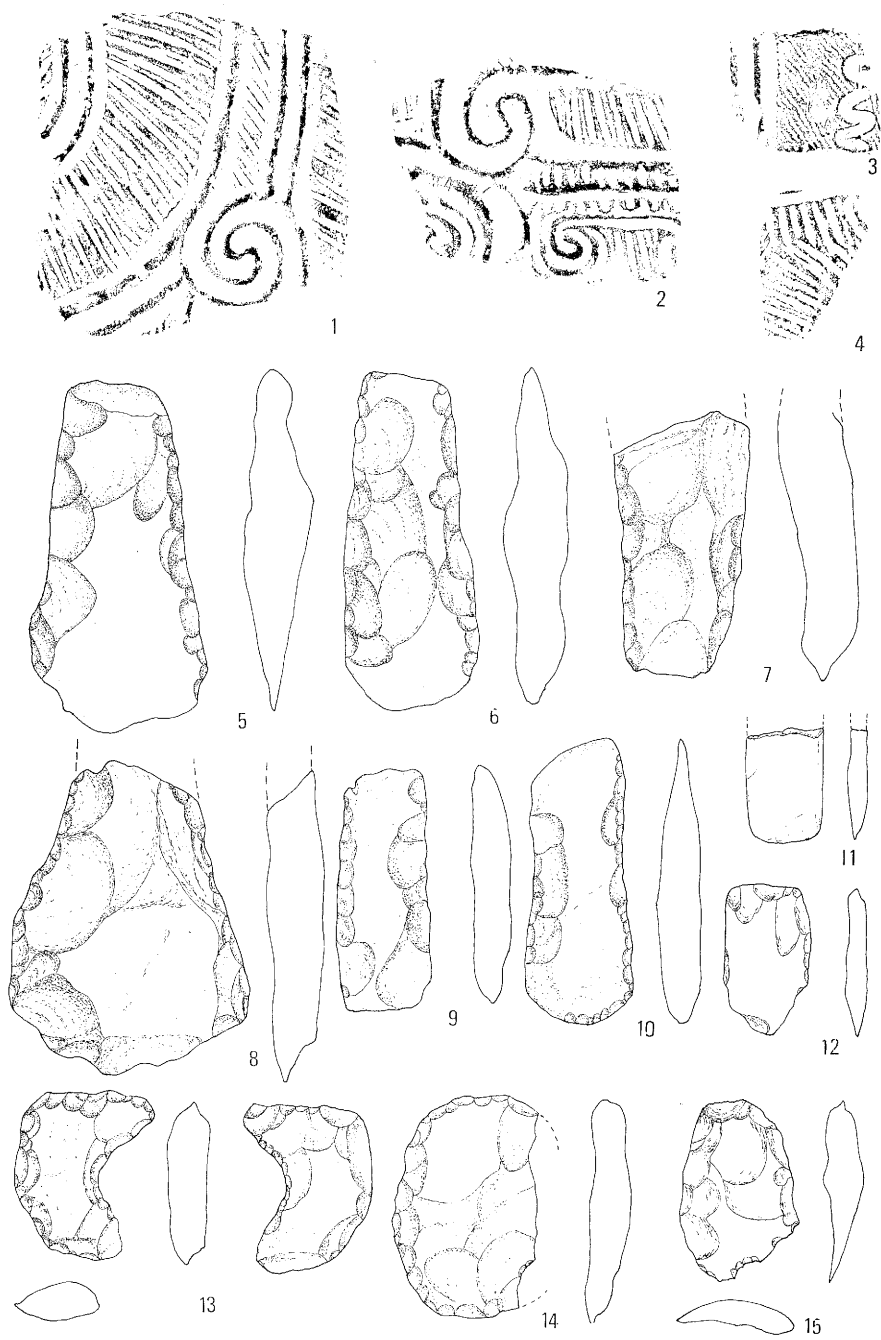
炉は住居址ほぼ中央に位置し、方形の石組み炉で石は抜かれている。南にある石は一部炉石の可能性もある。炉の西側に続いて浅い落ち込みがみられる。南にあるP₉の機能は不明である。炉の掘り込みは20cmで底は平担である。焼土はわずかにみられるだけである。

住居址中には石が流れ込み、作業を遅らせたが、当住居址の場合、炉の付近にケレン状に石が積まれ、他の住居址と異っている。これは第9号住居址でもみられた。このような例を持つ住居址は中越遺跡^{*3}でも知られ、時期が違い性格上問題はあるが、舟山遺跡^{*4}の小竪穴にもみられる。中越遺跡では団長の藤沢宗平氏は一なお第48号址内には第44号址同様に頭大の自然石の集石があつて（前年度の調査でも発見）、それは、廃屋になったことと関係あると思われるが、なお、よい考えが出て来ない—と述べている。住居址の廃絶に伴うものと考えるのが妥当と思われる。

柱穴はP₂、P₃、P₄、P₆、P₇と思われる。P₁、P₉は側柱であろう。

遺物（第85図） 土器の出土量は少ない。1、2は甕ないし深鉢の破片で、曾利Ⅱ式に盛行する渦文を持ったものである。4も同様であろう。3は縄文地に沈線の直線あるいは蛇行の懸垂文が施されたものである。

石器は打製石斧（5～10）、磨製石斧（11）、横刃形石器（12）、石匙（13）、特殊な石器（14、15）がある。



第85图 北方 I 第 4 号住居址出土遺物 (1/3)

打製石斧は自然面を大きく残すものが多い。7は一部に研磨がみられる。8は大形のものである。12は一応横刃形石器に分類しておく。13はつまみ部の発達があまりみられないが石匙に分類すべきであろう。14は第3号住居址より出土したもの(第84図-13)と同種の欠損品である。15は横刃形石器にノッチを持たせたもので、一部研磨がみられる。加工用具の機能を持つと思われる。

11, 12, 15は緑泥岩製, 他は硬砂岩製である。

※ 1, 2 上伊那郡箕輪町木下北城遺跡の発掘に参加した折, 弥生時代の住居址に平安時代の住居址が貼り床をした例があり, ローム面でのプラン確認のさい明らかに両者の覆土に違いがみられた。

※ 3 「中越遺跡 昭和44年度緊急発掘調査概報」 宮田村教育委員会 昭和45年

※ 4 「舟山遺跡緊急発掘調査報告書」 駒ヶ根市教育委員会 昭和46年

「羽場下, 舟山」 駒ヶ根市教育委員会 昭和47年

(吉村 進)

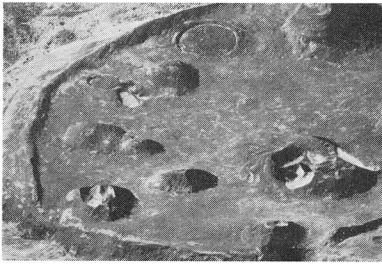


写真45 5号住居址埋葬

5) 第5号住居址 (第81, 86, 87図 写真44, 45)

第4号住居址の東部分と複合する住居址で, その複合関係については前述した。

プランは楕円形で長径 5.3m, 短径 4 mを測る。

壁高は40cmを測り, 床面は平坦で全体に薄くローム土が敷かれ, 固く堅ちである。

東側と西側に周溝がみられる。第3号住居址も同様であるが, 北側と南側に周溝がみられないのはいかなる理由であろうか。

炉はほぼ中央西寄りに位置し, 方形を呈して大きさ 1.3×1 mである。掘り込みは約25cmを測る。もともとは石囲い炉で炉石が抜かれたものと考えられる。南側にある石はその一部である。又内部にみられる石も炉石がくずれおちたものであろう。

ピットは全部で7ヶ発見されている。P₁, P₂ は主柱穴の可能性はあるが, P₁よりは底部が抜かれた小形甕形土器(第86図-7)が完形の状態で横になって, 更にP₂よりは大形甕形土器(第86図-6)が大きく割られて重なって出土しているところからすると, 柱が同時に存在したことは考えられなく, さりとてP₁, P₂を主柱穴と考えると上屋構造上問題が起きてくる。住居址の廃絶時に柱を抜き去り, わざわざ土器を埋設したと考えるのは邪推であろうか。いずれにしろ本例は注目したい。

住居址東側, P₃, P₄の間, 周溝ぎわに90cmの間隔をおいて正位の埋葬が2ヶ発見された。(ウメ1は第86図-2, ウメ2は第86図-1である。)両者とも底部が欠損している。

遺物(第86, 87図) 1は埋葬(2)である。全体にゆるやかなカーブを描きスマートな感じを受ける。チョコレート色に固く焼かれている。砂, 雲母を多量に含んでいる。

口唇内部に段がめぐる。

文様は口唇直下に無文帯を作り, その下に4ヶの渦文を配分し, その間は方形の区角を2組ずつ施す。区角内には沈線によって雷文が描かれる。胴部は大きな渦文が4ヶの渦文各々から発し, 頂



第86图 北方I第5号住居址出土土器 (1/6)

部には双頭の渦文を持つ。空白部は平行沈線が斜走、縦走する。

2もやはり埋襲(1)で底部を欠き、口縁部には炭化物の付着がみられる。4は床面より出土し復元したもので、全体の約半分ほどが残る。6はピット2より折り重なって出土したもので約3分の1ほどまわる。7はピット1よりの出土したものである。

1を含めてこれらは器形の面だけでなく、文様の面でも非常に斉一性がみられる。横帯区角文、渦文、それと空白部を埋める沈線の手法である。横帯区角文の内部は沈線の蛇行文(2)や粘土紐によるものを施したものが、この種の土器では多いようである。空白部を埋める沈線は6にみられる綾杉状のものも良く知られるところである。口唇直下は文様が施されないものが多いが、4や6のように小さな渦文や渦文をつないだ文様が描かれるものもみられる。

3は浅鉢であろう。内外面とも炭化物が付着している。

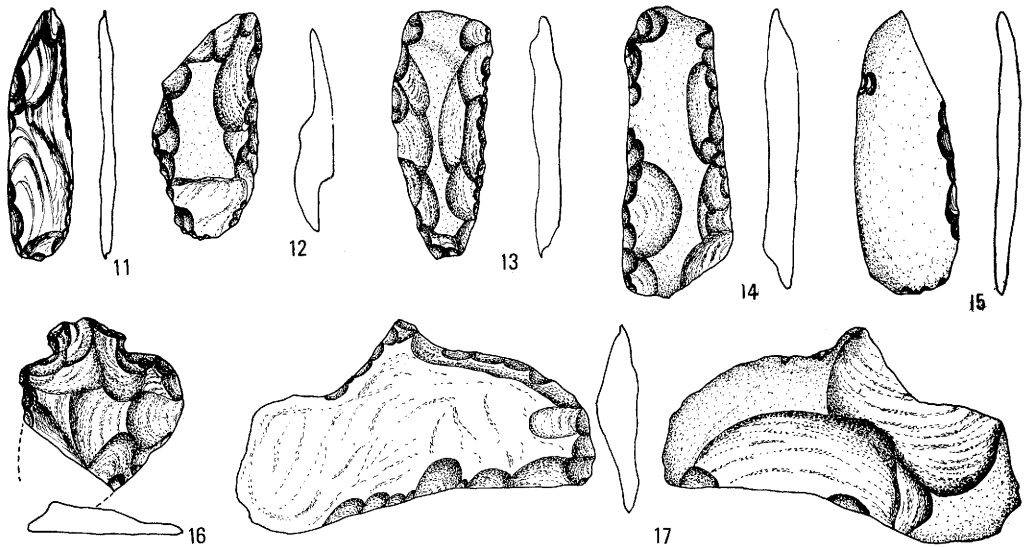
5は小形の深鉢で床面より出土したもので、口縁部と底部が一部欠損している。つまみ状の小突起を6ヶ持ち、口縁部には半肉状の楕円文が6配分される。その下には数条の沈線の連弧文が走る。

8は深鉢の底部で平行沈線が縦走ないし斜走する。

10は浅鉢である。褐色に固く焼かれ、内面には炭化物の付着がみられる。口唇は丸味を帯びる。文様は条線が斜走するだけである。総じて曾利Ⅱ式に比定できる。

石器は打製石斧(11~14)、石匙(16)、横刃形石器(15、17)がある。

12~14は自然面を残すもので、11も大きく打ち欠いた剥片の縁辺のみに調整がみられ技法上は同種に含まれるであろう。15、17は一応横刃形石器としたが、15は剥片、17は石匙の製作時の可能性もある。11は緑泥岩製、他は全て硬砂岩製である。(吉村 進)



第87図 北方Ⅰ 第5号住居址出土石器(1/3)

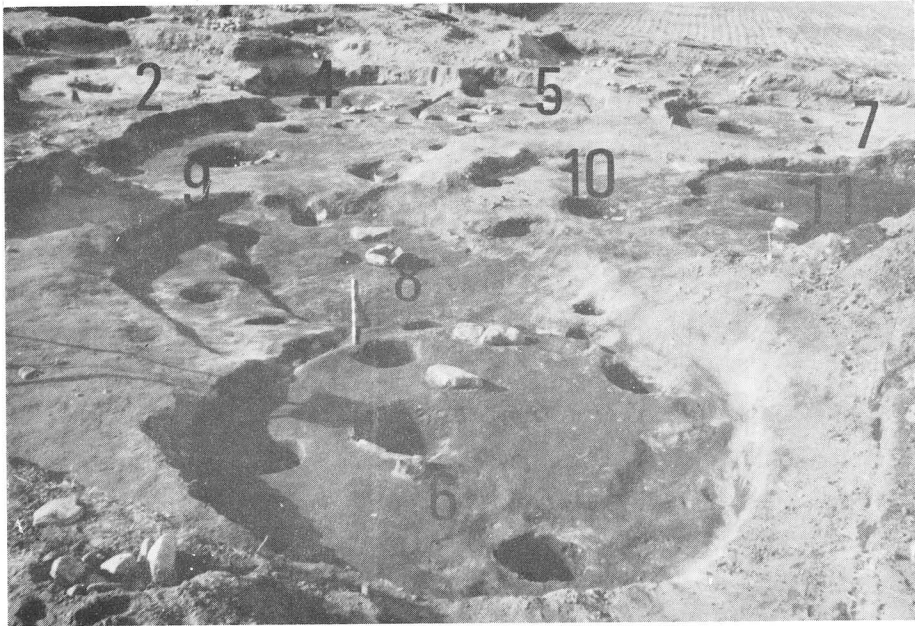


写真46 2, 4~11号住居址(南より)

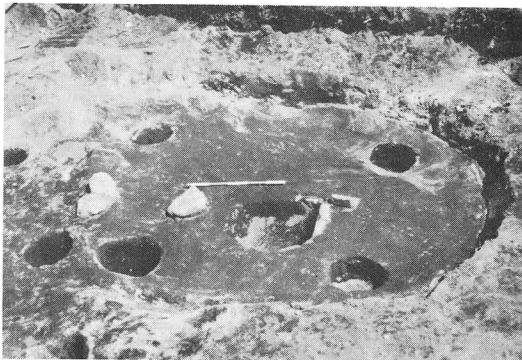


写真47 6号住居址(西より)

6) 第6号住居址(第88~90図, 写真46~48)

遺構 桑畑東南に発見されたもので、北側は第8号住居址と複合し、貼り床を行っている。

プランは隅丸正方形を示し、大きさは4.5m前後である。

壁高は南で30cmを測り、北するに従い若干低くなる。床面は平坦で薄くローム土を敷き固く良好である。

炉は中央西寄りにあり、方形の石囲い炉で炉石は東側の一部と南側を除いて抜かれ

ている。掘り込みは20cmを測る。焼土は5cmほど堆積している。

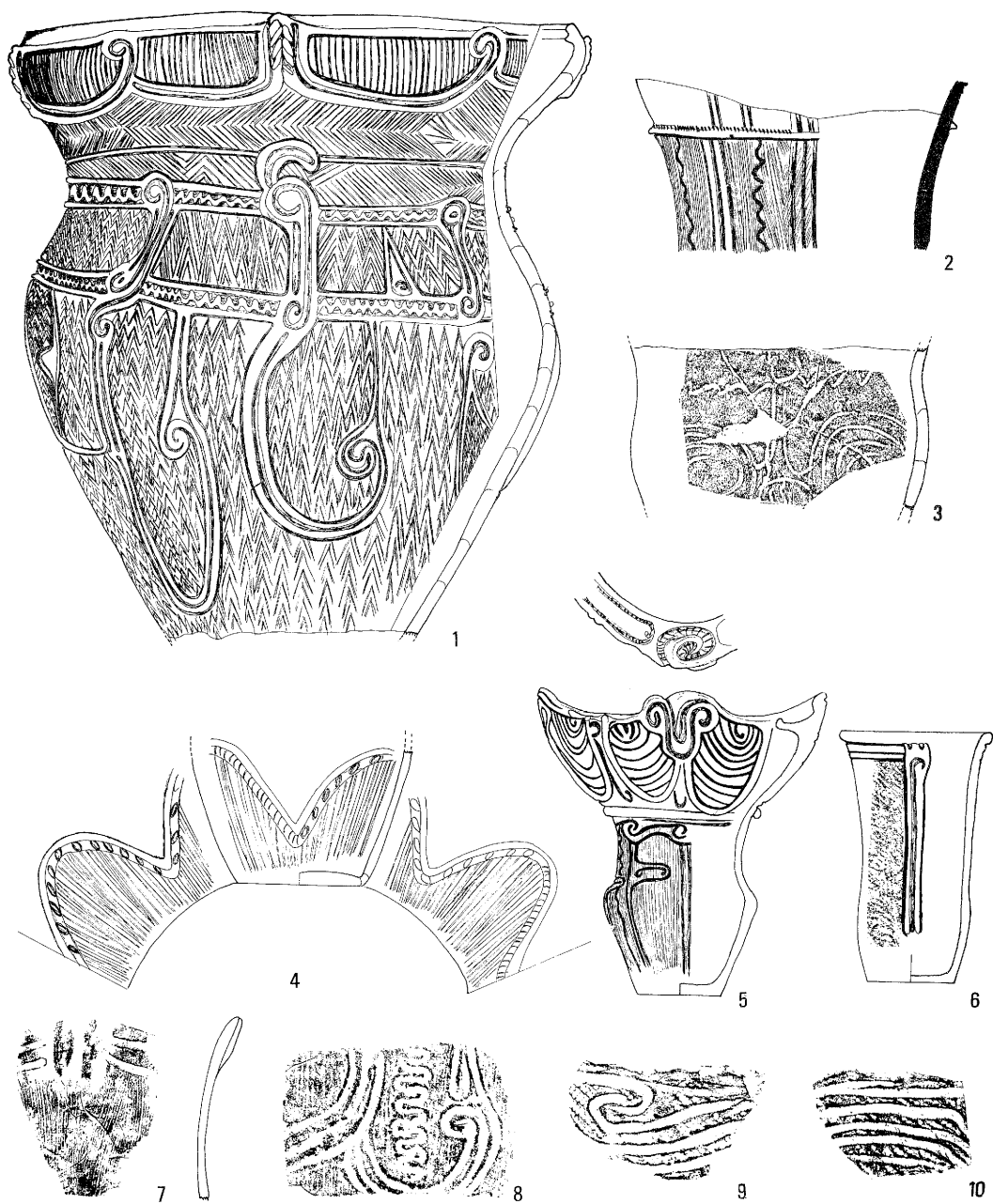
柱穴は4本で深さはほぼ一定している。

住居址東側、P₃の北に1mの間隔をおいて、埋甕が2ヶ発見された(ウメ1は第88図-1, ウメ2は第88図-2)。どちらも壁下より20cmほど離れている。埋甕1は底部を欠き、2は口縁部と胴下半部以下を欠いている。共に正位である。

P₄の西壁ぎわになだれ込むような形で小形の深鉢(第88図-5)が、更に第88図-6の小形土器

第88图 北方I第6·8·9·10·11号住居址实测图 (S = $\frac{1}{80}$)





第89图 北方I 第6号住居址出土土器 (1~6-1/6, 7~10-1/3)

が炉の東床面より出土している。

炉址の北わきの石は平らですった痕がみられる。偏平石皿と考えたい。壁ぎわにみられる2ヶの花崗岩は間取りに関係するものなのか、壁近くにあるから境界の役割をはたすものかはわからない。

遺物(第89, 90図) 1は大形の深鉢で底を欠く埋甕(ウメ1, 写真48)である。器形がくずれているがあまりの大形のため製作時において生じたものであろう。



写真48 6号住居址甕

頸部は強くくびれ、口縁は内湾する。口唇内部には1条のみぞがめぐっている。文様は口縁と胴部文様帯とにわけられる。口縁部はねじり紐状突起を4ヶ、更にその間にワラビ手文を配しそれをつないで器面を8区角し、内部は沈線を縦走させている。

胴部は、上半部から底部にかけて粘土紐を大きくワラビ手状に配し、上半部には蛇行文を持った横帯文がそれを連絡している。空白部は沈線の綾杉文が埋める。頸部は2条の沈線が横走し、く字に平行沈線が充填する。全体に茶褐色をなし、焼きは普通である。輪積みの痕を明瞭に残す。曾利II式に比定できる。

2もやはり正位の埋設資料(ウメ2)で口縁部と胴下半部以下を欠くものである。器形は知り得ないが、口縁が外反する深鉢と思われる。頸部には1条隆帯がみられ、上端に刺突を持つ。文様は沈線による懸垂文を主として、口縁部にかけては2条を1組みとする懸垂文、胴部は条線を地文として、3条を1組みとする懸垂文と蛇行懸垂文とが交互にみられる。曾利II式でも新しい時期に位置するのではないだろうか。

3は深鉢であろう。文様は沈線による横走の蛇行文や渦文がみられる。

4は深鉢の底部で、粘土紐による円弧文を連続させ、底部にかけては細沈線が縦走する。縦走する平行沈線は井戸尻III式からみられ、曾利I式に盛行する。それらにみられる沈線は深いもので本例はその退化であろうか。

5は小形の深鉢で頸部は強くくびれ、口縁部は内湾しつつも大きく張る。口唇内部は受け口状をなし、突起部には渦文、間には2条の沈線が施される。ゆるやかな波状口縁を示し、突起を4つ持つ。文様は頸部を横走する隆帯によって口縁部と胴部の文様帯とにわけられる。口縁部はみみずく状の突起を四配分し、それから発する粘土紐はし字状をなし器面を8分する。区角内には同心状の円弧文が施される。胴部は縦走する条線を地文として、ワラビ手文、懸垂文などがみられる。口縁部の文様は曾利初頭期にみられるミミズバレ状文に類似する。縦走する沈線の細線化、沈線による懸垂文などから曾利II式に比定できるであろう。

6は筒形の小形土器である。口縁はゆるやかにそり、口唇は肥厚して段を作る。文様は縄文を地文とし、やっこ状の懸垂文で器面を2分させ、それをつなぐ沈線が頸部に3条走る。

7は口縁部破片で2条の貼付文とそれをつないで口縁に沿って2条の沈線が施され、条線が器面を埋める。8は大形土器の胴部破片で縦走する条線を地文に3条を1組みにして描かれる渦文つなぎ、連続S字文の懸垂文が施される。7, 8は当住居址出土土器の内では新しい時期に属し、曾利

Ⅲ式に比定して良いであろう。

9, 10は同一破片で縄文を地文とするものである。太い沈線によって文様が表出される。

石器は打製石斧(11~17), 磨製石斧(18), 石錘(19)がある。

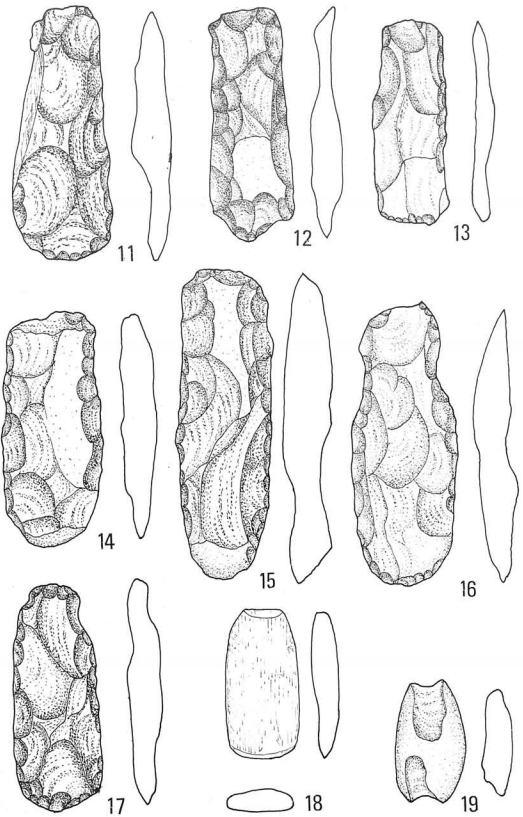
打製石斧は比較的小形なものが多く、欠損品が少ない。16は縦形の粗製石匙に分類すべきかも知れない。

石錘の出土は大城林同様少ない。小形のものである。

18は緑泥岩製で、他は全て硬砂岩製である。(北沢雄喜)



写真49 7号住居址埋甕



第90図 北方Ⅰ 第6号住居址出土石器(1/3)

(7) 第7号住居址 (第91, 92図, 写真49)

遺構 第5号住居址の東に発見された住居址である。

プランは変五角形をなし、基底 5.3m, 高さ 5mを測る。

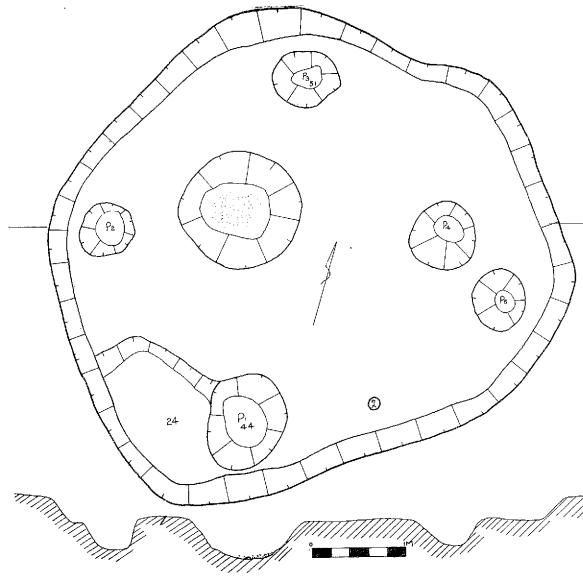
壁高は西で40cm, 東では若干低くなる。床面は平坦で所々にローム土が置かれ堅く良好である。壁は斜壁である。

炉は住居址ほぼ中央, 西寄りに位置する。径 1.3m前後の大きさの円形で底は方形をなす。もともとは方形の石囲い炉で炉石が抜かれたものと思われる。掘り込みは約40cmである。焼土は5cmほどの堆積がみられる。

ピットは5ヶ発見された。4本柱を基本とすると思われる。P₁の西に続いて浅いピットがみられる。貯蔵穴であろうか。

住居址東側, ややP₁より正位の埋甕(第92図-1)が出土した(写真49)。底部は抜かれている。壁下より30cm離れている。

遺物(第92図) 遺物は石器, 土器とも少ない。



第91図 北方I 第7号住居址実測図 (S=1/80)

1は器形を知り得る唯一のもので埋設資料で底部は抜かれている。口縁はゆるやかに内屈する甕形土器で全体にスマートな感じを受ける。口唇内部は受け口状をなし、段がめぐる。渦文と両角状の小突起を2ヶずつ交互に配し、区角内は沈線による渦文つなぎなどで飾られる。胴部は2条を1組みとした隆帯を大きく渦状に施し、空白部上部は縦位に下部は斜位に平行沈線が走る。チョコレート色に固く焼かれている。器面調整も非常に丹念である。

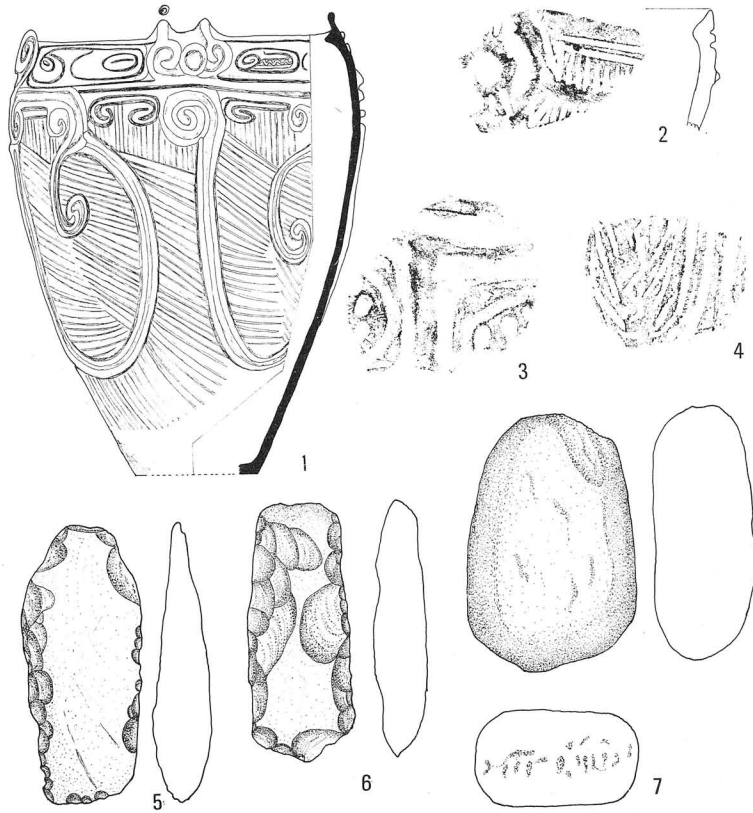
2は口唇が内そぎ状をなすもので、渦文を配して器面を区角する。3もやはり口縁部破片で口唇下に太い沈線をめぐらし、その下に楕円文を表出し、内部は刺突文で埋める。4は深鉢の胴部破片で隆帯による区角内を蛇行懸垂文と綾杉状沈線で埋めるものである。

石器は打製石斧(5, 6)と磨石がある。

打製石斧は共に硬砂岩製である。5は大きく自然面を残すものであり、横刃形石器に分類すべきかも知れない。

磨石はやはり当遺跡においては非常に少ない。石皿の少なさと関係するのであろうか。砂岩製である。

(伊藤 修)



第92図 北方I 第7号住居址出土遺物(1-1/6, 2~7-1/3)

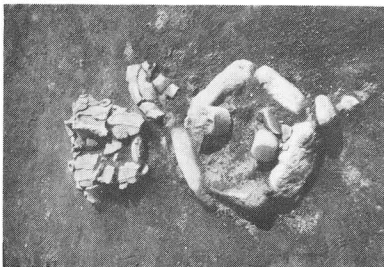


写真50 8号住居址炉址

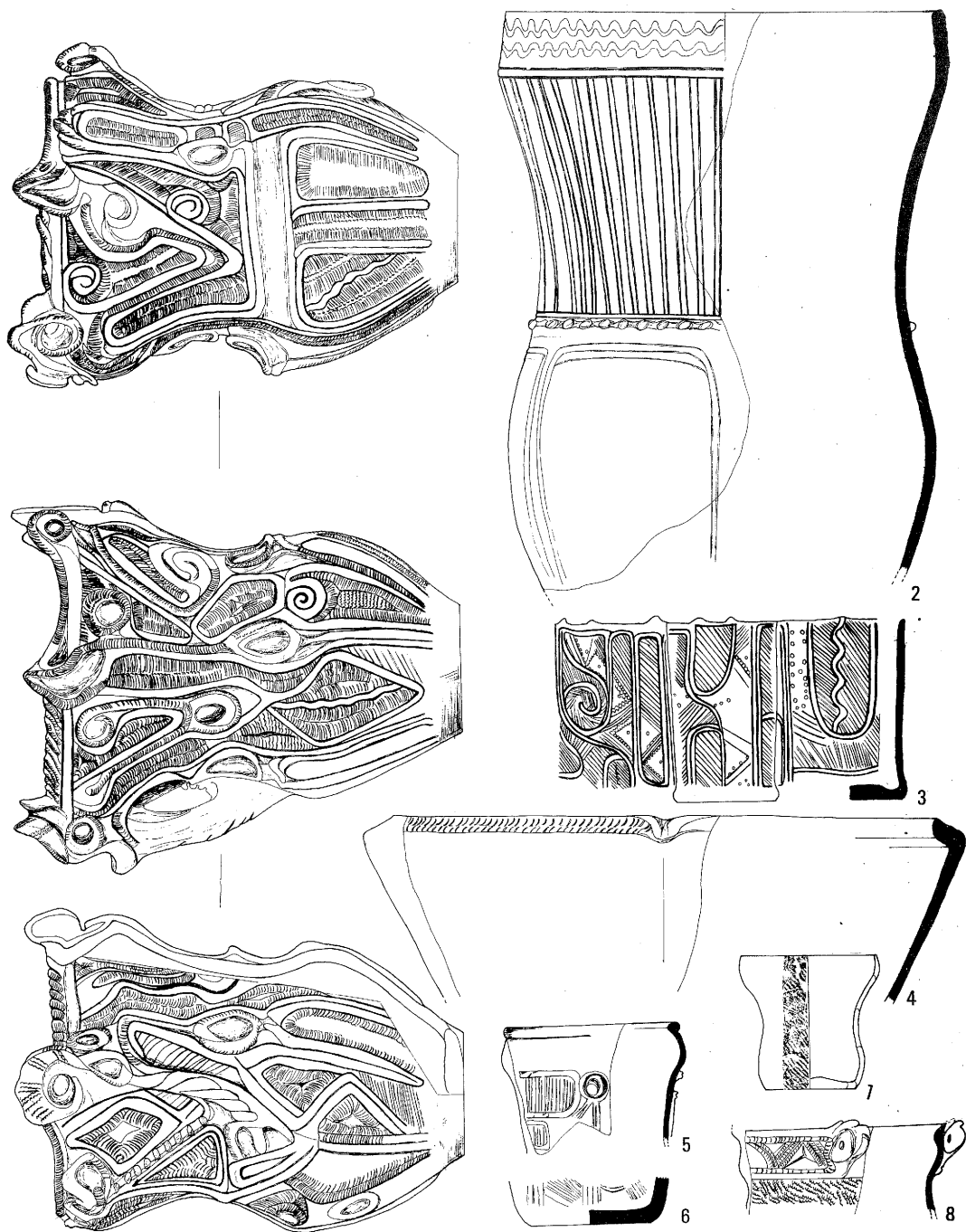
(8) 第8号住居址 (第88, 93, 94図, 写真46, 50)

遺構 6号, 9号, 10号住居址にはさまれており, 一部ずつであるが, それぞれの住居址によって貼り床がされている。しかしながら砂質上のため, 貼り床ははっきりと認めることはできなかった。

プランは楕円形をなし, 長径 5.8m, 短径 4.4mを測る。

床面は若干舟底状を呈し, あまり固くない。

炉は中央西寄りに位置し, 細長い自然石を利用して変五角形のプランを作っている (写真50)。掘り込みはまったくみられず, 床面に石を置いただけである。内部は炭化物が充満し, 底には焼土の堆積がみられる。炉の内部炭化物中に, 小形土器 (93図-3) が底を上斜めに倒



第93图 北方I 第8号住居址出土遗物(1/6)

れ込むような状態で出土し、更に石棒の欠損品（第94図-13）が立って発見されている（写真50）
ピットは南側のみみられる。

炉の西に焼土が薄く堆積している。南側床面上からは深鉢形土器（第93図-1）が横倒しにつぶれて発見された（写真50）。

なお住居址西側には幅1m程の段を持つ。床面上より前期末葉の土器（第94図-17~21）が出土しており、第8号住居址によって切られたためほとんど住居址の形を残さないが住居址があったと思われる。P₁、P₂などはそれに付属するものであろう。

遺物（第93、94図） 1は横倒しの状態で発見された深鉢である。中央部にくびれを持ち頸部はく字に内屈し口唇は強く外反する。全体にどっしりとした感じを受け、持つと非常に重く重量感がある。胎土は雲母、砂をかなり含むが器面調整は良好で、チョコレート色に固く焼かれている。

文様は立体感あふれる豪壮なものである。耳ふた状あるいは口ばし状の突起を口縁部に施し、ねじり紐状の把手を1ヶたすき状にかける。更に粘土紐を使って器面一杯に、菱形文、三角文、ワラビ手文などで区角し、内部はキャタピラ文が埋める。全体に縦位の文様構成を示す。文様手法は後田原式に類似する。

2は大形の深鉢形土器でほぼ3分の1ほどまわるものである。胴部はゆるやかな曲線を描き口縁はわずかに内屈する。文様は平行沈線を使ったもので、口頸部と胴上半部を横走する平行沈線によって文様帯が作り出される。胴上半部平行沈線の下には連続指頭痕を持つ粘土紐が1条めぐり、口縁部には2条の蛇行文、頸部には縦走する平行沈線、胴部にはく字文様が施される。

3は小形の筒形土器で底部は藤内期特有のく字の屈折底部を持つ。口縁部には不規則ながらツマミ状の小突起を持つ。文様は半截竹管によって描かれ、全体に縦位に文様が構成され、区角内は斜走する平行細沈線や半截竹管による連続爪形文や円形竹管文によって充填される。

4は浅鉢であろう。口縁はく字状に強く内湾する。口唇は肥厚し内そぎである。文様は口唇を指で押しつぶしたようなくぼみを4ヶつけ、口唇直下に2条の異方向の連続爪形文をめぐらす。

5は筒形土器で口唇は丸味を持ち、外反する。文様は頸部から胴部にかけて施される。

6は底部で半截竹管による平行沈線で文様が描かれる。

7は小形の深鉢形土器は薄手作りで固く焼かれている。縄文が器面を一杯に埋める。

8もやはり小形土器である。突起を4ヶ配し、口縁部は連続爪形文を持った区角文を施し、胴部は縄文が埋める。

9~12は今まで述べてきたものに含まれるものである。総じて藤内I式に比定される。

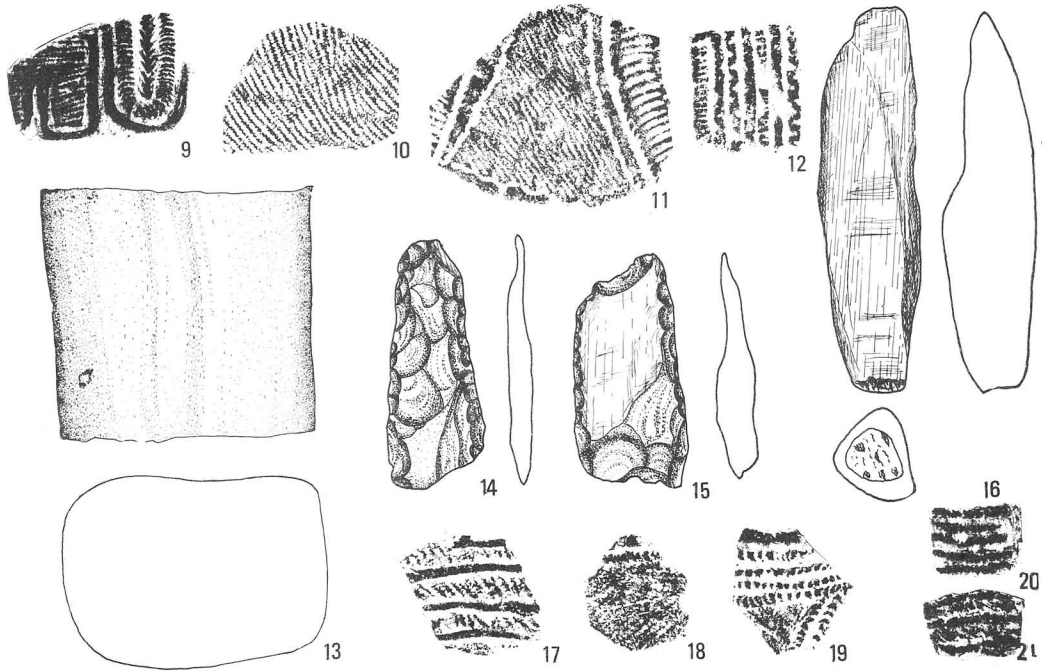
石器は石棒（13）、打製石斧（14、15）、乳棒状石器（16）がある。

石棒は大形なもので断面は楕円形を示す。15は打製石斧の自然面を磨いたものである。

17~21は住居址の西側の別の住居址床面より出土したものである。縄文前期に位置づけられるもので、縄文地に粘土紐を貼付したものが多い。中には刻みの施されたものもある。19はへら切手法によるものである。かつて羽場下遺跡^{*1}において第5類土器として分類したものである。

*1 北方遺跡の東約0.5km、上穂沢川右岸にある。

（吉村 進）



第94図 北方I 第8号住居址出土遺物 (1/3)

(9) 第9号住居址 (第88, 95図, 写真46, 51)

遺構 第8号住居址の北西にあり、北は第4号住居址と近接する。一部第8号住居址に貼り床をする。プランは隅丸方形を呈し、大きさは5×5.7mである。

壁高は西で10cmを測り、北ではなくなっている。床面は所々にローム土が敷かれているが、あまり固くない。

炉は中央西よりに偏してあり、炉石は現存しないが、方形の石組み炉で大きさは1.5×1.2mである。炉壁には自然石が敷かれており、底部には焼土が5cmほどの堆積をみせている。

柱は4本を基本とする。

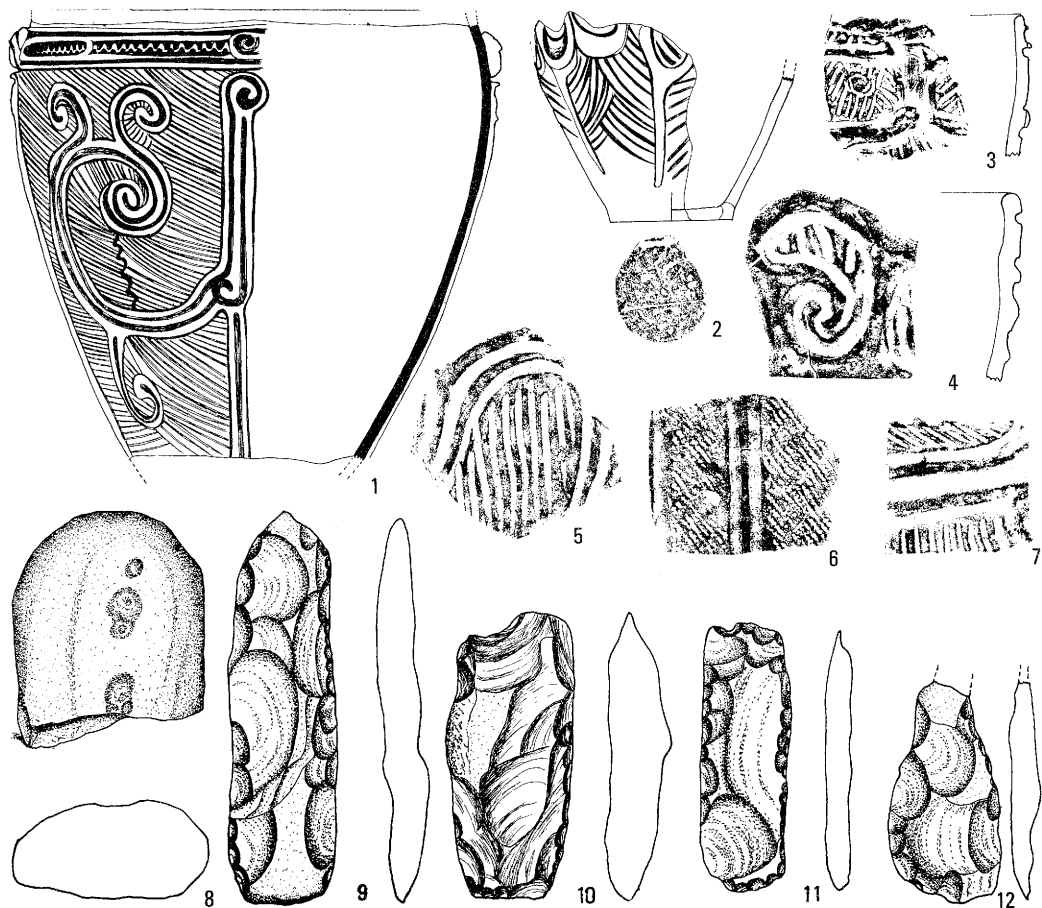
第4号住居址でもふれたが、炉の東に集石がみられる。一部は炉に落ち込んでいる。

住居址東側 P_5 と P_6 の中央やや P_5 よりにも口縁と底部を欠く正位の埋甕 (第95図-1) が発見された (写真51)。

遺物 (第95図) 1は口縁と底部を欠く正位の埋設資料である。口縁部は欠けているがわずかで口唇に達すると思われる。いわゆる無頸甕である。黒褐色に固く焼かれている。口唇直下は無文帯を形成し、その下に渦文を4ヶ配し、それをつないで隆線による区角帯を作出し、



写真51 9号住居址埋甕



第95図 北方I 第9号住居址出土遺物(1, 2-1/6, 3-12-1/3)

粘土紐を使って蛇行文が施される。胴部は渦文を持つ懸垂文を4配分し、それから発して大きく渦文を描く。空白部には平行沈線が斜走する。

2は1の埋襲の中から出土したものである。隆帯によって文様が作られ、やはり沈線が異方向に斜走する。木の葉底である。

3はやはり甕形土器の口縁部である。4も同様口縁部破片で波状をなす。勾玉様の文様を施し、太い沈線で埋める。5, 7は1などの胴部破片である。6は縄文を地文とし、削り出しによる懸垂文を施す。

曾利II式に比定できる。

石器は凹石(8), 打製石斧(9~11), 石匙(12)がある。

凹石は当遺跡において1点出土しただけである。打製石斧は大きく打ち欠いて縁辺に丹念な調整を加えたものである。9は両端部に自然面を残す。12はつまみ部を欠くが縦形の石匙である。

8は砂岩製, 10は粘板岩製, 他は硬砂岩である。

(福沢正陽)

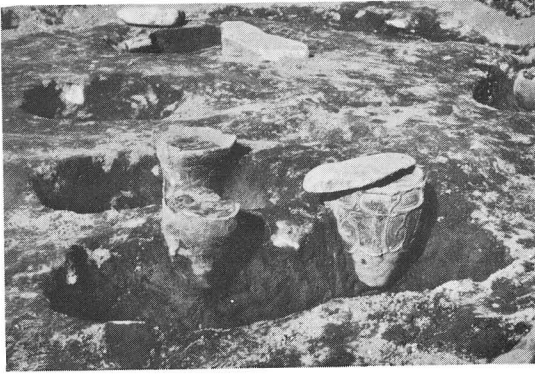


写真52 10号住居址埋甕



写真53 10号住居址炉址

埋甕1（第96図-1）は底部と口縁をわずかに欠き、上に石が乗っていたが、扁平でない。埋甕2（第96図-2）は口縁部と底部とをやはり欠くものである。埋甕3（第96図-3）は完形品である。共に内部は黒色砂質土が充満していた。

遺物（第96図） 埋設資料以外器形を知り得るものは少ない。

1は口縁部をわずかに欠くが無文と思われる。文様は隆帯を使っているもので、口縁部には方形の区角文その下には渦文つなぎが施され、内部を太い沈線で埋めるものである。外面文様部には炭化物の付着がみられる。器面調整は良く固く焼かれている。4, 6, 7, 9は同種のものである。4は炉の内部に貼られていたものである。

2は口縁部と頸部とを欠くが深鉢と思われる。黒褐色に固く焼かれている。外面にはへら削り手法の痕が、内面には刷け目状の擦痕がみとめられる。文様はくびれる頸部に集中する。太い沈線による区角文と重円文が描かれる。区角内には綾杉状の沈線が、重円内には刺突文がみられる。

3は埋設資料には珍しく完形品である。キャリパー形のくずれた深鉢である。口縁部文様は沈線を使った重円文で内部は縦位の沈線が埋める。胴部は∩形に区角され、太い沈線が綾杉状に底部まで埋める。

5は無文地に平行沈線が走る。10~12は縄文を地文とするものである。8は楕状工具によって流

(10) 第10号住居址（第88, 96図, 写真46, 52, 53）

遺構 第8号住居址の北東にあり、第11号住居址に半分ほど貼り床をしている。

第8号住居址にも貼り床をしている。

プランは不整形円形をなし、径 5.6m前後を測る。

壁高は北側で20cmを測る。床面は固く良好である。

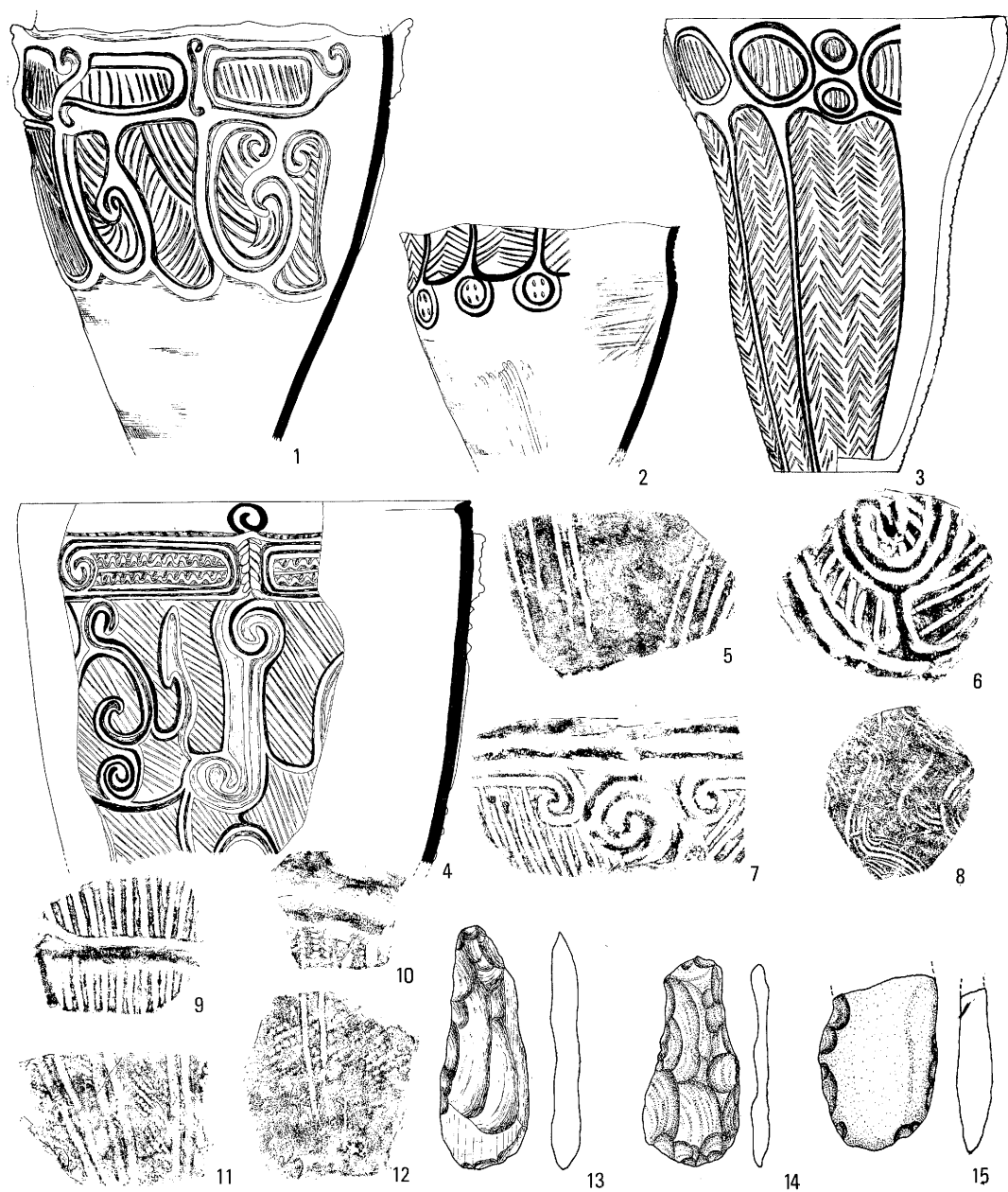
炉は中央西寄りにあり、方形の石組み炉で炉石は抜かれている。炉壁には土器片を貼り付けてある。焼土はわずかに堆積がみられる（写真53）。

柱穴は3本発見された。

住居址北側壁ぎわに花崗岩がすえられている。間取りと関連するものであろうか。

東側に埋甕が3個体近接して出土した。

3個体とも床面より5cmほど下に埋設され貼り床をこわって第11号住居址の調査を行っている時に発見されたものである。3例とも正位である。



第96图 北方I 第10号住居址出土遗物(1~4-1/6, 5~15-1/3)

水文が描かれる。鶴川遺跡群J地点第20号址^{*1}に類例がみられる。

総じて曾利Ⅲ式に比定できるが、1、4は出土土器群中では古い方に属する。

石器は打製石斧(13、14)と横刃形石器(15)がある。13は自然面が研磨されている。石材は13が緑泥岩、他は硬砂岩である。

※1 「鶴川遺跡群」 東京都町田市 鶴川遺跡群調査団編 雄山閣出版株式会社 昭和47年

11) 第11号住居址 (第89, 97図, 写真46)

遺構 第10号住居址の東にあり、西側は第10号住居址の貼り床がある。

プランは隅丸方形をなし、大きさは4.5×5mである。

壁高は東側で40cmを測り、第10号住居址の貼り床面との比高は約20cmである。床面はローム土が全体に薄く敷かれ固く良好である。

炉は中央北寄りにあり、方形の石組み炉で炉石は抜かれている。焼土はみられない。

柱穴は4ヶである。

住居址南東P₄の東わきに口縁と底部を欠く正位の埋甕(第97図-1)が発見された。P₃の東に筒形土器(第97図-2)がP₂にたおれ込むような状態で更に小形深鉢(第97図-3)が出土している。

遺物(第97図) 1は埋設資料である。長胴の深鉢で口縁部は無文と思われる。頸部に3条の沈線をめぐらせ、その下は隆帯で文様を描き、沈線を綾杉状に施す。

2は小形の筒形土器で口縁部にむかってわずかながら開いてそぎ状の口唇は強く外反する。文様は条線が縦走して器面を埋める。内面には炭化物が付着している。

3は胴部は短く、頸部が長い小形の深鉢で内湾ぎみの口縁は大きく開き、口縁部は4ヶの突起を持つ。文様は頸上部の横走する2本の沈線によってわけられる。口縁部は突起の下に沈線を用いた渦文が施され、その間と同様の曲線が描かれる。頸部には条線が斜走する。

4は粘土紐によって方形などの区角を表出し、沈線で埋める。5は渦文を施した突起を持つもので、粘土紐を懸垂させ、綾杉文で埋めるものである。

他はへら描きによる沈線を使った文様が多く、口縁部に楕円文を持つもの、条線を地文とするもの、縄文を地文としたものもみられる。12は関東地方の加曾利EⅡ式に類例がみられる。

総じて曾利Ⅲ式に比定できる。1、5はそのうちでも古い方に属する。

石器は打製石斧のみで自然面を残すものばかりである。15、16はその自然面を研磨している。

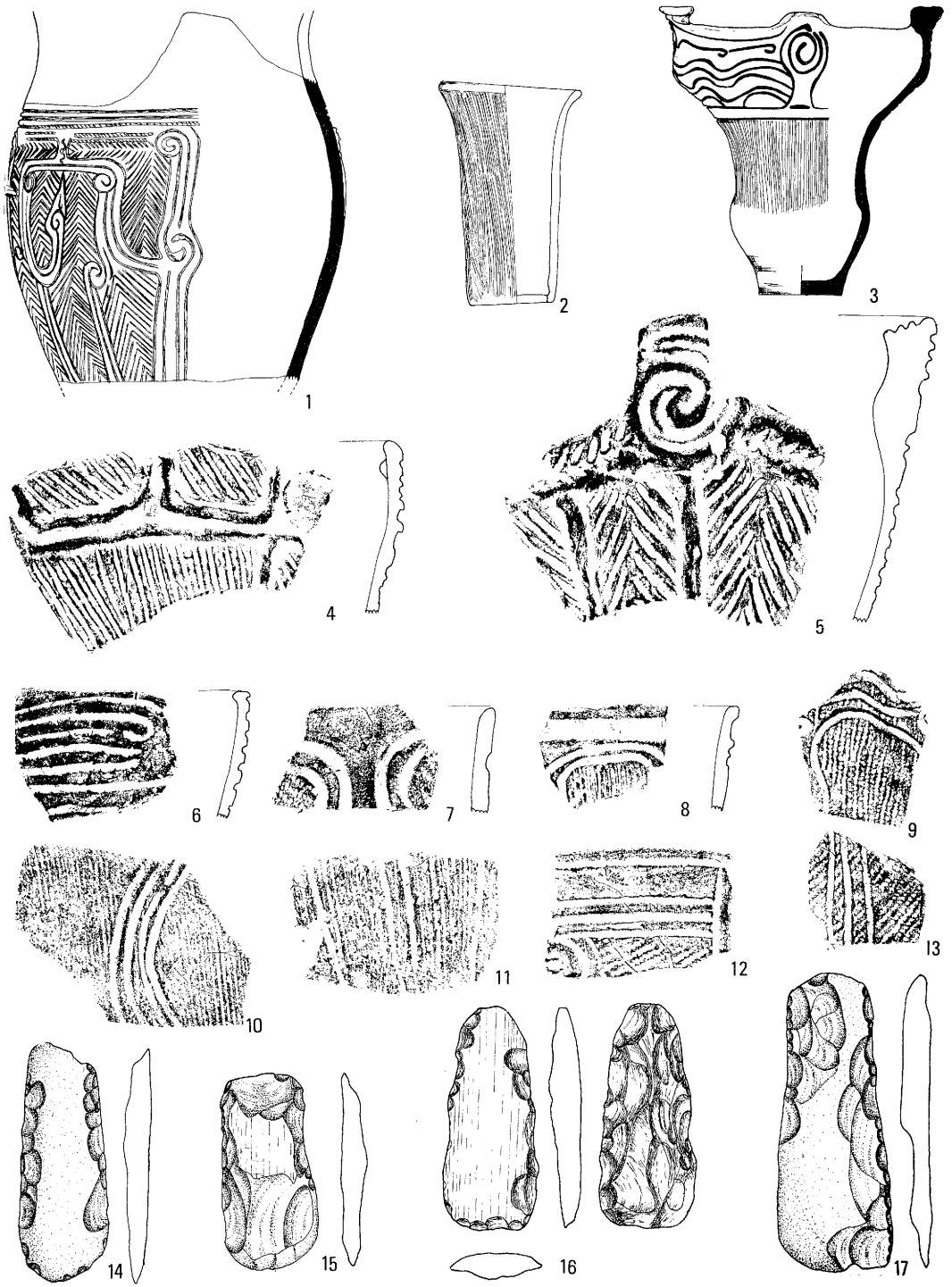
16は緑泥岩、他は硬砂岩である。 (福沢正陽)

12) 弥生時代の遺構と遺物 (第98, 99図)

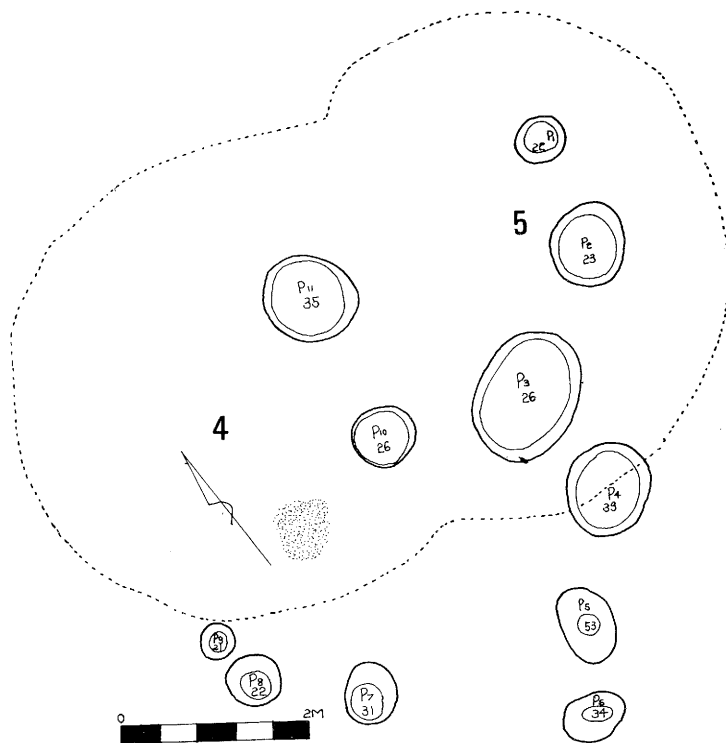
遺構 第4号、5号住居址の上部から南西部にかけて、焼土を伴った柱穴群が発見された。遺構面は赤色砂質土である。プランはまったく不明で、床面らしき固さもあまり顕著でないが、焼土を伴い、遺物も集中してみられたことなどから生活面の存在を考え、平地住居址としたい。

遺物(第97図) 土器のみで石器の出土はまったくない。4を除いて全て遺構出土のものである。

1は横につぶれて出土し、全体の半分ほどの破片から復元したものである。口唇部は強く外側に



第97图 北方 I 第11号住居址出土遗物 (1~3-1/6, 4~17-1/3)



第98図 北方I弥生時代遺構実測図 (S=1/80)

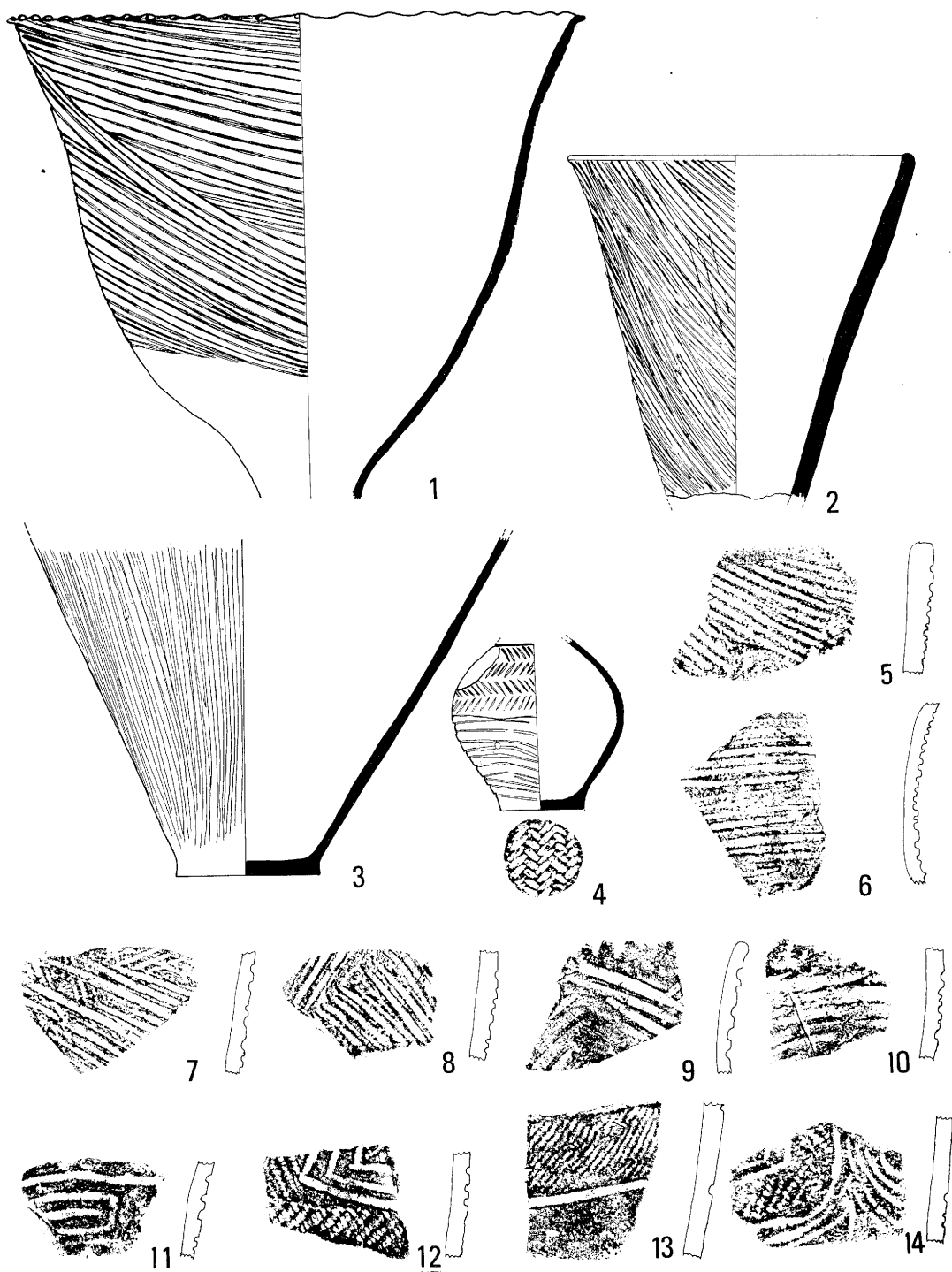
おれ、わずかに丸味を帯びる胴部から小さい底部へ収束する。石英粒をかなり含み、器面調整は丹念に行われ、固い焼きである。全体茶色を呈すが、外面は炭化物が全面にこびりついて黒色をしている。口唇部には連続指頭痕がみられる。文様は棒状工具で1本ずつ引いた斜走の条痕である。

2は底部を欠き、口縁部に向って直線的に開く。口唇は丸味を帯びる。文様はへら描きによる条痕が斜走する。1同様石英粒を含む。器壁は厚くて重い。黒褐色に固く焼かれている。器面に凹凸がみられるが器面調整時のものであろう。

3は底部が埋め込まれて出土した。石英粒はあまり含まない。明るい色に固く焼かれている。文様は刷け目状の擦痕が縦走する。

器形のおけるもの以外に多量に破片が出土している。文様の面からへら描きによる条痕を持つもの(5~10)、へら描きによると思われる沈線の文様を持つもの(11)と沈線および縄文で構成される文様を持つもの(12~14)とに大別できる。このような文様構成を持つものは庄ノ畑式^{*1}に類似する。

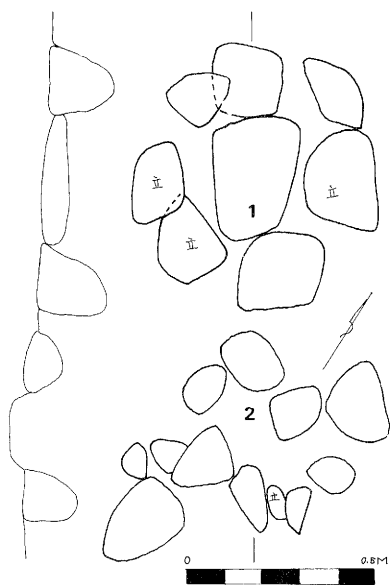
4は胴中央部の張る壺形土器で、薄手で明るく焼かれている。綱代底である。文様は棒状工具による沈線の綾杉文とへら描きによる条線が横走する。胴下半部にモミの圧痕がみられる。計測値は長さ6.2mm、幅3.8mm、長幅比1.63である。



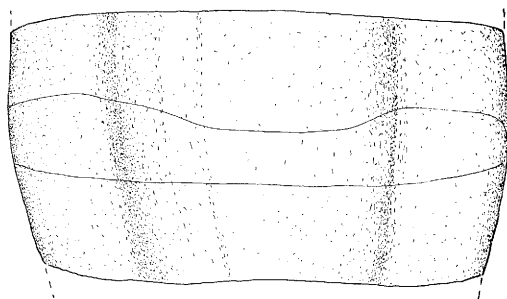
第99图 北方I 弥生时代出土土器 (1~4-1/4, 5~14-1/2)

やはり庄ノ畑式土器に比定できる。

※1 「岡谷市誌上巻」 岡谷市役所 昭和48年



第100図 北方I 配石 1・2 実測図(S=1/20) 第101図 北方I 配石 3 実測図(S=1/20)



第102図 北方I 配石 3 出土石皿(1/6)

13) 配石

(イ) 配石 1 (第100図)

第5号住居址の北東にあり南にある配石2と隣接する。中央に方形の平盤な石をおき、周りを自然石で円形に囲むものである。周囲の石には立石もみられる。配石に伴う掘り込みはみられない。大城林遺跡の配石3と類似する。遺物は曾利期の土器片が周囲から出土している。

(ロ) 配石 2 (第100図)

配石1に続いて南側に発見された。自然石をほぼ円形に配してある。中央部は若干くぼんでいる。中には立石もみられる。

(ハ) 配石 3 (第101, 102図)

配石2の南、第5号、7号住居址にはさまれて発見された。北側にはこぶし大位の石が転々と並び、その南に頭大位の自然石が列状に並んでいる。その石に乗かって石皿片(第102図)が発見された。石皿は花崗岩製である。

4 まとめ

約500㎡という狭い範囲の発掘調査であったが、縄文時代の住居址12基と配石址3基、弥生時代初頭の生活面を確認することができた。若干問題点を記して参考に資したい。

第1に遺跡の規模である。先述したが北にみられる八斗蒔遺跡に含まれるものである。桑畑の南の田に2×2mのグリットを8ヶ所設定して調査を行ったが、遺物はまったく出土しなかった。これからすると八斗蒔遺跡の南限に位置すると思われる。西は段丘崖まで続くとみるのが妥当であり東側はまったく調査することはできなかったが、かなりの住居址の存在を予想できる。

第2に住居址についてであるが確認された住居址は縄文時代中期のもので12軒を数える。そのうち第8号住居址とその西に一部確認された前期末葉の住居址を除く10基の住居址は中期後葉曾利IIないしIII式に属するものである。このように狭い範囲の中に時間的にそう差のない住居址が近接して、あるいは複合して発見されるということは、遺跡の集落立地の面で、住居址の構築に関し、何らかの規制があったのではないだろうか。

住居址のプランは楕円形(5, 8), 円形(2, 4, 10), 変五角形(7), 隅丸方形(1, 3, 6, 9, 11)がみられる。中期中葉の住居址は第8号であるが楕円形を示し、大城林遺跡と同様である。中期の住居址は円形を基調として、曾利期以降、徐々に隅丸方形に統一される傾向をみせている。

炉についても大城林遺跡でみられたと同様の傾向をみせる。第8号住居址は掘り込みもなく小形な石組み炉であり、曾利期になると掘り込みも段々と深くなって竪穴の石囲い炉に変わってくる。大城林遺跡でも指摘したが、その傾向は曾利II式以降、より強くなる。当遺跡における第6号住居址の炉址例はその代表的なものである。

住居址の中で炉の持つ意義は大きく、炉を中心として住居址内の間取りを考える所まできている。中期の炉は中央より片寄ってあるのが一般的で、その前方を入口と考えるのが妥当のようである。

炉と入口とを結んで、住居址の主軸としている。住居址の主軸方向即ち入口の方向は南に向くと一般にいられている。これについては神村透氏の最近の論文^{*1}に詳しい。それによると真南というものは1例もないが南の方がえらばれる傾向があるとされている。当遺跡の住居址をみると、南東から東南東に位置するものが多いが、第11号住居址はほぼ南を第4号住居址は東を、更に第2号住居址は東北東を向いている。

炉がどちらかに偏することは指摘したが、炉の占める位置からしてその住居址が縦長なのか横長なのか、住居址の間取りとも関係する問題と思われる。

円形プランの住居址の場合は問題ないところである。隅丸方形や楕円形のプランを示す住居についてのみ問題である。主軸の長さ副軸の長さを対比し、主軸の長い場合を縦長、反対を横長とする。これによって当遺跡の住居址をみると全て横長の住居址となる。やはり住居址の内部構造にも何らかの規制がみられるのではないだろうか。同時期の各地の遺跡との比較、時期別の対比など今後に残される問題は多い。

第3に出土土器についてである。当遺跡より発見された最も古いものは縄文前期末葉に位置する

もので、第8号住居址の西に確認された住居址の床面より出土したものである。これ以外には採集されていない。次に位置するものとして第8号住居址出土土器の一群がある。一応藤内期の前半に比定でき得る。他からはやはり出土していないが、上穂沢川の対岸の春日遺跡より、住居址が1基確認されているところから、ある程度当期の住居址があったものと思われる。

今回の調査では、井戸尻から曾利Ⅰ式期にかけての遺物はまったく発見されなかった。限定された地域の調査のためであろうか。大城林遺跡における曾利期の住居址のあり方から、上穂沢川沿岸において時代による集落の移動ないし、分村の可能性も考えられる。

当遺跡の主体をなす土器は曾利ⅡないしⅢ式に比定される一群のものである。器形をみると深鉢ないし甕形のものが多い。そしてこれらの土器は胴部に隆線を使って渦文つなぎの唐草文様を持つものが一般的である。曾利Ⅲ式になると、刷け目状文を持つ一群がでてくる。大城林遺跡でもみられた縄文を地文とする加曾利Ⅴ的要相をもつ土器も知られる。これれに続く縄文中期末葉の土器はまったく検出されていない。縄文後期の土器についても同様である。

その後当遺跡が占地されるようになるのは、条痕文土器を持つ人々によってである。

出土した一群の土器は庄ノ畑式あるいは北信の伊勢宮式に比定でき得るもので、これらの土器は静岡県の丸子式に極めて類似することは先学の教えるところである。大城林遺跡や北方遺跡よりこれに比定すべき土器が、かなりはっきりした形で確認できたことは、伊那谷における弥生時代開始時の解明にはたす役割は大きい。

住居址 種類	住居址											計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
打製石斧	3 ₂	10 ₇	10 ₆	24 ₁₀	14 ₅	11 ₈	7 ₅	5 ₂	6 ₃	5 ₂	10 ₆	105
磨製石斧		3 ₂	1	1		1					1	7
石 匙		2		1					1			4
石 錘						1						1
石 皿												
凹 石									1			1
乳棒状石器								1				1
横刃形石器			2	2	1					1		6
石 鏃												
スクレーパー												
そ の 他							1					1
磨 石			2	1				1 _{石棒}				4
計	3	15	15	29	15	13	8	7	8	6	11	130

第103図 北方Ⅰ 住居址別石器出土表

打製石斧小文字は完形品の数である。

庄ノ畑式土器を持つ文化がはたして農耕を持っていたかは、大変重要な問題であり、庄ノ畑遺跡の報文の中でも大きく取りあげられているところである。

大城林遺跡と当遺跡よりモミの圧痕のある土器が2例発見されており、更に当遺跡の立地条件からもその可能性は十分ある。しかし、生産道具としての石器の組成とも関係する所で、今語の課題である。

第4に石器についてであるが、庄ノ畑式土器に確実に伴うと考えられるものはないので、縄文時代中期の住居址出土のものに限って述べることにする。

住居址より出土した石器の種類別数を表にしたのが第103図である。やはり打製石斧の卓越が知られる。石鏃はまったく住居址からは出土していない。石皿は配石から1点出土したのみである。石器の種類別の数量比は大城林遺跡の結果とほぼ一致する。 (吉村 進)

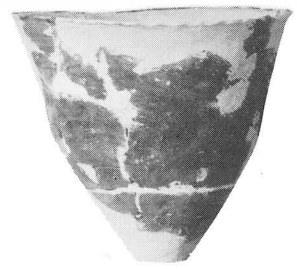
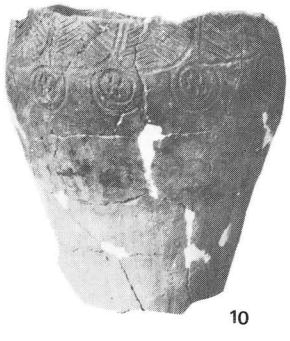
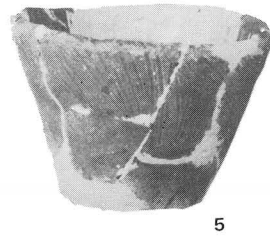
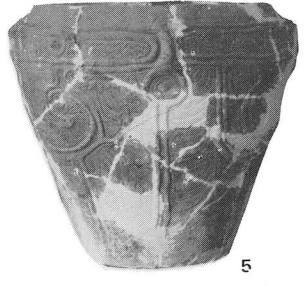
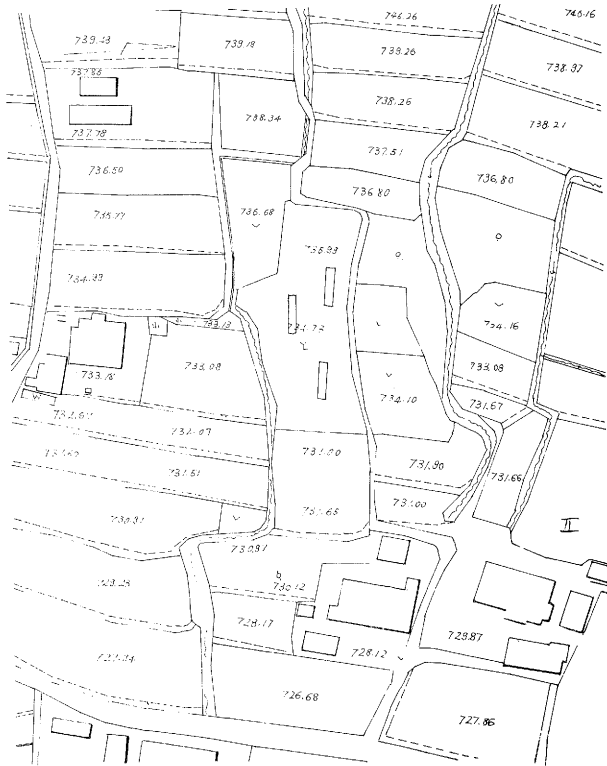


写真54 北方I遺跡出土土器

第3節 北方II遺跡



第104図 北方II遺跡地形図 (S=1/2000)

50~60cmあり、砂質ローム層にいたる。

分布調査の折、時期不明の土器片を2片採集したが、今回の調査ではまったく遺物を検出することはできなかった。
(伊藤 修)

第5節 湯原遺跡

1. 位置及び遺跡環境

駒ヶ根市赤穂7524番地南割地籍に所在する。北方I遺跡の西を走る南割と中割を結ぶ主要道路と大城林遺跡の西を走る上穂本線とが交叉した南側に位置する。

遺跡のすぐ北は赤羽根川が、約50m南には鼠川がある。その間を小支流が流れ遺跡はそれに面したやや南斜面にある。

北方I遺跡と同様の地質をみせ、白色砂質土の上に黒色砂質土が乗っている。これから南にかけ

1. 位置及び遺跡環境

駒ヶ根市赤穂7144番地南割地籍に所在し、北方I遺跡の南西段丘崖上にある。

北は上穂沢川、南には赤羽根川が流れ、これから山麓地帯にかけてはたびかさなる氾濫によって土砂が堆積し、当遺跡付近では浅いが、山麓地帯ではローム層の上に2m程みられる。

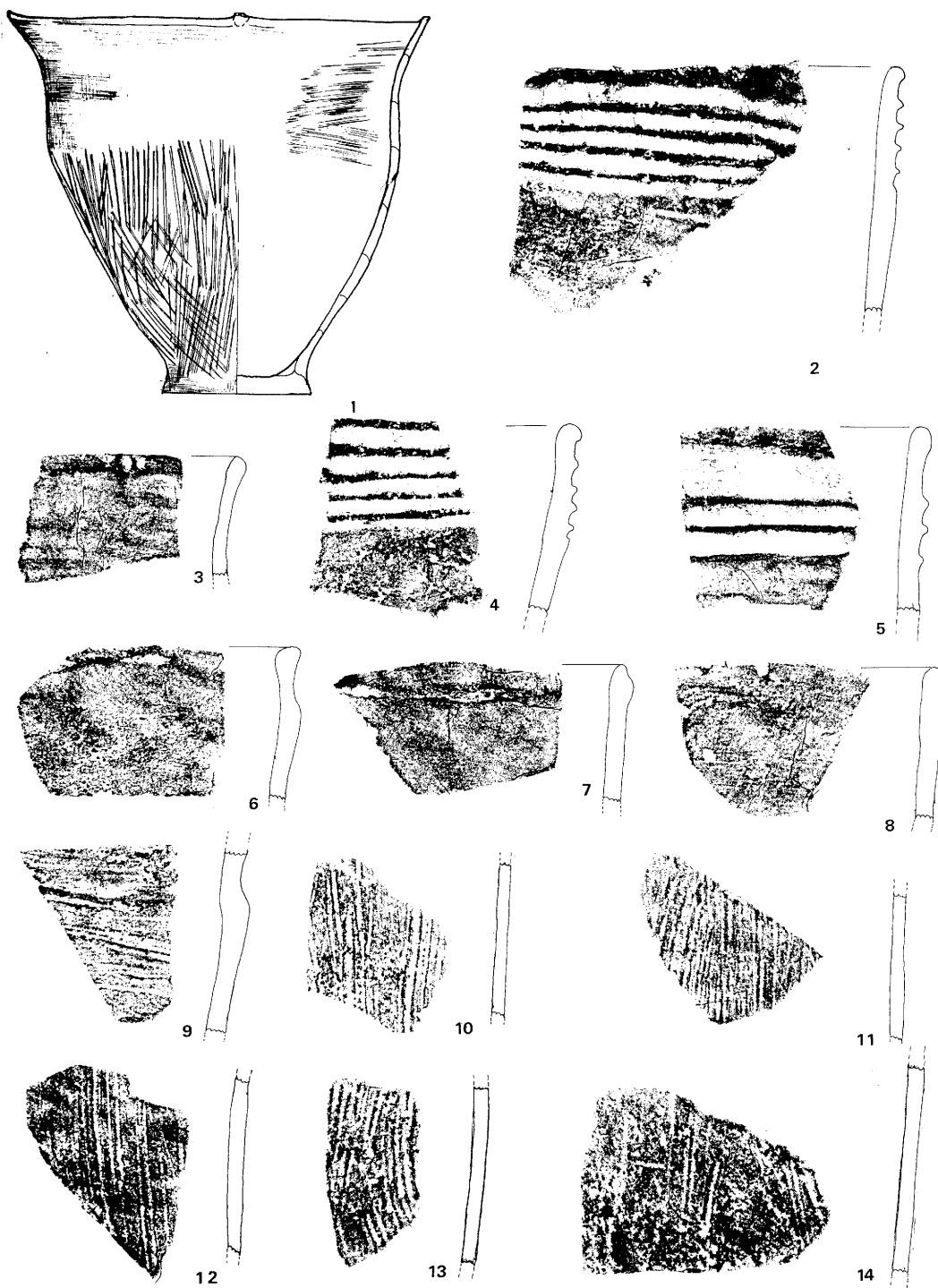
遺跡の北と南には上穂沢川の小支流がある。

標高は730m強である。

2. 調査概要

付近は水田となっており、桑畑に2m×10mのトレンチを3本設定し、2m毎に区切って適宜調査する。

表土は小礫まじりの黒色土層で、



第106图 湯原遺跡出土土器(1-1/4, 2~14-1/2)

b 文様を持つもの(2, 4, 5)

口縁部に数条の隆線がめぐるものである。隆線は粘土紐の貼り付けなどによるものでなく、ヘラ状工具による削り出し手法によるものである。器面調整も良く固く焼かれている。胎土中には砂などはあまり含んでいない。いずれも深鉢と思われる。

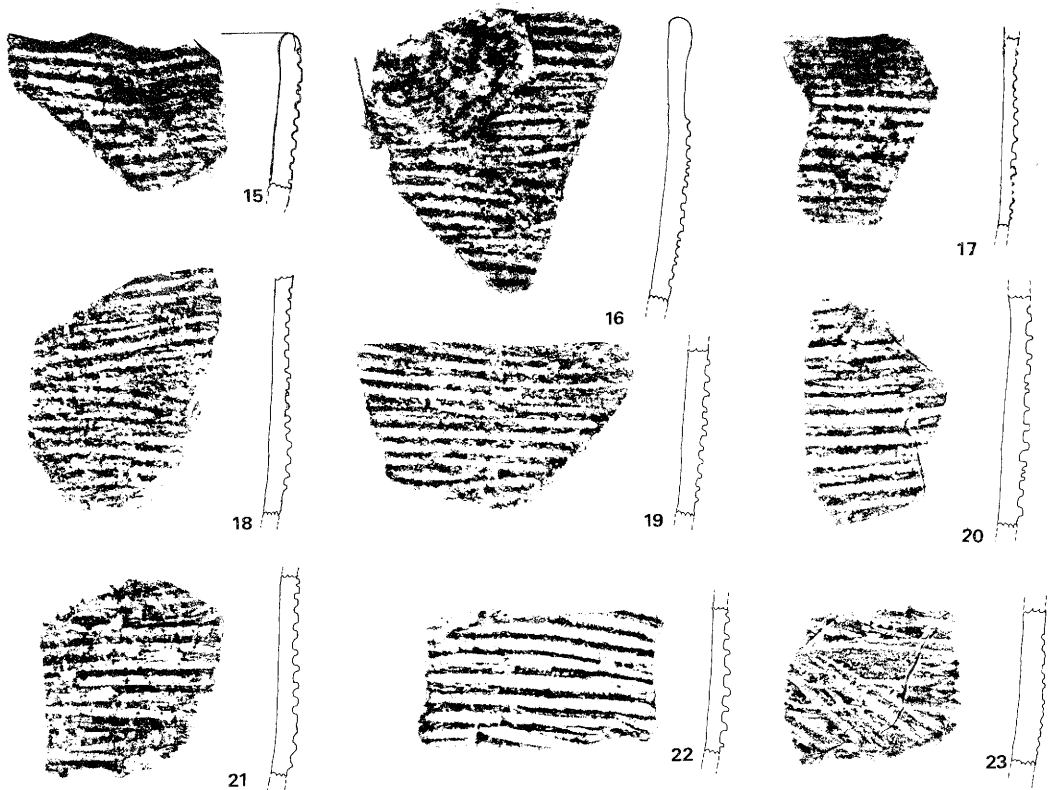
c 擦痕を持つもの(9~14)

9を除き縦走する擦痕が発達するものである。9は段を持つ。全体に茶色ないし黄褐色に焼かれておる。胎土はち密で混合物はほとんど含まない。このような土器は擦痕のみからなるものと2などの胴部破片のものと知られるが、両者は区別できない。

d 条痕を持つもの(第107図)

出土土器の中であらい条痕が横走する一群の土器がみられる。器形は知り得ないが、深鉢と思われる。胎土中に石英粒を含むが、多量のもの(20~22)と少ないものがあり。焼成の色にも両者には違いがみられる。多量に含むものはレンガ色に、他は茶色を呈している。更に施文手法にも違いがみられ、20~22は貝殻条痕、他は棒状工具や半截竹管による条痕である。

15, 16の口唇上部には連続指頭痕がみられる。



第107図 湯原遺跡出土土器(1/2)

4種にわけて土器をみてきたが、これらの土器相互の間にはまったく層位の出土は認められず一括出土である。

さてこれらの土器の所属時期であるが、a～c種は永式土器^{※1}に比定でき得ると思われる。永遺跡においては変形工字文土器や網状浮線文を持つ土器が知られているが、当遺跡においては該当する土器は検出されなかった。

市内において当時期の土器を多量に出土する遺跡としては蟹沢^{※2}と荒神沢遺跡^{※3}がある。どちらも表面採集によって採集されたものである。両遺跡においては網状浮線文の発達がみられている。土器構成の相違は時代的なものかは不明である。

d類の条痕文土器は東海地方との関係を考えたい。五貫森式土器あるいは檜王式土器に比定できるとされる。永遺跡においても伴出が知られている。a、c類の中にもこれらに類似する土器があるかも知れないが定かでない。

※1 永峯光一「永遺跡の調査とその研究」石器時代9号 昭和44年

※2 蟹沢遺跡は市内赤穂上赤須にあり、辻沢川が中田切川に流入する所にある。未発表資料であるが辻沢遺跡群研究会の好意でみせていただいた。今夏には「辻沢遺跡群」なる小冊子が刊行される予定でその中に所収される。

※3 荒神沢遺跡は市内赤穂小町谷にある。上穂沢川による低位段丘に立地し、荒神沢が上穂沢川に注ぐ所である。川の右岸(対岸)は縄文晩期の好資料を出土する如来寺遺跡である。遺物は田中清文が所蔵している。

4. まとめ

ほんの限定された範囲からのみの出土であったが、集中的に遺物が出土したところから、単なる遺物散布地でなく、単期間にせよ生活が営まれたものと考えられる。

縄文時代末葉という比較的資料の少ない時期の土器の出土をみたことは、今後の縄文時代から弥生時代への移行期の研究にはたす役割は大きい。大城林、北方I遺跡より発見された庄ノ畑式土器との関連とも考え併せて今後の研究の参考に資すること大と思われる。(以上 吉村 進)

第5節 射 殿 場 遺 跡

1. 位置及び遺跡環境

駒ヶ根市赤穂8130番地南割地籍に所在する。大城林遺跡の東段丘下の道を南へ、如来寺川を渡った段丘上に広がる遺跡である。北は如来寺川が流れ、南は琴ヶ沢によって低湿地が作られ、この両河川にはさまれた一帯は現在も低地湿となって水田に利用されている。

当遺跡の南、福岡十二天地籍は縄文時代後期の遺跡で上伊那における標式遺跡として十二天式と呼ばれ知られている。

遺跡の東端、如来寺川を見下ろす所に10×10mほどの土壇がきれいに残っている。現在その上は



第108図 射殿場遺跡地形図(S=1/2000)

墓地として利用され、周囲は森林となっている。そのものの時代、性格などは不明であるが、地名はこれに由来するものである。

2. 調査概要

昭和28年の友野が調査の折、縄文時代中期の土器片が採集されている。遺跡の真ん中を通る道路の北側はローム層まで削土されており、今回の調査は南側のみであった。2×10mのトレンチを3本東西に設定し、2m毎に区切って適宜調査を行った。表土は浅く耕作土が5～10cmで固いローム層に達する。付近の状態から旧地形は尾根状をなしていたと思われ、かなり南斜傾のところから畑を造成するさいに削って土を移動していると思われすでに破壊された遺跡である。(福沢正陽)

第6節 南原遺跡

1. 位置及び遺跡環境

駒ヶ根市赤穂7820-4番地南割地籍に所在する。湯原遺跡の南約500mにある。この付近においては塩木、春日、北方地籍と続く段丘はほとんどみられなくなる。北には如来寺が流れている。

南は福岡と南割との境界をなす緑地帯となり、これから山麓一帯にかけては大きな岩が露出している。付近は水田となっておる。



第109図 南原遺跡地形図 (S=1/2000)

2. 調査概要

付近がほとんど水田となっているため、残された畑に2m幅のトレンチを3本南北に設定した。層序は耕作土(黒色土)30cm, 暗褐色土40cmでローム層に達する。

昭和44年の県の分布調査のさい縄文時代中期の土器片を採集しているが今回の調査ではまったく遺物の出土はみられなかった。

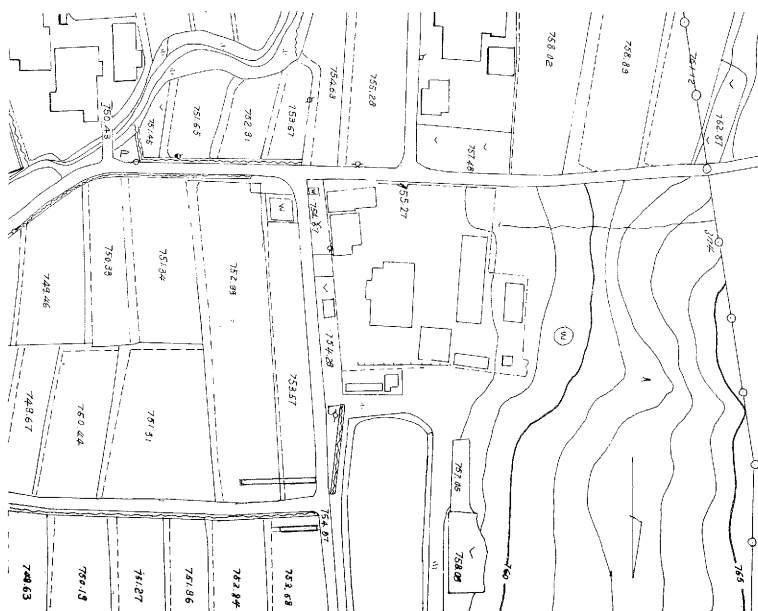
緑地帯をへだてた南, 大徳原地籍からは縄文時代中期, 弥生時代後期の遺跡が確認されている。遺跡の主体は森林から南にかけてと思われる。

第7節 横前新田遺跡

1. 位置及び遺跡環境

駒ヶ根市赤穂7742番地南割地籍に所在する。木曾山脈の山麓, 上穂沢川, 如来寺川の上流, 扇状地の扇頂部近くにある。扇中央部から扇端部にかけてV字谷を形成するこれらの河川も山麓地帯では小さな河川程度である。しかし大雨が降ると深くきざまれた山岳地帯から大量の土砂が押し出して来る。最近昭和39年, 42年にも洪水があり, このあたりの家屋や水田にも相当量の土砂が流れ込んだ。

中央道は遺跡の西方100m, 林の中を南北に通る。



第110図 横前新田遺跡地形図(S=1/2000)

2. 調査概要

かつて横山氏宅の東の水田より縄文時代中期の土器と炉址が発見されているとのことで、その水田を調査することとしたが、大部分が休耕地を利用した養魚地となっているため、道路の両側に2m幅のトレンチを2本東西に設定した。

たびかさなる氾濫によってローム層の上に2m以上の土砂が堆積している。地層は耕作土30cm、暗褐色砂質土25cm、茶褐色砂礫土45cm、黒色砂質土40cm、褐色砂礫土35cm、黒色土20cm、でローム層に達する。

遺物は最下層の黒色土より出土している。

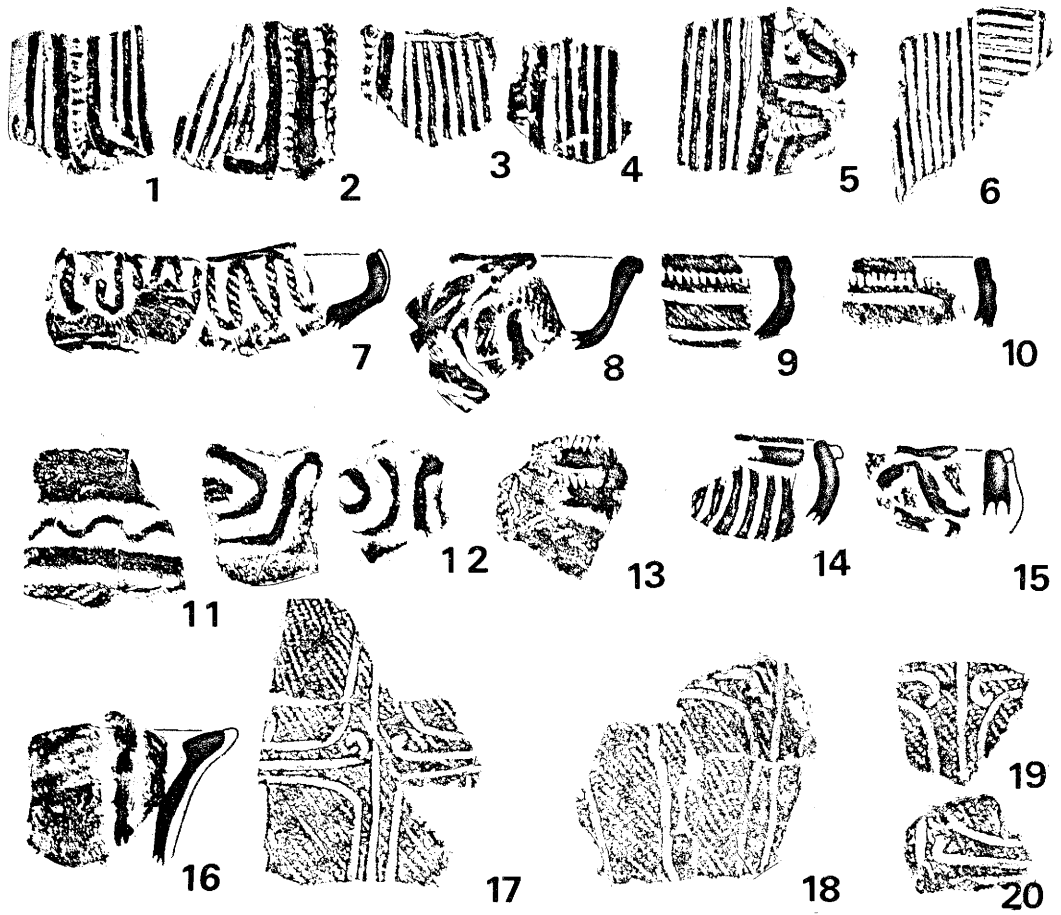
3. 遺物 (第111図)

非常に限定された地域の発掘のため、遺物のみで遺構の検出はできずに終わってしまった。

出土した遺物は土器のみで石器の出土はない。

出土土器は全て加曽利E式のものである。1～6は諏訪地方の曾利I式に発達する縦位の沈線を施したものである。口縁部破片は粘土紐を使って加飾したもの(7, 8)、太い沈線を使ったものなどがある。17～20は縄文地に沈線が走るもので関東地方の加曽利E的様相を持つものである。

(北沢雄喜)



第111図 横前新田遺跡出土土器 (1/3)

発掘調査協力者名簿 (順不同)

土屋嘉之, 西村彦久, 倉田源重, 大野吉五郎, 駒場和市, 小町谷元, 和田武夫, 倉田日出平, 下村修, 小林貞爾, 小町谷すみ子, 田中春子, 堺沢かめよ, 堺沢あさよ, 土屋貴美, 坂本つま子, 堺沢いしゑ, 堺沢里江, 堺沢里美, 竹花文江, 小松原利子, 尾形きくみ, 大沢美枝子, 小町谷恭子, 原田まつゑ, 福沢武子, 塩沢繁子, 塩沢まさよ, 北村和子, 小池しげ子, 林愛子, 倉田正義, 池上ちとし, 尾形まさよ, 小町谷節子, 駒場良子, 芦部喜一, 影山堅二, 小松原いと子, 小平甚三, 米沢弘, 米沢たつえ, 松崎賀訓, 吉沢祥子, 戸枝民男, 山本修司, 中山泉, 清水忠良, 小島孝夫, 池上治, 長野修司, 竹村一二三, 下平啓子, 中城百合子, 下平まち子, 浜崎義弘, 浜崎孝昭, 北原早苗, 宮下美恵

昭和47年度分第2次発掘調査

塩木遺跡

凡 例

1. 今回の調査は昭和47年度に実施されたほ県営場整備事業大田切地区に伴うものである。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により、県営ほ場整備大田切地区埋蔵文化財調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和48年度）にまとめることが要求されておるため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はでき得る限り簡略し資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 遺構関係の図面は吉村進が作図した。焼土はドットで表わしてある。柱穴の深さは床面からの深さをcmで表わしている。縮尺は各図に示してある。
5. 遺物の図版作成は吉村進が担当した。
6. 写真撮影は福沢正陽、吉村進が担当した。
7. 本文執筆は福沢正陽、吉村進、吉沢文夫が分担し、文末に文責を記した。
8. 本報告書の編集は吉村進があたった。
9. 遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。

目 次

凡 例	146
目 次	147
挿 図 目 次	147
写 真 目 次	147
第 I 章 発掘調査の経過	
第 1 節 発掘調査の経緯	148
第 2 節 調査会の組織	148
第 3 節 発掘作業経過	148
第 II 章 遺跡の位置及び環境	151
第 III 章 発掘調査	
第 1 節 調査概要	151
第 2 節 遺物及び遺構	151
第 IV 章 ま と め	158

挿 図 目 次

第 1 図 塩木遺跡地形図	150
第 2 図 第 1 号住居址実測図	152
第 3 図 第 1 号住居址出土遺物	153
第 4 図 第 2 号住居址実測図	154
第 5 図 第 2 号住居址出土土器	154
第 6 図 第 3 号住居址実測図	155
第 7 図 第 4 号住居址実測図	156
第 8 図 土壌実測図	156
第 9 図 縄文時代後期の土器	157

写 真 目 次

写真 1 発掘風景	149
写真 2 塩木遺跡東より望む	150
写真 3 遺構北より望む	152
写真 4 第 2 号住居址	154
写真 5 第 4 号住居址	155

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

県営ほ場整備事業大田切地区工区内の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託したい旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市当局と市教育委員会とが協議した結果、市立博物館を中心に、県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

8月23日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結、また市長と調査会との間で再委託契約を行った。一方、県教育委員会に発掘調査の着工について連絡し、指示を得たので友野良一氏を団長とする調査団を編成し、8月24日から調査を開始した。

第 2 節 調査会の組織

○ 県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

会 長	北 沢 照 司	(市教育長)
理 事	木 下 義 男	(市文化財調査委員会委員長)
	下 村 忠比古	(市文化財調査委員会副委員長)
	吉 沢 康 道	(市立博物館長)
監 事	池 上 重 雄	(駒ヶ根市文化財保存会会長)
	気賀沢善右衛門	(駒ヶ根郷土研究会会長)
幹 事	小 池 金 義	(市教育次長)
	福 沢 正 陽	(市博物館学芸員補)
	武 蔵 法 子	(市博物館)
	細 田 繁 子	(")

○ 調査団

団 長	友 野 良 一	(日本考古学協会会員)
調査員	吉 村 進	(明治大学学生)
	吉 沢 文 夫	(長野県考古学会会員)
補助員	和 田 武 夫	(" ")
指 導	桐 原 健	(県指導主事) (役職名は調査時のものである)
	" 丸 山 敏一郎	(")

第 3 節 発掘作業経過

8月24日(木) 曇 本日より調査に入る。遺跡は段丘の下と上とにあり、下は雑草がおい茂っているため、草刈りを行う。

午後より下の段へグリットを設定し、試掘する。黒色土層は深く2mほど堆積がみられ、ローム層に達する。遺物は黒色土層0.8~1mの間にみられる。

8月25日(金) 晴 昨日に続きグリット掘りを行う。南側を主として調査を行うも縄文時代中、後期の土器片がわずかに出土したのみである。

8月26日(土) 雨 作業は休み遺物整理。

8月28日(月) 小雨 下の段北西部表土下80~90cmで縄文時代中・後期の土器がかたまつて出土する。周囲を拡張精査するも、床面らしきタタキや、焼土など確認できなかった。更にローム層まで掘り下げたが、遺物は下層からはまったく検出されなかった。下の段は遺物は発見されるも遺構は確認できず、明日から上の段へ調査を進めることとする。

8月29日(火) 晴 上段水田部分へグリットを設定する。東南隅より市松様に表土剥ぎを行う。耕土30cm位でローム層に達する。各グリットとも縄文中期の土器片がわずかずつ出土する。

8月30日(水) 晴 昨日同様表土剥ぎを行う。一部土壌らしき落ち込み発見される。午後は作業を休む。

8月31日(木) 晴 昨日発見された落ち込みの調査と周囲の拡張を行う。更に北へ表土剥ぎを進めると縄文時代中期の土器片が集中して出土する。住居址の可能性あり。

9月1日(金) 晴 拡張を行った土壌群の掘り込みと昨日の遺物集中出土地点の調査を行う。一部柱穴らしきピットが発見されたので第1号住居址とする。

9月2日(土) 曇 土壌群の完掘と第1号住居址の調査を行う。炉址を発見するも壁はほとんど確認できない。

9月4日(月) 晴 第1号住居址の完掘に全力をあげる。表土剥ぎを北へ進めると4mほどの方形の落ち込みを発見第2号住居址とする。

9月5日(火) 晴 第2号住居址の調査にはいる。更に西の水田にもグリットをのばし調査を始める。

9月6日(水) 晴 第2号住居址の完掘。新たに第3号、第4号住居址を確認する。

9月7日(木) 晴 第1号、2号住居址の清掃と写真撮影、第3号、4号住居址の精査を行う。第3号住居址はほぼ完掘する。

9月8日(金) 晴 第4号の完掘、清掃終了後全体写真撮影。本日を持って発掘作業を終了する。

発掘調査を実施するにあたり、調査団員、土地改良事務所関係者、地主の方々、地元協力者をはじめ、多くの方々のご協力とご配慮によって、ここに初期の目的を果し調査を終了することができました。心から感謝の意を申し上げる次第です。

(福沢正陽)



写真1 発掘風景

第II章 遺跡の位置及び環境

当遺跡は駒ヶ根市赤穂3916,7番地北割地籍に所在する。南には鼠川が東流し、北は一ノ沢が流れる。遺跡は北方、春日と続く段丘の上と下とにまたがる。段丘の比高は2～4mを測ることができる。

鼠川の沿岸には遺跡は比較的少なく、しかも下流に集中している。当遺跡付近では北側段丘上に広がる久保、女体遺跡が知られるだけである。遺跡の東方川の中流付近に遺跡が少ないのは開発が早く水田となって確認できなかったことも十分考えられることである。

北に続く段丘上に塩木館と呼ばれる所があり、現在も水田の中に土塁が残っている。更に塩木は光前寺道が通っていた所で休み堂跡なども近くにある。(福沢正陽)

第III章 発掘調査

第1節 調査概要

遺跡は段丘の上と下とにまたがる。下の段は畑の南西隅を基点とし、北方向に2m毎に1, 2, 3, 東方向にa, b, c, 上の段は南東を基点とし、ほぼ北方向に1, 2, 3, 西方向にイ, ロ, ハとグリットを設定し、適宜グリットを調査し遺構確認によってその周囲を拡張する方法を採用した。(福沢正陽)

第2節 遺構及び遺物

遺構は全て上の段水田下に発見された。

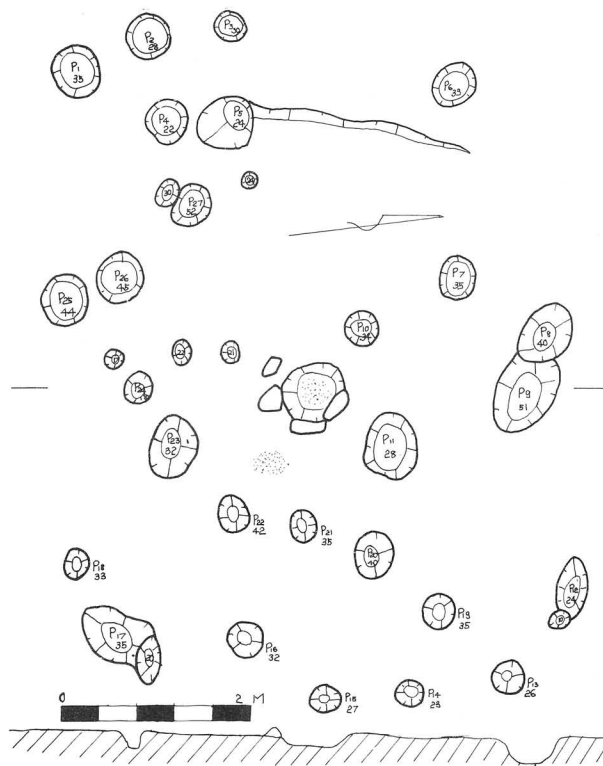
1. 第1号住居址(第2, 3図)

遺構 上段水田中央に発見された。西側に一部壁らしきものがみられるほかは、まったく確認できなかった。耕作中に破壊されたものと思われる。プラン及び規模はほとんど不明である。ほぼ中央に床面を一部掘り込んだ石組み炉と東に焼土がみられる。炉石は一部残すのみで抜き取られている。ピットは数多く検出されている。柱穴の数は不明である。東側に2重にピットがみられるが、住居址の建て替えがあったのではないだろうか。

遺物(第3図) 遺物は少ない。土器は全て破片で器形を知り得るものはない。1は大形の甕形土器の口縁部で波状をなし、ハート様の文様を表出する。その下は隆帯の懸垂文を施し、内部は沈線が綾杉状に埋める。2, 3, 4は縄文地に沈線による直線あるいは蛇行の懸垂文が走るものである。5, 6は縄文を地文としないが同様である。

1は曾利II式に類似する。他は曾利III式に比定されるが、関東地方の加曾利EII式に類似する。

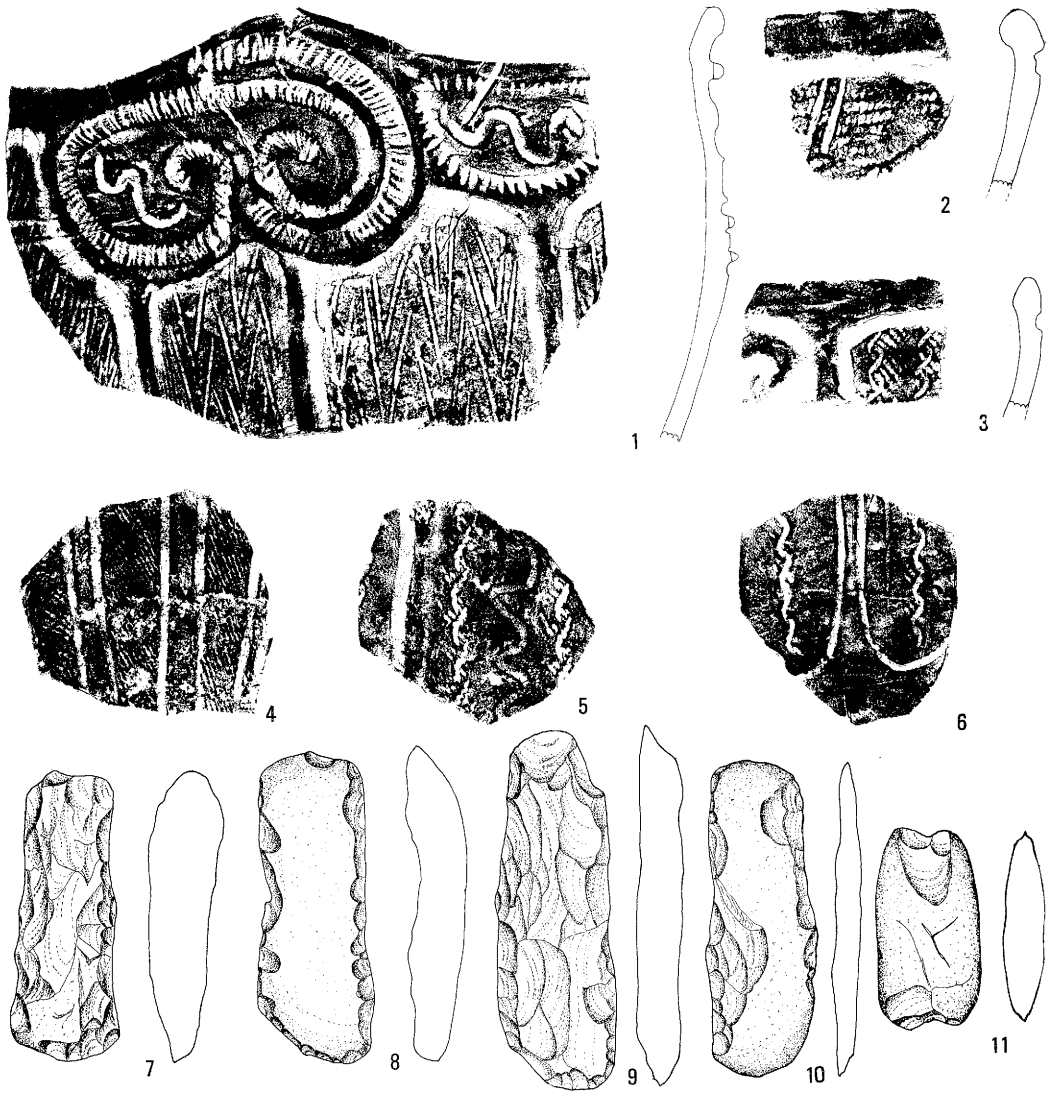
石器は打製石斧(7～10)と石錘(11)がある。打製石斧は自然面を残すもの(8, 10)とそうでないものがある。石材は硬砂岩である。(吉沢文夫)



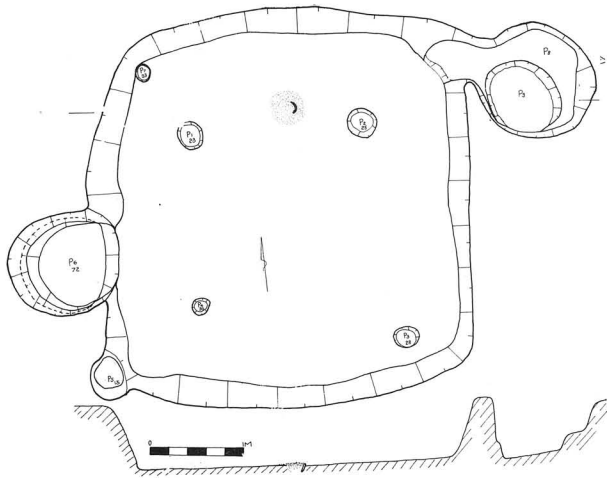
第2図 第1号住居址実測図(S=1/80)



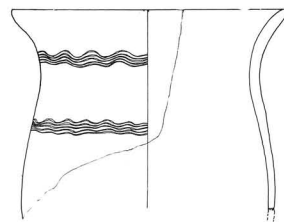
写真3 遺構北より望む



第3图 第1号住居址出土遺物 (1/3)



第4図 第2号住居址実測図(S=1/80)



第5図 第2号住居址出土土器(1/4)

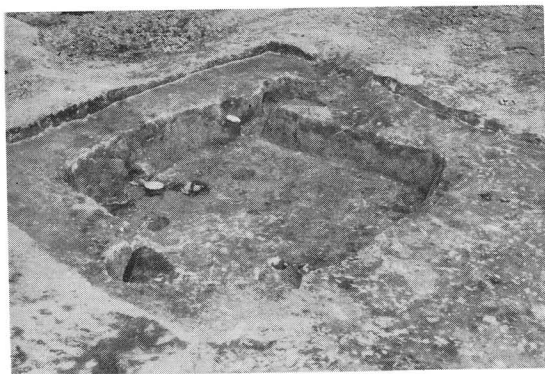


写真4 第2号住居址

2. 第2号住居址(第4, 5図, 写真4)

遺構 第1号住居址の北東に発見された住居址である。

プランはやや胴の張った方形で南北4.3m, 東西4.1mの大きさである。西と北東部に大きな深いピットを持つが住居址に付属するものかは不明である。

掘り込みは深く壁高は約70cmを測る。床面は固く良好である。

柱穴は4本である。

炉址は住居址中央北寄りP₁とP₂のほぼ中間に位置し甕形土器の口縁部(第5図)が

3分の1ほどが埋められている。焼土は厚く充満する。

遺物(第5図) 遺物は埋甕炉に使用された甕形土器以外はまったく出土しなかった。頸部と胴上半部に楡描きの波状文が施される。弥生時代後期中島式に比定できる。(福沢正陽)

3. 第3号住居址(第6図)

遺構 第2号住居址の北, 10mに発見されたものである。東側は開田によって破壊されている。

プランは隅丸方形で大きさはほぼ南北5m, 東西は不明である。壁高は西で8cmを測る。床面は平坦で固い。ピットは10ヶ検出されている。柱穴は4本を基本とすると思われる。ピット以外は内部施設は持たない。

遺物は表土中より縄文時代中期の土器片がわずか出土しただけで、遺構に伴う遺物はない。

住居址の所属時期は不明である。
なお、住居址西壁外南に径1.3mの浅い円形のピットがある。内部には小ピットがみられる。遺物の出土はまったくない。住居址に付属するものかどうかは不明である。(吉村 進)

4. 第4号住居址 (第7図, 写真5)

遺構 第3号住居址の南西に発見されたものである。西及び北では壁高5cmをみるが、南、東ではない。床面は固く良好である。

ピットは数多く検出されたが、柱穴は不明である。北東に張り出し状にカマドラしきものが発見された。遺構に伴うものかは不明。

第3号住居址同様、直属する遺物はまったく出土していない。(吉沢文夫)

5. 土壇 (第8図)

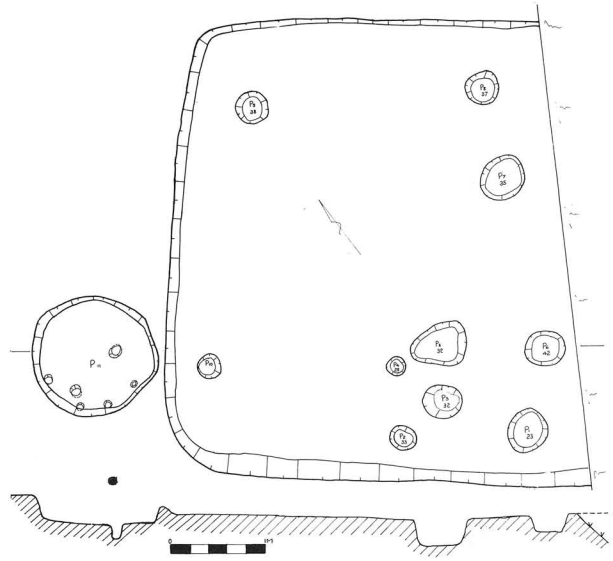
第1号住居址の南に不規則なピットが多く発見された。一応土壇群として報告しておきたい。

遺物は縄文中期加曾利E式の土器片がわずかながら中より発見されている。(吉村 進)

6. 縄文時代後期の遺物 (第9図)

発掘作業経過の中でふれたが、下の段より縄文時代後期の土器がかなりまとまって出土している。遺構は検出できなかった。土器の割れ口は磨滅しているものが多い。

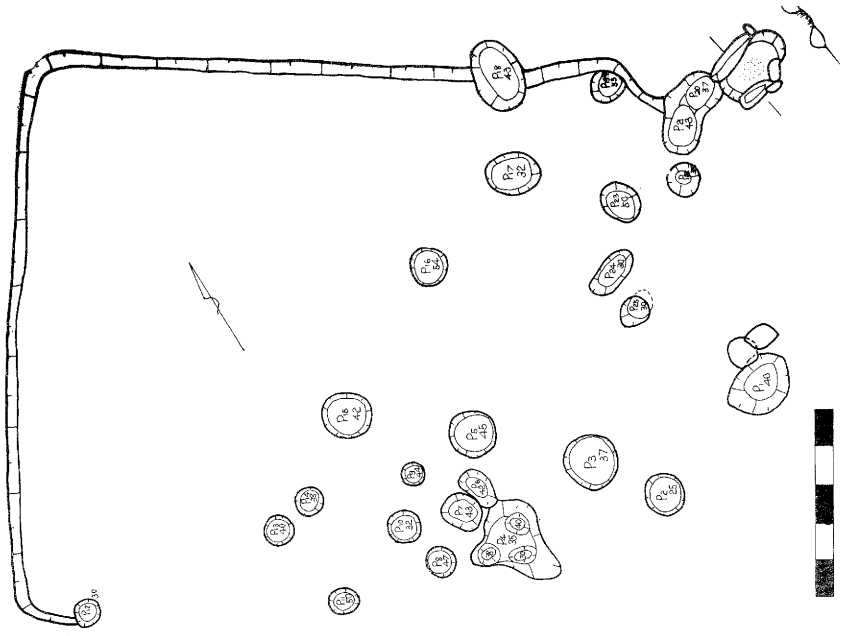
出土土器は、後期初頭から中葉にかけてのものである。全体的にやや薄手造りとなるが、胎土は中期の土器とそうかわりはみられない。器面調整は丹念に行われている。



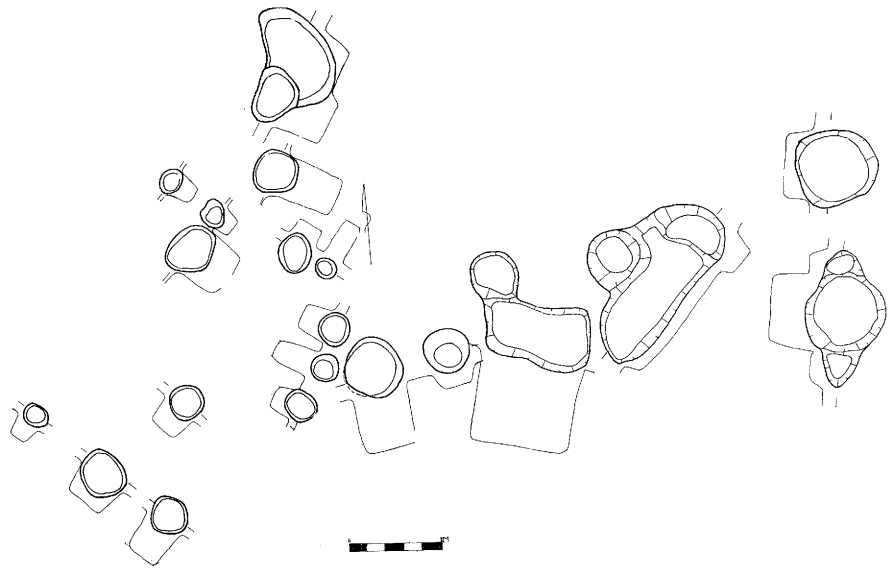
第6図 第3号住居址実測図(S=1/80)



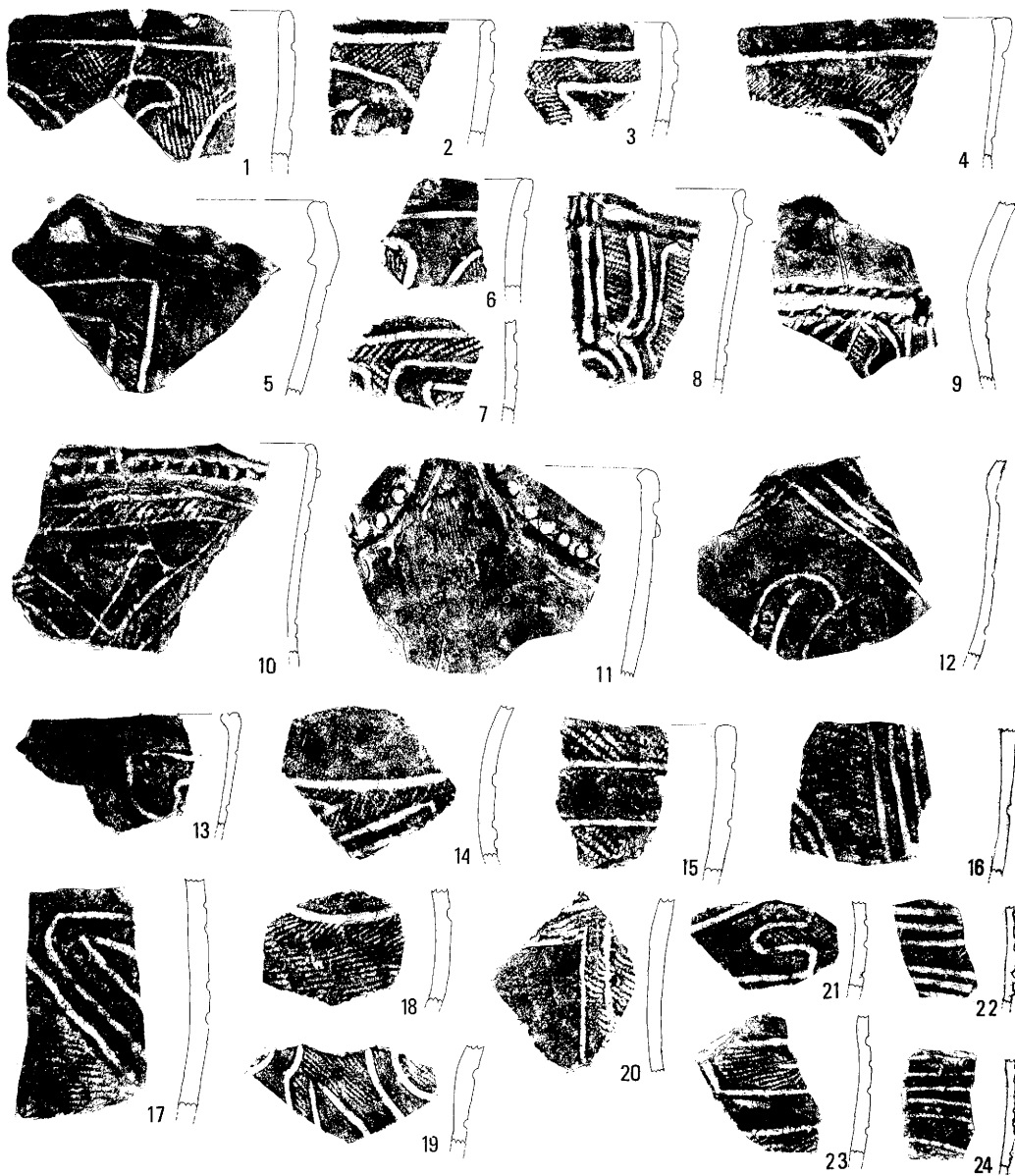
写真5 第4号住居址



第7图 第4号住居址实测图 (S=1/80)



第8图 土壤实测图 (S=1/80)



第9図 縄文時代後期の土器 (1/3)

文様は磨消縄文を主としたものである。8～10には細い粘土紐の加飾がみられる。5，8，10のように波状の口縁をなすものや小突起を呈すものもみられる。

5，12，16，19，20は称名寺式，22～24は加曾利B式他は堀ノ内式に比定できるのであろう。

(吉村 進)

第Ⅳ章 ま と め

当初予想していた下の段には遺物のみで、遺構は検出できなかったが、縄文時代後期という、当地方においては比較的資料の少ない時期の遺物を採集できたことは貴重であった。遺跡は水田となっている東側に広がるものと思われる。

段丘上は縄文時代中期の住居址1基と土壙群、弥生時代の住居址、それと時期不明の住居址2基を検出することができた。時期不明の2軒の住居址は比較的新しい時期に属するものではないかと思われる。
(吉村 進)

発掘調査協力者名簿(順不同)

倉田正義, 倉田日出平, 小町谷元, 松崎文徳, 長谷部重一, 土屋嘉之, 大野吉五郎, 福沢二郎, 池上ちとし, 福沢みのる, 倉田千里, 倉田八重子, 小町谷春子, 倉田源重

昭和48年度分発掘調査

富士山・北原遺跡

凡 例

1. 今回の調査は昭和48年度に実施された県営ほ場整備事業大田切地区に伴うものである。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により、県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はでき得る限り簡略し、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 遺構関係の図面は吉村進が作図した。焼土はドットで表わしてある。住居址内埋葬は○で表示し、ウメ（正位の埋葬）と記してある。柱穴の深さは床面からの深さをcmで表わしている。縮尺は各図に示してある。
5. 遺物の図版作成は吉村が担当した。
6. 土器の復元は和田武夫が担当した。
7. 写真撮影は吉村が担当した。
8. 本文執筆は、調査員が分担した。それぞれ文末に文責を記した。
9. 本報告書の編集は吉村があたった。
10. 遺物及び実測図類は市立博物館に保管してある。
11. 今回の北原遺跡の調査では、遺物、遺構はまったく検出されなかったため、作業経過の中でふれることとし、改めて項は設けていない。

目 次

凡 例	160
目 次	161
挿 図 目 次	161
写 真 目 次	162
第 I 章 発掘調査の経過	
第 1 節 発掘調査の経緯	163
第 2 節 調査会の組織	163
第 3 節 発掘作業経過	164
第 II 章 富士山遺跡の位置及び環境	166
第 III 章 発掘調査	
第 1 節 調査概要	166
第 2 節 遺構及び遺物	167
第 IV 章 ま と め	182

挿 図 目 次

第 1 図 富士山遺跡地形図	165
第 2 図 遺構全測図	166
第 3 図 第 1 号住居址実測図	167
第 4 図 第 1 号住居址出土遺物	168
第 5 図 第 2 号住居址実測図	170
第 6 図 第 2 号住居址出土遺物	171
第 7 図 第 3 号住居址実測図	172
第 8 図 第 3 号住居址出土遺物	173
第 9 図 第 4 号住居址実測図	174
第 10 図 第 5, 6 号住居址実測図	175
第 11 図 第 5 号住居址出土遺物	176
第 12 図 第 6 号住居址出土遺物	177
第 13 図 第 7 号住居址実測図	178
第 14 図 第 7 号住居址出土遺物	178
第 15 図 第 8 号住居址実測図	179
第 16 図 第 8 号住居址出土遺物	179
第 17 図 第 10 号住居址実測図	180
第 18 図 第 10 号住居址出土遺物	180

第19図	土壙1～18実測図	181
第20図	土壙19～21実測図	181
第21図	土壙4出土土器	182

写真目次

写真1	富士山遺跡南より望む	162
写真2	第1～6号住居址(東より)	167
写真3	第1号住居址(東より)	168
写真4	第2号住居址炉址	170
写真5	第2号住居址土器出土状態	170
写真6	第3号住居址炉址	173
写真7	第5号住居址埋甕	175
写真8	第6号住居址土器出土状態	177
写真9	第7号住居址炉址	178
写真10	第10号住居址と土壙群	180
写真11	土壙4土器出土状態	181

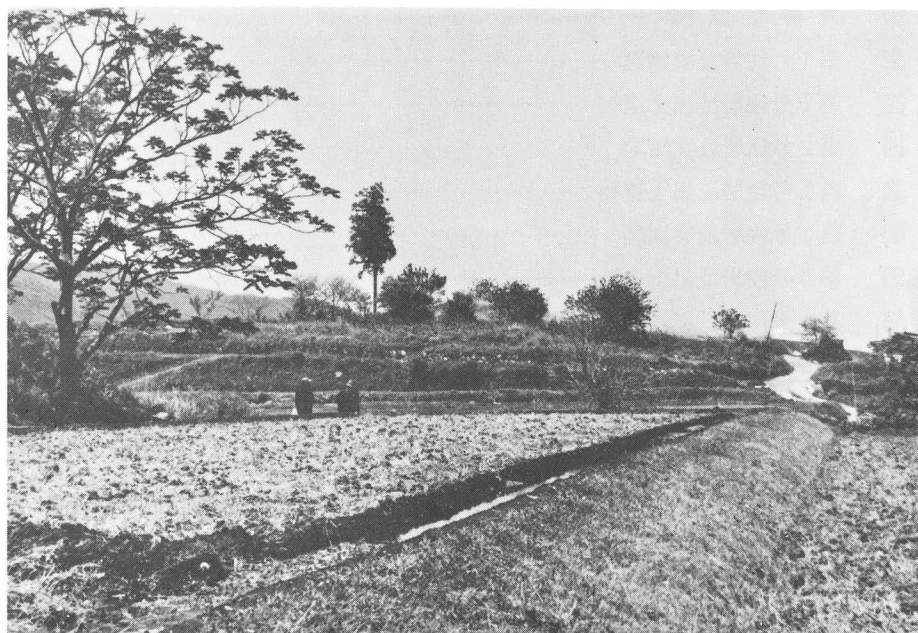


写真1 富士山遺跡南より望む

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

県営ほ場整備事業大田切地区工区内の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託したい旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市当局と市教育委員会とが協議した結果、市立博物館を中心に、県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

7月2日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結、また市長と調査会との間で再委託契約を行った。一方県教育委員会に発掘調査の着工について連絡し、指示を得たので友野良一氏を団長とする調査団を編成し、7月9日から調査を開始した。

第 2 節 調査会の組織

。県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

会 長	北 沢 照 司	(元市教育長)
”	宮 下 清 計	(市教育長)
理 事	木 下 義 男	(市文化財調査委員会委員長)
”	下 村 忠比古	(” ” 副委員長)
”	吉 沢 康 道	(市博物館長)
監 事	今 井 武 彦	(市文化財保存会会長)
”	佐 藤 雪 洞	(駒ヶ根郷土研究会会長)
幹 事	小 池 金 義	(市教育次長)
”	小 池 宏	(市博物館)
”	吉 村 進	(”)
”	井 上 かほる	(”)

。調査団

団 長	友 野 良 一	(日本考古学協会会員)
調査員	吉 村 進	(市博物館学芸員補, 担当者)
”	和 田 武 夫	(長野県考古学会会員)
”	北 沢 雄 喜	(”)
”	吉 沢 文 夫	(”)
”	田 中 清 文	(”)
指 導	桐 原 健	(県指導主事)

第3節 発掘作業経過

7月9日(月) 曇 本日より北原、富士山遺跡の調査を初める。最初に北原遺跡の調査から行う。2×10mのトレンチをほぼ東西に設定して排土作業を行う、大きな岩や礫が多量にみられる。遺物はまったく発見されなかった。

7月10日(火) 晴 昨日に続いて排土作業行うもまったく遺物の出土はみられず、午後より富士山遺跡へ移動する。富士山遺跡のグリット設定行う。

7月11日(水) 晴 グリット調査を行う。表土(耕土)15~20cmでローム層に達する。北側は浅く南はわずかながら深くなる。表土中より縄文中期の土器片出土する。

7月13日(金) 晴 水田北側部より、住居址らしき落ち込みを確認、第1号住居址とし、周囲の拡張を行う。

7月14日(土) 晴 第1号住居址の精査を開始。第2号住居址が第1号住居址の東に続いて確認される。

7月15日(日) 晴 第2号住居址の掘り込みを行う。中央やや北東寄り床面から高台付き土器が横倒しになって発見される。

7月16日(月) 晴 引き続き第1号、2号住居址の調査に全力を傾ける。第1号住居址は貼り床がされた炉が発見された。更に中央南壁ぎわに埋甕が2ヶ発見され、1つは他を壊っている。これらから住居址の建て替えが考えられる。

7月17日(火) 晴 第1号住居址の完掘、清掃。第2号住居址の炉址は方形竪穴石組み炉で石は抜かれている。炉内より大形深鉢土器が投げ込まれた状態で出土している。南側に続いて第3号、4号住居址を発見する。

7月18日(水) 晴 第2号住居址完掘、清掃行う。第3号、4号住居址の調査、第3号住居址のプランはあまり明りょうでない。第4号住居址は南側部分が開田によって破壊されている。

7月19日(木) 晴 第3号、4号住居址の完掘、共に炉は方形竪穴石組み炉である。

7月20日(金) 晴 第3号、4号住居址の清掃。第2号住居址の北東に第5号住居址確認、周囲を拡張すると南に落ち込みが続き住居址の複合が考えられる。

7月21日(土) 晴 第5号住居址の掘り込みを行う。南に第5号住居址に切られた第6号住居址を発見する。両住居址の調査に全力を注ぐ。

7月22日(日) 晴 第1号、2号住居址の測量実施する。

7月23日(月) 晴 第5号、6号住居址の調査を続けて行う。第6号住居址は清掃まで終了する。中央南壁ぎわに埋甕発見される。

7月24日(火) 晴 第5号住居址中央南壁ぎわより埋甕発見される。清掃終了後写真撮影。調査区域を東に移してグリット調査を行う。

7月25日(水) 晴 昨日に続きグリット調査、第7号、8号住居址を発見する。一部掘り込みを始める。

7月26日(木) 晴 第7号、8号住居址の精査を行うとともに、全面発掘に切りかえる。

第7号住居址の西に土壘発見される。

7月27日（金） 晴 第7号、8号住居址完掘、第7号住居址の炉は円形石組みで内部に小形深鉢が埋められている。第8号住居址は地床炉を持ち、その西側に胴部以下を埋め込んだ小形深鉢が発見された。更に第8号住居址の南に落ち込みを発見、第9号住居址としてプランの確認を急ぐ。

7月30日（月） 晴 第9号住居址は調査の結果、10数個の土壘が隣接していることがわかり、掘り込みを行う。第7号、8号住居址の清掃、写真撮影行う。第3号、4号住居址の実測。

8月1日（水） 曇 昨日に続き、土壘群の精査を行う。土壘内より大形深鉢土器が壊され重なって出土する。土壘群の南に第10号住居址を発見、周囲の拡張行う。

8月2日（木） 曇 土壘群の清掃と第10号住居址の精査行う。南側は開田によって壊されている。

8月3日（金） 曇 第10号住居址の完掘、清掃。現場作業は本日をもって終了のため、器材点検、撤収準備行う。測量は後日に残すことにする。

7月9日から始った発掘調査は全国的な猛暑の中での作業となり、どろと汗の毎日でした。調査にご協力いただいた皆さん本当にご苦労さまでした。

調査団員、土地改良事務所関係者、地主の方々、地元協力者を初め、多くの方々のご協力とご配慮によって、ここに初期の目的を果し調査を終了することができました。心から感謝の意を申し上げる次第です。

（吉村 進）



第1図 富士山遺跡地形図（S=1/2000）

第II章 富士山遺跡の位置及び環境

当遺跡は駒ヶ根市赤穂1618番地北割地籍に所在し、国鉄駒ヶ根駅の北西約1kmの地点にある。標高は600~700mを測る。馬住原、十二天、大城林、大手と続く段丘の突端に位置する。段丘はこの付近で約2mの比高をみるが大田切川沿岸では顕著でない。

遺跡の南は古田切川によるV字谷が形成され、その比高は約5mである。

地質基盤は伊那礫層からなり、その上に新期ローム層が堆積する。表土は黒色腐植土で調査区域外の畑部分で30~40cmを測る。調査区域は水田となり耕土の下にローム層が続く。遺構はそのローム層を掘り込んで構築されている。遺跡の東端畑の中に、高さ3m程の富士塚がある。富士山なる地名はここに由来すると思われる。段丘下を通る道は大田切海道と呼ばれ、南割大城林付近へ通じる重要な道路であった。

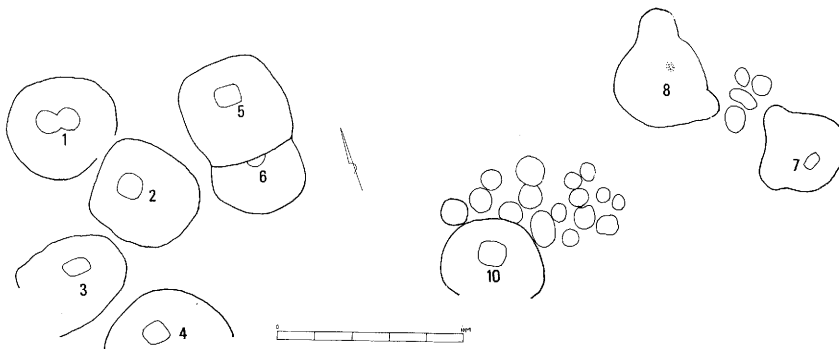
第III章 発掘調査

第1節 調査概要

当遺跡は古くから縄文時代の遺跡として有名で、現在畑となっている南及び東傾斜面から遺物が採集されている。

今回の調査は水田部分のみということで、古田切川に面した畑に続く水田を対象とした。

調査方法は2×2mのグリットを設定、ほぼ南北方向にa, b, c, 東西方向に1, 2, 3として、適宜グリットを調査し、遺構確認によってその周囲を拡げる方法をとった。(吉村 進)



第2図 遺構全測図 (S=1/400)